

艦これの世界で三式中 戦車が人になったら

雨宮季弥99

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦隊これくしょん二次創作です。三式中戦車、チヌが人になり、鎮守府に所属して艦娘達とともに戦いながら心身ともに成長していく話です。

かなりの主人公補正とご都合主義の元に成り立っております。

目次

第三章	第9話	第8話	第7話	第6話	第二章	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	第一章
	39	36	28	23		15	12	7	4	1	

第20話	第五章	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第四章	第12話	第11話	第10話
89		81	78	73	68	63	59	56		53	47	43

第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第六章	第26話	第25話	第24話	第23話	第22話	第21話
139	136	129	119	116	112		109	106	103	100	96	93

第九章	第42話	第41話	第40話	第39話	第八章	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第七章	第33話
	181	177	172	168		165	161	155	150	145		142

第53話	第52話	第十一章	第51話	第50話	第49話	第十章	第48話	第47話	第46話	第45話	第44話	第43話
234	229		223	219	214		211	205	200	195	192	186

第65話	第64話	第63話	第62話	第61話	第十二章	第60話	第59話	第58話	第57話	第56話	第55話	第54話
306	299	295	285	277		273	268	253	248	244	241	237

第76話
第75話
第74話
第73話
第72話
第十四章
第71話
第70話
第69話
第68話
第67話
第66話
第十三章

361 350 346 340 337 330 324 321 316 313 309

第十六章
第87話
第86話
第85話
第84話
第83話
第82話
第81話
第十五章
第80話
第79話
第78話
第77話

419 416 409 404 399 395 391 388 384 372 367

第 98 話	第 18 章	第 97 話	第 96 話	第 95 話	第 17 章	第 94 話	第 93 話	第 92 話	第 91 話	第 90 話	第 89 話	第 88 話
477		467	463	458		455	450	447	440	435	431	424

第 20 章	第 109 話	第 108 話	第 107 話	第 106 話	第 19 章	第 105 話	第 104 話	第 103 話	第 102 話	第 101 話	第 100 話	第 99 話
	531	526	521	517		512	508	503	495	492	486	480

第 第
111 110
話 話



545 536

第一章

第1話

カン カン と高い音が山の中に響き、やがてバキバキと音を立てて、木が倒れる。

倒れた木はそのまま数人がかりでトラックまで運んでいく。かつては重機やチェンソーと言った機械類が使われていたというこの仕事も、現在では個々人が斧を持ち、人力で行っている。

「あー、クソッ！ 全然進まねえ！」

近くで作業してた同僚がそんな悪態をつくが、誰も気にしない。全員が同じ気持ちで、そして、どうにもならない事だという事を知っているからだ。

「おい煩いぞ。黙れ」

それでも喚く同僚に他の同僚が声をかける。だが、声を荒げる同僚は逆にその同僚を睨みつけてきた。

「これが黙っていられるか！ なんで俺らは人力で木材切らなきゃいけないんだよ！」

「仕方ないだろ。深海艦隊のせいでガソリンは碌に入ってこない。入ってきてても国が優先される。俺らみたいな使い捨てのところまで回ってくるわけねーだろうが」

「ちくしょう……！ 仕事で失敗してなけりや……」

「俺だつて借金がなけりやここに來てねーよ。おら、愚痴つてないでさっさと仕事を進めろ」

同僚たちはそんなやり取りの後に再び仕事に戻った。さっきの同僚が言ったように、俺達が働くこの職場は様々な理由でまともな仕事につけない人間が受けてる仕事だ。同僚の大半は他所からここに回されてきた人間ばかりで、地元の町に住んでいるのは俺ぐらいだろう。

そんな事を思いつつも、俺達は仕事を黙々と続けていく。そして、定時をとうに過ぎたころあいによくやく仕事を終えることができた。仕事を終えた俺達はさっさと事務所に戻り、そこで服を着替える。そして、更衣室から出ると、休憩用のスペースでくつろぎ始めた。

「あー……疲れた……さっさと酒飲みに行きてー」

「もうちよい待て。給料来るぞ」

くつろぐ同僚たちがそんな事を話していると、俺達の元に社長がいくつもの封筒を持って現れた。

「おい、今月の給料配るぞ。名前呼ばれたやつからさっさと来い」

そう言つて社長が順番に名前を呼び給料を配っていく。俺もそれにならつて封筒を

受け取り、中身を確認する。中には十数枚の紙幣と小銭、それに給与明細が入っている。「……はあ……あんだけ働いてこれっぼっちかよ……」

「しゃあねーだろ。金が貰えるだけマシつてもんだぜ……ここだつて、いつどうなるかわからねえんだからな。こうやって銀行振り込みにしないのも、脱税の為に記録が残らないようにしてるからとかつて言ってるやつもいるんだぜ」

「マジかよ……」

そんな話を話してる同僚たちだが、ふと片方が俺の方に視線を向けてきた。

「よう、これから一杯呑みにでも行かねーか？　こんな時ぐらい酒呑まなきややつてらんねーだろ」

「悪いが……俺は酒が飲めないんだ。他を当たってくれ」

「はあ？　お前、付き合いわりーな」

「ほつとけ、そいつボツチだからな、根暗やろーなんか気にするな」

そんな言葉を後ろに聞きつつ、俺は事務所を出ていく。どうせ酒で酔いつぶれ、明日には酷い状態で出てくるだろうに、なんで酒なんて呑むのだろうか。人間の考えはよくわからない。

第2話

事務所を出た俺はその足で行きつけの食堂へ行く。店内に入ると、このご時世にも関わらず、未だ使われている白熱灯の元、数人の客が不景気そうな顔をして食事をし、流れてくるテレビの音がやけに大きく響いている。俺は適当な席に腰を下ろすと、店主がすぐに注文を聞きに来た。

「いらつしやい。今日は何にする?」

「天ぷらそば定食を頼む」

注文を聞いた店主がすぐに厨房へと戻った。俺は食事が出るまでの間、特に考えることもなく待ち続け、程なくして目の前に置かれた定食を食べ始める。そうして食べていると、ふとテレビから聞こえてくる声に、視線を向けてしまった。

「さあ、では本日は深海棲艦から私達を守ってくれるヒーロー、艦娘のお一人、那珂さんをお連れ致しました」

「艦隊のアイドル那珂ちゃんだよ。よつろしくー」

テレビに映っていたのは若い女性のリポーターと、その横に立っているお団子頭の女性だった。

「お、那珂ちゃんか、相変わらず可愛いねえ」

「あんな娘だけど、深海棲艦と戦ってるんだから、凄いわよねえ」

艦娘の登場に、さつきまで物静かだった店内のあちこちで声があがり、皆テレビに視線を向けた。こんな町ですら、彼女達の存在は希望になるのだろうか……。

「お、お前さんも気になるのかい？ 普段は堅物のくせにねえ。ああいうのが好みなのか？」

手を止めてニュースを見る俺を、店主が茶化してくる。

「いや……そんなじゃないよ」

そう言うと、俺は視線を定食に移して食事続ける。店主はまだ何か言っているが、店主が想像している様な感情は俺にはない。

やがて食事を終えた俺は会計を終えて帰路に就く。寄り道もせずまっすぐに家に向かつて歩く俺の胸の内には、確かな黒い感情が渦巻いている。そんな感情を爆発させるわけにもいかず、俺は急いで家へと歩いていく。

さして大きくもない町で寄り道もしないため、家にはすぐに戻ってきた。二階建てのオンボロなアパートの二階に俺の部屋があり、薄暗い電灯の元に歩いていく。俺以外の入居者は地縛霊どものせいで追い出されており、俺が全員を殴り倒してからも新しい住人が来る気配もない。

そんな静かなアパート。俺は自分の部屋に入ると適当に荷物を放り出す。そしてさっさと服を着替え、歯磨き等を済ませると布団に潜り込んだ。電気の消えた部屋の中、天井を見つめる俺の胸の中にはくすぶり続ける黒い感情が、俺の思考を支配していく。

(ああ……なんで……なんで、俺は生まれたんだ……?)

艦娘達……かつて、兵器として戦った彼女たちは、今は人の姿となり、深海棲艦と戦うことができる。だが、俺には何もない。先の大戦でも何もできず、今もこうして人の為に働くこともできず、ただ日々を消費している。俺の存在意義はなんなんだ？ 俺は……何のために……生まれたんだ……。

暗闇の中、湧き上がる黒い感情に俺は無理やり目を逸らして眠りに落ちていった。

俺にあるのは羨望と嫉妬、第二次大戦で散っていき、そして今でも軍艦として戦う事ができる彼女たち、日本を守るために戦える彼女たちへの気持ちとしてこれが間違いないだろう。

俺は……何もできなかつた。昔も……今も……。

第3話

翌日、目を覚ました俺は手早く身支度を済ませると、軽い朝食を胃に詰め込んでから仕事に向けて家を出た。まだ朝早く、日も完全には登っていないが、俺の職場は後1時間もすれば始業開始だ。だから寝坊とかなんてできないし、道も最短距離で行くほうが良い。

その為、俺はいつも海辺の道を歩いている。暗い道を歩く中、ふと俺は歩みを止め、道以上の暗さに包まれる海を見つめた。

「……深海棲艦……か」

深海棲艦。艦娘以外のあらゆる通常兵器の攻撃を謎のバリアで無効化するという化け物たち。突如世界のあらゆる海から現れたあいつらのせいで海上の交通網はほとんどを破壊された。その為この国は輸入、輸出のほとんどが滞り、一時は人口が半分になるほどの被害を受けたし、諸外国も大なり小なり似た被害を受けたらしい。現在は艦娘達によって徐々に交通網は回復しているらしいが、それでも制海権はほとんど奴らの手にあると言っても良い。

だからこそ、艦娘達は今現在も戦い続けている。人々のために戦い続けれる彼女達が

とても羨ましく、そして……とても妬ましい。だが、だからと言って俺にできることなどなにもない。まさか、海に出て深海棲艦と戦うわけにもいかないのだから。

「……やめよう、不毛だ」

いつまでも無駄な事を考えても仕方ないと、視線を前に向けようとした俺の視界に一瞬、何かが映った。暗い海の上、明かりもなく何も見えないはずなのに、俺は海から何かが来ている。それを視界に捕らえていた。

「なん……だ……？」

嫌な予感に俺が海を見つめていると、不意に海の一点で何か光ったと思うと、空気を切り裂き、何か飛んできた。それは近くの空き家にぶつかり、大きな破砕音を発した。

「な……!?!」

音を立て崩れる民家に俺は言葉を失い、慌ててもう一度海を見る。そして……わかった。暗い海の中からこちらを見てくる赤い目、魚のような異形のソレは大きく口を開いており、その中には未だこちらに向けて何か向けられていることを。

「マズイ……!」

慌てて俺は海から遠ざかるように走って逃げる。そして、周辺には単発的に砲弾が着弾し、家が壊され、人々が騒ぎ始める。

「まさ……か。深海棲艦が出てくるなんて……!」

少なくとも俺はこの町で奴らが出たとは聞いた事がない。だが、そもそも海辺の町だ、今まで出なかつたのがおかしいだけだ。だが、どうする、どうすればいい。

「逃げ……ないと……」

物陰に隠れ、息を整えていた俺はそう結論付けようとした。だが……足が動かない。いや、足どころか、体も……そして、逃げようとする意志を捻り潰すかのように、心が騒ぎだす。

戦え。人の為、兄弟の為、己の為すべきことを為せ。栄誉ある大日本帝国陸軍として、戦え。

そう、心が騒ぐ。体全体が熱くなつていく。逃げようとした足が海の方を向く。そうだ、逃げるなんて何を考えている。俺は……俺は戦えるんだ。例え勝ち目の一つもない戦いでもいい……いや、これで死ぬるなら……!

そんな自分の気持ちに従い、俺は海に向かつて走り出す。そして到着すると、海からは今も深海棲艦が町に向けて砲撃を飛ばしている。陸に近づいてきてるおかげでさつきよりもハッキリと姿を見れるようになってきたが……敵は一体だけ。よく見れば所々から煙が上がってるのを見ると、艦娘と戦って逃げてきたのか? 理由はわからないが、負傷しているなら都合だ。

「おい、深海棲艦！ こっち向け！」

俺の怒鳴り声が聞こえたのか、深海棲艦がこちらに向いてくる。遠く離れてるはずだが、その赤い目から向けられる殺気を感じる。だが、敵が俺に向けて砲撃するよりも早く、俺は準備を終えていた。

「主砲は装填済みなんだよ！」

その言葉と共に、俺の肩に出現したのは俺の主砲。軍艦の使う砲に比べればあまりに小さいものであり、普通であれば軍艦に通用するはずもない……だが。

「その大口の中の砲身にぶち込めば、少しは効果あるよなあ！」

そう叫ぶと、俺は主砲を発射した。その砲弾は寸分たがわず敵の砲塔に命中し、敵の砲弾が次々と誘爆していく。

「……まさか、こんなまぐれ当たりをするとは……」

俺の困惑を余所に敵の口からは次々に爆炎と煙が上がっていき、やがて敵は動きを止めると、そのまま海に沈んでいった。

「……これで終わった……のか……？」

しばらく深海棲艦が沈んだ先を見つめるが、それ以降海は静かなままで、何も起きる気配はなく、俺はそれを確認すると急いでこの場を離れた。既に破壊された家から出てきた人達によって騒ぎはどんどん大きくなっている。これ以上この場に居て人目に

付くのは避けるほうが良いだろう。

第4話

深海棲艦襲撃から数日後、久しぶりの休日の朝、俺は定食屋で朝食を食っていた。

「しかし、軍の連中はいつまで町に居座るつもりだろうねえ」

「仕方ないさ。轟沈したはずの船が消えてるってんだろ？ 必死で探してるんだろ

う」

深海棲艦の襲撃以降、町の中での話題はこれ一色だ。その日の内に到着した軍の連中によって現場は封鎖され、深海棲艦の引き上げ作業を開始しているようだが、沈んだはずの深海棲艦が見つからないという事で現場は混乱しているようだ。それに、深海棲艦による攻撃を許した事に対する非難の声も上がっているそうだし、当分軍の連中は町に居座るんだろう。

「わかめそば定食お待ち」

目の前に出されたわかめそばを、俺は手を合わせてから食べる。あれから職場も町も騒がしくなったが、俺自身は特に何も変わらず過ごしている。ただ、たった一度だけ……：……たった一度だけだが、お国の為に戦えたという満足感のおかげか、俺の心は充実感に溢れていた。これで、少しでも俺の生まれた意味があったというものだ。

そんなことを考えながらそばを食べていると、突然店の扉が開かれる。そして、中に入ってきたのは軍服に身を包んだ数名の男性。その内の一人は胸に一つ、勲章をつけている。

「ぐ、軍人さんがいったい何の御用で……？」

突然の軍人の出現に、客は全員驚きと困惑の表情を浮かべて軍人達を見る。そんな中、店主は声を震わせながらも声をかけた。

「騒がせてすまないな店主。私達が用があるのは彼だけだ」

そう言うのと、胸に勲章をつけた男は俺の前に立った。

「初めまして、田中さん。私は飯田次郎一等陸尉だ。貴方にはこれから東京の軍部に来ていただく」

突然の言葉に俺は言葉を失い、飯田一等陸尉を見上げる事しかできなかった。

「……なぜ、私が軍へ？ 自分で言うのもなんですが、私は軍に連れていかれるほどの何かをしたことはないはずですが」

俺の言葉に飯田一等陸尉は表情を変えることなく答える。

「無論だ。むしろ、君がしてくれたことを評価しているからこそ、来てもらわねばならぬのだ」

そう答える飯田一等陸尉は俺の肩に手を置いてくる。どうやら、どうしても俺を連れ

ていくつもりらしい。

「……食事だけ、終わらせてもよろしいですか？」

「ああ、構わない」

了承を取ってから、俺は手早く食事を終える。そして、店主の前に代金を置くと、軍人たちと共に店を出ようとする。

「あんた……いったい何をしたんだい？」

後ろから聞こえた店主の不安そうな声に、俺は振り向くことなく答えた。

「大したことのない……ちよつとしたことだ」

そう言つて、俺は背中に客たちの無遠慮な視線を感じつつ、店を出た。

第5話

店を出た俺は、そのまま軍人達に車に乗せられ、町を出発した。車の中では俺も軍人達も何も話さず、ただ外の光景を眺めるしかなかった。時間が経つごとに景色は変わっていき、ド田舎の寂れた風景から、徐々に都会の大きな街並みへと景色は変わっていく。そうして最終的には、こないだのニュースで見たような都会に到着していた。

そして、車はやがて一つの大きなビルの前に到着した。

「着きましたよ」

そう言うと、一尉は俺に降りるように促す。それに従い俺は車から降り、目の前にあるビルを見上げた。それは、俺の居た港町では絶対に見ることのできない、何十階にもなるであろう高層ビルであった。入口には軍服に身を包んだ門衛が二人いて、その横には「防衛省」と刻まれた壁がある。

「早く進みなさい」

ビルの高さに気を取られていると、飯田一等陸尉に後ろから急かされ、俺は前を歩く軍人の後について行き、その後ろを一等陸尉が付いてくる。俺は連れられるままエレベーターに乗り込み、20階で降ろされると、ある部屋の前まで歩かされた。

俺たちが扉の前に到着すると、一等陸尉が扉をノックする。

「入りましたえ」

「失礼します」

部屋の中からの返答を聞き、まず一等陸尉が中に入る。そして少しして、俺も中に入られた。

「竹下一等陸佐。この者が、例の者です」

「そうか。その者と二人で話したい。君たちは部屋の外で待機していてくれ」

そう言ったのは部屋の奥のデスクに座っている立派な軍服に身を包んだ男であった。年齢は50代ぐらいだろうか、温和な笑みを浮かべているが、寸分の隙も感じられない。

「しかし、それでは……」

「お前たちが居たところで、彼が本気になればどうにかなるものでもあるまい。いいから部屋の外で待機していなさい」

再度の命令に一等一尉達は俺に不審の目を向けながらも部屋を出ていく。

「さあ、そこにかけてなさい。君とはちゃんと話をしたいのでね」

そう言うと竹下一等陸佐は来客用のソファを指さす。

「はっ。失礼します」

俺は一礼すると、指さされたソファに腰をかけた。

「さて、まずは君には礼を言わねばならないな。君のおかげで深海棲艦による被害の拡大を防ぐことができた。家屋はいくつか破壊されたが、幸いなことに死傷者も出てないと聞いている」

「竹下一等陸佐。一体何のことでしょうか？」

陸佐の言葉に俺は内心で諦めながらもとぼける。

「とぼける必要はない。君が何もないとところから大砲を肩に背負い、深海棲艦を轟沈させた光景を目撃した者が複数いる」

「……そうですか」

現場はかなり混乱していたはずだが、どうやらけっこう見られていたようだ。まあ、俺がこの場に連れてこられた時点でそれはわかっていたが。

「私にも、一度見せてくれないかね？」

「……わかりました」

バレている以上、隠す必要もない、俺は主砲を出現させる。

「おお！ いや、事前に聞いてはいたが、こうして直接目にするのと迫力がある。いや、素晴らしいよ君」

「お褒めに預かり光栄でございます」

一等陸佐の喜びのように俺は少し複雑な気分になりながらも一礼し、装備を収納する。

「さて、艦娘の攻撃しか通用しないはずの深海棲艦を轟沈させた君だが……」

そこで一度言葉を切り、一等陸佐は口元を組んだ手で隠す。

「艦娘が登場した頃、茨木県にある陸上自衛隊武器学校で展示されていた三式中戦車が行方不明となった。その時防犯カメラは一名の不審者を捉えたが、不審者の行方はようとしてれず、何トンにもなる現物の中戦車を個人が盗むことも不可能であるとされ、事件は迷宮入りとなっている」

「さて、君の経歴を調べさせてもらったが、戦車の盗難事件が発生してからしばらくしてあの港町で仕事に就いて今に至るが、それまでの経歴が一切不明。軍が調べて一切不明なんてのは普通ではありえない。……さて、ここまで来ると君の正体もおのずと見えてくる」

そう言うと、一等陸佐は組んでいた手を解いて、俺に視線を向ける。

「君は艦娘と同じ、兵器が人と化した存在。そして君は三式中戦車だね？」

確たる証拠もないはずなのに、その目には絶対の自信が宿っている。どうせへたに否定したところで面倒だと考えると、俺は溜息を一つついた。

「その通りです竹下一等陸佐。私は三式中戦車。チヌと名乗っています」

そう言うと、俺は深々と頭を下げる。

「おお、やはりそうであったか。いやはや、まさか戦車まで人になるとはなあ。事実の小

説よりも奇なりとはよく言ったものよ」

「まったくでございます。それで、竹下一等陸佐は一体私をどうされるおつもりでしょうか？」

俺の言葉に一等陸佐は笑みを浮かべる。

「なに、君を処分したりするつもりはないよ。君は我が陸軍の中であきつ丸を除く唯一の深海棲艦を倒しうる存在なのだから」

その言葉に俺は面食らう。

「買いかぶりでございます。私は所詮戦車、軍艦を相手にするなどできるはずもございません」

「だが、沿岸防衛で働くことができるという事は先日の件で証明されているだろう。例えば相手が損傷している船であっても……だ」

そう言うのと、竹下一等陸佐は机の上にある書類を手に持ち、俺の前のソファに座ると、書類を俺の前に出した。

「指令だ。君にはとある鎮守府に向かつてもらい、そこで沿岸防衛任務に就いてもらう」「は？……申し訳ありません、仰っている意味が良く理解できないのですが……」

指令の内容に、俺は混乱と困惑の表情を浮かべているだろう。軍人でない俺に指令は……まあ、良いとしよう。俺は戦車なんだから。だが、鎮守府は当然海軍の指揮下の施

設であり、今は艦娘の拠点となっている。ちゃんとした船ならともかく、人間の形をしていて、すぐにでも出撃のできる艦娘が居れば例え深海戦艦が攻めてきても問題ないはずだ。俺が行く必要なんかまったくないはず。

俺の表情を見て察したのだろう、竹下一等陸佐は苦笑を浮かべる。

「君が困惑する理由は察せられるよ。だが、今この世界で陸軍なんてのは暴動鎮圧や治安維持ぐらいでしか役に立たん。このご時世で他国に侵略する国なんておらんからな。そんな状態で、艦娘と同じように深海棲艦に攻撃が通じる君を、内地で遊ばせるのはあまりに勿体ない」

「それに、君もこのまま民間人に混じって生きていくだけでは物足りないのではないのかね？」

「……見破られてますね」

そう、色々と気になる事はあるが、俺にとつて兵器として戦う事ができる場所を得る事が出来るというのが最優先事項であった。例えばそれが海軍の指揮下であっても、艦娘の中で俺にできる事なんてあるのかと気になるが、このまま港町で燻つてるのに比べれば遥かにマシだろう。

「畏まりました、竹下一等陸佐。三式中戦車チヌ。辞令に従います」

そう言つて、俺は立ち上がり敬礼する。それを見た一等陸佐も立ち上がり敬礼し返

す。

「期待しているぞ。この国の為に尽くしてくれ」

「ハッ！」

指令を受けてから数日後、港町での身辺整理を終えた俺は輸送車に揺られながらある鎮守府に向かっていた。俺の乗っている物の他にも鎮守府に定期的に補充するための資材を運ぶ輸送車が何台か走っている。

「鎮守府……か」

あれから心の整理はつけたつもりであったが、やはり海軍の指揮下に置かれるというのは違和感が拭えない。あきつ丸殿のように揚陸艦とはいえ艦娘ならともかく戦車の俺ではなおさらである。

「……いや、アメリカの海兵隊は自前で戦車や軍用ヘリを用意してるんだったな。そう言うのと同じようなもんなのかな……。いや、敵国に上陸したりするから必要なだけで深海棲艦相手に必要なわけではないしなあ……」

そんな事を取り留めもなく考えていると、外の光景に徐々に海が見えるようになっていく。

「もう海が見えてきたか……。まあ、考えても仕方ないよな」

海が見えてきた事で、俺はネガティブな考えをいったん横に置いておく事にした。聞いた話では練度を高めた艦娘は改造する事で強化される聞くし、それを活用できればもしかしたらまだ役に立つ機会があるかもしれない。

「ま……行つてから考えるべきか」

色々と頭に浮かんだ考えを、俺は頭を振って切り替える。そして改めて外を見ると、遠くのほうに港らしき施設があるのが見えてきているのに気づいた。

「あそこが俺の着任する鎮守府……か」

俺はこれから先への期待と不安を胸に抱きながら、近づいてくる鎮守府を眺めていた。

第二章

第6話

鎮守府に到着した俺は、トランクケースを持って輸送車から降りて辺りを見渡した。

「なんていうか……基地じゃあ、ないよなあ」

そこに広がる光景は昭和の学校。とでもいえばいいのだろうか？　ともかく、基地という重々しい空気もないし、そもそも設備が違う。見える範囲の建物はほぼ木造だし、その建物にしても校舎という印象が強い。

「貴方がチヌさんですね？」

建物を見上げている俺に声がかかった。振り返ると、そこに居たのは、なんか巫女服を改造したようなのを着ている長い黒髪の女性であった。

「私はこの鎮守府で秘書艦を勤めています金剛型三番艦榛名です。貴方を提督室に案内するよう言われています」

「お願いします」

軽く頭を下げ、俺は榛名と共に建物の中に入っていく。しかし、榛名のこの格好はなんなんだろうか？　俺は一応用意された陸軍の服を着こんでいるが、彼女の着ているの

が軍服とはとても思えない。それともあれは秘書艦専用の服装なのか？　だとしたらこの提督は相当な変態なのかもしれない。

そんなことを考えている内に、俺は提督室と扉に書かれている部屋の前に到着していた。

「提督、チヌさんをお連れしました」

「ああ、入ってくれ」

中から返ってきたのは思ったよりも若い声であった。それに内心で首を傾げながら、俺は榛名に続いて部屋に入る。そこに居たのは20後半か……多くても30台ぐらいの男。提督としての白い軍服に身を包んでいるという事は確かに提督なのだろうが、いかんせん若く感じる。見た目も優男に見えるが、まあ実際深海棲艦との戦闘に出るわけでもないし、体力が必要なわけでもないだろうか。

「三式中戦車チヌ。本日付で当鎮守府に着任しました」

そう言つて、俺は陸軍式で敬礼する、海軍の敬礼？　知らんな。少なくとも何か言われるまでは陸軍式にするつもりだ。

「初めましてチヌ。私がこの鎮守府を預かる提督だ。艦娘達からは司令官ないし、提督と呼ばれているので、君にもそう呼んでほしい……まあ、とりあえず楽にして」

「ハッ」

そう言われ、俺は敬礼から休めの体勢に入る。

「さて、君の事は聞いているが、とりあえず君の兵装を見せて欲しい」
「わかりました」

まあ、予想できたことだから、俺は特に何も思わず兵装を出現させる。

「なるほど、確かに艦娘と同じなんだ……。榛名、君は彼のような存在を見たことはあるか？」

「いえ、私も聞いたことはありません」

「そうか……チヌ君。君はなぜ自分がそうなったかわかるかね？」

とんでもない事を聞いてくるな。

「あいにく私自身にもわかりかねます。他の事例もありませんし」

「そうだな。特に君は実物のチヌから変化したらしいとも聞いている。その点だけでも艦娘とは違うわけだしな……まあ、それに関しては私達が今検索する事ではないか」

そりやそうだ。そんなのはお偉いさんに任せればいい。それより俺にとつて重要なのはこれから俺がどういう扱いになるかだ。

「さて、君に關しては正式に私の部隊に指揮下に入ってもらうわけだが……君はこの鎮守府がどういった役割を担っているか知っているかな？」

俺がその問いに首を横に振ると、提督が長々と説明しだした。まあ、纏めるとこの鎮

守府は練度の低い艦娘の特訓や近海での作戦を担当しているようで、他の鎮守府に比べると所属する艦娘の練度も低く、数も少ないということだそう。その中で榛名が所属している事のありがたさをかなり熱弁されたが、それだけ少ないという事なんだろう……多分。

「……まあ、そういうわけだ。君には艦娘達が出撃している時のこの鎮守府の防衛や警備をしてもらおう。まあ、ここに敵が来るなんてことはそうそうないんだが、艦娘達に不埒なことをしようとする輩が来たりするから、警備の任務のほうが主な任務になるだろう。なにせ艦娘というのは全員が魅惑的な外見だから、不埒な輩が入り込むことがある。特に榛名は艦娘の中で最も美しいと言っても過言じゃない。その榛名が不埒な輩に襲われるかもしれないと思うと不安で仕方ない」

「提督、榛名は大丈夫です。そんな不埒な輩に負けたりなんかしません」

「榛名。そうは言うが、俺は心配なんだよ。榛名がもしもそんな輩の手で汚されでもしたらと思うと……」

「提督……」

おい、俺の目の前で何をやりだしてるんだこの二人は。

「……了解しました」

咳払いをし、俺は了承の言葉を伝える。ちよつと落胆したが、まあ妥当な任務だろう

な。

「さて、この鎮守府の案内だが、榛名は私の秘書艦だからな。他の者を呼んである」

提督がそう言った時、後ろの扉がノックされた。

「ちようどいいタイミングだな。入ってくれ」

提督がそう言うのと、扉が開かれて一人の娘……まあ、艦娘なんだろうが、入ってきた。背丈は高くないが、どこか大人びた雰囲気を感じさせる何かがある。そして服装はまあ、榛名に比べればまともだな。

「提督、何の御用でしょうか？」

「ああ、お前にはそのチヌに鎮守府内を案内してほしい。既に聞いていると思うが、彼は艦娘を除いて唯一深海棲艦を倒すことができるという事で、陸軍からこの鎮守府に配属されたんだ。丁重に頼むよ。チヌ、君への正式な命令書はこれだが、今日は鎮守府の案内が終わったら自由にしてくれて構わない。明日からはよろしく頼むよ」

「畏まりました。では、こちらへ」

提督に一礼すると、不知火は俺のほうを向いてきた。

「わかりました」

俺も提督たちに一礼、命令書を受け取って懐に仕舞うと、不知火と共に提督室を後にした。

第7話

不知火に案内されて、俺は鎮守府内を歩き回る。まず案内されたのは艦娘が主に生活面で行動する寮、食堂、運動場、図書館と言った施設であった。

「寮は男性の立ち入りは禁止されているので注意してください。ヘタに入りこめば砲撃を食らいます」

「……気をつけましょう」

戦車が軍艦の砲撃なんか食らったらどんな重装甲だったとしても吹っ飛ばされるのが目に見える。流星に味方からの砲撃でそんな無様な死に方はしたくない。

そんなことを考えている内に、俺たちは戦闘に関する施設……武器庫や倉庫、港湾などが存在する区域に足を踏み入れた。どうも最初に俺が居た場所からは見えなかっただけのようで、この辺はしっかりと軍事基地としての雰囲気を出しているし、実際の建物も重厚なコンクリートや鉄鋼によって作られている。

案内された設備群を見ていくが、どこか古ぼけた印象を受けるのはやっぱりこの鎮守府が重要拠点でない事を現してゐるんだろう。まあ、俺の居た寂れた港町に比べたら十二分に最新なんだが。

「ここが工廠となります。中に明石という艦娘がいますので、挨拶を先に済ませておくのがいいと思います」

「ああ、お願いします」

俺は不知火の提案に頷くと、工房の中に入っていく。工房らしく、あっちこっちに工具や材料らしき物があるが、こういう事に詳しくない俺にとってはどれがどれやらわからない。

「明石さん、新しく配属になった方が挨拶に来ました」

不知火がそう言うと、奥のほうからツナギを来た赤い髪の女性がこっちに向かって走ってきた。

「あー、話は聞いているよ。貴方が新しく配備された戦車さんですってね。初めまして、私は工作艦明石。ここで装備の制作とか、皆の近代化改修とかを担当しているんだ」

「初めまして、明石さん。よろしくお願いします」

工作艦か。確か日本では唯一の艦種なんだっけな。

「それじゃあ、さっそく装備を渡して貰っていいですか？」

「……なぜですか？」

突然の要求に、俺は戸惑いの声を上げてしまう。

「あれ、提督から聞いてないんですか？ そのままの装備じゃ厳しいだろうから、装備の

改修や換装を行うようになって事ですよ」

「なるほど」

まあ、言われれば当然の処置だな。

「では……これを」

取りあえず主砲と機銃を取り出して明石に渡す。

「はい、確かにお預かりしました。それじゃあ、当面はとりあえずこれを装着しといてください」

そう言つて出されたのは、俺の主砲の二倍ぐらいの大きさの単装砲であった。

「これ、12センチのなんですけど、とりあえずこれなら装備できますか？」

「そう……ですね」

受け取つた単装砲を装備する。正直かなり重いが、なんとか装備したまま戦闘はできそうだ。

「じゃあ、装備の改修は私のほうでやつておくのと……チヌさん自身の近代化改修もやらないといけないので、時間のあるときに私のところ来てくださいね」

「わかりました」

俺自身の近代化改修か……なんか、見た目だけが同じなだけで中身が完全に変わりそうな気がするが、どうせ今の俺じゃ役に立たないんだからやつてもらおうしかないんだろ

うな。

そんなことを考えつつ、俺は工房を離れ、不知火に案内を続けてもらった。結局2時間程で鎮守府の全体を案内された。

「さて、全体の案内はこんなところですよ。後は、貴方の住居となりますが……」

「そう言えばまだ案内されていませんでしたね。どこになるんでしょうか?」

「司令の住居の予備を使用して頂くことになりましたが……艦娘の寮や司令の住居から少し離れていますので、少々不便ではありますが……」

「構いませんよ」

「そうですか。では、ご案内します」

そう言つて不知火が俺を案内したのは、一応生活区に入るが、端のほうにある一軒家だった。確かにこれは寮とかに比べると遠いな。他の施設から10分ぐらひは離れる。

「こことなります。では、これで施設の案内は終わりますので、私はこれで」
「ありがとうございます」

お礼を言い、不知火が立ち去るのを見送つてから、俺は家の中に入る。家の中は古い日本住宅らしく、玄関を上がつてすぐに6畳の居間があり、奥には台所が見える他、トイレや物置と思しき扉も見える。畳の上にはちゃぶ台や木製の箆筒もあり、ちゃぶ台の

上に置かれている紙に目を通すと、そこにはこの部屋にある物は全て軍からの支給品で、自由に使つて良いという旨が書かれていた。

「やれやれ……今日からここが俺の家か……」

古ぼけてはいるが港町で住んでいた家よりもしつかりしているし、見た処家具もちやんと揃っている。流石に予備とはいえ提督の住居なら当然か。

俺は家の上がると、荷物のトランクケースを畳の上に放り投げ、その隣に胡坐をかく。天井にはLEDの電球がぶら下がっている。

「しかし……やつぱり俺にここでの戦闘は厳しいよなあ……」

装備を出現させ、俺は新しく支給された単装砲を触る。12センチのこれは旧型で大した威力なんかはないはずだが、その装備にすら難儀する有様では……。

「……まあいい。どうせやられてなんぼの戦車だからな……」

俺は少し溜息をつくと、とりあえず家の中を確認していく。台所には料理道具が一通り揃っており、トイレは水洗式になっている。その横の扉には小さいながらも木造りの浴槽の設置している浴室があった。台所の隣には勝手口があり、そこから出ると目の前は海が広がっており、防風林として松が何本も生えている。

それから中に戻り、箆笥や押し入れの中を確認する。中には生活に必要な道具が一式と、軍服が揃っている。軍服を取り出してみると、それは海軍の物であった。

「……俺、陸軍の兵器なんだが……。贅沢も言えないか」

少し溜息をつき、俺は試しに軍服を着てみる。すると、事前に俺に合わせて作られたのであろう、服のサイズは俺にキチンと合っていた。

「……なんか居心地悪いなこれ……。仕方ないか」

そう呟き、俺はトランクケースを開ける。そこにあるのは数日分の衣服に財布等の貴重品。後は古本屋で買っていった第二次大戦に関する本数冊。これが、今の俺の私物の全てだが、とりあえず財布を除いて全部筆筒に仕舞っておく。

「さて……。後は明日からか……。つて、もうこんな時間か」

ふと時計を見ると、時間は既に1時を回っている。この間の戦闘からの空腹も相まって、少し気分が悪くなってきている。取りあえず台所をもう一度確認したが、食材がまったくなかったから、俺は家を出て、生活区の中で案内された食堂に足を向ける。

「はい、いらつしやいませー」

俺が中に入ると、割烹着を来た女性……。さつきここに案内された時に不知火から紹介された間宮が俺を出迎えた。

「あら、チヌさんですか。お食事ですか？」

「ええ。何かお勧めの物はありますか？」

「そうですね……。では、定番海軍カレーを用意しますので、少々お待ちください」

そう言っておくに引っ込んだ間宮を見送り、俺は席の一つに着き、カレーを待つ。だが、カレーが到着するよりも早く、新しい客が食堂に入ってきた。

「あら、チヌさん。貴方もお食事ですか」

中に入ってそう言ってきたのは不知火であった。

「不知火殿も今からお食事ですか？」

「ええ。少し仕事で時間が遅くなっちゃいましたが……。相席、宜しいでしょうか？」

「ええ、どうぞ」

俺が頷くと、不知火は俺の向かいに座る。そして不知火が来たことに気づいた間宮が奥から顔を出すと、俺と同じカレーを注文する。

「部屋の服を着られたんですね。お似合いですよ」

「……私は陸軍の兵器ですから、違和感は拭えないんですけどね」

不知火の言葉に俺は苦笑を浮かべる……。まあ、内心はもつと苦いものがあるのだが、表に出すわけにもいくまい。

そんな考えを押し込みつつ、俺は不知火と会話を続ける。しばらくしてカレーが到着し、それを食べながらも同じような調子だ。しかし、海軍のカレーはうまいと聞いているが本当だな。おまけに、あの主砲を撃つて以降の空腹まで満たされていつている感覚がする。どうなってるんだ？

やがて、不知火が先にカレーを食べ終えると、水を一杯飲んでから席を立つ。

「それでは、私は午後の仕事がありますので、これで失礼します」

「わかりました」

俺がそう言つて不知火を見送ろうと顔を上げると、不意に不知火が俺の顔を見つめてくる。

「貴方の喋り方つて素じゃないですよね？」

「はい？」

突然の言葉に俺は首を傾げる。

「これから同僚となるあなたに一応の忠告としておきますが、この鎮守府内でその敬語を使い続けるのは疲れるので、素の口調もある程度だしておいたほうがいいですよ」

そう言うと、不知火は俺の返事も待たずに食堂を後にし、残された俺は不知火の言葉の意味を考えながら食事をする事となった。

第8話

結局、不知火の言葉の真意もわからないまま食事を終えた俺は、家に戻って命令書に目を通す。命令書の内容は提督が直接行った事と大差はなく、他には警備の道順やチェックを入れる紙がどこにあるか等を書き込んでいる地図があった。それに目を通し、とりあえず暗記しようと努力する。

「……あ、もうこんな時間か」

ふと窓の外に目をやると、既に日も落ちて辺りはすっかり暗くなっていた。どうも暗記に集中しすぎて時間の経過に全く気付かなかったようだ。一応、地図や命令書を筆筒にしまうと、俺は軽く体操で関節を解していく。そうしていると、不意に、扉がノックされた。

「はい？」

体操をやめ、俺は扉を開ける。すると、そこには不知火の姿があった。

「チヌさん。貴方の歓迎会を行いますので、ついてきてもらえますか？」

「………歓迎会？」

兵器の……しかも、ここでは碌に役に立たない俺が歓迎会なんて開かれるとは思って

いなかったが……。

「はい。艦娘達との顔合わせもしますので」

「なるほど、わかりました」

その理由に一応納得した俺は、服を軽く整え、不知火の後に続く。少しして、食堂に到着した俺たちが中に入ると、そこには提督と間宮。それに、十五、六名程の艦娘達が居た。

「おお、主役の登場だ」

そう言うと、提督は出入り口までわざわざ来て、俺の腕を掴んで全員に見やすいように真ん中の壁際に連れてくる。

「皆、彼が本日付でこの鎮守府に配属された三式中戦車のチヌだ。宜しく頼むぞ」

「チヌです。宜しくお願いします」

そう言つて俺が頭を下げると、艦娘達が一気に俺に詰め寄つてきた。

「本当に戦車さんなんですか？ どうやって私達みたいになつたんですか」

「兵装だしてみてよ、ほらほら」

主に詰め寄つているのは、明らかに子供の外見をしている艦娘だが、その後ろから成人女性らしい艦娘も詰め寄ってくる。

「はいはい。皆さん、チヌさんが困ってますから少し離れてください」

後ろから手を叩き、不知火が注意を促したおかげで艦娘達が俺から離れてくれた。

「チヌさん、こういうわけですので、できれば素の口調でいられるほうが楽だと思いますよ」

確かに、幼女相手に敬語を使い続けるのは辛い。それに他の艦娘達もどうもそう言うのを気にしている雰囲気はないし。

「ゴホン……えーと、こうでいいか？」

そう言つて兵装を出すと、艦娘達から感嘆の声上がる。

「おおー、ホンマに出しとるわ。うちらだつて装備は普段外してるのに、なんでできるんや？」

「これは凄いですね。まさか戦車でも私達と同じ方が居るなんて」

そう言つて俺の兵装に遠慮なく触ってくる艦娘達を不知火と提督と、後は数名の大人らしい艦娘がなんとか落ち着かせる。

「さて、そういうわけだ。彼にはこの鎮守府の防衛や警備の任務に就いてもらう。皆も仲良くしてやってくれ」

提督のその言葉に艦娘達が返事すると、俺は席に着く様に促される。促されるまま席に着いた俺は結局、艦娘達の好奇心を満足させるために色々答えたりやらなんやらないといけない羽目になった。

第9話

結局、あれから艦娘達にいろいろやられた俺は、覚束ない足取りながらもなんとか家に向かって歩いていった。

「……………気持ち悪……………」

重巡の艦娘……………確か足柄だったか、あれに無理に飲まされた酒のチャンポンが俺の胃の中で存在感を放っている。あいつとは酒を呑まないほうがいいな。

「チヌさん、大丈夫ですか?」

不意に後ろから声を掛けられ、振り向くと、そこにはメガネをかけた艦娘……………確か香取と言った気がするが、彼女の姿があつた。

「ああ、香取か……………正直キツイ」

敬語を使うのをやめ、俺は普段の口調で彼女に返す。

「そうだと思いますので。私の肩に手を置いてください」

「……………ああ」

前に出た香取の肩に右手を置いてそれを支えにしてなんとか歩き続け、そして家に着くと彼女から手を離し、畳の上に倒れこんだ。

「……動けないな」

へ々に動けば吐きそうだ。いくらなんでも配属された当日に自室を汚したくはない。「少し待つててくださいね」

そう言うのと、香取は押し入れから布団を出してきて俺の横に敷く。俺がなんとかそこに転がっている間に水を入れてきて俺の横に置いた。

「それでは、私ももう戻らないといけませんので。おやすみなさい」

そう言うて、香取は俺に微笑みを残して去って行つた。

(世話係とかそんな立ち位置なのか? ……あー、今の頭じゃどういう自己紹介してたかとも思い出せん……寝よ)

早々に考える事を放棄し、俺は眠りに全てを委ねて行つた。

翌日、俺は目を覚まし……そして、頭痛に顔を顰めた。

「痛つて……二日酔いなんて、初めて酒を飲んで以来か」

それでもなんとか体を起こして時間を確認すると、朝の5時を指している。取りあえず皺くちやになつた服を着替え、洗面所で体裁を整えると、家を出て、まずは警備の為に施設内を巡回する。

「あー……頭痛たいな……。人間の体はこういうのが面倒なんだ……」

そんなことをぼやきつつ、俺は施設内を順調に巡回していく。そして2時間もして巡回を終えると、俺は食堂に足を向け、歩き出す。だが、ふと足を止め、視界に映った物に視線を向けた。

「あれは」

俺の視線の柵にあるのは港湾施設。そしてそこから今まきに出撃している14名の艦娘達であった。彼女達は途中で6人、4人、4人の三つのグループに分かれて水平線へと消えていった。よく見てみると、6名のグループの先頭には榛名が。そして4名のグループの先頭にはそれぞれ不知火と香取の姿があった。

「彼女たちは今日の出撃グループだ。6人のグループは深海棲艦の撃退。4人のグループはそれぞれ偵察と資源確保に向かっている」

「うお!?!」

突然声を掛けられ、俺が慌てて後ろを振り向くと、そこには提督の姿があった。いつものまに背後取ってたんだ!?!

「彼女たちは毎日ああして敵との戦いに備えて活動している。でも、この鎮守府は人手不足だから彼女達だけじゃ手が回しきれないんだよ。特に、この鎮守府の防衛にはね。そして、深海棲艦を相手にする以上、普通の軍人を増やしても大した役には立たないし、

不埒な輩をどうにかするために多くの軍人を置いておけるだけの余裕もない」

「まあ、彼女達は一般人たちの中で生活したことがほとんどない世間知らずだから、不埒な輩を相手にさせるのも避けたいんだけどね。うっかり口車にやられかねないし、彼女達の敵はあくまでも深海棲艦だ」

「だから、君には期待しているよ。深海棲艦からも、人からも、この鎮守府を守る事ができる存在としてね」

そう言うと、提督は俺の肩を軽く叩いて「じゃあ、食事に行こうか」と言つて先に歩き出し、俺もその後を追う。

（人からも深海棲艦からもねえ……。俺だって、そんなに長く人と接してきたわけでもないし、深海棲艦相手に役に立つかどうかともわからないんだが……）

まあ、それでも鎮守府の中で他の提督以外の人間とほとんど接する事のない艦娘に比べればマシなんだろう。なんでも、各鎮守府には妖精と呼ばれる謎の存在達が雑用もこなしているという事で、普通の人間は本当にごく少数らしいし。

（……ま、いいか）

深く考えるのをやめ、俺は純粹に必要とされているだろうという事を喜ぶことにした。

第三章

第10話

鎮守府に配属になってから2週間が経過した。取りあえず警備の順路も頭に叩き込めたし、ここに所属する艦娘達の名前と顔も一致するようになったし、今のところ俺の仕事は問題だろう。

艦娘達や他の軍人達とも取りあえず良好ないし無難な関係を築けている。取りあえずしばらくの間はこんな状態が続くだろう。

そう思っていた時期が、俺にもあつた。

今日、俺はそれまでと特に違いのない一日を過ごしていた。朝に起きて身なりを整えた後は基地内の巡回。その途中で港湾によつて出撃する艦娘達を見送る。それから警備の任務を数少ない女性軍人に引き継いでから間宮食堂で食事をとる。

朝食を食べ終えてからは訓練と勉強の時間となる。ともかく効く効かないは置いとくとしても深海棲艦に砲撃を当てられなきやどうしようもない。そして、艦娘達による海戦についても勉強しなければ沿岸防衛時に艦娘達の足を引っ張りかねない。

そういうわけで俺は特訓を一通りこなした後に図書館の中にある自習室で勉強をしていると、不意に肩を叩かれた。

「チヌさんお勉強ですか？」

そう言ってきたのは香取であった。

「ああ。俺はド素人だからな。香取は遠征から帰ってきたところか？」

「はい。皆がきちんとしてくれたおかげで、今日も無事に遠征を終えられました」

そう言つて笑顔を浮かべる香取。なんでも香取は練習巡洋艦という艦であり、駆逐艦や軽巡達への指導役という立場らしい。まあ、見た目からして教師みたいな感じはしてたが、確かに駆逐艦を率いて遠征に行く姿は教師として生徒を引率してるような感じがしてゐる。

「もしよろしければ、私もお手伝いしましょうか？」

「それは助かる、ちようどわからないところが……」

俺がそう言おうとした時、不意に大音量の警報が鳴り響いた。

「この警報は？」

「敵襲です、急いで司令室に向かいましょう」

そう言うと、香取は先ほどの優しい態度から一転して厳しい表情を作り、図書室から出ていく。俺も急いでその後を追った。

司令室に到着した俺の目の前には難しい顔をした提督。そして、香取と、香取と一緒に帰ってきた艦娘、暁、響、川内に、普段工房に籠っている明石、そして今日の待機組であった羽黒、青葉の姿があった。

「先ほど、近海を巡回していた第三艦隊から通信が入った。空母を含む一艦隊がこの鎮守府に向かって来ているとのことだ。後1時間もしないうちにこの鎮守府に到着するだろう」

第三艦隊の今日の編成は……確か黒潮、大井、北上だったか。よくまあ向こうからの攻撃を受けずに済んだもんだ。

「羽黒を旗艦として編成を組み、至急防衛の為に攻撃してくれ。明石、チヌの二人には対空装備の上で鎮守府で待機だ」

「了解しました」

提督の指示に全員が敬礼で答えると、すぐに司令室を後にして出撃準備を整える。そんな中、俺と明石は武器庫に向かう。

「いやあ、私工作艦だから敵と戦っても役に立ちそうにないんですけどねえ」

「そんなの言ったら俺はどうなるんだよ。そもそも俺が装備できる対空装備あるのか？」

武器庫に到着した俺達は装備を整える。と言っても用意するのは明石で、俺は明石が装備を出してくるのを待つしかないのだが。

「えーと。取りあえず7. 7 m m機銃ですね。後は単装砲で対処してもらおうしかないです。すみません、まだチヌさんの装備が作れてなくて……」

そう言つて明石が渡してきた機銃を取りあえず装備する。元々7, 7 m m機銃は俺にも装備された装備だったおかげか、使う分に不自由はなさそうだ。

「私のほうは……こんなもんでしょうか」

そう言っている明石のほうを見ると、なんかやけにごつい高角砲やら連装砲を装備していた。やっぱり工作艦って言つても艦娘は艦娘か。ちなみに、彼女は今、普段着ているツナギじゃなくてセーラー服を着てる。

「じゃ、行きますよ」

「ああ」

こうして俺は、この鎮守府に来てから初めての实战に赴く事になった。

第11話

明石と共に港に到着した俺たちは、ちようど出撃する第三艦隊を見送る形となった。

「まだ敵は見えませんか。でも、確実に近づいてきています。見たいです」

そう言つて明石は油断なく水平線を見つめる。俺も双眼鏡で水平線を見続ける。

「……あれは……」

やがて、双眼鏡の先で砲撃や水雷による爆発の煙や、敵空母の艦載機が飛び交う様子が見えるようになってきた。それに合わせて艦娘達と深海棲艦の姿も確認できた。

「マズイですね。やっぱり主力艦隊のメンバーじゃないと、空母相手はきつそうです」

「そうだな」

隣で戦況を見ている明石の言葉に俺は頷く。先ほどから互いに砲撃を行っているが、どうも致命傷を与えられてる様子はない。特に空母からの艦載機への対処が厳しいようだ。

「第一艦隊の帰投はいつたいいつなんだ？ 彼女たちが戻ってきたら……」

「予定だとまだまだ先ですし、予定より早く帰つてくるとしたら第一艦隊も深手を負つてる状態でしょうから、どっちにしろアテにはできないです」

「そうか……きついな」

援軍が当てるにできないとなると現状戦力で対処するしか手はない。だが、このまま無事に敵を撃退できるとは思えない。

しばらくして、俺の予想は的中した。

「あ、敵の空母がこっちに来ます！」

そう叫んだ明石の視線の先を追うと、確かに第三艦隊の攻撃を掻い潜りつつ、敵の空母がこちらに向かつて来ている。第三艦隊もそれを阻止しようとしているが、駆逐艦や重巡達がそれを阻んでいる。

「空母相手か……。戦車にとつて上からの攻撃は天敵なんだが……。まあ、軍艦の砲撃食らえば大抵一発で吹き飛ぶのは同じだが」

そう言いつつ、俺は兵装を構える。

「私だつて戦闘力は低いんですから。なんとか、羽黒ちゃん達がこっちに来るまで頑張らましよう」

そう言つて機銃を構える明石。それを横目で見つつ、俺は迫りくる空母を睨み付けた。

距離が近くなつてくるにつれて、空母の姿が明らかになってきた。噂で聞いていた通

り、やはりその姿は人間の女性のそれである。が、頭部にはあの駆逐艦とかと同じような、なんかよくわからない怪物のような何かが覆いかぶさってる。あれは帽子か兜のもりか？ 趣味悪いな……。

「……！」

遠いせいでよく聞こえなかったが、恐らくは攻撃の指令なんだろう。空母が何か叫ぶと、それに合わせて大量の艦載機がこちらに向けて飛んできた。しかし、艦載機までなんか化け物の姿なんだな。しかも、あの被り物から出てるし

「来ましたよ！ 対空防衛！」

「了解！」

明石の叫びに応じて、機銃を、主砲を艦載機に向けて発射していく。だが、敵の艦載機は身軽に動き回り、ほとんど当てる事ができない。なんとか当たった弾も致命傷を与えられている様子はない。

「てえええい！」

一方、明石は戦闘が得意でないと言いながら、確実に敵の艦載機を一機ずつ撃墜している。やっぱり練度の差は大きいな、これは。

「……そんな悠長に考えてる余裕はないな」

そんなことを口に出しつつ、俺は必死に動いていた。艦載機からの爆撃や銃撃を食ら

ええ一たまりもないからともかく必死に動く。だが、そんな中で俺は、自分の中に燃え上がる物を感じていた。

(心が燃える……なんて高揚感だ。やつぱり……これが兵器としての俺の有り方なんだ！)

声にこそ出さなかったが、俺は心のままに機銃や主砲を撃ち、艦載機を追い払う。だが、そんな俺の高揚感とは裏腹に、戦局は一向に良くならない。

「このままじゃまずいですよ。本当、空母は厄介ですね」

「本当にな」

互いに背中を合わせ、俺と明石は上を飛び交う艦載機を睨む。既に周りは艦載機の攻撃でかなり被害が出ているし、俺も明石も少なからず傷を負っている。

「あの空母を落とす事はできないのか？」

そう言うって俺は、艦載機の収納と発艦を繰り返している空母を指さす。

「ダメですよ。私達の装備じゃまともにダメージ与えられませんから。ともかく艦載機を落としましょう！」

そう言いながら明石が発射した対空砲によって、艦載機が一機落とされる。だが、未だに十以上の艦載機が俺達の上空を飛び交っている。

「だが、このままじゃ埒が……」

俺がそう呟いた時、沖から大きな爆発音が起き、そして巨大な水柱が立った。
「!?」

俺だけでなく、明石も敵空母もそちらに視線を向ける。すると、そこには深海棲艦は存在しておらず、あちこち傷ついたり煙を上げたりしながらもしつかりとこちらに向かつて来ている第三艦隊の姿があつた。

「やった！ これでも残ってるのはあの空母だけですよ」

そう言つて嬉がる明石。そして空母のほうはというと忌々しげな表情を浮かべながら艦載機を収納しつつ、沖に向かつて反転している。

「ただで逃げられると思うな！」

後ろを向けた瞬間、俺は主砲を放つていた。弾は空母まで到着し……そして、バリアを僅かに貫いたが、そこまでだった。

「キサマー！」

バリアを貫かれたことに空母は怒りの表情を浮かべて俺を睨む。だが、それも一瞬で、すぐに踵を返して沖へ向かつて行つた。

「……やっぱりダメか」

大きくため息をつき、俺は主砲に目を移す。やはり俺が装備できる兵装でまともに傷を与える事は無理のようだ。さて、今後どうするべきか……。

「危ない！ 避けて！」

「え？」

思案に暮れていた俺に明石の声が届く、顔を上げた時、俺が目にしたのは俺に向かって飛んでくる一発の砲弾であった。

「な!?!」

咄嗟に回避行動をとり、直撃こそ避けたが、至近距離で着弾した砲弾の爆発の衝撃は俺に耐えられるものではなく、そのまま吹き飛ばされ……そして俺の意識は途切れた。

第12話

「ごめんなさい！ ごめんなさい！」

家の蒲団の中で包帯やらギプスやらで全身を巻かれている俺に羽黒は先ほどから土下座する勢いで謝ってきている。

「気にする必要はない。生きてるんだから問題ない」

そう言つて俺は羽黒を宥めると、後ろに居る足柄に羽黒を連れて行くように促す、それに気づいた足柄も頷き、羽黒を連れて家から出ていった。

「……あー、最初の大破が味方からの誤射からとはなあ……」

二人が居なくなつたことを確認し、俺は大きいため息をつく。まあ、死んでいないし、戦局に影響があつたわけでもない以上、誤射程度でとやかく言つても仕方ないか。その程度、軍隊ならあり得ることなんだから。

「チ又さん、具合はどうですか？」

そんなことを考えていると家の戸が開かれ、不知火が入ってきた。

「不知火か。まあ、まったく動けない程じゃないが……入渠のほうはどうなってるんだ？」

「第一艦隊、第三艦隊、共に負傷している娘が居るので……もう少し時間がかかりそうです」

不知火の言葉にそうか。と返し、俺は溜息をついた。まったく、つくづく戦車の我が身が情けない。味方の誤射の爆発程度で大破した挙句に意識を失なって、艦娘達の入渠が終わるまで寝てるしかないなんて。

「申し訳ありません。この鎮守府は前線に比べて施設が整ってなくて……他の鎮守府ならもつと入渠施設も大型なんです……」

「いや、構わないよ」

俺の表情を読んだんだろう、不知火が少し申し訳なさそうに頭を下げてる。別に不知火に頭を下げてもらおうような事でもないから気にしなくていいんだがな。誤射した張本人にはこれでもかと謝られたし、戦闘中の事を糊塗されうるさく言う気もない。

「入渠が空くまで待つてるから、不知火はもう戻ったらどうだ？ 遠征してたんだから疲れてるだろ？」

そう言ったが、不知火は首を横に振った。

「疲れは問題ありませんし、報告書等も他の艦娘達がやってくれていますから。チヌさんが入渠するまでは一緒に居ます」

そう言うのと、不知火は「お水を用意しますので」と言っただけで台所に向かった。いや、死

ぬような傷でもないし、入渠が終われば回復するんだから放っておいてくれていいんだが……さすがに言いづらい。

「チヌさん、お水用意しました」

そう言つて俺の横に水の入つた水差しとコップを置く不知火。結局、俺はこのまま入渠が空くまでどころか、入渠施設に行くまでの道中の支え役や、施設の説明まで全て不知火に頼むこととなるのだつた。

第四章
第13話

あの敵襲から数日が経過した。無事に治療を終えた俺は、あれから対空を含む訓練にいそしんでいる。そして、この日の朝、非番の俺は訓練場で対空訓練を行っていた。

「チイツー！」

上から襲ってくる演習用の艦載機の銃撃や爆撃を避けつつ、なんとか反撃するが碌に当てることができない。

「ほらほら、艦載機の動きにちゃんと見なさい。そんなんじや今度は吹っ飛ばわよ」

そう言ってくるのは演習用艦載機を発艦させている飛鷹だ。だが、俺はそれに反応する余裕はない。くそ、あの実戦の時は明石が相当頑張ってくれてたんだな。

「しまっー！」

不意に、艦載機の内の一機が急降下してくる。俺はそれを機銃で撃ち落としたが、その後ろから飛んできた複数の艦載機から落とされた爆弾によって、俺は吹っ飛ばされた。

「もう、だから吹っ飛ばされるって言ったじゃない」

艦載機を収納した飛鷹が呆れながら俺に近づいてきた。

「仕方ないだろ。戦車が対空攻撃する事自体が想定外なんだから……痛てて……」

なんとか体を起こそうとするが、吹っ飛んだ衝撃のせいかわからない。体がうまく動かない。見かねたのか、飛鷹は一つ溜息をつく、俺の腕を掴んで引き起こした。

「まったく、私の服が汚れちゃうじゃない。次はもっとしつかりしなさいよ」

「……善処する」

汚れるなら別に俺を引き起こさなくていいんだが、そう言ったらなんか余計に怒りそうなのから黙っておこう。

「もうこんな時間だし、今日はこの辺にしましょう。ほら、明石に行くんでしょ？　行くわよ」

「あ、ああ」

先を行く飛鷹の後を慌てて追って、俺たちは工房に行く。そして中に入ると、ちょうど明石が工房の出入り口の傍で水を飲んでいる姿があった。

「あ、飛鷹さん、チヌさん。訓練終わったんですか？」

俺達に気づき、明石が声をかけてきた。

「ああ、ズタボロに吹っ飛ばされたけど……機銃の砲身が曲がったから修理頼みたいんだが」

「はいはい。承りますよ。妖精さん、修繕台まで持って行ってくださいーい」

明石が工房の中に向かって言うと、小人達が中からわらわらと出てくると、俺から機銃を受け取って、工房の中に持って行き、変わりの機銃を持ってきたのでそれを受け取る。

「さて……と。じゃあ、俺は着替えてくるか……流石にここまで泥と砂まみれじゃなあ……」

「そんな恰好で食堂に行ったら追い出されるわよ。私はこの後に出撃があるから、先に食べちゃうわ」

「わかった」

受け取った機銃を装着しつつ、俺は飛鷹と別れて自分の家へ向かった。

第14話

家に戻った俺は洗濯機の前まで行くと、とりあえず上の服を脱いでそのまま中に放り込む。しかし、所々から泥や砂も入ったせいか、肌着まで汚れてるな。これはもう下も全部放り込んで、軽く風呂に入るしかないか……。

そう思つてズボンに手を掛けた時、突然家の戸が開かれた。

「チヌ。ちよつとお願ひしたいんだ……けど……」

後ろを振り向くと、暁と響が、戸を開けた状態で固まっていた。

「戸閉めて外でてろ。後で聞くから」

俺がそう言うのと、響が固まったままの暁を戸から引きはがし、そのまま戸を閉めた。まったく、ノックもせずには戸を開けるなんて、何が一人前のレディなんだか。

ともかく、俺は服を全部洗濯機に放り込み、動かしておく。風呂に入つて軽く体を洗う。5分程で汚れを洗うと風呂を出て新しい服に着替え、そして戸を開けた。

「まったくもう、戸の鍵を閉めていないなんて、不注意にも程があるじゃない」

出てきた俺に暁が怒ってきた。

「そもそもノックもせずには開けたお前が悪いんだろうが。一人前のレディならマナーを

弁えろ」

「ムムム……」

何がムムムだ。

「いや、ナイスだったよ暁」

「へ？ 何がよ」

ふくれつ面になっている暁の肩を響が叩き、サムズアップする。

「だって、チヌの体見れたもん」

「は？ な、何言ってるのよ響?!? そ、そんな……」

「おい響、どういう意味だそりゃ」

響の言葉に暁の顔は真っ赤になり、俺も怪訝な表情を浮かべている。

「どういう意味って……あれだけ良い体してたら提督と違って肉体労働も大丈夫そう

じゃないか。提督はけっこうひ弱だから、何か頼んでも当てにならないんだよ」

軍人なのによいのか？ あの提督。そりゃまあ、管理職なら体より頭だろうけど。

「な、なによ。そういう意味なの？」

「ん？ 暁はいつたいたいどういう意味にとったんだい？」

「え、そ、それはその……」

心底不思議そうな顔で尋ねる響に暁は顔を真っ赤にして言葉に詰まっている。そろ

そろ、俺食堂に行きたいんだが、いつまで付き合わなくちやいけないんだこれ？

「で、一体何の用なんだよ？ 漫才するなら余所でやれ」

俺がそう言うと、暁がこれ幸いと俺に向きなおる。

「そ、そうよ。用事があるの。ねえ、チヌって今日非番よね？」

「ああ、そうだけど」

「それじゃあ、私達の買い物に付き合ってほしいんだ」

「……はあ？」

二人の言葉に俺は困惑する。こいつらの買い物に付き合う？

「買い物に付き合えて……。俺が？ なんで？」

「今日買い物に付き合ってくれる予定だった香取が作戦行動の変更とかで来れなくなつたんだ。他の皆も出撃や遠征があるし、他に空いているのがチヌだけなんだよ」

「お前らだけで行けばいいだろ」

「私達だけじゃ外出許可が下りないのよ！ まったく、大人のレディを子ども扱いするんだから、酷い提督よね」

暁の言葉で俺はどういう事か納得した。不知火はまだそうでもないが、この二人じゃ確かにダメだろうな。

「……まあ、俺も構わないが、朝飯だけは食わせる。訓練してたから腹減ってるんだよ」

「もちろんだよ、チヌ」

「ふふん。私達みたいな美人と一緒に買い物に行けるなんてありがたく思いなさい」

「響、暁は留守番したいようだから、今日は二人で行くか」

「ハラシヨ。それはとても素晴らしい提案だね」

「ちよつ、二人とも酷いじゃない！」

第15話

結局、朝食を終えた俺たちは電車やバスを使って、大体1時間程で街に着いた。

「あー、街も久しぶりねえ。さあ、今日はどう遊ぼうかしら」

「予定はちゃんと立ててるよ、暁」

街に來た途端、二人のテンションが上がる。まあ、年頃の娘のメンタルなんだったらそうなんだろうなあ。私服も色々気合が入っているのはわかるんだが……俺には暁がデニムジャケットにワンピース、響がフルソンとワンピースだつて事ぐらいしかわからない。正直ファッションなんかそんな興味ないしなあ。

(しかし……街か……最初の頃を思い出すな)

一方、俺の脳裏に浮かんだのは、生まれてからあの港町に來るまでの間に行つたいくつかの大きな街だつた。まあ、あの頃の俺は碌な常識もなかったから、苦労した記憶しかないんだが。

「で、最初に行くのは確か映画館だつたか？ 早く行つた方が良くないか？」

「そうだね。早めに行こうか」

「わかつたわ。でも響、一体どんな映画見るの？」

「それは行つてのお楽しみだよ」

そう暁に返した響。その表情、声音に、普段見ない何かを感じたのは……きつと、俺の気のせいじゃないだろう。

そして、その予想は映画館に着いた時の暁の反応で気のせいじゃない事はわかった。

「え、ひ、響……これ……見るの?」

「? そうだよ暁。けつこう面白いらしいよ」

二人がそう話している前にある広告の映画……それは所謂ゾンビ物だった。

「で、でも、本当に見るの? ほほ、他の映画でもいいんじゃない?」

「でも、他の映画ってよくわからない人間ドラマとかだよ? こつちのほうがりや

すくていいと思うけど……もしかして暁、怖いのか?」

「な、なによ! 一人前のレディがこんなの怖がるわけじゃない! さっさと行く

わよ二人とも」

そう言つて一人で映画館の中に入っていく暁。取りあえず俺と響も後に続き、料金を

支払つてポップコーンとコーラを購入すると、そのまま上映室に入った。

「えーと席は……あそこか」

俺達の席はちょうど前後左右から見て真ん中らへんだった。そこに左から俺、響、暁の順番で座る。

「もうちよつと時間があるね。チヌ、先にトイレ行きたいから荷物見ててくれるかい？」
「ああ。眺も行つとけよ」

「わ、わかっているわよ」

二人を見送ると、俺はパンフレットに目を通す。うーん、港町のレンタルビデオ屋でこういうのを借りた事はあつたが、見てもどうもよくわからないんだよなあ。

しばらく適当にパンフレットを眺めていたら二人が戻ってきた。交代で俺もトイレに行つて戻ってきたら、ちょうど映画が始まる頃だつたが。

(あれ、響の前のやつでかいな)

席は微妙に空いてはいたが、よりもよつて響の前に座っていたのはそこそこ身長のある男だつた。

「響、俺と席交換するか？」

「良いのかい？ 助かるよ」

こうして俺と響が席を交換していると部屋が暗くなって映画が始まった。そして最初の大量の他の映画の予告を適当に見てから本編が始まった。

(……うーん)

見始めてから30分程で俺は飽きてきていた。そもそも、俺にはこのゾンビによる恐怖つてのがよくわからん。筋肉の制御がきかなくて常にフルパワーで恐怖心もないっ

てのは、まあ突撃兵としては優秀だけど、そんなの長続きするはずがない。数日もしないうちに自分の筋肉の力に耐えきれず体が崩壊するのが目に見えてるし、そもそも突撃するしか脳のない輩なんか砲撃で吹き飛ばすなりひき殺せばいいし。

にしてもこのゾンビってのが良くわからん。なんでこんな動きが遅い癖に力だけあるんだ？ こんな動きが遅いつて事は体の筋肉組織だつて相当やられてるはずだ。しかも血液が通つてないつて事は体に栄養補給もできてないはずなのに、どうして延々動いているんだ？ どう考えても数日もすれば腐つてまともに動けないだろ。一か月もする頃には全滅してると思うんだが……。

そんなことを思っていると、不意に俺の右腕が掴まれた、視線を横に移すと、暁が俺の腕を掴んでた。あ、怖いんだな、やつぱり。

「怖いなら先出てるか？」

「(ゴコン)、怖くないわよ！ い、一人前のレディは……ひい!？」

暁がそこまで言つてた時、ちようど主人公グループの一人がゾンビに襲われて食い殺された。それを見た暁がもはや取り繕うこともできないのか、俺の腕にしがみついて必死に目を閉じている。

(ん?)

ふと俺が反対側に目を向けると、響も俺の腕を掴んでいた。

「……怖いなら外出るか？」

「いや、大丈夫だよ。でも、このまま掴ませておいてくれないかい？」

そう言つて、響は更に力を込めて俺の腕を掴んでくる。結局俺は、映画が終わるまでこの二人に腕を掴まれたまま過ごす事になったのだ。怖いなら見なけりやいいに。

第16話

「うう……もう絶対に見ないから！」

「そんなに怒らないでよ暁」

映画が終わり、休憩スペースで暁はふくれっ面をし、響がそれを宥めている。どうも相当怖かったようだ……まったく、何が大人のレディだか。

「暁、次はお昼を食べて、それからお買い物だよ。色々買いたいものがあるって言ったじゃない」

「うう……そうね。買い物しましょう。映画なんてなかったのよ」

どうやら気持ちの切り替えをしたようだ。まあ、落ち込まれたままってのも困るから助かるが。

「で、どこで飯にするんだ？」

俺が聞くと、響が少し考えて上を指さす。

「えーと……うん、ここの上階がレストラン街だからさ。そこで先に食べようか」

「ああ、わかったよ。暁もそれでいいか？」

「うん」

こうして俺たちは近くのエレベーターを使い、最上階に上がる。エレベーターを降りると、確かにそこには和洋中様々な飲食店が軒を連ねていた。

「で、どこで食うんだ？ 何か行きたい処はあるのか？」

「私、あそこがいいな」

そう言つて暁が指さしたのは、かなり有名なファミレスで今もそこその人数が並んでいる。

「いいのか？ 時間待ちになつてるぞ」

「私は別に構わないわよ。響も、別にいいわよね」

「問題ないよ。たまに街に出てるんだから、美味しいものを食べたいからね」

というわけで、俺たちはここで食事をする事になった。列に並ぶこと大体40分程で俺達の番が来て、俺たちは窓際の席に通された。

「うわあ、いい景色ね。ほら響、人があんなに小さいよ」

「ハラショー。これは普段は見れない光景だね」

そう言つて窓からの風景を眺める二人。まあ、あの鎮守府の建物の高さじゃ、こんな光景なんて見れないからなあ。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

二人がそうやって眺めていると、ウェイトレスがテーブルに来て注文を聞いてきた。

「えーと、俺はステーキセットでいいか……。おい、二人はどうするんだ？」

「え？ わ、私はこれにするわ」

そう言つて暁が頼んだのは辛口のカレーであつた。……大丈夫か？ こいつつて確か甘口ばかり食つてた気がするんだが……。

「じゃあ、私はこれにするよ」

そう言つて響が注文したのは……。お子様ランチだつた。

「ふ、やっぱり響はお子ちゃまよね」

「本当に良いのか？」

「問題ないよ。今日はランチを頼んだら追加でプリンが貰えるからね。それに、普通のメニューのなら間宮さんのほうが美味しいし」

「プ、プリン!？」

あ。暁がプリン、という単語に反応した。

「暁、どうしたんだい？」

「え、えーと……。そのー……」

モジモジと顔を赤くして何か言おうとする暁。さっさと何か言わないとウエイトレスも困つてるぞ。

「暁、注文変えるなら早くしろ」

「……だ、大丈夫よ！ 注文はそのまま！」

そう言ってそっぽを向く暁。結局注文はそのまま通したが、本当に大丈夫か？
しばらくして、俺の不安は的中した。

「うう……うぐう……」

カレーを一口するたびに、暁の口からは苦しみの声が漏れ出てる。

「暁、大丈夫かい？ 少し私も食べようか？」

「だ、大丈夫！ だいじよ……」

どう見ても大丈夫じゃないんだが……仕方なく、俺はウエイトレスを呼ぶと、牛乳を注文した。で、しばらくして来た牛乳を暁の前に置く。

「な、なによ。私が牛乳が必要な体つきだつて言いたいの？」

「誰が言った。誰が。辛い物を食べたら水よりも牛乳とかのほうがいいんだよ。常識だぞ？」

そう言うと、暁は驚いた顔で牛乳とカレーに交互に視線を送る。そして、顔を引き締めると、牛乳を口に含んだ。

「あ………本当だ」

暁はそう呟くと、再びカレーを食べ始める。そして辛さが辛くなったところで牛乳を口にし、また食べ始め、なんとかカレーを完食した。

「あー、辛かったあ……鎮守府のカレーのほうが美味しかったよお」

「海軍のカレーは美味しいからね。でも、よく完食できたね」

カレーを食べ終え、机に突っ伏す暁に響が驚きの表情で見つめている。

「ふん、大人のレディなら当然よ。尊敬しなさいよ?」

「うん、チヌの頭に尊敬するよ」

「なんでよー!?!」

騒ぐ二人をしり目に、俺は飯を完食する事に専念していた。いつまでも相手したら飯が冷める。

第17話

なんだかんだで食事を終えた俺たちは服屋に来ていた。暁と響の私服を買いに来たんだが……。うーん。

「響、これどうかしら？」

「似合うと思うよ。じゃあ、私のこれはどうかな？」

「あー、凄い似合うわよ響」

なんか、色々と話してるけど、正直服の良し悪しなんて俺にはわからないんだよなあ……。あの港町じゃ着飾ったやつなんてほとんど居なかったし、俺の私服だって基本は丈夫さ優先だしなあ。

「……………ん？」

ふと気づくと、周りの女性客の何人かが俺のほうに視線を向けてる。あー、女性フロアに長時間いるとやっぱダメか。

「おい、暁、響。俺はちよつと外に移動してるからな」

「ん、わかったよ」

「はいはい」

こうして、俺は女性用服のエリアを抜けて休憩スペースに移動すると、自販機でお茶を買って、それを飲みながら椅子に座る。

「フアツションなあ……。俺も勉強しなきゃだめなのか？」

だが、兵器である俺がフアツションなんか勉強しても意味があるのだろうか？ 迷彩とかなら意味はあるだろうが……。

そんなことを考えていると、不意に、俺の周りを4人の男が取り囲んだ。

「……なんだ？」

俺が聞くと、一人が俺の前に出てきた。体格もけつこうでかいし、こいつがリーダー格か？

「お前、何者だよ？ 暁ちゃんと響ちゃんとイチヤイチャしやがってよう」

「……はあ？」

言っている意味がわからず、俺は首を傾げる。

「とぼけんじゃねえ！ 暁ちゃんと響ちゃんは俺等のアイドル！ 最高の艦娘！ そんな彼女達に引っ付きやがって！」

「そうだそうだ！」

リーダー格の男の言葉に周りの連中も奇声を上げる。……ヤバイな、わけがわからないすぎる。

「俺は彼女達の同僚で付き添いだ。それ以上でもそれ以下でもない」

俺が勤めて冷静にそう返すが、男たちの勢いが削がれる様子もなく、リーダー格の男が俺の襟を掴んで、俺を無理に立たせた。

「おい、ふざけんなよ？ 艦娘の同僚？ お前どうみても男じゃねえか。何嘘ついてやがんだこら」

そう言つて、リーダー格の男は俺を威嚇してくる。まあ、深海棲艦や飛鷹の艦載機に比べれば迫力も何もないんだが、どうするかなあ。民間人とイザコザ起こすのも問題だし。

「ちよつと！ あんた達、チヌに何やってるのよ！」

俺が対応に困っていると、片手に袋を持つている暁と響が向こうから走ってきていた。

「やべ、暁ちゃんと響ちゃんだ」

「撤収だ！」

二人の姿を確認した途端男たちは蜘蛛の子を散らすように四散していった。

「やれやれ……なんだったんだあれ？」

掴まれていた襟をただし、溜息をついていると二人が俺の元に駆け寄ってくる。

「チヌ、大丈夫かい？ いったい何があったんだい？」

「そうよ。まさか、喧嘩売ってたんじゃないわよね？」

「んなわけあるか。なんかお前らのファンだとか、俺が付きまるとか言ってたけど、なんなんだ？」

俺の言葉に、暁は少し考えるそぶりを見せたが、響はすぐに何か思い立ったようだ。

「言葉で説明するより、本屋に行った方が早いかな。ちよつと来て」

そう言つて響が俺達を連れてきたのは近くの書店だった。そして、その雑誌コーナーに到着すると、その一角を指さした。

「ほら、これだよこれ」

そう言つて響が指さした先にあるのは、艦娘達に関する雑誌の山であつた。そして、その中に暁達第六駆逐隊の特集もある。

「那珂以外の艦娘もこうやって特集されたりするからさ。そう言つた手合いが増えてるって司令官が話してたんだ」

「何よこれ。いったいどこで撮影してるのよ？」

暁の視線の先には明らかに鎮守府内での光景と思しき写真がいくつつかある。しかも、割とプライベートと思しきシーンも見受けられる。

「私達の許可の元撮影しているのが大半だけど……一部は私達じゃなくて提督に話を通してただけのものもあるみたい。それに、軍の中にも盗撮して小遣い稼ぎしてる人もいるっ

て噂もあるよ」

「……やれやれ。提督は何を考えているんだ？」

手に持っていた雑誌を置き、俺は大きくため息をつく。そして、周りの人間の視線がこつちに向いている事に気づいた。

「……おい、行くぞ。バレてる」

流石に二人の顔の載っている雑誌を手を取ってたらバレるか。ともかく、俺は二人を促してこの場を離れた。

第18話

結局、あれからなんやかんやと買い物をしてたらけっこう時間がかかっていた。まだ日は落ちていないが、それも時間の問題だろう。

「ちよつと急いだほうがいいかな。こつちの道を通ろう」

そう言つて響は裏路地を指さす。

「えー、こんな所歩くの?」

暁がそう言うのも無理はないだろう。薄暗いし、あつちこつちにゴミ箱あるし。

「でも、ここを通らないと厳しいよ? まだ行きたい所あるんでしょ?」

「むー、わかつたわよ」

結局暁も折れて、俺たちは裏路地を通つていく。だが。

(……!?)

俺が後ろを振り向くよりも早く、俺の頭に何か固いものが叩きつけられた。

「きゃあ!?!」

「チヌー!」

二人の叫び声が聞こえたが……俺は叩きつけられた部分を軽く撫でながら後ろを向

く。

「な、なんで倒れねえんだよこいつ!」

後ろを向いた先に居たのは、俺に絡んできた奴……が一人いるな。で、後の二人は見
た事ない。その手には鉄パイプやら角材やらを持っている。

「……軍所属に対しての暴行。これは現状の法律では、一般人への暴行以上の罪状にな
ると知つての事か?」

そう言つて俺が一步前に踏み出すと、連中は一步後ろに下がる。

「ぐ、軍属!? おい、話が違うじゃねえか! あいつらは暁ちゃん達に付きまとつてるス
トーカーじゃねえのかよ!」

「ん、んな事言われてもよ! あいつ、二人の同僚とか抜かしたんだぞ! 男でそんなの
いるわけねえだろ!」

「じゃあ、誰なんだよあれ!」

「……何言つてるんだこいつら? まあいい。」

「……軍属への暴行の現行犯につき、逮捕する」

そう言つと、俺は一息に三人の中に突入すると、俺を殴つたであろうやつの鳩尾にま
ずは正拳突きを捻じ込む。そしてそいつが崩れ落ちるの横に避けつつ前に踏み出し、鉄
パイプを持っているやつらの顎にアッパーを叩きこむ。そして右足を軸に体を回転させ、

最後に残っていた男の腹部に蹴りを突きこんだ。

「……………こんなもんか？」

地面に倒れ伏す三人を見て、俺は軽く息を吐く。そして暁達のほうを見たら……………暁に怯えた目で見られた。

「チ……………チヌ。怖い……………」

「チヌ、流石にやりすぎなんじゃ？」

一方の響はやけに冷静な声音だ。お前ら、本当は響のほうが年上だろ？

「仕方ないだろ。俺が普通の人間だったら最初に殴られた時点で重傷なんだぞ。今から警察に電話するが……………お前たちはどうする？ 先に鎮守府に帰るなら、鎮守府に連絡し

たら大丈夫だと思うが……………」

「いや、証人は必要だろ？ 私は付き合うよ。暁はどうする？」

「い、妹や同僚を置いて一人で帰れるわけないでしょ。私も行くわよ」

「どうやら二人も付き合ってくれるようだ。それを確認してから、俺は警察に連絡した。」

第19話

結局、あれから警察の到着、事情聴取等でけっこうな時間がかかってしまい、解放された頃にはもう日が落ちてきており、帰りのバスに乗る頃にはすっかり夕暮れになってしまっていた。

「あーあ、今日は散々な一日だったわよ。ゾンビ映画は怖かったし、変なのに絡まれたし」

「まあ、普段できない体験だったかな。でもよく無事だねチヌ。あれ、鉄パイプで殴られたんじゃないか？」

「ん？ そりゃまあ、戦車だからな。あれぐらいでどうにかなったことはないが」
その言葉に二人は互いの顔を見合わせる。

「チヌ、貴方どう見ても人間じゃない。普通は鉄パイプで殴られたら昏倒ものよ」

「いや、確かに見た目は人間だが……俺の本質は戦車だぞ？ 今までも似たような事はあったけど、やばい傷なんて受けた事はないんだが……お前らだってそうだろう？ 深海棲艦からの砲撃を食らって無事なんだから」

俺の言葉に、二人は首を傾げる。

「いや……深海棲艦の砲撃を食らっても確かに簡単に沈没はしないけど、あんな鉄パイプで殴られたら私達じゃ無事じゃ済まないよ。私達の体は人間とほぼ同じなんだから」

「そうよね。そうじゃなかったらこんなに驚かないわよ」

「……そうか……」

「いったいどういう事だ？ 仮に、至近での爆発で俺が吹っ飛ばされたあの羽黒の砲撃を食らったとしてもこいつらはあんな吹っ飛ぶこともないはずだ。それが人間とほぼ同じ体で、鉄パイプで殴られたら死にかねないとか。いったいどういう違いがあるってんだ？」

俺は首を傾げる……が、すぐに考えるのをやめる。今考えても仕方ない。

「……ま、その辺はまた考えるところとして……今日は悪かったな。俺のせいであの辺なのが絡んできたわけだし……今度また埋め合わせはするよ」

「本当!! じゃあ、私色々行きたい場所あるんだけど」

「私も、色々お願いしたいことあるかな。その時はよろしく頼むよ、チヌ」

「わかったよ」

あー、面倒なことになったなあ……。まあいいか。どうせ給料なんて使い道もないし。

そう思いつつ、俺はバスの外の景色を眺め続ける。やがて、鎮守府に一番近いバス停

の名前が放送で告げられた。

「よし、降りるぞ……」

俺が横を見ると、そこには寝息を立てている暁、そして船を漕いでいる響の姿があった。

「おい、寝るな。なんでここまで来て寝れるんだお前らは？」

二人の体を揺さぶり、響はなんとか眠気を払おうと頭を振ったりしているが、暁は完全に寝ている。いつの間にか寝たんだよ本当に。

結局、暁と荷物を抱え、眠気にふらつく響の手を引いてなんとかバスから降りる。だが、暁は一向に起きる気配はないし、響もかなり厳しそうだ。

「おい、響、起きれるか？ 歩けるか？」

「んあ……ねむ……無理……」

俺の言葉にも響はまともに返答しない。こりやだめだな。仕方ない。

「まったく……よつと」

取りあえず、俺は左腕で暁を抱え上げ、俺の体にもたれかからせる。そして左手に荷物を纏めて持つと、膝をつく。

「響、俺の腕に乗れ。抱え上げるから」

「ん……」

ふらつく響だったけど、なんとか俺の腕の中に入り、俺にしがみ付く。それを確認してから俺は立ち上がると、そのまま鎮守府に向けて歩き出す。

「……これじゃあ、完全に赤ん坊を連れて買い物した父親だな」

今の俺達の様子の方が傍からどう見えるかを考えて俺は溜息をつく。そんな俺を余所に二人は俺の腕の中でおもつきり寝息を立ててやがる。警察の事情聴取とか、慣れない事で疲れたんだろうけど、もうちよつと頑張れよ頼むから。

そんなことを思いつつ、俺は歩き続け、なんとか鎮守府まで戻ってきた。すると、鎮守府の入り口で警備の人間と、もう一つの人影が見えた。

「お帰りなさい、チヌさん」

そう言つて俺達を迎えたのは香取だった。

「香取か。どうしたんだ?」

「鎮守府のほうに警察から電話が来ましたから……何もなかったとは聞いていますけど、やっぱり心配ですから」

「なるほどな。じゃ、この二人を寮に連れてくから、その後は頼んでいいか?」

「ええ、わかりました」

こうして、俺は香取を伴つて艦娘の寮に向かつて歩く。

「でも、こうしてみると、チヌさんお父さんみたいですね。二人も懐いていらつしやいま

すし」

「冗談はやめてくれ。俺には兄弟はいても子供なんてのはいないし……元の大きさを考えろ」

軍艦が戦車の子供なんていったいどんなわけのわからない光景だ。

「あら、元はなんであれ、今は貴方のほうが大きいじゃないですか。それに精神年齢も、貴方のほうが上に思えますし」

「そういう問題か？」

俺は首を傾げつつ、香取と一緒に艦娘の寮に向かう。そして寮に着くと香取と、ちょうど入口に居た羽黒に二人を任せると、司令室に向かった。

俺が提督室の扉をノックすると、中から入るように声がかげられ、俺が中に入ると、そこには机の上で腕を組んでいる提督と、横に立っている榛名が居た。

「チヌ、警察から話は聞いているよ。まあ、災難だったね」

「いえ、私は大したことはありませんでした。ですが、彼らの態度を見るに、私が原因であり、その為に二人に手間を掛けさせてしまいましたし、こちらにも迷惑をかけてしまひ、申し訳ありません」

そう言つて、俺は深く頭を下げる。

「大丈夫ですよ。暁ちゃんも響ちゃんもこんなことでチヌさんをお嫌いになりません

し。むしろ、ああいう手合いが事前に見つかって良かったと思います」

「まったくだな。日本国国民でありながら、艦娘の前で暴力沙汰を起こそうとするなんてゲスの極みのようなクズだ。チヌ、もしも彼らのような者が居れば遠慮なく叩きのめして構わん。奴らの魔の手が万が一にも榛名に伸びたらかもと思うと夜も眠れない」

本当に相変わらずだなこの提督は。まあ、そこはいいか。

「……そう言えば、今日街中の本屋で暁や響の身に覚えのない写真が写真集に乗っていましたが。それに関しては何？」

「ああ、あれは国民向けのプロパガンダだよ。基本的には彼女達の許可の元に撮影しているが、一部にはこっそり写真を取って、私の検閲の元に出している。まあ、私の知らぬところでそういった写真が流出している可能性もあるが、ある程度は容認しているよ。厳しく取り締まりすぎると余計に面倒だからね」

「なるほど」

「ただし、榛名のもものだけは例外だ。榛名のもものでそう言った物が流出したら、全力で持って叩き潰している」

蛇足にもほどがある説明だな。

「まあ、そういうわけだ。今後も艦娘達に頼まれたら、彼女達が鎮守府の外に出るときには一緒に行ってやってくれるかな。今回のような件が起きる可能性もあるが、それ

上に君が居てくれるほうが心強い」

「はっ。了解しました」

提督の言葉に頷くと、提督は退出するように促す。それに従い、俺は提督室を後にした。

チヌが出ていったのを見送ってから、私は手元の資料に目を通す。

「……榛名。確認だが、君たち艦娘の体は基本的には人間なんだよね？」

「はい。私達は艦装を扱えるという点を除けば、基本的な体の構造は人間と大きな差はありません。勿論、多少は頑丈だったりはしますが……それでも、仮にチヌさんみたいに鉄パイプで殴られでもしたらただではすみません」

「そう……だよな」

榛名の言葉に相槌を打ちつつ、私は資料の一部を見る。そこには今回の件で精密検査を受けたチヌの記録が書かれている。そしてその書かれている事柄は私を驚かせるのに十分だった。

（彼も基本的には艦娘達と同じ……人間と構造的には同じだ。だが、よく見れば人間や艦娘とはまったく異なる部分もいくつかある。特にその体の硬度はまさに鋼鉄のそれだそうだ。これでは角材や鉄パイプなんかでブン殴ったところで殴った側が傷つくだけだろう）

（明石曰く、艦娘達よりもよほど頑丈だそうだが……先日の羽黒の誤射によって吹っ飛ばされた経緯を見ると艦娘よりも頑丈とは思えるはずもない）

仮に艦娘よりも丈夫なのであれば砲撃の爆風程度で重傷を負うなんてことはありえないはずだ。

「……どういう事なんだろうな。艦娘と戦車……一体、どこにどういった違いがあるというのだろうか」

資料に目を通しつつ、俺の口からはそんな言葉が漏れていた。

第五章

第20話

暴漢に襲われてからいくらかの日が経過した。結局、あれからは非番の日には街に出る艦娘達に付き合う事が多くなった。その為、特訓の時間が減ったのが辛いところだ。彼女達の安全を考えれば仕方ないのだが、その分を取り戻さないといけない。

だが、今日は久しぶりに艦娘達の外出がない。その為、俺は久しぶりにじっくりと訓練を行えると思ったのだが、最近ハードワーク気味だと香取から今日は体を休めるように言われてしまった。仕方なく、俺は釣のセットを手にとって港湾施設に足を運んでいった。

「さて……この辺でいいか」

取りあえず埠頭に着くとそこに餌をつけて釣り糸を垂らす。一応この辺りでは小アジ等が釣れるらしいので後で間宮の所に持って行ってみるか。

「お、チヌはん釣りやつとるん？ 釣りが趣味やったつけ？」

ふと声を掛けられ振り向くと、そこには黒潮の姿があった。

「ああ。この間街に行った時に在庫処分くじ引きとかつてのをやってな。やってみた

ら釣り道具一式当たったんだよ。置いたまま放置するのも申し訳ないからな」

そう言っている間にも釣竿に反応があり、引き上げると数匹の小アジがかかっていたので、俺は素早く針から取り外してクーラーボックスに放り込む。

「おおう、けっこう釣れるんやな。なあチヌはん。うちにもちよつとやらせてーな」
「ああ、構わない」

餌をつけてから黒潮に竿を渡すと、楽しそうに釣り糸を海に垂らす。

「いやあ、釣りなんてあんまりやった事ないから楽しみやなあ。何が釣れるんやろか？」
「この時期だとさつきみたいなおアジとかだろう。投げ釣りでもすれば別のも釣れると思うが」

「ほえー。それじゃあちよつと投げてみよかな。チヌはん。やつてもええ？」

「やつてもいいが、やり方わかるのか？」

「……教えてくれると嬉しいな」

その言葉に俺は少し肩を落としたが、とりあえず投げ釣りのやり方を教える。

「ほな、いくでー」

黒潮がそう言つて釣竿を構えたのを見て、俺は横にずれる。そして黒潮が一気に釣竿を振り抜くと、釣り糸の先端は見事に100メートルは先の海面に着水した。

「おー、飛んだわ飛んだわ。後は何が釣れるか楽しみやわー」

そう言いながら黒潮はリールを巻いていく。まあ、何か目新しいのが釣れればいいんだらうけど、どうなのやら。

「お？ お、おお？」

そう思っていると、突然黒潮が前のめりになった。慌てて足を踏ん張り、リールを巻こうと力を込めている。

「ちよ、なんやこれ！ めちゃくちゃ重い引きやで！ あ、あかん！」

そう叫び、海に落ちそうになった黒潮を、俺は慌てて後ろから掴む。だが、糸の引きは相当強く、俺が支えていてなお簡単に引き上げられる様子はない。

「うう……これはアカンでえ。さっさと糸が切れればなんとか……」

「ダメだ。それかなり丈夫な糸だから……ともかく引つ張るぞ！」

掴んでいるだけの体勢から、俺は腰を下ろし、しっかりと黒潮の腹に左腕を回し、右腕で釣り竿を握る黒潮の手を上から握る。そして、黒潮も渾身の力を込めて糸を巻いて行き、徐々に徐々に糸が巻かれていく。

「重たい……いったい何が引つかかったんやこれ……」

「くそ……こんな重量級のが居るなんて聞いてないんだが……」

互いの力を合わせ、ともかく引つ張っていき……そして遂に釣り上げる事ができた。

「……」

「……」

釣り上げた俺たちはそれを見て言葉を失った。なぜなら、釣り上げたのは人。なんか白色の水着を着ていて、水中ゴーグルを着けている少女……つまり。

「ど、ドザエモン釣つてもうたー!？」

少し置いて、黒潮が悲鳴を上げた。

「すみません。ドザエモンじゃありませんから!」

「ひいやあああ! 死体が喋ったー!？」

釣り上げた少女が話し出して黒潮が悲鳴を上げる。まあ、そうなるよなあ……じゃなく。

「……いや、お前は誰だ? というか、シユノーケルもなしに潜っていたって事は……艦娘か?」

「は、はい。私は……」

そこまで喋った時、大きな音を立てて糸が千切れた。そして、少女は海面に落ちて、そのまんま沈んでいった。

第21話

「三式潜航輸送艇まるゆ。着任いたしました」

そう言つて俺と黒潮が釣り上げた少女……まるゆが提督に敬礼している。あの後、なんとかまるゆを回収した俺と黒潮は、まるゆから話を聞いて、とりあえず俺が提督室へ連れて行くことになったのだ。

「んー……新しい艦娘が着任するとは……聞いていないぞ？」

だが、まるゆの言葉に提督は思い切り首を傾げる。

「えー、そんなあ。そんなことないですよ。ちゃんと連絡が来てるはずですよ」

まるゆの言葉に提督が視線を榛名に向けると、榛名が記録を遡っていく。

「えーと……あ、ありました。……かなり小さい連絡でしたから、気づきませんでした」

そう言つて榛名は記録を提督に渡す。そして提督は記録に目を通して……あ、なんか溜息ついてないか？

「うん、こちらの不手際だったようだな。三式潜航輸送艇まるゆ。着任を確認」

そう言つと、提督は内線を手に取り誰かを呼び出す。そしてしばらくしてこの鎮守府唯一の潜水艦である伊168、通称イムヤが提督室に入ってきた。

「提督、何の御用でしょうか？」

「ああ。彼女は今日からこの鎮守府に配属となった潜水艦まるゆだ。潜水艦としてのいろはを一から教えてやってくれ」

「了解しました。それじゃあ、早速行きませうか」

「は、はい」

提督の言葉に頷いたイムヤはまるゆと一緒に提督室を出ていく。それを見送ると、提督はまた溜息をついた。

「……提督、何か心配事でも？」

俺が聞くと、提督は微妙に苦い表情を浮かべる。

「まあ、これを見てくれ」

そう言つて提督は指さしたのは先ほど榛名から渡されていた記録である。取りあえず手に取つて内容に目を通すが……。

「……なるほど」

資料に目を通し、俺は軽いため息をついた。内容はまるゆの前歴……まあ、大戦時にどう運用されていたかについてなんだが、これはキツイ。要するに彼女は当時の陸軍が作った潜水のできる輸送艦だということだ。だが、戦闘能力はほぼ皆無。潜水に關しても沈めなかつたり浮かべなかつたりと散々だったらしい。

「潜水艦である以上、彼女には一定の期待を皆するだろうし、実際に戦闘域に行ってもらえないが、どれだけ時間がかかるか……」

「だろうな。俺みたいに最初から戦闘域に行けないとわかっている戦力外ならともかく曲がりなりにも出陣できるんだ。その期待は大きいだろう。」

「チヌ、君とまるゆは同じ陸軍出身だし、今回の経緯もあるから、なるべく彼女の事を気にかけてやってくれ」

「はっ。了解しました」

まあ、戦力になってもらわないと困るし、俺も注意しておかないとな。

第22話

まるゆを釣り上げてから数日後、俺は特に変わり映えのない一日を送りつつ鎮守府で過ごしていた。まるゆに関してはイムヤが特訓しているためか、どうも会う機会がないのが困ったものだが。取りあえず今日の警備を終えて間宮で食事をとっている。

「あ、チヌはん。お疲れさんや」

食事をとっている俺に向かって、新しく間宮に入ってきた黒潮が声をかけてきた。

「黒潮か。そっちもお疲れ様。今日は出撃だと聞いたが」

「ホンマ疲れたわー。あ、間宮はん、うちにもソバ定食お願いな」

黒潮がそう言ってしばらくして、ソバと小さいお椀で御飯と漬物、そして味噌汁を間宮が運んできた。

「ほな、頂きまーす」

そう言うのと食事を始める黒潮。俺も適当に食事をつけ、ふとまるゆの事を思い出した。

「なあ、黒潮。まるゆは最近どうしてる？」

俺が聞くと、黒潮が微妙な顔になった。

「あー……そうやねえ……。うん、頑張ってるのはわかるんよ、頑張ってるのは……」

少しの間歯切れの悪く言葉を出していたが、やがて黒潮は大きいため息をついた。

「いやあ、うちかてそんな強くもないし、ここの鎮守府にはそもそも榛名はんを除けば前線で戦えるほど強い艦娘がおらんのも事実や。でもな、いくらなんでも戦闘能力のない艦娘は初めてやで」

ああ、やつぱりそこだよな。

「俺みたいな前例が居るだろ。皆ある程度耐性はついてると思つてたが……」

「いやいや、チ又はんは男で戦闘以外に色々やつてくれるやん。でも、まるゆは正直な人もないからなあ……そもそも潜水艦なんて早々こおへんから、皆余計期待してもうとつたんや」

この辺は提督が危惧してた通りだな。まったく、どうするべきか……。俺はこういうの苦手なんだがなあ……。

「それになあ、やつぱり元陸軍やろ？ チ又はんはその辺なんか達観しとるゆうか、そんな気にしてへんけど、まるゆはその辺引き摺つてるようやからなあ、話があんま弾まへんのや。うちもどないしたらいいんかわからへんねん」

そう言うと、黒潮はお手上げとばかりに両手を上げる。

「確かにそれはな……わかった。まあ、釣り上げた仲だし、何かと気にかけてくれないか

? 頼む」

「わかっとするよ。仲間やもんね。でもチヌはん、頼む言うなら、なんか見返りがあつてもええんとちやう?」

そう言うのと、黒潮は意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「どうしろと? 飯でも奢れって言うのか?」

そう言うのと、黒潮はチツチツチツ、と指を振った。

「いやいや、仲間に関する事や。別にお金がかかるような事なんて頼まへんて。そうやなあ……頭撫でてもらおうか?」

……なんでそうなるんだ?

「……まあいいが……」

そう言いつつ、俺は黒潮の頭を軽く撫でる。

「はわく、やつぱりチヌはんの手は大きいなあ。気持ちええなあ〜」

そう言つて黒潮は気持ちよさそうに目を閉じる。本当にいいのかこれ? どうも駆逐艦勢は見た目もそうだが、子供っぽいんだが、こいつら元を辿れば俺よりも遥かにでかいんだよな。

「よっしゃ、うち、ちゃんとまるゆの世話するで」

「あ、ああ。頼む」

こうしてなんとか黒潮に話は通したが、俺自身もある程度機会があれば接するほうが良いかもしれない。そう思いつつ、俺達は食事続けるのだった。

第23話

黒潮と話した翌日、警備の仕事を終えた俺は明石に頼まれて武器庫の整理をしていった。

「いやあ、すみませんね。妖精さん達じゃ流石に限界があつて……」

「いや、気にするな。これも必要なことだからな」

そう言いつつ、俺は弾薬の詰まった箱を柵の上に置く。確かにまあ、妖精さん達やるには重いだろうし、明石一人でやるには量が多い。

「あ、あの〜。すみませ〜ん」

ふと、整理をしている武器庫の中に声が響く。俺と明石がそちらを見ると、そこには入り口の前に立っているまるゆの姿があつた。

「あれ、まるゆさん、どうしました?」

整理の手を止めて明石が声をかける。

「あの……イムヤさんに、そろそろ実戦に出るために魚雷貰つて来いって言われたんですけど」

その言葉に明石は目を見開いた。

「え、でもまるゆさん、まだまともに魚雷扱えませんか？ それなのに実戦なんですか！？」

「は、はい。イムヤさんが、実戦に出て経験を積むほうが良いって……」

そう呟くまるゆは、やはりオドオドしていて自信のなさが手に取るようにわかる。これで実戦に出て大丈夫なのか？

「あ、チ又さん。こんにちは」

ようやく俺に気づいたのか、まるゆが俺に挨拶してくる。

「ああ、こんにちは。実戦に出るんだな……大丈夫か？ 自信がないなら、もう少し特訓をしてからにしたほうが良いって、俺からイムヤに言ってもいいぞ？」

「い、いえ！ 大丈夫……です……。大丈夫……」

いや、どう見ても大丈夫じゃなさそうなんだが……少し明石に視線を向けると、魚雷を用意しつつも明石も心配そうな顔をしている。

「大丈夫には見えないんだが。良いのか？ 実戦となれば……」

「そうですね、私も正直お勧めしませんよ。私も口添えますし、イムヤさんにはちよつと言っておくほうが……」

「だ、大丈夫ですから！ 私も頑張らないといけませんから……。明石さん、魚雷お願いします」

「あ……わかりました」

二人の言葉にまるゆは頭を振って大声を上げると明石に魚雷を強請る。それに明石は押されて、とりあえず三連装魚雷を持ってきてまるゆに渡す。渡された魚雷を重そうに持つまるゆを見てるとどうも心配になる。

「ありがとうございます。では失礼します」

そう言うのと、まるゆは魚雷を担いで武器庫を後にしていった。

「……本当に大丈夫でしょうか？ 心配ですねぇ」

「まあ、初実戦ならそんな危険な海域には行かないだろ。仮にまるゆが役に立たなかつたとしても大丈夫だと思うが……」

そう言うが、俺は内心で少し心配になる自分を自覚していた。

第24話

結局俺の予想は的中した。まるゆ達が出撃してから数時間後、敵の攻撃によって敗北した第三艦隊は敵に追われつつ鎮守府まで敗走。待機していた黒潮と足柄、それに俺と明石によってなんとか撃退する事ができた。敗退したとはいえ、第三艦隊によってある程度敵艦隊が負傷していたのが不幸中の幸いだった。

「やれやれ……危なかったなあ」

戦闘を終えた俺は鎮守府の休憩室で一息ついていた。休憩室には畳とちやぶ台が用意されており、靴を脱いでそのスペースで休む事になっている。そのちやぶ台の一つに肘をつきながら溜息をつく。まったく、戦車の俺がやけに実戦に出てる気がするんだが、いいのか？

「あ、チヌはん、お疲れやー」

声がかけられて俺がそちらに顔を向けると入渠から出てきたんだろう、体から湯気が上がり、首にはタオルをかけている黒潮と不知火の姿があった。

「不知火に黒潮か、お疲れ様。大変だったな」

「いやー、本当大変やったなー。なあ、ぬいぬい」

「不知火の事をぬいぬいと呼ぶのはやめてください。まったく、酷い目にいたしました」

そう言うと、二人は入り口にある自販機で牛乳を買くと、俺の前に座って飲み始める。

「あー、風呂上がりの牛乳はうまいわー。でも、少しは胸大きくならんかなあ？」

そう言うと、黒潮は服を引っ張って自分の胸を見つめてる。

「黒潮、チヌさんの前ですよ、はしたない」

「何言つとんねん不知火。こんなお堅いチヌはんがそんなイヤらしい視線を送るようなら、女性冥利に尽きると思わんか？ ホレホレ、不知火も少しは自分の魅力をアピールしたらどうや？」

そう言つて黒潮は不知火の後ろに回るとその服に手を伸ばし、まくり上げようとするが、不知火が眉間に皺を寄せて阻止している。

「……二人に聞きたいんだが、まるゆはどうだったんだ？ 確か、不知火は今日同じ艦隊

だっただろ？ それに黒潮も沖で合流してたと思うが」

俺の問いに二人は渋い表情を浮かべた。

「……まるゆさんは正直使い物になりませんでしたね。魚雷を撃つても明後日の方向に行つてますし、敵の攻撃が集中してあっさり大破してしまいました……。彼女を庇つて他の艦娘も負傷して、撤退せざるを得なくなつたんです」

「そうやねえ……。他の艦娘にも聞いたけど、けつこう酷い評価やつたで。チヌはんは

言われてなかったら、うちかてもっと厳しい視線送ってたかもしれない」

「そうか……まるゆは今どうしてるか知ってるか？」

「まるゆさんなら、一番初めに入渠が終わってるのもう外に居ると思いますが……」

「そうか……ありがとう」

そう言つて頭を下げると、俺は休憩室を出た。ともかく、まるゆを探さないといけな
いな。

第25話

結局、あれから大体一時間程かけて探した結果、俺と黒潮がまるゆを釣り上げた埠頭に座り込んでいるまるゆを発見した。

「こんなところで何してるんだ？」

俺が声をかけると、まるゆは驚いた顔でこつちに振り向いて、そして何も答えずに前に向きなあった。

取りあえず俺はまるゆの斜め後ろに立ってもう少し話しかける。

「今日は散々だったな。まあ、誰もやられなかったから、次に活かしていくのが一番だろう」

そう言うと、まるゆが俺の顔を見上げてきた。

「そんな簡単に言わないでください！ そんな簡単にできたら……こんな所で泣いていません」

そう言われると、暗がりでも良く見えなかったが、確かにまるゆは目に涙を浮かべていた。

「……それもそうだな。だが、俺には他にどういえばわからない」

こんな人を慰めるとかなんてやった事ないんだがなあ。

「……チヌさんは一人で敵を倒したと聞きました。それに、この鎮守府でも活躍してるって……それに比べて私は……」

「二人で倒したのは単にほぼ全壊の敵一体だけだったからだし、ここで活躍してるって言っても敵を撃破してるわけじゃないんだが……」

俺がそう言ってもまるゆは納得した様子を見せない。あー、どうすればいいんだこれ？

「……ともかくなあ」

俺は大きく息を吐くと、まるゆの頭に手を置いて何回か撫でる。

「ともかく。まだ一回失敗しただけなんだから、まだ挽回できるだろう」

「……本当、ですか？」

不安そうな顔のまるゆ。取りあえず、力を込めて言うしかないか。

「本当だ。失敗なんて誰にでもあるんだ。俺は同じ陸軍出身として、お前がちゃんとやっていけるって信じているんだ。だから、お前も信じろ。自分を信じる所から始まるんだ」

「そうよ。その通りよ」

不意に後ろから声がかげられ、俺達が後ろを向くと、そこにはイムヤと、なんか得意

満面な笑みを浮かべてる黒潮の姿があった。

「まるゆ、今回は私が急ぎすぎたわ。今度はもつとちゃんと教えるから、頑張りましよう」

そう言ってるまるゆの前に来るイムヤ。それに対してまるゆはなんかオロオロしてる。多分予想外過ぎてどう反応すればいいかわからないんだろ。

「ほら、イムヤもこう言ってるんだから、これ以上落ち込んでないで特訓してもらえ」

俺がそう言うと、まるゆは戸惑いながらも俺に対して軽く頭を下げ、そしてイムヤに連れられるまま鎮守府の中に戻っていった。

「いやー、うまくいったようやなー。ホンマ骨折った甲斐があったでー」

「イムヤを連れてきたのはお前か、助かったよ、俺じやどうしようもなかったからなあ」

「いやあ、役に立って良かったで。でもチヌはんも頑張らないとあかんでえ」

「善処するよ……」

黒潮の苦言に俺は困った表情を浮かべるしかなかった。

第26話

あれから数日、イムヤの特訓もあつてまるゆは他の鎮守府との演習で見事に魚雷を命中させたそうだ。この分なら練習を積んでいけば実戦でも戦えるようになるだろう。

一方、イムヤは他の鎮守府へ異動となつた。まるゆを性急に教育していたのもこれが原因らしい。

あれからまるゆの事を他の艦娘達も徐々に認めるようになったのか、まるゆも少しオドオドしている様子がなくなつたと黒潮から聞いている。どうやら提督の心配も解消されたようだし、良かった事だと思う。ただまあ……。

「チヌはーん、遊びに来たでー」

「お、お邪魔します」

あれから黒潮とまるゆがよく俺の家に遊びに来るようになった。来られた所で茶と茶菓子を出すぐらいしかできないんだが。俺にこいつらが喜ぶような話題なんて出しようがない。

「いやー、チヌはんの家つて広くてええやんかー。寮だとして一部屋を数人で使つてるから。狭くなつてまうんやー」

俺の目の前で頬杖を突きながらせんべいを齧っている黒潮がそう答える。行儀悪いぞ。

「あ、チヌさん。チヌさんが居た茨城県の陸上自衛隊の学校について聞きたいんですけど」

一方まるゆは、なんやかんやで陸軍関係の事を話題に振ってくる。まあ、他に陸軍の事を話し合う相手がいないんだろなあ。ここに居るの一部を除けば全員海軍出身だし。

「なんやー。また陸軍の話かいなー。もつと色気のある話でもしよーや、まるゆ」
別にまるゆはお前に話してるわけじゃないぞ。

そうやってなんかグダグダと過ごしてしていると、家の戸が開かれ、不知火が入ってきた。「黒潮、やはりここに居ましたか。香取先生からの課題は終わつたんですか?」

「げ、不知火!? え、えーと……まだ……かなー、アハハ……」

不知火の視線を受けた黒潮がちよつと視線を漁つての方向に向けながら答える。

「……今から課題をこなしますよ。それと、まるゆさんも、明石さんが改良した魚雷を用意できたから受け取りに来てほしいとの事です」

「うあー、しゃあないなー……ほなチヌはん、また後でなー」

不知火の言葉に黒潮は渋々立ち上がる。それに続いてまるゆも立ち上がった。

「あ、わかりました。急いで受け取りに行きます。それではチヌさん、失礼します」
こうして黒潮とまるゆが家から出ていき、最後に不知火が軽く頭を下げて出ていった。

「やれやれ……捨てるわけにもいかないし、俺が処理するしかないか」

二人の為に出したせんべいの残ってるのを齧り、茶を飲みつつ、俺は溜息をつくしかなかった。

第六章

第27話

ある日、俺は提督に工房に呼び出された。なんでも、俺用の武装を作ったらしいんだが、なんでわざわざ提督が呼び出すのか？

そう思いつつ、俺が工房に来ると、そこには提督と明石。それに、シートが被せられている、なんか妙にでかい物が置かれていた。

「お、来たなチヌ」

俺の姿を見た提督が俺に声をかけてきた。なんかにやけてるような……。

「私用の武装が作られたと聞いたのですが、一体どのようなものなのでしょうか？」

俺の言葉に提督と明石は互いに顔を見合わせ、そしていやに良い笑顔を浮かべる。

「それはな……これだ！」

提督の言葉に合わせ、その辺に居た妖精達がシートを取り除く。そしてそこにあったのは……。

「水上……バイク……？」

そう、シートを取り除かれた先にあったのは、一人乗りの水上バイク……だと思っ

だが。

「そう。これは私が妖精さんに手伝ってもらって開発した戦闘用水上バイクです。いやー、手間がかかりましたよお」

そう言つて、明石は良い笑顔を浮かべながら説明し、提督もそれを補足する形で説明する。まあ要約すると、深海棲艦に対抗するため、装甲も艦娘達が使用している物を利用したとの事。しかも、日本驚異の科学力でエンジンは小型で高性能なものを開発したらしい。将来的には武装も装着したいとか。しかし……。

「なぜこのようなものを開発したんですか？ 私は鎮守府防衛が任務ですから、こんな海上に出て戦うための武装を用意したところで……」

そう。地上でしか動かない俺にこんなものは無用の長物。こんなものを作るぐらいなら、他の艦娘の為に装備を用意でもするほうが余程いいはずだ。

「チヌ、君の言いたいことはわかってる。こんな武装を作るよりも、もつと有効利用する方法があるはずだと言いたいのだろうか？」

「……ええ、まあ」

俺が頷くと、提督はやけに芝居がかった動作で理由を説明し始めた。

「知つてのとおり、この鎮守府に居るの艦娘の多くは未熟な艦娘だ。言い換えると、訓練を積んだしつかりした艦娘はすぐに他の鎮守府に配属される。おかげでここは常に戦

力不足だ。榛名だって他の鎮守府に配属されそうになったのを、私のもてる全てを使って阻止したからに過ぎない」

まあ、実際ここはそう言う鎮守府だからなあ。北上や大井も重雷装巡洋艦になった途端他の鎮守府に転属になったし。

「だから、だ。純粋にこの鎮守府の戦力を上げるには榛名を除くと……明石とまるゆしかいないし、まるゆだってヘタすれば他の鎮守府に回される可能性がある。その点、チ又なら他の提督や上層部は甘く見てるから、異動になる事はないんだ」

「……言いたいことはわかりましたが、現実問題として、私が海に出て役に立つとお思いですか？ 艦娘と違って、私は船がなければ溺れるしかないんですよ」

「あれ、チ又さん泳げないんですか？」

明石の問いに俺は首を横に振った。

「泳げるのは泳げるが……並みといったところだぞ。海原で浮くものもなしで放り出されたら、自力でどうにかするなんて無理だ」

「もちろん、厳しい任務に就かせるつもりはないさ。当面は第一艦隊と共にこの付近の海域を巡回してもらう事になる」

「榛名さん達と一緒にですし、やられる心配はないですよ。それに実戦を繰り返していく中で改良していけば、もつと強くなりますから」

「……俺が心配なのは、艦娘達に負担をかけることなんです……。これは命令、なんですね？」

「ああ、既に物も作ってるからな。悪いが、頑張ってもらおうぞ」

提督の言葉に、俺は溜息をつきつつも、敬礼し、「了解しました」と返した。

第28話

水上バイクを受け取ってから二週間、俺は海上での戦闘訓練に従事する事になった。艦娘達がやっているのと同じように海上に的を出して、それに向けて主砲を当てるのだが、これがどうにもやりにくい。

当然だが、海上では陸上と違って弾を発射する事で崩れるバランスが違いすぎる。一応水上バイクはその辺を考慮して設計したと聞いているが、それでも陸上と同じようにはいかない。特に水上バイクに設置されている主砲の発射は、普段の感覚と全然違うためかなり扱いにくい。

更に、移動そのものも面倒だ。水上バイクの運転なんて一回もやったことがないから、当然だが思うように行動できない。おかげで二週間間に数えるのも嫌になるほど水上バイクから落ちたが、そのたびに待機していた艦娘達によつて救助されてきた。

それでもなんとか訓練のおかげである程度は水上バイクの運転に慣れてきた。そんな俺に、ついに出撃命令が下されることになった。その日、訓練を終えた俺に召集がかり、俺は今までは行った事のない、作戦会議室に入ることになった。

俺が作戦会議室に入ると、そこには榛名、飛鷹、黒潮、まるゆ、不知火の姿があった。

「あ、待ってましたよチヌさん。宜しくお願いします」

俺が入ってきた事に気づいたまるゆがまず挨拶をしてきて、他のメンバーも挨拶してくる。

「ああ、足を引つ張る形になってしまおうと思うが……できる限り負担をかけないようにしたいと思っている」

「大丈夫よ。これから行くのは今まで何回も通ってきたルートだし、今まで出てきたのもせいぜい軽巡までよ」

「そうですね。私も何回か通ってますけど、この戦力なら問題はないかと」
俺の言葉に飛鷹と不知火が心配ないとばかり声をかけてくる。

「そこは心配はしてないんだが……。で、いったいどういうルートを通るんだ？」

「はい、こういうルートを通ります」

そう言うと、榛名は後ろにある液晶画面を操作して、出撃する海域を表示する。そして、そこに赤い矢印でルートが表示された。

「今回通るルートはこの鎮守府で定期的に回っているルートです。既に知っていると思いますが、このルート上では軽巡以上の深海棲艦が出現したことはなく、この鎮守府に配属されたばかりの艦娘達の実戦訓練として最も使われているルートとなっています」
「今回はこのルートを一周して、チヌさんに実戦経験を積んで頂くのが目的となります。」

また、他の皆さんも初心を思い出すという意味で決して気を抜かないようにお願いします」

「今回の作戦の内容は以上です。出撃は3時を予定していますので、それまでに準備を整えて出撃ドックに集まってください」

「了解です。それではチヌさん、宜しくお願いしますね」

「ああ、宜しく頼むよ」

不知火の言葉に取りあえず俺は頷く。それから他の面々とも多少のやり取りをしてから、俺は明石のところで準備を整え、出撃ドッグへ向かった。

第29話

出撃ドッグから出撃した俺達はルートに沿って進軍していく。そして、途中で飛鷹の飛ばした偵察機によって周辺に敵がいなかどうかを確認する。

「あー、この待つてる間が暇やねえ。まるゆ、しり取りでもせえへんか？」

「しり取りですか？ 別にいいですけど」

待つている間、浮上したまるゆ相手に黒潮が話しかけている。

「気が緩んでますよ黒潮……まったく、いつもいつも……」

「まあまあ、いいじゃないですか。海域自体には強い敵の出現例は報告されていないですし……。それにしてもチヌさん、静かですね？」

そう言つて榛名が俺のほうを向いた。

「……そりゃそうだろ。俺はお前たちと違つて海面に立てないんだ。この水上バイクに何かあれば、俺は陸に戻れず、死ぬしかないんだからな」

今更だが、この見渡す限り海以外が見えないこの状態で、俺を支えているのがこの水上バイクだけだという事に不安を覚える。俺が死ぬだけならともかく、俺の救出に無駄に人手を割かせたくない。

「大丈夫です。何が起きようとも私達がちゃんと連れ帰りますので」

だから、そう言う足手纏いになりたくないんだがなあ……。そう思っていると、飛鷹の偵察機が戻ってきた。

「お帰りなさい……。榛名、ここから2時方向に敵艦隊発見よ」

「了解です。皆さん、今から敵艦隊に向けて攻撃を仕掛けます。くれぐれもチヌさんに何かないように気をつけてください」

榛名の言葉に全員が頷き、俺達は敵艦隊へ向かう。だから、そうやって気を遣うなどいうのに……。

初戦の敵は駆逐艦4隻、補給艦1隻の小規模艦隊であった。そのおかげでこちらに大した被害もなく、俺も一隻を轟沈させた。まあ、黒潮が大破させたやつにとどめを刺しただけだが。

そして二回目の戦いも特に問題はなかった。このまま行けば順調に終わらせることができる。俺はそう思っていた。

「いやあ、けっこうやるなあチヌはん。これならうちのサポートなしでもええ線いけるんとちゃう？」

三回目の偵察機の発進の後の待機時間、黒潮は相変わらず気楽に言ってくれる。

「いや、俺一人だったら一発二発被弾しただけで終わりなんだぞ。頼むからそう気楽に言うな」

「そうですよ。黒潮、少し口を慎んでください」

「へー。でもうちは水上バイクの壊れたチヌはんを背負つてもええで。不知火はどうなんや？ たまにはチヌはんとそれだけ接近してみたくはないんか？」

「……！ 黒潮！」

黒潮の言葉に不知火が声を荒げる。顔が赤くなってるが、それだけ怒ってるんだな。どうもこの二人、姉妹って割には性格がけっこう違うな。というか黒潮、俺を背負うにはお前の背丈は小さすぎるぞ。

「まったく、駆逐艦は皆子供ねえ……。そう思わない？ 榛名」

「あはは……あ、偵察機が戻ってきましたよ」

飛鷹の言葉に苦笑する榛名だったが、不意に空の一点を指さす。そこには飛鷹の飛ばした偵察機の姿があった。偵察機を回収し、報告を受けた飛鷹が神妙な顔つきになった。

「皆、敵艦隊を発見……敵は戦艦一隻、空母一隻、重巡二隻、駆逐艦二隻よ」

その言葉に全員の顔つきが変わった。

「そんな。この海域でそんな戦力の艦隊なんて出るんですか!？」

不安そうなるまるゆの声。それに榛名が首を横に振る。

「今までそんな報告はないです。そんな報告があつたらチヌさん連れてきていませんよ」

だろうな。俺みたいな荷物を担いで戦艦や空母を相手にするなんて愚の骨頂だ。

「榛名。俺は撤退する事を提案する。空母や戦艦相手にこの編成はかなり厳しい」

俺の提案に榛名は少し迷った様子を見せるが、すぐに考えを纏めたようだ。

「そうですね、皆さんすぐに撤退を……」

榛名がそこまで言ったとき、不意に航空機の音が聞こえた。全員が顔を上に上げると、そこには深海棲艦の使う爆撃機が今まさに俺達に向かって降下してきているところだった。

「!? 回避急いで!」

咄嗟の榛名の指示に全員がバラバラに回避行動に入る。俺も急いで水上バイクを動かす。間一髪で爆撃を回避した。

「どうやら、もう敵に捕捉されているようです。榛名さん、戦いましょう」

「そのようです。飛鷹さん、爆撃機を出してください! 他の艦は対空攻撃急いで!」

その攻撃を合図に飛鷹を援護する形で対空攻撃が始まった。俺も機銃で参加し、なんとか飛鷹の爆撃機を発艦させることができたが、その頃にはもう敵艦隊が目視できる距

離まで接近していた。

「主砲砲撃開始！」

榛名の合図の元、俺達の主砲が火を噴き、同時に敵からも砲撃が飛んでくる。互いの砲弾が飛び交う中、俺は水上バイクを飛ばして敵に接近する。先の二戦で解つたことだが、俺の主砲じゃ冗談抜きで近距離で撃たないとともに効かないから仕方ない。

「食らえ！」

榛名達の砲撃に気を取られていた重巡の顔面に向けて主砲を撃ちこむ。あんまり効いている様子はないが……俺に気を取られた隙に、味方の砲弾が着弾していく。それによつてその重巡は轟沈していったが、敵の攻勢が衰える様子はない。

「チヌさん、先行しすぎです。危険です」

「仕方ないだろう、こうしないとまともに通用しない……上！」

後ろから追いついた不知火にまともに言葉返す余裕もなく、敵の爆撃を避ける。上に視線を向けると飛鷹と敵の艦載機が制空権を確保しようと飛び交っているが、どうもこちらが押されているようだ。

「マズイですね。こちらは榛名さんを除けば火力も低いですし、敵の空母の練度は飛鷹よりも上の状態では……」

確かに、戦艦は榛名だけの今の状態じゃ、火力がキツイ。さつきはうまく重巡を轟沈

させてたが、戦艦や空母相手にどこまでやれるか……。

「不知火、俺の事は気にせずに戦うほうが良い。そんな余裕はないだろ」

「しかし……」

不知火が何かいうよりも先に付近に敵の放った砲弾による水柱が上がる。このまま固まってるやバイな。

「ともかく、固まってるわけにはいかないぞ！」

不知火が何かいうよりも先に俺は水上バイクを走らせて不知火から離れる。周りの様子を見てみるが、戦艦が黒潮の砲撃を受けても平気で動いていたり、まるゆの魚雷を受けた重巡からの砲撃を榛名が受けてたりしている。だが、やはり厄介なのは上空からの爆撃だ。これのせいで飛鷹の艦載機からの援護が受ける事が出来ずに一方的に攻撃されてる。

「うわあ！ ……アカン、こりやアカンでえ」

黒潮の叫び声が聞こえた。そっちに視線を向けると、艀装が折れ曲がり、煙を上げている黒潮の姿があった。これは……マズイな。

「戦艦や重巡は榛名達が相手している……となると……」

俺の視線の先にあるのは、未だこちらからの砲撃を食らう事もなく、艦載機を飛ばしている敵の空母。あれをどうにかすれば戦闘も有利になるはずだが……俺の砲撃でま

ともにダメージを与えられるとも思えない。

仕方なく、俺は再び敵の重巡や戦艦たちの間を動き周り、隙をついて砲撃していく。だが、やはり俺の砲撃じゃ碌にダメージを与えられず、他の艦娘達も、一番強い榛名と潜っているまるゆを除く三人は追い込まれてきている。

(本当にマズくなってきたぞ。やはりあの空母をどうにかしないと……相手は人型だ。通用するかはわからんが、賭けるしかないか)

どつちにしろ、今の俺は録に役に立ってないし、博打を打たないといけないだろう。覚悟を決め、俺は一気に水上バイクを走らせる。目標は……敵の空母だ。

「……キサ……マ……」

俺の接近に気づき、空母が俺を睨む。更に重巡や爆撃機からの攻撃も飛んできた。途中まではなんとか避けたが、その内の一発が至近距離に着弾。その衝撃で水上バイクが大きく揺れる。

「ぬぐ……！ こんなところで落ちれるか！」

バランスを崩しながらも強引に水上バイクを走らせ、俺はそのまま空母に向かい、ついにすぐ近くまで来た……が。ついに後ろに着弾した砲弾の衝撃で水上バイクが空を舞う。

「ちっ……おおおおー！」

その衝撃に吹き飛ばされながら、俺は水上バイクから手を離し、その勢いのまま空母に向けて落下した。

「ナニ!？」

咄嗟の出来事に反応できない空母に覆いかぶさるように俺は体当たりする。その衝撃に空母は水面に倒れ、俺が馬乗りになる形で上に乗る。

「()まで来れば……バリアもくそもないよな!」

怒鳴りながら、俺は空母の顔を右から殴り抜ける。確かな手ごたえと共に空母の顔が横に飛ぶ。どうやら、生身の肉弾戦は通用するみたいだな。

「オノ……レ……!」

空母も反撃とばかりに俺に殴りかかってくるが、どうやら肉弾戦は慣れてないんだろ。ただやみくもに殴りかかってくるばかりだ。俺はそれを受けとめつつ更に空母を上から殴り続ける。

その時空母の被る帽子みたいな何かから艦載機が出てこようとした。

「させるか!」

艦載機が出ようとするよりも早く、俺は主砲を帽子に叩きこんだ。

「アア! 痛……い……!」

流石に帽子を破壊する事はできてないが、それでも衝撃で艦載機のバランスが崩れて

横転した。よし、これで時間を……!?

突然の機銃の音、そして、俺の右腕に走る強烈な痛みと熱。苦痛に顔が歪み、思考が混濁する中、俺が視線を向けると、そこには半分ぐらい千切れかけている俺の右腕と、そこに食い込んでいる機銃の弾があつた。

「が……グ……!?!」

一体どこから、既に放つていた艦載機から？ それとも別のやつが？ そんな考えが俺の中にと渦巻く。そして、それが俺の動きを止めていた。

「がっ!?!」

空母が俺の体を掴み、力いっぱい横に引つ張る。それに抵抗できず、俺はバランスを崩し、代わりに空母が俺の上に来た。だが、俺は咄嗟に半分千切れた右腕で空母の服を掴み、左腕を空母の首に回し、足を空母の腰や足に回して空母にしがみ付く。

「ハナレロ……!?!」

右腕を振り払い、空母が俺の腋を殴る。だが、俺は全身の力を使ってともかくしがみ付く。今こいつを離せばこいつがまた自由に動いてしまう。ダメだ、そんなことはできない。やってたまるか!

しばらくの間、ともかく空母にしがみ付いていたが、だが、不意に俺の目に空から降下してくる敵の艦載機が目に入った。そして、艦載機の放つた機銃は寸分違わず、俺の

左腕の肘から上の部分に命中した。

「あ…………グ…………」

左腕に穴が開き、力が抜ける。足には何とか力を入れ続けるが、長くは持たない。それ以前に上に上げる事ができなくなった俺の上半身は既に海中に没していて、海面を見ることができない。

(…………まで…………なのか…………)

しばらくして、何回かの衝撃を受けて俺の足にも力が入らなくなる。そして強引に外される感覚と共に、俺は海中に沈んでいく。

(まだ…………だ…………こんなところで…………死んだら…………あいつらのために…………も…………)

沈んでいく中、俺は腕を上げようとして、まったく動かないまま、海中に沈むように俺の意識も闇の中に沈んでいく…………。最後に俺の視界に入ったのは、太陽の光と、そして俺を困惑した表情で見下ろす空母の姿だった。

第30話

「……………ん？」

不意に俺の意識が目を覚ました。と言つてもまさに寝起きといった感じか。視界もぼやけ、まともに頭が回らない。

「()……………は……………」

体を起こそうとして、水音が耳に入り……………そこで俺は水の中……………いや、温かいからお湯か？ その中に居るのに気づいた。

「これは……………お湯？ ………………」

頭を振り、お湯を掬つて顔を洗うとそこでやつと意識がはつきりして辺りの様子が入った。

「これは……………入渠施設か」

そこは以前俺も世話になつた入渠施設だった。そして俺の体には腰のタオル一枚を除いて何も身に着けてない。なんで俺ここに居るんだ？ 俺は確か……………。

「目が覚めましたか？」

不意に後ろから声をかけられ、俺は後ろを向く。そこには香取が居た……………んだが、な

んでバスタオル一枚なんだ？ いや風呂場だから間違いないんだが、なんで俺が居るのに香取が居るんだ？

「第一艦隊の皆さんに聞きましたよ。空母相手に一人で挑んだって。もう少しで轟沈するところだったとも」

……そうだ。俺は確かに海中に沈んでいったんだ。

「待ってくれ。確か俺は海中に沈んでいってはいはずだ。なんで俺はここに居るんだ？」

「まるゆちゃんですよ。沈んできた貴方を一所懸命海上に引き上げてくれたんですよ」

「……という事は、艦隊のメンバーは無事なんだな？ 俺の救助なんかには手を回す余裕ができたって事は、それだけ戦闘が有利になったは……」

「そこまで言った俺の頭に香取の拳が叩きこまれた。特に痛くはなく、逆に香取のほうが痛がっていたが。」

「……。チヌさん、どうして自分の事をそんなに低く見るんですか？ あとちよつとでチヌさんは……死ぬところだったんですよ？」

「死ぬつもりはなかったが、あそこはああやって空母を抑える必要があると思っていた。そうしないと艦隊の被害はもつと大きくなっていたはずだ。俺が沈むよりも他への被害を減らすほうが大事だ」

そう言ったらまた拳が叩きこまれた。

「チヌさん、戦車だとか艦娘とか関係ありません。貴方はこの鎮守府のメンバーなんです。そこに命の優劣なんてあると考えるいけません。貴方が死んだら皆が悲しみます」

いや、命の優劣がないとしても戦力の優劣ははっきりしてるだろ。俺よりも艦娘が生存するほうがよっぽどいいはずなんだが……と思つたが、正直言い合ひする気力は今の俺にはなかった。それにへタに香取の機嫌を悪くするわけにもいかないし、話を変えるか。

「……ところで、なんでお前はバスタオル一枚でここに居る？」

俺の言葉に香取は少し溜息をついた。

「チヌさん、自分がどれだけの傷を負っていたか覚えてないのですか？ 両腕はズタズタ。足もいくつも痣ができていました。おまけに気を失っている。そんな状態で貴方を一人で置いておけるわけじゃないじゃないですか」

まあ、妥当な理由だな。取りあえず腕や足を動かしてみるが、傷の影響は残っていないようだ。

「じゃ、傷も治ったようだし出るぞ。いつまでもここを占拠するわけにもいかないからな」

俺が入っている間は艦娘は使いにくいだろう。まあ、第一艦隊のメンバーは先に使っているだろうし戦力的にマズい状況ではないだろうが。

「キヤツ」

俺が浴槽から出ると、香取が視線を逸らし、胸元を手で覆った。……ああ、上から見られると思ったのか？ なら別のを着ていれば良かったのに。ここには海中用の作業服ぐらいあつたと思うんだが……。まあいいか。

そう思いつつ、俺は脱衣所に入る。そして目に付く位置に俺の服の入った籠があつたので手早く体を拭き、服を着る。そして脱衣所を出ると……。

「チヌさん！ 無事に体治りましたか？」

「チヌ！ 心配したんだよ!？」

「チヌはん、大丈夫かいな!？」

「チヌさん、大丈夫ですか？ 大丈夫ですか!？」

脱衣所を出た俺に不知火、響、黒潮、まるゆが群がってきた。

「入渠したから大丈夫なのはわかるだろ……。まるゆ、俺を助けてくれたんだってな」

「うう……。本当に危なかつたんですよ。チヌさんが空母から引き剥がされて、沈んできて……」

「ああ、俺も正直あのまま死ぬと思った。感謝するぞまるゆ」

そう言うのと、俺はまるゆに頭を下げる。

「いい、いえ！ 当然の事をしたままでですから……あ、あの、でも、もうあんな無茶はしないでください……」

そう言つて、まるゆは悲しそうな表情で俺を見上げる。気づけば他のやつも同じような表情で俺を見上げていた。

「……戦争をしてるんだ。無意味に特攻するつもりはない」

そう言つて、俺は軽くため息をつく。

「取りあえず提督に回復の報告をしてくるから、後でな」

俺はそう言つて四人から離れると、提督室に向かつて歩き出す。そして何事もなく提督室に到着すると、軽くノックして中に入る。

「おお、チヌ。無事に回復できたようで良かったよ」

提督室に入った俺を迎えたのは提督に明石であった。

「はい。このたびは自身の力不足によつて第一艦隊のメンバーには迷惑をかけてしまいました。申し訳ありません」

俺はそう言つて深く頭を下げる。

「頭を上げてくれチヌ、今回はあまりにも不運な遭遇戦だったと言えるだろう。普段はあの海域では空母どころか重巡すら遭遇する事はなかったからな。だが、その代わりに

「良い事もあったよ」

「良い事……ですか?」

「はい。あの戦闘のおかげで水上バイクのデータが思った以上に取れたんです。しばらくしたらもつと改良した水上バイクをご用意できますよ」

そう言つて明石が満面の笑みを浮かべている。楽しそうだなこいつは。

「で、もう一つ良い事があったんだよチヌ。……なんと、君が組み着いていた空母を鹵獲できたんだ」

「……!? 鹵獲ですか? 深海棲艦を!」

それは驚きだった。今まで俺の知っている限り深海棲艦の鹵獲どころか轟沈したものの回収する話を聞いたことがない。それを鹵獲できたなど、いったい何があったのか?

「君を無理やり剥がした後、あの空母も多少粘っていたが、艦娘達に包囲されて、そのまま轟沈させられると思つたんだが、なんと両手を上げ、残っていた艦載機を収納して降伏したんだよ」

「……それはとても信じられませんね。今まで深海棲艦の鹵獲とかなんて聞いたこともないですが……」

「ああ。だろうね、私達もこんな出来事は初めてでどう対応すればいいか困惑してるぐ

らいだ。取りあえず今は反省房に入れて足柄と川内に見張りを頼んでいる。会ってみるかいい？」

「ええ。お願いします」

俺がそう言うと、提督は戦闘に関しては他のメンバーに聞いているから、今日はもう下がって、彼女に会ってくると言い。俺は反省房に足を進めた。

第31話

反省房は不用品を置いている倉庫の地下に設置されている。本来ならば軍規違反した艦娘や軍人を入れておく場所で、たまに小遣い稼ぎに艦娘の写真を撮っていたやつが捕まって入れられてたりしている。俺が階段を降りると、さして明るくもない電球の光に照らされて8つの反省房の扉が並び、その一番奥に川内と足柄が立っていた。

「チヌ、もう大丈夫なのね」

「心配したよー。まったく、こいつのせいで酷い状態になったって聞いたよ」

チヌに気づいた二人に声をかけられつつ、俺は扉の前に立って覗き窓から中を見る。そこには手と足に枷をつけられ、簡易ベットのの上に座っている空母の姿があった。頭にはあのよくわからん帽子はない。

「……オマエカ……」

俺に気づいたのか、空母が顔を上げて俺を見てきた。

「……足柄、中に入りたいんだが大丈夫か？」

「え、別にいいけど、気をつけなさいよ。艦載機とかはないけど、何してくるかかわからないからね？」

そう言うと、足柄は鍵を取りだし、扉を開ける。俺は中に入ると、空母の前に立った。「いくつか聞きたいことがある」

俺がそう言うと、空母は俺を見上げながら頷いた。

「まず、なぜお前たちはあの海域に居た？」

「ココヲ襲ウタメ、以前ヨリモ戦力ヲ増強シテタケド、マサカオマエニヤラレルトハ思ワナカツタ」

あつさりと答える空母に、逆に俺のほうが面食らう。なんだこいつ？

「……次の質問だ。どうしてお前たちは人間を襲う？ いや、それ以前にどうやってお前たちは生まれているんだ？ お前たちは何者なんだ？」

この質問に空母は……とても不思議そうな表情を浮かべる。

「……ワカラナイ。私達ハ気ツイタラ海中ニ産マレ、海ニ出ルモノヤ、一部の空ヲ飛ブモノヲ襲ウ。ソコニ私達ノ明確ナ意志ハナイ。本能ノママヤツテイルト言ツテイイ」

表情からは嘘は言っていないように見えるが、本当だとしたら、いったいこいつらは何なんだ？ 俺が言えることでもないんだが。

「じゃあ……どうしてお前は捕虜になつた？ 今まで聞いてきた中でお前たちが捕虜になつたなんて話は聞いたことがない。それがなんでだ？」

そう、それが俺が最も聞きたいことだった。

「……ワカラナイ。オ前ノ主砲ヲ受ケテカラ、私ノ頭ハ海に居タ時ヨリモハツキリトシテイル。ソウデナケレバ、私ハアノママ轟沈スルマデ戦ツテイタハズダ」

「ダカラ私が聞キタイ。オマエハ何者ナンダ？」

「……俺は三式中戦車チヌ。それ以外の何物でもないし、お前がそうなる要因もわからぬ」

こいつの言葉を聞いて、俺は更に困惑が深まった。俺がやった事と言ったら肉弾戦ぐらいだが、それが原因なわけないよな。いくらなんでも。

「ソウ……。私が言イタイノハソレダケ」

そう言うと、横を向いてしまった。これ以上話しても仕方なさそうだし、俺は反省房を後にして、取りあえず定時の見回りをして寝る事にした。こいつの処理は、さて、どうなるのやら……。

第32話

俺が空母に会ってから三日後。俺は提督室に呼び出された。新しい水上バイクでも完成したのだろうか？

そう思いつつ俺が提督室に入ると、そこには提督と明石……は想像通りだが、なぜか捕虜にした空母と不知火、黒潮もいる。

「来てくれたか、チヌ」

「ハッ。それで、今回は一体どのような御用でしょうか？」

俺の言葉に不知火と黒潮が微妙に表情を歪めた。どうしたというんだ？

「うん、実はな。大本営から彼女に関しての通達が来た」

「……それで、いったいどういう処遇になるのでしょうか？」

なにせ人類側が初めて鹵獲した深海棲艦だ。相当な尋問を受けるのか？ それとも研究所で解剖されるのか……。

「彼女自身はこの鎮守府での預かりとなった」

「……なんですって？」

提督の言葉に俺は耳を疑った。空母をこのままこの鎮守府に置いておく？ いった

い、上層部は何を考へてるのか？ まったくわからない。

「その代わりだが、彼女が頭部に着けていたもの……彼女曰く艦載機の収納スペースらしいのだが、あれを本部の研究所に運ぶことになった。彼女からの尋問に関しては我々が担当だがな」

「……そうですか」

やけに寛大な処遇だな。だが、上には上で何かしらの考へがあるんだろう。俺が口出す事ではないし、口を出せる事でもない。

「というわけで。チヌ、君に彼女の監視を任せたい。彼女の身体能力は普通のひとほどとんど変わらないからな。艦娘よりも君のほうが適任だろう」

監視……か。

「了解しました。それで、彼女はどこで生活するのでしょうか？ 反省房でよろしいでしょうか？」

「いや、彼女は君の家に滞在してもらおう」

「……は？」

言葉を失うとはこのことか。

「彼女が何かをした時に対処できるように考えればチヌと一緒に居るほうが良いだろう。と言っても任務もあるわけだから。チヌが任務の間はここに居る不知火と黒潮の

どちらかを常に。それとは別に、手の空いた者を回すようにする」

「そういうわけや、チヌはん、今後も宜しゅうな」

「提督の命令ですから、仕方がありません。宜しく願います」

いや、お前たち、これは異議を唱えるべき内容だと思うんだが。

「失礼ですが提督。それならば俺が彼女の隣の反省房で生活するのが良いのではないでしょうか？」

「反省房がいつまでも使えないのも困るだろ。それに、彼女の体調に無為に悪化させても仕方がない。幸いと言うべきか、彼女は空母であり、艦載機が居なければ何もできないのだから、君の家でも問題はるまい」

問題は大有りだと思うんだが……いや、やめておこう。提督はこの鎮守府の最高責任者だ。意見具申以上の事をすべきじゃない。

「……了解しました。三式中戦車チヌ、これより鹵獲した空母の監視の任務に就きます」
そう言つて、俺は敬礼した。こうなつた以上、任務を全うするしか俺にできる事はなかつた。

第33話

「……」

あれから数日が経過した。今日は見回りの任務は非番であり、飛鷹達の出撃や、水上バイクのメンテナンスもあつて、今日は基本的な訓練だけである。そしてそれも終わり、俺は家に戻り、普段ならば図書館で借りた本で勉強をしたりするはずなんだが……。

「まるゆー、お茶取ってーな」

「あ、はい」

「黒潮、それぐらい自分で取りなさい」

「……コノ才菓子美味シイ」

俺の目の前には三人の艦娘と一人の深海棲艦がちやぶ台を占領していた。黒潮は本を読みながら茶を飲んでいて、まるゆがやかんを黒潮の近くに置いてある。不知火は勉強をしながら、空母……は煎餅を齧っている。

ちなみに、空母は自身がヲ級という分類なので取りあえずヲ級と呼ぶように要求してきたので、今はヲ級と呼ぶようにしている。名前としてはまあ、俺も似たようなものだ。特に問題はないだろ。もし今後正式に名前が必要になるのであれば、その時に改めて

考えればいいだろうしな。

「おい、ちやぶ台を占領するな」

「あ、すまんなーチ又はん」

「す、すぐどきますね」

俺の言葉に黒潮とまるゆが横にずれ、空いたスペースに俺は本を置き、それから改めて部屋を見渡した。部屋の中には不知火たちが寝泊りするためのに新しく用意された布団が障子の開いた押し入れから見えており、箆筒には寝ている間ヲ級に装着するよう簡易の拘束着が入れられている。そして、出入りする艦娘達のためのお菓子やら本やらの娯楽品が部屋のあちこちに置かれている。まったく、俺が来たころとはかなりの変わりようだ。

「チ又さん、ちやぶ台の新しい物を購入すべきです。このちやぶ台では全員が使う事はできません、小さすぎます」

「それは今度の休日どこかの家具屋で買ってくる。というか、俺が戻ってきたんだから、どっちかはもう戻ってもいいんだぞ。二人とも居る必要はないはずだ」

俺の言葉に三人が睨んできた。

「何言うてんねんチ又はん。こいつはチ又はん殺しかけたんやで。チ又はん一人でなんてのは論外やとしても、一人でも多く監視しとるほうがええに決まっとるやん」

「そうですよ。何かあつてからでは遅いんですよ」

黒潮とまるゆがそう言い、不知火も同意とばかりに頷く。

「私ハチヌニ鹵獲サレタ身。チヌヲ襲ウツモリハナイ」

「ふざけるなや。そんな話ホイホイ信じられへんわ」

黒潮がヲ級の言葉に噛みつくように反論し、残りの二人も鋭い視線でヲ級を睨む。それを見て俺は溜息をつくことしかできなかつた。

第七章

第34話

現在の世界の情勢は中々複雑である。第二次大戦、冷戦を経てからも、世界中で小規模な戦争は起きていたし、ロシア、中国、アメリカといった国々が代理戦争として内戦を煽った例もいくつもある。

今も、深海棲艦の登場によって一応は人類対深海棲艦の構図はしているが、人類側は一枚岩とは言えない。深海棲艦に対抗できる艦娘の数はあまりに少なく、更に所属している国には相当な偏りがある。今現在深海棲艦に対して攻撃を仕掛ける事ができる国は日本を除けばアメリカに、イギリスやドイツといったヨーロッパ諸国の一部にロシアぐらいで、アフリカはもちろん中東や日本を除くアジア諸国の大半。そして南米は攻撃どころか防衛すらままならないのが現状である。

もちろん、比較的艦娘の多い日本はある程度他の国の防衛も手伝っているため、その発言力は増していき、逆に深海棲艦に対して有効な対処ができていない国は発言力が低下しており、それらの国が発言力のある国に対して嫌がらせをする事もしばしば起こるようになってきた。

まったく馬鹿馬鹿しい話ではあるが、人間という種族はそう言うものなんだろう。それはさておき、それに対して発言力のある国は国で、交流を深めつつ、相手の国の内情を調べようと色々と画策しているようだ。今回、ドイツの艦娘が日本へ二名送られてくる事になったのも、それが要因なんだろう……。

その日、鎮守府の中は騒がしかった。と言うのも、10日ほど前に、提督よりドイツの艦娘が二名、日本に援軍として送られ、一時この鎮守府の扱いになる。という事を話したがためである、当時、ドイツは日本と同盟国であったため、抵抗を感じる物は居なかったようだが、初めての外国の艦娘との交流に気が落ち着かない者も多かったのだろう。

そして今日、鎮守府の全艦娘は広間に集められた。壇上には提督と、二人の艦娘がいる。一人は金髪の凛とした雰囲気漂わせる女性で、もう一人は長い銀髪の小柄な少女だ。緊張しているのか、恥ずかしそうに顔を俯かせている。

「皆、彼女達がドイツから我が国に来てくれた艦娘、戦艦ビスマルクと潜水艦U—511だ。宜しく頼むぞ」

提督がそう言うのと、艦娘達が敬礼を行い、俺もそれに合わせて敬礼する。そしてそれを確認した後、提督が金髪の女性にマイクを手渡した。

「私が先ほど紹介に預かった戦艦ヴィスマルクよ。かつての同盟国として、共に戦えることを誇りに思うわ」

「U—511です。み、皆さん……宜しくお願ひします……ユ—とお呼び下さい……」
ヴィスマルクのほうはまさに軍人の鏡というべき挨拶をする一方、ユ—のほうはどうにも小心者とししか見えない。まあ、潜水艦だから人目に出るのに慣れてるわけじゃないんだらうが。

そう思っていると、ふいにヴィスマルクが俺に対して怪訝な表情を浮かべ、提督に話しかける。すると、提督が俺に向かって手招きしてきた。それに答えて俺が提督の元に向かうと、提督が俺の紹介を始めた。

「ビスマルク、ユ—。彼は三式中戦車のチヌだ。艦娘を除いて唯一深海棲艦を撃破できる者だ。艦娘共々よろしく頼むよ」

「三式中戦車チヌです。誉れ高き戦艦ビスマルク殿、潜水艦U—511殿と共に戦える事を光栄に思います。どうぞ宜しくお願ひ致します」

そう言つて、俺は右手を差し出す。だが、ビスマルクはそれを見て、そして冷笑を浮かべた。

「戦車？ ふん、そんなやつに差し出す手はないわ」

そう言うのと、ビスマルクは俺の手を払った。それを見て艦娘たちから驚きと、そして

一部から嫌悪の視線が向けられる。これはまずいな。

「なるほど、確かに戦艦であるビスマルク殿に軽々しく握手を求める等、分不相応でした。どうかお許しください」

そう言つて俺は頭を下げつつ、隣に立つ提督に視線を向ける。それを見た提督が話し出した。

「さて、皆への挨拶は終わったし、長旅で疲れているだろう。今日はこの辺で休んで、明日また個別に挨拶していくのが良からう。榛名、彼女達を案内してくれ」

「は、はい。こちらになります」

提督の言葉に榛名が二人を案内する。ビスマルクは悠然と、ユーは申し訳なさそうに俺に軽く頭を下げたから出ていった。

三人が出ていったのを確認すると、艦娘達の中から黒潮が出てきて提督の前に立った。

「提督はん！ なんやねんあのビスマルクとかいうやつ態度。チヌはんがいったい何をしたつていうんや！」

その言葉に不知火やまるゆといった比較的交流のある艦娘達からも同意の声が上がる。声を上げない艦娘からも不信の視線が向けられてる。うーん、俺が原因でビスマルク殿達と軋轢ができるのは避けたいんだが……。

「その理由についてはわからないが、少なくとも彼女のあの態度は俺だけに向けられた者だ。皆はどうか普通に接してほしい」

「そうは言うてもなあチヌはん。チヌはんはうちの仲間やで。それを貶されて黙ってみてるいうんか？」

黒潮の言う事ももつともだが、俺としては俺なんかが原因でドイツの艦娘と鎮守府の艦娘の間でいざこざが起きるほうが困るんだよな。

「黒潮、君の言う事も最もだが、彼女にも何か理由があるのかもしれない。私からも言うておくから、今日のところはおとなしくしてもらえるか」

横から提督がそう言うと、黒潮は渋々と言った表情で後ろに下がった。それを見て他の艦娘達も不満げな表情をしつつもこの場はおとなしくするつもりのようなのだ。しかし、これは面倒なことになりそうだな……。

第35話

そんなことがあつてから数日。ビスマルク殿の態度は特に変化はなかつた。強いて顔を合わせるような関係ではないとはいえ、彼女はあからさまに俺を無視するか、または冷やかで厳しい言葉や態度を示す。俺自身としては特に問題はないのだが……。

「なんやねんあいつは！ 毎度毎度チヌはんの事を敵視しおつてからにー！」

「わ、私も同じ意見です！ それに、ユーさんも怖いです」

「……ユーさんの事は何とも言えませんが、ビスマルクさんの態度が看過できないのは同意見です」

「私もちよつと物は言いたいわね。なんなのかしらあの態度は」

俺の家で黒潮、まるゆ、不知火がビスマルク殿に対しての不満を漏らす。今日のヲ級の監視を手伝つてくれてる足柄も、三人を宥めつつも割と同じ意見らしい。

「……チヌハソンナニ嫌ワレテイルノ……？」

そんな四人を見ながらヲ級が首を傾げる。

「俺には嫌われる理由は思い浮かばないんだがな。初対面だし、第二次大戦中にも戦艦ビスマルクと俺達……というより日本の戦車と何かあつたわけではないし」

強いて言えば艦娘以外の存在として男性が居るのが気に食わない……。まあ、男性嫌悪等があるのかもしれないが、それなら提督に対しても似たような態度になるだろうし。

「……つと、そろそろ出撃の時間だな。今日は足柄と不知火にユーで出撃か」

「そうね。それじゃあ、さっさと片付けに行きましようか」

「了解です。では、行きましよう」

俺の言葉に不知火と足柄が立ち上がる。そして、まるゆと黒潮にヲ級の監視を頼み、俺達は出撃室に向かった。俺達が到着すると、既にそこにはユーが待機しており、その隣ではビスマルク殿が立っている。

「ふん、戦車風情が良く来たわね。あんたなんて鉄屑が海上に出ても役に立つわけないってのに」

開口一番にビスマルク殿が俺に厳しい言葉を投げかけてくる。それに対して不知火と足柄が口を開こうとするが、それより先に口を開く。

「ビスマルク殿のご心配はごもつともかと。ですが、私がこれから出撃する海域は既に幾度も出撃し、強力な深海棲艦の出現は確認されておりません。私がやられるような事があつても、足柄や不知火が居ればユー殿への心配も減るか」と

俺の言葉にビスマルク殿は苦々しげに表情を歪めると、「ユー。気をつけなさいよ」と

だけ言うと、出撃室を後にした。後に残ったのは申し訳なさそうにしているユーと、苦々しげにしている不知火と足柄であった。

「時間だ、出撃しよう」

そのままにいるわけにもいかなないので、ともかく俺は出撃準備に入り、三人も用意に入る。そしてしばらくして俺達は無事に撃撃したが、海域を進む中で不知火が俺に話しかけてきた。

「チヌさん。私はもう我慢の限界です。いくらチヌさんが許しているとはいえ……」

「不知火、言いたい事はわかるが、俺が原因でお前たちとビスマルク殿を不仲にさせるわけにはいかないんだが……」

「何言ってるのよ。他の艦娘達もほとんどがビスマルクに嫌な感情を抱いてるわよ。私もだし」

隣を走っている足柄からも言われ、俺は溜息をつく。どうやら、俺が思っていた以上にビスマルク殿の態度は艦娘達に嫌われる要因になっていたらしい。彼女の言う事は間違っていないんだから、怒るような事はないんだが。

「あ、あの……あんまりビスマルク姉さんを悪く言わないであげてください……」

ふと後ろから声をかけられ、振り向くとユー殿が浮上していた。

「……ユーさん。私も悪く言いたいわけではありませんが、彼女の態度は目に余るもの

があります」

「そうよ。仲間を悪く言われて、平気でいられるわけないじゃない」

「……ユー殿。どうしてビスマルク殿は私……というよりは戦車に対してに思えますが、戦車に対して何か嫌な事があるのででしょうか？」

俺の言葉にユー殿は少し視線を逸らしたが、少しして口を開いた。

「……あの頃、ドイツは戦車とかばかり作って……私達海軍にはあまり予算が回されなかつたから……。ビスマルク姉さんも、イギリス海軍に沈められて……」

ああ、なるほど。確かに、ドイツじゃ海軍よりも陸軍に予算回すよなあ。西にフランスが隣接し、東にはポーランドを挟んでロシアもとい、当時はソ連か。まあ、海軍に予算は回さないよな。ソ連相手に海軍なんて役に立たないし。

「……つまり、八つ当たりって事じゃないですか」

ユーの言葉を聞いた不知火がジト目でユーを睨む。待て、ユーは関係ないぞ。

「不知火、口を慎め。俺としてもビスマルク殿の気持ちはわからないでもない」

不知火の言葉を俺が注意する。

「でもこのままじゃまずいわよ。駆逐艦の子達には貴方に懐いてるのもけっこう居るし、私だって仲間を悪く言われるのは嫌だわ」

足柄の言葉に俺は頭を抱えそうになる。俺への敵意に関しては正直気にしてないっ

てのに……。提督に相談しておくか。

第36話

出撃を終えた俺は取りあえず提督に相談するが、特に有効な内容も出る事はなく、結局いつも通りに過ごすしかなかった。その間にもビスマルク殿は俺に会うたびに厳しい態度をとり続け、更に艦娘達から悪い感情を抱かれているようだ。

そんな中、今日は明石と一緒に工廠で作業をする事になった。

「それにしても、ビスマルクさんって本当にチヌさんに喧嘩売ってますよねえ。チヌさん、よく我慢できますよね」

作業をしている中、明石が俺に話しかけてくる。話題はあれだが。

「俺としては特に気にしてないからな。ビスマルク殿が言ってることは正鵠を得ているんだし。そもそも、いくら戦力不足だからって戦車を出撃させる事自体おかしい事だろ」

「うーん、でも、一定の戦果は出てるんですよえ。だからこそ、私もビスマルクさんの態度好きになれないんですが」

そんなことを話しつつ作業を続けていると、ふいに工廠の扉が開き、件のビスマルク殿が入ってきた。噂をすればなんとやらか。

「明石、艤装の点検を……ふん、戦車風情が、こんなところにもしゃしゃり出てるのね」
その言葉に明石が眉間に皺を寄せる。だから、お前が怒るなど言うに。

「……艤装の点検はこちらで行いますので、こつちに来てください。チヌさんは、向こうの棚での作業をお願いします」

俺が何かいうよりも早く明石が指示を出して来た。取りあえずそれに従い、俺は明石に言われた場所の棚での作業を始めた。まあ、作業と言ってもやることは在庫の確認ぐらいだが。

まあ、ビスマルク殿と顔を合わせていても仕方がない。取りあえずリストにある通りに在庫があるかどうかを確認していく。たまに妖精達が勝手に資材を使つて主砲とか作つてるからなあ……。

しかし、そろそろ棚も新調したほうがよくないかな、普段からけっこう重い物ばかり載せてるし、耐用年数も心配だが……。

そんなことを思いつつ確認をしていると、ふいに後ろに気配を感じた。振り向くと、そこにはビスマルク殿が立っていた。

「ビスマルク殿？ どうされました？」

俺が尋ねると、ビスマルク殿は酷く眉間に皺を寄せて俺を睨み付けてきた。

「本当にうっとおしいわね、戦車風情が！」

そう言うのと、ビスマルク殿は足元にあったバケツを蹴り飛ばした。備品は乱暴に取り扱わないでほしい。

「まったく、ここの艦娘は本当におかしいわよね。あんたみたいな戦車を戦力として運用して、それを信用してるなんてき。本当にイラつくわ」

「あんたみたいな戦車風情が私達の領域まで出てくるんじゃないわよ！ あんたらはおとなしく陸の上を走ってればいいのよ！」

そう叫ぶと、ビスマルクは近くの棚に拳を叩きつけた。

「おっしゃりたい事はよくわかります。しかし、一兵器である私には提督の命令を拒む権限は持っていません。私の行動に関しての進言は提督にしていただけば……」

そこまで言った時、ビスマルク殿が俺の胸ぐらを掴んで棚に押し付けてきた。

「その態度も癪に障るわ……！ 何、私はどう言ってきた構わないか思ってるのかしら？ 本当にイラつくわね……！ 私をバカにしているのかしら？」

これはマズイ。艀装があつたら主砲を撃ちかねないな、なんとか穏便に済ませないと……。

そう思っていると、不意に地面が揺れ始めた。どうやら地震のようだが、そこそ大きな。足に力を入れ、こけないようにするが……。

「な、なにこれ!？」

ビスマルク殿が尻もちをついた。ああ、そう言えば欧州では地震そのものが起きる事がほぼないんだったか。地面が揺れる。という感覚に慣れてないんだろう。

と、不意に俺の頭に何か当たり、床に転がった。それは、一本の大型のネジであった。それを見た瞬間、俺が後ろを振り向くと、そこには更にいくつかのネジが外れ、こちらに向けて傾いている棚であった。

「!? 危ない!」

尻もちをついているビスマルク殿は茫然とこちらに倒れかかってくる棚を見上げている。それを見て、俺は咄嗟にビスマルク殿の上に覆いかぶさる。その上に棚の天板や艤装のパーツ、資材等々が降り注ぐ。

「…………ツ」

しばらくして衝撃が収まる。が、どうもかなりのものが俺の上に降り注いだらしく、動くことができない。細々したものが重なっているせいか、電光もほとんど遮られ、ビスマルク殿の様子も確認できない。

「…………… あなた、血が!」

俺の下に居るビスマルク殿が声を上げる。そしてその段階で俺は背中に尖った鉄の棒が刺さっているのに気付いた。幸いそこまで深くも刺さってはいなさそうで行動に支障はない。

「これぐらいの傷なら問題ありません。ビスマルク殿はお怪我はございませんか」

「! ……私は平気よ。それより、動くことはできないの?」

「申し訳ありませんが、今の体勢を維持するのが精いっぱいです。明石が気づいてくれれば……」

そこまで言ったとき、耳に慌てて走ってくる誰かの足音が聞こえた。

「わ!? 倒壊して……チ、チ又さん! ビスマルクさん! どこですか?」

どうやら明石がここまで来たようだ。彼女のほうはどうやら無事だったようだな。

「明石、俺とビスマルク殿はここだ。自力で動けそうにない。そっちからどうにかできるか?」

「うーん、ダメです。私だけじゃどうしようもないです。すぐに人手を集めますので、持ちこたえてください」

そう言うと、明石が去っていく足音が聞こえた。どうやら、これで無事に出る事はできそうだな。

「……グッ」

重なった物の重さに耐えきれず体が少し下がる。まだビスマルク殿の体に触れてはいないが、今の体勢をどこまで維持できるか……。

「……どうして?」

不意にビスマルク殿が俺に声をかけてきた。

「どうして私を助けたのよ。私があんたにどういう態度をとっていたのか、わからないほど脳みそが錆塗れなわけじゃないでしょ」

酷い言いようである。これでも明石に定期的なメンテナンスを受けているというのに。

「貴方は艦娘です。俺が負傷する事に比べれば、貴方が負傷するほうが大きな損失となります」

「ふん、模範的な回答ね。本当、イラつく。私があんたを嫌ってるのに、よくそんな事言えるわね」

「……貴方の言う事は正しいですから」

「……ただ、せめてこの鎮守府に居る間だけ、我慢して頂きたい。貴方のその態度によって他の艦娘が厳しい目で貴方を見ている。私の事で貴方方の間に溝を作っては、出撃の時にやりにくくなってしまおうでしょう」

「……ふん」

ついでに頼んだが、そっぽを向かれてしまった。いや、真面目に聞いてほしいんだが。

第37話

その後明石達によつて救出された俺達だが、入渠施設には既に第一艦隊のメンバーによつて使用されていた。幸いさして時間を置かずに施設が空くとの事なので、血が流れないように軽い処置だけしておいて近くの休憩スペースで待つこととなつた。休憩室の畳のスペースで、俺は新聞を読もうと手に取つていたが、俺を心配したという黒潮、それに入渠から出てきた響が俺の両隣に座っているせいで集中できず、それを、響と同じく入渠から出たばかりの榛名が見ている。

「ほん、まつ！ あいつ腹立つわ。チヌはんに喧嘩売つたあげくにチヌはん怪我させるつてどんな了見や」

そんな俺の隣で黒潮が騒いでいて反対側で響も頷いている。

「黒潮、落ち着け。さして深い傷でもないからすぐ治る」

「そういう問題やないやん。うち、もう我慢ならん。後で提督にあいつをさつさと異動させるように進言するで！」

「チヌ、自分達の仲間を悪く言われて気にしない人なんて普通いないんだよ。それに、怪我したんならなおさらさ」

二人に挟まれてそう言われる。傷に關しては事故だと説明したはずだが。どうしてこうなるんだ。

「二人とも、チヌさんを困らせてはいけませんよ……でも、今回の件は流石にまずいかもしれませんか」

二人を諫めつつ、榛名も表情を曇らせている。榛名がこういうとなると、流石にマズイか。だが、どうすればいいのか。

俺がそう悩んでいると、休憩室のドアが開かれ、そして、件のビスマルク殿とユー殿が入ってきた。

「……チヌ、少しいいかしら」

黒潮と響が睨む中、ビスマルク殿が俺の前に来た。

「何の御用でしょうか、ビスマルク殿」

畳から立ち上がり、

「……チヌ、今までの態度、謝るわ。……ごめんなさい」

そう言つて、ビスマルクが深々と頭を下げた。それを見て俺達は言葉を失つた。

「チヌ……ビスマルク姉さん、反省してる……許してあげて欲しい……」

ビスマルク殿の後ろからユー殿も俺を見上げる。

「……」。許すも許さないもありません。元から怒つたり等はしてませんから。ですが、

貴方が私の事を受け入れて頂けるといふのなら、とても嬉しい事です」

俺がそう言うと、ビスマルクは少し笑みを浮かべ、そして少しして、右手を差し出して来た。

「あの時は握手に応じずごめんなさい。私から改めて挨拶するわ。戦艦ビスマルクよ、宜しくね」

「三式中戦車チヌです。宜しくお願いします」

差し出されたビスマルクの手を取り、俺達は握手を交わす。それを見て黒潮と響が微妙な顔をしているが、榛名は笑顔になつてゐる。

「……それじゃあ、今日はこれで失礼するわ。明日から宜しくね」

そう言うと、ビスマルクは俺に背を向けて休憩室を後にした。

「チヌ……私も改めて……明日から宜しく……」

ユー殿も俺に頭を下げるとビスマルク殿を追つて休憩室を後にした。

「黒潮、響。ビスマルク殿もあやつて謝つたんだし、提督への進言はなしにしてくれるか？」

「うーん……正直虫のええ話やけど……チヌはんがそう言うなら」

「私は構わないよ。でも、またやりだしたら言うと思うから」

二人は洗ひ顔をしているが、納得してくれたようだ。榛名もそういう心配はなさそう

だし、これでどうにかなりそうだな。

第38話

ビスマルク殿の謝罪から数十日が経過した。あれ以来ビスマルク殿の態度が変わったことと、黒潮たちが謝罪の事を話した事で、鎮守府の空気が少し和らいだ。そのおかげもあってビスマルク殿と艦娘達との交流も深まっていつているようだ。

俺自身も、それ以降ビスマルク殿と共に出撃したり、雑談をしたりと共に過ごす時間が増えた。おかげで互いの事を知る機会が増えたのは非常に有意義であった。どうも彼女は戦艦としての誇りが先行しすぎていただけで特に悪い人格というわけでもなく、日本の文化にも興味を持ち、食堂でユ一殿と共に日本食に驚いていたりしていた。それを見て他の艦娘達が色々面白がったりと、そういう場面を見る機会が増えた。

そうして日にちが過ぎていくうちに、二人は他の鎮守府へ異動となった。送別の日になり提督と全艦娘、そして俺が見送る事となった。

「提督、皆、今までお世話になったわね。本当にありがとう」

「……お世話になりました」

見送りに来た俺達に二人が挨拶していく。どの艦娘達も笑顔や残念そうな顔で見送っている。あのままビスマルク殿に嫌な感情を抱いたままで終わらなかつたのは良

かったな。そういう意味ではあの地震に助けられたか。

「それと……チヌ、貴方には色々悪い事してしまったわね、ごめんなさい」

最後に俺に挨拶の番が来た。

「どうか気になさらないでください。私は何も気にしておりません」

改めて俺がそう言うと、ビスマルクは少し笑みを浮かべた。

「そう言ってもらえると嬉しいけど、やっぱりそれだけじゃ私の誇りが許さないわ」

そう言うと、ビスマルクはいきなり俺を抱きしめてきた。……ああ、確か向こうの挨拶はこういうのだったか。

「これはドイツ人の親しい人同士での挨拶よ。日本の人では貴方しかないわ。貴方への敬意を示して……ね」

そう言うと、ビスマルクは俺を抱きしめたまま左右の頬にキスをして来た。

「私はこういう習慣がないのでわかりませんが、返礼すべきなのではないでしょうか？」

「そうね、してもらえるかしら」

そう言われたので返礼としてビスマルクを抱きしめ、左右の頬にキスをする。

「ありがとう、チヌ。それと、今後はこの艦娘達みたいにタメ口で構わないわ。ユーもね」

「は……はい、お願いします」

「そうか。それじゃあ、音言葉に甘えさせてもらう。次の鎮守府でも頑張ってくれ」
「ええ、任せてちょうだい」

「が、頑張ります……」

二人はそう言うと、港から出発していった。やれやれ、色々大変だったがなんとか
なったな。そう思いつつ後ろを向くと。

「……」

不知火が俺をジト目で睨んでいた。

「なんやねんあいつ。最後の最後にチヌハンに粉かけおつて、腹立つわー」

黒潮がよくわからないが憤慨していた。そして。

「あ、あれが大人のレディってやつね……うん、私も見習わないと」

「相変わらず欧米は進んでるね。私も参考にしよう」

暁と響が何か考え込んでいた。ついでに言うと、他の艦娘達も色々な反応をしていた。榛名は少し顔を赤くして提督を見ているし、足柄は何か頷いているし、提督も何か含みのある笑みを浮かべてるし。

そんな色んな反応に、俺は困惑するしかなかった。

第八章

第39話

その日、俺はヲ級を連れて工廠から戻っていた。明石によるヲ級のチェックが終わり、そのままどこかに行かないようにとの見張りの為なのだが、最近こうしてヲ級の見張りをしているせいで自主訓練の時間が取れないのがどうにも辛い。

まあ、幸いヲ級は特に暴れたりすることもなく、肅々とこちらの言う事に従っているからそういう苦労はないんだが……。

そう思いながらも俺は家の前に着くと、戸を開けようとして、ふと、中から何か音が聞こえてくるのに気づいた。

「……」

耳を澄ませつつ腰を落とし、ゆっくりと戸に手をかける。そして、次の瞬間に一気に戸を開けて中に入った。

「……………」

そこに居たのは、俺の蒲団に包まって寝ている女だった。俺が家に入った事にも気づいた様子はなく、寝息を立てている。誰だこいつ？

「……見夕事ナイ顔……チヌノコレ……？」

そう言つてヲ級は小指を立てた。おい、どつからそんな事知つた？

そんなことを思いつつ、俺はヲ級の言葉を否定し、それから布団に近づき、掛布団を剥ぎ取つた。

「んあ……返してえ……」

布団を剥いだ拍子に女が目を開けたが、まだ寝ぼけているようだ。

「人の布団で勝手に寝るな。お前は一体誰だ？」

「んー……私は加古……おやすみー」

そう言うと、加古は掛布団を取り返す事も諦めて枕に顔をうずめて寝息を立て始めた。おい、俺の枕だぞそれ。

「おい、起きろ。起きろつての」

加古の肩を掴んで激しく揺らすのが全然起きようとしないなこいつ。仕方ない、少々強引にでも起こすしか……。

「おい、チヌはん遊びにきたでー」

「チヌさんお邪魔します」

家の戸が開いて黒潮とまるゆが入ってきた。そして。

「……チ、チヌはんが女連れこんどるー!？」

「チ、チ又さん不潔ですー!」

大声を上げる二人を宥めなければいけなくなつた。

「ああ、ちゃんと着任してる。期待に添えられるかはわからないが力は尽くす」

そう言つて、電話を置いた提督は深くため息をついた。

「まさか挨拶に来るよりも早く寝に……しかもチ又の家に入つて寝ているとは思わなかつたぞ、加古」

「いやー、眠くてどこかい場所がないかと探してたらつい目に入っちゃつて」

俺の隣で加古が笑いながら頭を掻いてる。

「……チ又、彼女は重巡の加古だ。以前この鎮守府で訓練を終えて別の鎮守府に異動してたんだが、見てのとおり異様なまでに寝ようとする。その為、今回こちらで鍛え直す事になったわけだ」

まあ、昼間から誰かの家で寝るような性格じゃなあ。

「で、だ。君にその教官役を任命する。期間は彼女を更生させるまでだ」

「……提督、お言葉ですが、艦娘の教育となれば香取が適任なのではないのですか?」

そう、この鎮守府は教育を主な目的とした鎮守府なのだから、教育するのは当然だがどうして俺が任命される?

「もちろん香取にもやってもらう。だが、香取には他にも教育する相手が居るからな……。正直、加古のあれは専属で誰かつけないと修正できないと判断されているんだよ」

「……事情はわかりましたが、私には教官の経験なんて皆無です。正直な所どうすればいいのかわからないのですが」

俺の困惑した顔に提督は少し溜息をついた。

「基本は香取の指示に従ってくれればいい。それと、当面の間君の見回りの任務から外して加古の事にその分の時間を割いてもらうから、頼んだぞ」

……なんとも反応に困るが、取りあえず俺は了解しました。と返した。

第40話

ともあれ、俺の家にはヲ級と見張り当番の艦娘、そして新しく加古が泊まることになったわけだが、流石に手狭になってきたな。まあ、加古に関しては期間限定だろうか
らそれはいいんだが。

問題は加古の睡眠であつた、一週間程様子を見ていたが、ともかく暇さえあれば寝て
いて、一度寝たら中々起きない。それでも訓練は割と真面目にしている当たりは根つか
らの不真面目というわけでもないようだが、あれは体質なのだろうか？ 取りあえず、
香取にも意見を聞くか。

「……というわけなんだが、香取はどう思う？」

ちょうど昼食の休憩が重なつたので、俺は香取を間宮食堂に誘い、意見を聞いてみる。
「そうですねえ。加古さんは確かに、ここに所属していたころから寝てばかりでした。
それでもまあ、訓練では一定の成績を収めていたのと、戦闘の時にはちゃんと起きてい
たのとで他の鎮守府に異動したんですが……」

香取はそう言うのと短くため息をついた。

「……要は単なるサボリ癖という事か？」

俺が聞くと、香取は「恐らくは……」と返して来た。それを聞いた時、俺の中に何か黒い感情が沸き上がるのを感じた……が。表に出さないように努めた。

「単なるサボリ癖なら少々厳しめの訓練と生活習慣で矯正していけると思うが、艦娘としての戦闘訓練を厳しくすることは可能か？」

「……あからさまに加古さんだけに厳しい訓練。と言うのは難しいですけど、通常の訓練の中で評価を多少厳しくするぐらいなら大丈夫です」

「それじゃ、それで頼む。俺のほうは加古の生活の中で厳しくしていつてみよう」

それから俺達は互いに話し合い加古のサボリ癖修正に向けて動き出す。……俺の中の黒い感情が表に出ないうちにどうにかしたいものだが。

翌日、家の中で最初に目を覚ましたのは俺であった。布団から起きて時計を確認すると、今の時間は6時5分前。まだ目覚ましが鳴るには時間がある。取りあえず布団を押し入れに入れ、カーテンを開け、着替えを取ろうと筆筒の前まで来たとき、後ろから目覚ましの轟音が鳴り響いた。

「うわあああ!! 何!?! なんなのさ!」

「ウ、ウルサイ……!」

「あわわわわわわ」

加古とまるゆは轟音に驚いて体を起こし、ヲ級は必死に頭を布団の中に押し込んでい
る。拘束具のせいで耳を抑えれないから仕方ない。

「昨日言っただ。6時に絶対に起床だ。まるゆ、ヲ級の拘束を解いておいてくれ。
俺は洗面所で着替えるから、6時20分までに全員着替え終る事」

そう言っただ俺は洗面所に入り、5分後に出てきた。三人はなんとか着替えを終えてい
る。

「今から朝食の8時までグラウンドで基礎トレーニングを行う。まずは腕立て、腹筋を
200回。それが終わってからグラウンド20週。さあ、急げ急げ！」

「ひ、ひい、い」

俺が大声を上げて宣言すると、加古はわけもわからないままグラウンドまで走り出て腕
立て伏せを初め、その隣でまるゆとヲ級も腕立て伏せを始める。流石に二人とも艦娘と
いう事もあって、訓練内容は問題なくこなしてるな。ヲ級も問題はなさそうだ。だが、
加古はどうも体がふらついてるな。

「うう、ね、眠い……」

「あ、加古さん、寝ちゃだめですよ！」

「……寝タラ怒ラレル……」

ふらつく加古をまるゆとヲ級が励ましながら訓練をこなしていき、どうにか時間内に終える事ができたようだ。

「時間だ。9時までには朝食を終えてもう一度ここに集まる事。時間に遅れた場合には懲罰の対象となる。以上」

俺がそう宣言すると、加古はげんなりとした表情をしつつも、ヲ級とまるゆと共に間宮へと向かって行った。それから、朝食を終えた三人は10時からの艦娘としての本来の訓練を行い、午後からの訓練の前に再び同じような特訓。ともかく昼寝をする暇を与えず、訓練を重ねて行き、夜になった。

「あう……もう……ダメ……」

諸々の訓練を終えた加古が家に入ってきたが、足取りがおぼつかず今にも倒れそうなのをまるゆとヲ級が支えている。

「風呂に入ったら寝ていいからそれまで起きていろ。まるゆは加古が風呂で寝ないよう一緒に入ってやってくれ」

「あ、わかりました。さ、加古さん、頑張ってください」

「うー……」

まるゆに連れられてフラフラとしながらも加古は風呂場に入っていた。……その様子を見ていて、また俺の中で黒い感情が出てきそうになっているのを感じる……。

「やれやれ……一日目からこれで大丈夫なんだろうか」

「……大丈夫だと思ウケド……早く終ワツテクレルト嬉シイ……朝ガウルサイ……」

ちやぶ台で茶を飲みつつヲ級が嘆息する。顔は無表情だが、やはりどこか不機嫌な様子を感じるな。

「加古が更生されるまでの間だけだ」

俺の言葉にヲ級は「……何時ニナルカワカラナイ……」と呟き、再び茶を啜る。そうこうしている内に風呂から出てきた加古はそのまま晩飯を食べる暇もなく畳の上に突っ伏して寝てしまったので、俺はまるゆとヲ級と食事をとってから眠りに着いた。目覚ましをちゃんとセットして。

第41話

訓練を始めてから2週間。香取と話し合いつつ加古の訓練を続ける。やはり艦娘である事から体力的な問題は少なく、順調に経過している。……と思っていたが。

「あー、もうダメ……もう動けない……」

朝の訓練の途中、加古が突然グラウンドに倒れこんだ。一緒に訓練していたまるゆと不知火が傍に駆け寄り様子をうかがう。

「加古、まだ訓練は残ってるぞ！ 起きろ！」

倒れこんだ加古を起こすが、加古は半分以上を意識を手放して起きる気配がない。仕方なく俺は用意していたバケツを持ち上げると中の水を勢いよく加古にぶつかけた。

「うわ！ ゲホッ！ ゲホッ！」

水が鼻に入ったのか、加古がむせながらも起き上がる。

「立てー！ まだ訓練は残ってるぞー！」

俺が声を上げると、加古が鋭い目で俺を睨み付けてきた。

「あーもう！ 訓練訓練うるさいよ！ 私はこんなに訓練とかやる気ないんだよ！ 寝

て過ごしたいのに邪魔しないで！」

その言葉に、俺は加古の胸ぐらを掴み、そして加古の頬を引つ叩いた。甲高い音がして加古が涙目で俺を睨む。だが、俺は逆に思い切り睨み返した。

「ふざけるな！ 戦える力があるのに！ 守れる力があるのに！ それを發揮せずに腐らせる気か！ それだけの力がある癖に！」

そこまで怒鳴り、俺は加古の表情に驚きと、そして怯えが浮かんでのに気づいた。それにまるゆ達も同じような表情で俺を見ている。

「……すまない、頭に血が登った。今日の訓練は中止する」

俺は加古から手を離すと、グラウンドを後にした。

グラウンドを後にした俺は、そのまま見回り等の任務をこなしていたが、加古に対してやった事が頭から離れず、任務に集中する事ができなかった。それでもなんとか任務を終えたが、家に戻ればまるゆ達と顔を合わせかねない。正直今の気持ちのまま会うつもりになれず、間宮の食堂で日本酒を飲む。

「ここにいらしたんですかチヌさん」

不意に声がかかけられ、そちらを向くと、香取が間宮に入ってきていた。そして俺の向

かいに座ると間宮に俺と同じ酒を注文している。

「まるゆさん達に聞きましたよ。加古さんに手を上げたそうですね」

「……ああ。完全に俺の個人的な怒りによるものだ。だから香取、俺は加古の訓練から外すよう提督に願い出る……。私情を挟むような指導をするわけにはいかない」

私情で指導をすれば相手に対して適切な指導をできるとは俺は思っていない。そして艦娘は他に代わりの居ない存在だ。俺のへたな指導でその力を発揮できなくするわけにはいかない。

「……私はそうは思いませんよチヌさん」

香取の言葉に俺は眉をしかめた。

「香取、慰めのつもりなのかもしれないが……」

俺が全て言う前に香取が手を出して俺を制する。

「チヌさん。私だって多かれ少なかれ、皆に教えるときには個人的な感情があります。私の場合は、無事に帰ってきてほしいとか、怪我がないようにとか、そう言うのですけど……。チヌさんは、どういう想いで教えていたんですか？」

俺の感情。それは……。

「……立派に戦ってほしい。俺と違って加古には艦娘として、深海棲艦に対抗できる力があるんだ。だから……力をつけて欲しい。加古自身に、彼女が出陣した時の他の艦娘

達になにかが起きてしまう前に」

俺の言葉に香取は深く頷く。

「とてもいいと思います。ですから、明日加古さんともう一度話してみてください。今日のところは加古さんは私の部屋に泊めますので、私からも加古さんと話はしておきます。結論を出すのはそれからいいと思います」

香取の言葉に俺は頷いた。それを見た香取は安心したように表情を綻ばせた。それを見て俺は続きが言えなかった。俺の中にあるもう一つの感情「艦娘への嫉妬」を。

(……情けない。俺は兵器。兵器は使用者の動かすままに動くべきはずなのに。こんな人間的な感情はまるであの人たちのような……)

第42話

香取と話した翌日。俺は家で加古と相對していた。俺も加古も正座し、加古の後ろには心配そうに見ているヲ級をまるゆと不知火。そして加古の隣には香取が居る。

「……加古、まずは前日の非礼を詫びる。俺は自分の感情に任せてお前を怒鳴りつけ、手を上げてしまった、申し訳ない」

そう言つて、俺は深く頭を下げた。しばらくそのままだったが、加古からの反応がない。これはどうやら相当嫌われているな。

「提督に進言し、俺はお前の教育役を降りる。同じ鎮守府内に居る以上、顔を合わせることはあるだろうが、できるだけ最小限の接触で……」

そこまで言つたとき、不意に俺の言葉が遮られた。頭を上げると、そこにあるのは、俺を見る加古の顔であつた。

「その……私も悪かつたよ。……チヌが一所懸命なのに寝てばかりだったからさ」

「あれからさ……香取先生と話して色々考えたんだよ。で、寝る癖は中々治らないと思ふけど……チヌに指導してもらいたいんだ」

……俺は加古が言つてることが理解できなかった。俺に指導してもらいたい？ 大

丈夫か？　もしかしてどこかで頭でも打ったのか？

俺がそう思っていると、香取が声をかけてきた。

「チヌさん。加古さんもこういつてることですし、教育係を続けてもらえませんか？」

「……加古がそれでいいと言うなら……」

正直、加古の心境がどうなっているのかは理解ができない。だが、本人から頼まれた以上はやるしかないのだろう……。

翌日より、加古は再び俺の訓練を受ける事となった。意識して寝る癖を治そうとしているおかげか、以前よりも訓練の調子も良くなり、目に見えて寝る癖も収まってきた。ただ、その分普段の睡眠がかなり深くなっているのか、朝に起きるのが更に苦手となつてしまった。とぼやかれはしたが……。

そんなこんなで一か月が経過し、俺と香取の報告を受けた提督は、加古を元の鎮守府に戻す事を決定した。その決定から数日後、加古は帰り支度を整えて鎮守府の正門の前に立っていた。見送りとして提督と香取、そして俺が居る。

「いやあ、今回は本当にお世話になったよー。感謝してるよー」

「感謝してるなら、もうここに返ってくるような事にはなるなよ……お、来たな」

加古と提督が話していると、護衛用の戦闘車両2台に挟まれた護送車両がこちらに向かつて来るのが見えた。しばらくして車が到着すると、中から恰幅の言い提督が降りてきた。

「加古、久しぶり。元気にしてたかい？」

「提督久しぶりー。元気にしてたよー」

降りてきたて遺徳に向かつて加古が走りだすと、その胸に飛び込み互いに熱い抱擁を交わしている。どうやらこの提督は人目を気にしないようだ。

「革元。お前の希望通り、加古の再訓練は終わったぞ。次はちゃんとお前のとこでなんとかしろよ」

「ハッ。このたびは先輩のお手を煩わせて申し訳ありません」

「……香取、お二人は知り合いなのか？」

互いに慣れた様子なのと、革元提督が先輩と呼んでいる当たり、軍学校の先輩後輩関係なのだろうか？

「はい。革元提督は、うちの提督の後輩にあたります。軍学校を卒業後も何かと一緒に行動する機会も多かったらしく、けっこう親しい関係を維持されているとか」

「なるほど」

俺が香取から説明を聞いている間に提督と革元提督の話にひと段落がついたのか、革

元提督の視線がこちらに向いていた。

「君がチヌか。先輩から話は聞いているよ。今回の加古の再訓練にあたって協力してくれただってね」

「自分の協力など微々たるものです。全ては香取の指導、そして加古自身のやる気によるものであります」

「ふむ、確かにそれはあるかもしれないが、加古のやる気を出してくれたのは君の指導によるものと聞いている。その点では感謝しているよ……ただね……」

不意に革元提督が凄い形相で俺を睨んできた。今までの態度からは想像もつかないような怒りに満ちた形相……。俺、何かしただろうか？

「加古の胸ぐらを掴んだとか、水をぶっかけたとか……そう言うのは勘弁してほしかったなあ。それになにより、加古と同じ屋根の下で寝泊りとか……うん、とても容認できないんだよ私にとって」

……ああ、わかった。提督と榛名の関係と似たような関係って事か。

「革元。同じ屋根の下での生活は俺の命令によるもの。胸ぐらを掴んだり是指導の一環だ。現に加古は再訓練が終われたんだからそういう態度はやめろ」

「そうだよ提督。私はチヌに感謝こそすれ怒ってなんかないんだから」

二人に宥められ革元提督の表情が徐々に元に戻っていく。どうやらこの二人には流

石に逆らえないようだ。

「あー……まったく。先輩たちがそう言うなら我慢しますが……次はないですよ」

そう言つてくぎを刺すならそもそも加古を再訓練に出させるような状態にしなければ良いものを……。

「ハッ。了解いたしました」

取りあえず俺が返答をすると、革元提督は提督と香取に挨拶をして加古と共に護送車両に乗り込んで去つていった。やれやれ。

「すまなかつたなチヌ。あいつは加古の事になると見境がなくなつてなあ」

「あら、提督も榛名さんの事となれば見境がなくなるじゃないですか。他人の振りを見てなんとやら。ですよ?」

「さーて、仕事しに戻るかなー」

香取のツツコミに提督があからさまなとぼけた態度を取りながら鎮守府の中に戻つていく。それを見た俺と香取も苦笑しながら鎮守府の中へ戻つていった。

第九章

第43話

この日、俺はこれまでにない程の衝撃を受ける事となった。その理由は、提督の言葉によるものだ。

その日、俺を含む鎮守府内全ての艦娘が会議室に呼ばれていた。これまでもそういった事はあったが、そういうときが大抵何かしらの大きな出来事が起きるときであり、艦娘達も緊張していた。

「皆、今日は重大な報告がある」

会議室のスクリーンを背にして提督が全員を見やる。

「この鎮守府に……大和が配備される事となった」

この言葉に艦娘達は大きくざわめく。ある者は信じられないような表情を浮かべ、ある者は周りに居る者達と話し出す。かく言う俺もその衝撃に目を見開いていた。

大和。大日本帝国における最大級の戦艦。この日本の名を背負う者。この名前は大日本帝国時代の出身である俺達にとってあまりに特別なものであった。

「皆静かに！ 気持ちにはわかるが話はまだ終わっていない！」

提督の言葉に艦娘達は次第に冷静を取り戻していく。そして会議室が静かになったのを確認して、提督が話を再開した。

「簡単な話だ。例えば大和と言えども訓練を積まなければ十全の力を発揮はできないということだ」

まあ、確かにその通りだ。おまけに大和は第二次大戦時には大した戦果を上げる事もなくアメリカ軍に撃沈されている。実戦経験も豊富とは言えない。

「我が鎮守府は当面の間、大和の訓練を無事に終了させ、彼女を前線の鎮守府に配属させる事を目的として動く。皆には不自由をかける部分もあるだろうが、どうか協力してほしい」

提督の言葉に艦娘達は了解の返答を返していく。そして当然俺も同じ返事を返した。

提督の説明より数日後、大和が護衛の艦娘達と共にこの鎮守府に到着した。その出迎えには全ての艦娘が集まり、俺も一番端で大和を迎えた。

港に到着した大和の姿は近くで見るとは叶わなかったが、遠くからでもその立ち居振る舞いから溢れる気品を感じる。あれがこの国の名を冠する戦艦か……。

その時ふと、大和がこちらを向いた……いや、正確には俺の居る方向であつて、俺ではないな、あれは。そして、その顔に笑みを浮かべる。そして俺の視界の端で、俺の隣で敬礼をしていたまるゆの顔が笑顔になっていた。なんだ、この二人は面識があるのか？

そう思っている内に大和は提督に連れられて鎮守府の中に入つていった。後は提督や榛名の仕事だ。

出迎えが終わり、艦娘達が解散した後、俺とまるゆと不知火は家に戻つてヲ級の監視の任務についた……まあ、正直ほぼ形骸化してゐるような気はするんだが。今も拘束具を付けていたとはいへ、布団で寝ているヲ級の姿を見ていると脱走とかを起こすとはとても思えない。

「……才帰り……」

俺達が戻つた音で目を覚ましたヲ級が布団から体を起こす。それを見たまるゆがヲ級の拘束具を外しヲ級を起こすと布団を片付ける。

「そう言えばまるゆ、大和殿がお前のほうを見て笑つたように見えたんだが、大和殿とは面識があるのか？」

俺がそう聞くと、布団を押し入れに押し込んでたまるゆが照れくさそうに笑った。

「はい、大和さんが沖繩に向かうときに一度だけお会いしたことがあるんです。覚えてくださってるとは思いませんでしたけど」

「あれ、それじゃあまるゆさんはあの陸軍所属なのに海軍員になったという艦長が乗っていたというまるゆさんなんですか？」

不知火の言葉にまるゆが苦笑いする。

「あ、いえ、私は四十程建造されたまるゆの全員の記憶があるんです。だから、不知火さんの問いにはそうでもあつて、そうではないって感じですね」

「……なるほど、そうだったんですか……、それじゃあ、チヌさんもそうなんですか？」
その問いに俺は首を横に振る。

「いや、俺は俺自身以外のチヌの記憶はないな」

そう、俺には他のチヌの記憶はない。同じ陸の出身であるまるゆもそうなのかと思っていたが違うそうだし、やはり俺は異質なんだろうな。

そんなことを思っていると、不意に家の扉がノックされた。

「どなたでしょうか？」

不知火が声をかけると、扉が開かれるとなんと大和の姿がそこにあつた。

「初めまして皆さん、本日よりの鎮守府に配属された大和です。宜しく願います」

そうやって大和は頭を下げる。それを見た俺達もつられて頭を下げる。そして顔を上げると、先に顔を上げていた大和がまるゆに向けて歩き出した。

「まるゆさん、お久しぶりです。ご無沙汰をしております」

まるゆの傍まできた大和が再び頭を下げる。それに対してまるゆは困惑と驚きの表情を浮かべた。

「は、はい。こちらこそご無沙汰しています。……覚えていてくださったんですね」

「もちろんです、あの日、沖繩に向かう私の為に礼をしてくださった事、忘れて等いません」

そうやってほほ笑む大和の姿にまるゆも不知火も、そしてヲ級からも感嘆の息が漏れる。俺自身も漏れそうになったが実際に出る事はなかった。

「それにしても……深海棲艦を鹵獲したという話は聞いておりましたが、まさかこんな無防備な状態で置いているとは……」

そうやって大和はヲ級に厳しい視線を向ける。ああ、そうだよな、普通に考えたらこんな普通の一軒家に対して拘束器具もなく捕虜を置いとくなんてしないよな、本当に何を考えているんだろう、うちの提督と上層部は。

「私ハソコニ居ルチヌに鹵獲サレタ身、チヌノ意向ニ沿ハナイ行動ハシナイ」

大和の視線を真っ向から受け止めつつ、ヲ級は答える。その答えを聞いた大和は不意

に俺のほうに向いてきた。

「貴方の噂は聞いております。戦車でありながら艦娘と共に海に出て戦い、そして深海棲艦を鹵獲した唯一の存在と。こうしてお会いできて光栄です」

そう言つて頭を下げ、挨拶をする大和、まさか俺が大和と直接言葉を交わす事になるとはな……緊張しているのが自覚できる。

「初めまして大和殿、こちらこそ大日本帝国海軍の象徴、大和殿にお会いできるなどと、ましてこうして言葉を交わす事が出来るなどとは思いませんでした。こちらこそ光栄です」

そう言つて俺は頭を下げる。これが俺と大和殿との出会いとなった。

第44話

大和を迎えてから一か月が過ぎた。その間、敵からの大規模な襲撃があるというわけでもなく、比較的平和な日々が続いた。だが、大和を迎えることによる弊害は確実に鎮守府を蝕んでいた。

その日も俺は基礎訓練を終え、家で本を読んでいたのだが……。

「あー、暇やー。暇すぎるわー」

卓袱台の上に頭を置いた黒潮が退屈そうな表情でそんなことを言っている。

「確かに暇ですねー。訓練もあんまりできませんし、頻繁に外出もできませんしねー」

そんな黒潮に答えたのは青葉だ。前々から取材と称してここに来ることはけっこうあったが、最近はその頻度が上がっている。おかげで最近取材のネタもなくなつたようだが。

「……最近何カアツタ……?」

ヲ級がそんな二人を見て声をかけると、二人とも声を揃えて答えた。

「訓練の時間が大幅に減っているんです」「やー」

そう、大和が来てから、彼女の訓練に使用される資材によって鎮守府の備蓄が一気に

「圧倒されているのだ。遠征の頻度を増やしたりして対策はしているようだがそれでも追いつかない。その為他の艦娘の訓練に使用する資材が減らされているのだ。その為榛名を初めとした主戦力を除くメンバーは暇を持って余している。勿論俺も大和が来て以来同じ状態である。」

「あー、ヲ級さん。もつとこう何かインパクトのあるネタってないですか？ 深海棲艦への取材なんてこの鎮守府の特権みたいなものなのに、ネタがもう尽きるなんてもったいないです。なんでもいいから、教えてもらえませんか？」

「……ソウ言ワレテモ困ル……」

青葉が声をかけるがヲ級も困った顔をする。彼女から得られた情報の大半は軍事機密として処理されているため青葉が取材した大半のネタは公表できないらしい。まあ、それもそうだろうが。

「失礼します……黒潮、またここでだらけていたのですか」

そうやってとりとめもなく過ごしていると、扉がノックされて不知火が入ってきた。そしてだらけている黒潮を見て溜息をつく。

「仕方ないやん、やることないんやもん。不知火かて本持つてるって事はここで読もうとしてたんやろ？ 自分の部屋で読めばええのに」

確かに不知火の手には数冊の本がある。ここに居るよりは自室のほうが集中はでき

そうなもんだが……。

「それもあります……チヌさん、提督が呼びです。司令室まで来てほしいとの事です」

「そうか。伝えてもらってすまないな」

不知火に礼を言つて俺は家を出る。しかし、この状況で俺に一体何の用事があるというのだろうか？

第45話

疑問に思いつつ俺は提督室の中に入った。中ではいつもの如く提督が椅子に座り、俺に視線を向ける。

「呼び出してすまない。少々、頼みたいことがある」

「なんででしょうか？」

「……今この鎮守府の資材がかなり少なくなっているというのは、重々承知していると思う。上層部とも掛け合ってはいるが、他の鎮守府の作戦のほうに優先的に回されていて、こちらに回ってきていないのが現状だ」

ああ、他の鎮守府で何かしらの作戦が行われているのか。大和を回した以上、上層部からも資材を優先して回して貰っている可能性はあったが、それもなかったのか。

「それで……だ。他の鎮守府にも掛け合ったが、碌に回してもらえなくてな……。かと言つて大和の訓練が終わるまでこのままでは艦娘の練度や士気を維持するのも難しい。それが今の鎮守府の現状だ」

まあ、うちにいる黒潮たちを見てたらそうとしか思えないな。問題はそれをどうするかだが……。

「提督、それで、何か方策はあるのでしょうか？」

俺の問いに提督は少し溜息をついた。

「あまり使いたくはないのだが……。ち又、君には竹下一等陸佐の元に行き、彼の所で管理されている資料をこちらに回してもらうように打診してほしいのだ」

「……なんですつて？ それは流石に……」

提督の言葉に俺は言葉を詰まらせる。その言葉はあまりに予想外だし、そして正直非現実的だ。

「ああ、言いたいことはよくわかる。今の陸と海とでは流石に……。だが、他に当てがないのも事実なんだ。頼む、今この鎮守府で陸と繋がりがあるのは君とまるゆだけであり、まるゆにこういうことを頼むのは酷な事だと思う」

まあ、まるゆにはなあ……。実年齢はさておき、精神年齢がなあ。

「……わかりました。微力は尽くします……。が、当てにはしないでください」

ともかく上からの命令であり、この鎮守府の為でもあることから、俺は命令を受諾した……。正直うまくいくとは思ってはいないのだが。

その日のうちに俺は竹下一等陸佐と連絡を取り、数日後にアポをとる事ができた。そしてアポの当日、俺は初めて竹下一等陸佐と会ったあの部屋で再び彼と対峙した。

「久しぶりだねチヌ。君やまるゆの活躍は耳にしている。特に深海棲艦を鹵獲したという知らせは大きかったよ。おかげで我々陸も少しは海に対して胸を張れるようになった」

「ハッ。お言葉有難うございます。これもあの鎮守府への派遣を決定された竹下一等陸佐のおかげでございます」

このやり取りを皮切りに、俺と竹下一等陸佐は多少の世間話をする。そして頃合いを見て竹下一等陸佐が話を切り出した。

「さて、まさか私に褒めてもらうために今日来たわけでもあるまい。電話では私に願いたい事があるとの事であったが、内容を聞かせてもらえるかな」

「ハッ。実は……」

俺が現状を説明し、資材を鎮守府に回してもらえないかを打診すると、竹下一等陸佐は非常に渋い表情を浮かべて俺を見てきた。

「なるほどな……確かに、艦娘の練度や士気を維持できないのは問題だし、功績を考えれば君の願いを無下にしたいとは思わん」

「それでは」

「だが、知つてのとおり、今現在我々陸に回される予算や人材はとても限られている、勿論資材もだ。深海棲艦が跋扈する世の中だ、それもまた仕方がない。だが、これ以上そ

の資材が減るとなればもはや現状の活動すら更に縮小せねばならん。そうなれば国内における他国のスパイや深海棲艦を心棒するカルト共の検挙も満足に行えなくなる。陸の治安を預かる者の一人としてそのような状況を良しとはできないのだ」

竹下一等陸佐の言葉に俺は心の中で溜息をつく。当然だ、バイオ燃料や核のおかげでなんとかエネルギー確保はできているが、それでもかかつての化石燃料を海経由で大量に輸入できていたころとは違う。国内で使えるエネルギー資源は限られており、その中で艦娘を初めとした海関係に多くを費やしそれ以外を削るのは極当然の事だ。そこから更に融通してくれと言っただけはいささかとできれば苦労はしない。

「……だが、それでも融通するとなれば、一つ方法がある」

「!? なんでしょうか、それは」

竹下一等陸佐の言葉に俺は自然と体が前のめりになる。

「実は近々、ある国のスパイ共が深海棲艦を信仰するカルト共を扇動する集会を開くという情報を入手した。大方、この国を内部から崩壊させ、その混乱に乗じて艦娘を奪おうとでもしているのだろう。まったくばかげた話ではあるが、ちょうどいい機会でもある。そいつらを検挙できれば、長い間とは言えないがしばらくの間そちらの鎮守府に多少の資材を融通する余裕はできるだろう」

「そこで、君には奴らを検挙するための作戦に参加してほしい。君が手柄を立てれば他

の連中を説得する材料にもなるだろう……どうだ、受けるかね？」

竹下一等陸佐の提案に、俺は拒否をする理由はまったくなかった。

「私がお力になれるのであれば、全力を持って参加させて頂きます」

そう言つて俺は竹下一等陸佐に敬礼する。それを見た一等陸佐も同じように敬礼してくださつた。

第46話

竹下一等陸佐との会談を終え、鎮守府に戻った俺はすぐに提督に事の次第を報告し、陸の作戦に参加する許可を得た。不知火や黒潮たちにも事情を説明し、仕事の引継ぎを終えた俺は竹下一等陸佐の元を再び訪れた。

そして検挙の予定の日までの間、俺は今の陸軍における訓練を受ける事となった。戦車である俺にとっては人間向けの訓練の大半は水準を遥かに上回る数値を出す事ではきたが、チーム訓練ではやはり足を引っ張るところが多く、結局訓練のほとんどをそこで費やす事となった。

そして訓練を終えてから三日後、俺は部隊の者達と共に装甲車に乗って現場に向かう事となった。メンバーと共に装甲車に乗りこんだ俺は、揺れる車内で奇妙な感覚に陥っていた。

（戦車である俺が装甲車に乗って、人間のチームメンバーと共に外国のスパイの検挙……海軍に所属する事になったのも奇妙な事だが、今のこの状況も、考えてみればおかしなことだ……）

「どうかしたのか？」

不意にメンバーの一人が俺に声をかけてきた。いかん、気が集中できてないな。「いや、なんでもない」

俺が短く返事すると、声をかけたメンバーが肩をすくめた。

「ま、あんたの普段の戦場とは勝手が違うだろうが、あんたの本分はこっちだろ、頼むからへまはしてくれなよ」

「ああ、わかっている」

まあ、本分とはいえ、今回が初実戦ではあるんだが、そうも言っではいられない。俺のミスが結果としてどう悪い方向に転ぶかもわからないんだ、気を引き締めなければな。

そうこうしている内に、車が止まった。どうやら目的地に到着したようだ。

「目的地に到着した。これより作戦行動を開始する」

その言葉に俺達は即座に車を降りる。降りた俺達の視界に入ったのはうっそうとした木々、そして目の前にある古い建物であった。元々は研究所として使われていたらしく、4階建ての地上部分に、地下も3階まであるらしいという事はブリーフィングで聞いていたが。

「行くぞ、チヌ」

メンバーの一人に声をかけられ、俺はメンバーに混じって建物に近づく。そしてメン

バーが手際よく入り口を指向性の爆薬で爆破し、突入するのについていく。その途中で見張りと思しき人物を幾度か発見したが、そのたびに手際よく処理されていく。

「情報では地下3階で集会をしてみたいだからな。こんなザコに構つてる時間はないぜ」

メンバーの一人が倒れ伏す見張りを横にどけながら言う。まあ、それもそうだろう。こんな木端を相手にしている暇はない。そういうわけで、俺もメンバーと共に足を進め、目的地に到着した。

「さて、ここが集会をやつてる広間だ。手筈通り、一気に突入して連中を取り押さえるぞ……何を準備しているかわからないからな」

先頭の言葉に全員が頷く。そう、今回俺が参加する事になった大きな理由の一つがこれだ。外国のスパイである連中はともすれば重火器や生物兵器すら持ち込んでいるのだという。事実、それらの情報に乏しかったころは幾人もの殉職者を生んだらしい。

「3……………2……………1……………GO！」

隊長の合図と共に、俺達は扉を突き破り中に突入する。中には高台の上でマイクをもつ白人たちと、それを見ている観客たち数十人が、驚きの視線でこちらを見ていた。

「動くな！ 陸軍の命令により、お前たちを拘束する！ 投降するものは床に寝て頭を手を乗せろ！ それ以外の者は銃殺とする！」

その言葉に観客たちが慌てて地面に伏せる。だが、一部の観客と、高台の白人たちは懐から拳銃やサブマシンガンを取り出して、こちらに狙いをつけてきた。

「撃て！」

短い命令の後、連中よりも先に俺達は銃を撃つ。だが、観客たちならともかく、距離が遠い白人たちのほうへは流石にうまく命中させる事ができない。そうしている内に白人たちも俺達に応射しながら後ろに下がっていく。

「チヌー！」

「了解！」

メンバーの呼びかけに答え、俺が先頭を走る。たまに白人たちの弾丸が当たるが、戦車である俺には当然そんな豆鉄砲など効果はない。

「逃がすか！」

先頭を走りつつ、銃撃を加える俺の後ろから、更に数人のメンバーが銃撃を続ける。それによって白人の内何人かが倒れたが、生き残りは後ろのドアから奥へ逃げ込む。

「追うぞ！」

メンバーの言葉に頷き、俺が先頭でドアを開ける。そして、驚きに目を見開いた。

「！ 下がれ！」

ドアを開けた俺の目の前に飛んできたのは、白人が投げた手りゆう弾であった。咄嗟にメンバーに怒鳴ると、俺は扉を閉める。その途端、轟音と共に手りゆう弾が破裂し、扉を破壊し、扉の残骸と手りゆう弾の破片が俺に襲い掛かる。が、俺はその中を突き進んだ。元々の俺であればキヤタピラに損傷したりしてたかもしれないが、明石の元で何回も改良を加えられている今の俺にはこの程度の爆発ではダメージは受けない。そこに、慢心があつたと気づいたのは数時間後だが……。

「……しまー」

爆風を突破した俺の目の前に次に飛んできたのは、数発のロケットランチャーの弾頭であつた。まさか、こんなものまで用意しているとは……。

頭で考えるよりも早く、俺は回避……はしなかった。両腕を広げ、ロケットランチャーの弾を全てもろに食らう。そして、流星にそれには耐えられず、俺は意識を失った。

第47話

「う…………ぐ…………」

俺が目を覚ますと、そこは見覚えのある車内であった。俺の声に気づいたのか、メンバー達が俺に視線を向ける。

「おい、大丈夫か？」

「ああ、なんとかな…………ぐ…………」

返答はしたが、痛みに顔が歪むのを感じる。体を改めてみると、両腕は簡易ギプスで覆われ、上半身も下半身も至るところに包帯が巻かれている。

「おとなしくしてろよ。重症なんだから、病院につくまで安静にしてろ」

「ああ、そうさせてもらう……………作戦はどうなったんだ？」

「作戦なら成功だ。首謀者及び他の構成員の確保、および相手方の書類の確保にも成功した。これで今後もやりやすくなる……………お前が先陣切ってくれてなければこずっていただろうな。感謝する」

そう告げるメンバーに、俺は充実感を感じずにはいられなかった。これまで鎮守府でやってきた作戦ではお荷物になってばかりだったからな……………。

そして作戦成功から数日後、俺は鎮守府に戻ってきていた。怪我は録に治ってはいないが、どうせ入渠すれば一日もせずに治るのだからと、無理を言って戻して貰ったのだ。そして、入渠によつて傷を治した俺は提督室へ足を運んでいた。

「チヌ。今回の君の活躍のおかげで陸軍から多少ながら資材を融通してもらえるようになった。感謝している」

「いえ、これもひとえに作戦を立案した陸軍本部と、私と一緒に作戦を実行したメンバーのおかげです」

俺がそう言うと、提督がなにやら苦笑いた。

「チヌ、毎回思うが、君は謙遜がすぎる。もつと胸を張ってくれ。少なくとも今回、鎮守府に資材が回るようになったのは君の存在なしではありえなかったのだからな」

「……そう……ですか」

謙遜も何も事実を言ってるだけなのだがなあ。陸軍から見たら今の俺は単に頑丈なだけで、チーム行動に期待もできないはずだし。

「さて、今回の件で陸軍から回された資材のおかげで……まあ、なんとか艦娘達の訓練も再開できそうだな。それでも大和が来る前の基準には及ばないが……練度の維持は十分できると思う。だが、申し訳ないがチヌの分までは……な」

「いえ、当然の事です。大和殿が他の鎮守府に異動するまでの間、私はこれまで通りの訓

練と任務をこなしたいと思います」

申し訳なきように述べる提督に俺は当然と答えた。俺が優先されるなんてあつてはならないからな。

「……すまないな、チヌ……。さて、話はここまでだ、下がっていいぞ」

「ハッ、失礼します」

提督の言葉に頷くと、俺は提督室を後にした。そして、取りあえず家に戻ろうと廊下を歩いていると。

「チヌさん」

不意に呼び止められ声のした方向を向くと、そこには大和殿の姿があつた。

「大和殿、どうかされましたか？」

俺の問いに大和殿は申し訳なきような表情を浮かべると、突然大きく頭を下げた。

「このたびは申し訳ありませんでした！」

「や、大和殿？ どうされたのですか？」

突然頭を下げられ、俺は困惑する。なんだ、あの大和殿に頭を下げられるなど、一体何があつたんだ？

「提督からお聞きしました。今回私のために鎮守府の資材が少なくなり、それを解消するためチヌさんが手を回してくださいと……本当に申し訳ありません」

……いや、そんな事で頭を下げられても困るんだが。ともかく、誰かに見られたらいらぬ誤解を招きかねない。

「大和殿、頭を上げてください。私はこの鎮守府の為となる事をしただけ。大和殿に頭を下げて頂くような事はしておりません。そもそも、貴女の練度を上げる事が最優先なのですから、当然の事をしたままでなのです」

俺がそう言うのと、やつと大和殿が顔を上げて……おい待ってくれ、なんか涙目になつてないか？

「……いつもそうです。皆さん、私の為にと言つて色々としてくださつて……それなのに私は何も返せていない。そもそも、私が建造されなければ他の船や、戦車等を作ることもできたはずなのに……」

「かつて、陸軍の方からホテルのようだと揶揄された時も、自分の不甲斐なさが情けなく思つたのに、今回もチヌさんにご迷惑をおかけして……」

ダメだ、何か変なスイッチでも入つたのか、完全にネガティブな状態になつてる。まあ、確かに彼女が建造されなければ、他に空母や重巡とかを複数作れたらうし、陸軍に回してくれてたら戦車を何両作れていたか……だが、そんなことを言えばますますネガティブになるよな……。

「大和殿」

取りあえず大和殿の両肩を掴み、大和殿に視線を合わせる。こういうときはともかく正面から言葉を重ねるしかない。と言うか、俺にはこれぐらいしか思いつかない。

「胸を張ってください。貴女は大日本帝国が建造した最大級の戦艦なのです。確かに先の大戦では貴女は活躍する事はできなかつた。しかし、今は、深海棲艦を相手とする今ならば、貴女は存分に力を発揮できる。ですから、どうか胸を張ってください。貴女が弱気になったら、後に続く者達まで不安になってしまいます。微力ながら、私が今後も貴女を支えられるよう努めますから、どうか」

取りあえずそれらしいことを言つて大和殿を励ましてみる。正直、こんな言葉で彼女の心に響くのか……。

「……そう……ですね。折角チヌさんに頑張っていたのに、弱気になつてはいけませんよね」

そう言つて大和殿が顔を上げ、俺を見てくる。どうやら効果があつたらしい。そう思っていると、不意に大和殿が俺の胸に頭を置いて来た。

「……すみません。なんだか嬉しくて……少し、こうさせてください」

「は、え、……は、はい……」

突然の大和殿の行動に俺は心から困惑した。なんだ、どうなっているんだこの状況は？ 何が起こっているんだ？

「……チ、チ又はん!? 大和はん!？」

「や、大和さん!? どうしたんですか!？」

俺が困惑している時、不意に後ろから声が聞こえた。振り向くと、そこには黒潮と榛名が驚きの表情でこつちを見ていた。それを見た俺はこれから起こることを考えて冷や汗を流す事しかできなかつた。

第48話

結局、あれから榛名と黒潮に色々説明することにはなつたが、妙な誤解を抱かれることもなく無事に説明することができた。そして、それから数日、大和殿の錬度も順調に上がっていき、訓練が再開された他の艦娘達の士気も再び上を向いてきた。

その間、俺は訓練と勉強、そして提督から言い渡される任務を黙々とこなしていた。今日も家で勉強をしつつヲ級の監視をしている。まあ、正直半分形骸化してる気はするのだがな。今日の手伝いは不知火と黒潮、まるゆだが、この三人も、最初の頃は警戒心を隠さなかったが、今ではすっかりヲ級への警戒心が消えていた。まあ、ヲ級が何一つ問題を起ささないのだから仕方ないことだが。

「チヌさん、失礼します」

不意に家の扉が開かれ、大和殿が中に入ってくる。それを見て不知火、黒潮が若干眉間に皺を寄せたのが見える。

「大和さん、何の御用でしょうか？」

「はい。間宮さんから羊羹を戴きまして。それで、チヌさんへお裾分けがてら、任務のお手伝いをさせて頂こうかと」

そう言う大和殿の手には確かに羊羹が入っているともしき箱が持たれている。任務と言うのはまあ、ヲ級の監視の事なんだろう、それ以外思いつかないし。

「大和さん、貴女はこの任務の担当ではなかったと思えますが」

不知火が大和殿に尋ねる。なんか声色が普段より固いのは気のせいだろうか？

「ええ、確かにそうなんです、チヌさんには資材の件でお世話になりましたし、この鎮守府に居る間だけでもお手伝いさせて頂ければと思ひまして」

そう言う、大和殿は台所に入り、手際よくお茶の用意を整えていく。そして五分ぐらいで羊羹と日本茶を人数分用意すると卓袱台に置いて行く。

「うわあ、大和さん手際が良いんですね」

その手際の良さにまるゆが感嘆の声を上げて大和殿を見た。

「はい。ここの見えても陸軍の方からホテルのようだ。と表された事もあるんですよ。当時は皮肉で言われていましたので悲しかったですが、こうして皆さんのお世話ができるのですから、呼ばれてよかったのかもしれない」

いや、戦艦としてはそれはどうなのかと思うのだが……まるゆが目を輝かせて大和殿を見てるから言い出せない。

「……チヌハ子供ニ好カレテルト思ッテイタケド、大人ニモ好カレテル」

「ヲ級、誤解を招く言い方はやめろ」

突然のヲ級の言葉に俺はツツコミを入れる。

「そうやヲ級、誰が子供やねん」

「ヲ級、その言い方は心外です」

不知火。黒潮、怒る部分はそのじやないと思うんだが……。まるで大和はそんなやり取りを笑顔で見ているし……。

(……どうやったらこんな状況になるんだ?)

目の前で広げられる彼女達のやり取りを見つつ、俺は内心深いため息をつくのだった。

第十章

第49話

暗い、暗い、薄ぼんやりとしかあたりを見渡せない闇の中、俺は走っていた。

「待つてくれ！ 行かないでくれ！」

俺の視線の先、手を伸ばす先には陸軍。俺の兄であるチハヤチへ、弟であるチトに、親戚である他の車両達。そして……大日本帝国陸軍の兵士たち。

俺は懸命に走る。彼らに置いて行かれたくなんてない、俺も加えてくれと、全力で叫び追いかける。だが追いつけない。それどころか段々離されている。

愚か者が。

その言葉が聞こえたとき、俺は足を止めた。憎悪と呪詛に満ちたその声は、彼らから発せられているのだから。

先の大戦で、我ら陸軍の多くは戦場に散り、生き残った者も何かしらの形で国に貢献した。貴様は大戦で何もできなかつたくせに、今になって活躍できていると浮かれる愚か者よ。

「違う！ 俺は兵器だ！ 国家安寧のため、国民のため、戦うこの心にそんな考えなんて

ない！」

嘘をつくな。貴様の心には欲が浮かんでいる。海軍の下で改良され、無念の内に散っていった我らを忘れながら、活躍する自分に酔いしれる心がな。

「違う違う違う！ 俺は、俺にはそんな心はない！」

必死の叫び。だが、陸軍は恨みと呪詛の言葉を残しながら俺を置いて行ってしまった。俺は……動けなかった。

調子に乗った愚か者が。

次に聞こえてきたのは聞き覚えのある声であった。辺りを見渡すと、そこには提督、不知火、黒潮、明石、香取、響……他にも鎮守府で会ったことのあるメンバー。それに竹下一等陸佐や、先日の陸軍の作戦で一緒に参加したメンバーが、俺を見下ろしあざけ笑っている。

戦車のくせに私たちと同じになったつもりだなんて、滑稽なものね。

先の作戦に参加した程度でいい気になっているな。あの程度の功績などたかがしれているというのに。

お前を私の鎮守府に配属させたのは間違いだつたな。もはや溶かす価値すらない。

「あ……あ……」

皆の声が、俺の心に染み込んでいく。そうだ、俺は常に口にしていたじゃないか。自

分は役立たずだと、戦車が海に出るなどおかしいと。なのになぜだ、なぜ「他人から言われた同じ言葉に」こんなにも打ちのめされるのか。

「俺は……俺は……！」

涙に濡れる顔を上げ、俺は声を張り上げた。

「……又さん……チ又さん！」

「……！」

体を揺さぶられ、俺は目を覚ます。俺の視界に入ってきたのは見慣れた天井。そして、俺を心配そうに覗き込む不知火、ヲ級、香取の三人だった。

「チ又さん、大丈夫ですか!? 随分魘されていましたよ」

「……ああ、ちよつと嫌な夢を見たようだ……」

上半身を起こして頭を振って先ほどの光景を頭から剥がそうとするが、一向に離れる様子もなく、すぐに鮮明に内容を思い出してしまふ。そして、夢の中に居た不知火たちの表情が目の前の不知火達に被さりそうになるが頭を横に振って振り払う。あれは夢なのだ、目の前の不知火たちに被せるな、と心の中で言いながら。

「チ又さん、よつぽど嫌な夢を見たんですね……涙が出ていますよ」

そう言って、香取がハンカチで俺の涙を拭う。普段なら拒否するはずだが、今の俺にはその気力すらない。

「チヌ……凄イウナサレテイタ……大丈夫……？」

「ああ……なんとか……」

「チヌさん、本当に大丈夫なんですか？ 今日には不知火と響と一緒に出掛ける予定ですがどやめておきますか？」

「そうね、付き添いなら私がやるから、チヌさんには今日はお休みいただいたほうが……」

「いや、大丈夫だ。香取は今日は演習の予定があつたはずだろ。別に体調が悪いわけじゃないんだから、代わつてもらう必要はない」

「香取の提案を俺は断る。実際、夢見が悪かつただけで体調が悪いわけじゃないからな。」

「そう……ですか。でも、何かあつたらすぐに連絡を入れてくださいね。不知火さんも気を付けてね」

「もちろんです。何かあつたらすぐに帰りますから」

俺を置いて何やら深刻な雰囲気になつている二人。いや、本当に大丈夫だからな。

「……チヌ……無理シナイデネ？」

終いにはヲ級にまで心配されてしまった。念のため近くにあつた誰かが持ち込んだ鏡を見てもそんなに酷い顔をしているわけではないんだが、一体何がそんなに心配されているんだろうか？

第50話

不知火と響の二人とともに街中を歩き、彼女たちの買い物や食事に付き合う。だが、その間も俺の頭の中には今朝に見た夢の内容が残っていた。

(陸軍に見捨てられ、海軍からは必要とされず……か)

それはまさに俺にとって悪夢である。かつて置いて行かれた時と同じ……いや、それ以上となるだろう。

(……恐れているのか、口では色々言っておきながら、結局俺は見捨てられる事に怯えている……その恐怖が夢に出たのか。だが、最近の俺は鎮守府でも少しは役に立てるはずだし、先の陸軍での作戦でも役に立てたはずだ……そのはずだ)

そう考えようとするが、あの夢の内容がそれを否定する。なんで今あんな夢を見たのかはわからない。だが、そうだ。俺はいつあんなつてもおかしくはないんだ。俺は戦車。海上では艦娘程の実力もなく、陸では先の大戦で使われる事がなかった遺物であり、今の陸軍の作戦行動にもついていけないかどうかすらわからないような存在。

そして、そんな俺の活躍なんて、今国のために戦っている者達、先の大戦で散った者達、国家復興のために働いた者達の功績に比べれば塵芥に過ぎない。そうだ、俺は

所詮その程度の存在なんだ。

……なんて身勝手な気持ちなんだろうか。先の大戦で置いていかれた俺がこうやって戦えるだけでありがたいというのに、使えない兵器は捨てられて当然なのに、捨てられることに怯えるなんて……いつから俺はこんな弱い気持ちを抱いてしまうようになったのだろうか、こんな弱くなってしまったのだろうか。

(俺は弱い、俺は役に立たない、俺に存在価値はない、俺に生きる価値は……)

思考が同じところを回り続ける。俺自身を否定し、俺自身を拒否し、俺自身が……「チヌ、チヌ。私の話を聞いているかい？」

不意に声をかけられ慌てて視線を動かすと、そこには不機嫌そうな顔をしている響の姿があった。

「さっきからずっと声をかけてるのに返事もしないなんて。人としてどうかと思う」

「悪い響、ちよつと考え事をしてた。それで、何の用なんだ？」

「この先のお店でちよつと買い物をしたいからついてきてほしいんだ。不知火も良いって言ってくれてる」

「そう言うわけです。行きますよチヌさん」

そう言つて不知火は歩き出し、それを響が追いかけ、更に俺がそれを追いかける。いかな、今朝の夢の事をいつまでも引き摺っていても仕方ないっていうのに。

「そ、その人！」

不意に後ろから声が聞こえ、俺が振り向くと、そこには老年の男性が立っていた。髪は白くなっているが、しっかりとした足取りでこちらに歩いてきている。……なんだ？ 何か、見覚えが……。

「貴方は……もしかして、木村勝彦さんの親戚の方でしょうか？」

木村勝彦。その言葉に俺は目を見開く。俺の中にある戦車として作られた時の記憶、その中には俺に配属される予定であった小隊のメンバーの顔があった。そして……。

「貴方は……もしかして、藤村二等兵……!？」

そう、その記憶の中の顔の一つが、今俺の目の前に居る老人の顔立ちと重なった。

「どうしたんですかチヌさん？ お知り合いなのですか？」

「でも、木村って……チヌの知ってる人なのかい？」

俺の後ろから不知火達が声をかけてきた。それを聞いたのか、老人が少し落ち着いた様子になった。

「チヌ……。では、貴方は鎮守府に配属されたという……」

「ええ。三式中戦車チヌです。貴方は……藤村二等兵の……」

俺の言葉に藤村二等兵は頷いた。

「……はい、息子の藤村純一です。しかし、父の名前と階級を知っているという事は、貴

方は父が乗る予定であつた、あのチ又なのですね」

「ええ……今でも忘れはしません。貴方のお父上たちと初めてお会いした時の事は」

俺達がそう会話していると、不意に不知火が俺の袖を引っ張つてきた。

「チ又さん、なにやらお知り合いのようですし、ここはどこか落ち着ける場所でお話しませんか？ 私や響も聞いておきたいですし」

「そうだね。往来でいつまでも立ち止まっているのも迷惑だし、そうしないかい？」
二人に言われ、確かにその通りだと気づいた。

第51話

場所を移動した俺達は手近な所にあつた喫茶店に入った。幸い店内にはさして人はおらず、俺達は一番奥のテーブル席に座る。

「先ほどは興奮して申し訳ない。チヌ殿の噂は聞いたことはあつたから、まさかとは思っていたのだが……」

コーヒーを口にして藤村さんは息を吐いた。

「私もまさか藤村さんの息子さんにお会いできるとは思いませんでした……。他の方は……？」

その言葉に藤村さんは首を横に振った。……そうだよな、もうあれから相当な時間が経つた。もうあの頃の繋がりがりなんてなくなっているだろう。

「えつと、それでチヌ。この人はチヌの関係者なのかい？」

響の言葉に俺は我に返る。

「ああ。彼は俺に乗るはずだった戦車小隊において装填手を務めるはずだった藤村正二等兵の息子さんだ……。まさかこんな形でお会いすることになるとは思わなかつたが」

「そうなのですか……。初めまして。陽炎型駆逐艦2番艦不知火です。チヌさんには鎮

守府でいつもお世話になっています」

「同じく暁型駆逐艦2番艦響です」

俺が藤村さんを紹介すると、二人が礼儀正しく挨拶する。この辺は流石と言うべきか。

「初めまして、藤村純一です。このような場所で艦娘のお二人にお会いできるとは思っておりませんでした。お会いできて光栄です」

藤村さんも礼儀正しく挨拶する。

「藤村さんは今は何をされているのですか？」

俺が聞くと、藤村さんは深く息を吐いた。

「私は父の跡を継いで、ある神社の神主を務めています。そろそろ息子に譲って残りの余生を過ごすつもりでしたが……長生きはするものですね、まさか父が搭乗するはずだったチヌ殿に会えるとはな」

「私입니다。まさかこうして出会えるとは……」

そこまで言つて、俺は言葉に詰まった。ああ、まさか本当に彼らの血縁に出会えるなんて……。

「チヌ、君に乗るはずだった方々はどんな方だったんだい？」

「……ああ。皆、気のいい、愛国心に溢れる人たちだった。その中でも藤村二等兵は縁の

下の力持ちという感じだったかな。木村准尉とよく一緒に行動して、彼のサポートのために走り回っていたイメージが強いが」

俺の記憶の中にある彼らの事を思い浮かべる。俺が完成した後、毎日俺の元に来ては色々な事を話していたっけかな……。

「はい、父はまさにそういう人でした。自分より他人の為に動くのが性にあっていると
言っております」

ああ、やつぱりプライベートでも彼はそういう人だったのだな。

「……ところでチヌ殿。貴方はなぜ、木村准尉の姿なのでしょうか？」

不意に、藤村さんが俺の顔を見ながら聞いてきた。まあ、当然の質問だが。

「……恐らくは、彼の想いが最も強かったのでしょう。終戦を聞いた彼は私の元に来て泣いていました。これから護国の為に戦えるのに、先に行った仲間たちと共に戦えるはずだったのに、なんで自分は行けなかったのだ……と」

「そして、後から来た藤村二等兵に慰められつつ私の前から去っていきました。……あの二人の後ろ姿を、私は忘れる事はないでしょう」

「そう……でしたか……木村准尉と私の父は幼馴染でして、家族のいない彼は私のことを自分の息子のように可愛がってくれました……だからこそ、貴方の姿を見たときは驚きましたよ」

藤村さんの言葉に、俺の記憶の中の木村准尉の姿が次々思い浮かぶ……。いかん、不知火と響がいるのにしんみりとするわけにはいかん。

「ところで藤村さんは先ほど神社の神主をされていると仰っていました、どこの神社なのでしょうか？」

不知火の質問に藤村さんも気を取り直したのか改めて姿勢を正した。

「ああ、愛知県にある御上神社という所です。元は滋賀県にある御上神社の分社です。もし機会があれば訪ねていただければ歓迎いたします」

「はい、その折には是非とも」

御上神社か……。今は行くことはできないが、いずれ必ず訪れよう。そう、俺は心に決めると、改めて藤村さんと言葉を交わした。

1時間ほどして、互いのことを話し終えると俺たちと藤村さんはここで分かれる事にした。

「今日はとても良い一日でした、藤村さん」

「私もですチ又殿。まさかちよつとした旅行で来ているだけのこの土地で貴方にお会いできるとは思わなかった。貴方が神社に来られるのを楽しみにお待ちしております」

それでは。と言い残し藤村さんは俺たちと別れた。本当に、まさかこんなところであの人の血縁と出会うなんて、な……。

「さて……悪かったな二人とも。退屈な思いをさせてしまった」

思いにふけるのも程々に、俺は不知火と響に向き直る。

「いや、中々見られないものをみれたし、チヌの事を色々知ることができたんだ。別に構わないよ」

「私も同じ意見です。チヌさんはあまり自分のことは語りませんから」

「……そりゃ、俺の身の上話を聞いたところで何もないからな。作られた後はただただ置いて行かれていただけなんだ……。話せることなんかにもない」

そうだ、俺にはないんだ。さっきの藤村さんと話した思い出以外には何も……。何一つ、誰かに話せるようなものはない。そんな俺が、少しでも役に立っているなどと考えてしまうのは、思えば上がりかもしれない。だけど、それでも、俺はあの人たちの想いに答えなければならぬ。きつとそれが俺という存在が生まれたことによつてできた責務だ。

「それより、確か面白い物に行く店があるんだつたな。急がないと時間がきついな……」

心の考えを無理やり隅に置き、俺はあえて平静さを見せつつ話を交える。

「いや、もう時間もキツイし、私は次の機会にするよ。不知火はどうだい？」

「私も問題はありません。今日はこのまま帰りましようか」

「そうか、すまなかつたな。次の時にこの埋め合わせはする」

二人の言葉に頷き、俺たちは鎮守府に帰るために歩き出す。

(……役立たずな俺だが……でも……今日だけはこの喜びに浸らせてほしい。置いて行かれた俺の、数少ない、あの大战での良き思い出に繋がるのだから)

二人と一緒に歩きながら、俺はそう思いながら空を見上げた。青い空に一瞬、俺に乗るはずだった彼らの顔が映った気がした。

第十一章

第52話

先日、やつと大和殿が他の鎮守府へ異動し、鎮守府の資材不足も解消された。それに伴って俺も訓練を再開できたし、当分はこのまま以前の日常を送ることができるとも思えない。

その思いはあっさりとは否定されることとなった。

「……別の鎮守府の提督。ですか？」

訓練の途中で提督室に呼び出された俺は提督の言葉に首を傾げた。

「そうだ。この近辺の深海棲艦の拠点を叩くという作戦が本部より採決されたが、うちの鎮守府の戦力では足りないから、他の鎮守府より応援が来るようになった」

まあ、この鎮守府の戦力は低いからなあ。それも当然の処置だろ。しかし、他の鎮守府の提督や艦娘か……うまくやっていけるだろうか？ まあ、多分ほぼ関わり合いになることはないだろうが。

「その提督を迎えるのに君も加わってほしい。君は特殊な立場だからな、ちゃんと説明をしておく必要がある」

「了解しました」

まあ、事情はわかったんだが、どうも提督の顔色は良くない。体調でも崩しているのだろうか？

俺がその理由を知ったのは、件の提督を迎えるときであった。

数日後、俺は提督、榛名、そして第一艦隊のメンバーと共に埠頭で待機していた。

「来たぞ」

不意に提督がそう言ったので、視線を沖合に向ける。すると、こちらに向かつて来る一隻のクルーザー。そしてそれを囲む形で並走している艦娘達の姿も見えた。

しばらくして、クルーザーが栈橋に到着すると、中から提督服に身を包んだ女性が降りてきた。背中の半分ぐらいまで届くロングヘアに170はあるであろう身長。それに凛々しい顔立ちをしている。痩せているという印象もないし、うちの提督より腕が立ちそうだ。

そして、その後ろに護衛していた艦娘達が整列する。一人は榛名と同じような服装をしているから、姉妹艦なのかもしれないが……それより気になるのが別にいる。

(あれは……陸軍の服装か?)

そう、その艦娘の服装は陸軍のそれだ。背中には排膿とかも背負ってる。だが、艦娘

が陸軍の恰好をする理由は……ん？　そう言えば、確かまるゆとは別に一人陸軍出身の艦娘がいたはずだ。

「今作戦の為にこちらに派遣された朝野だ。今作戦が成功に終わるように全力を尽くさせてもらう」

整列を終えた朝野提督の挨拶を始めたので、俺も意識をそちらに向ける。

「こちらこそ、宜しく頼む」

そう言つて、提督が朝野提督の前に行つて手を差し出し、朝野提督も手を出して互いに握手をして……。

「まあ、堅苦しいのはこの辺にしようか。久しぶりだな」

そう言つて朝野提督は提督を抱きしめた。

「グエえ……ギブ！　ギブ！」

あ、抱きしめられた提督が苦しさで身もだえしてる。なんだ、二人は知り合いなのか？

「飛鷹。あの二人は知り合いなのか？」

「ええ。なんでもお互いに明治から続く軍人の家系で、その頃から付き合いがあるらしいわ。だから、あの二人も幼馴染なのよ」

「なるほど」

それだけ親しい関係ならまあ、ああいう態度にもなるんだろう。

「えーと、それで、あんたがチヌってやつなの?」

提督を解放した朝野提督が俺に視線を向けてきた。

「ハッ。三式中戦車チヌです」

俺が敬礼すると、朝野提督はジロジロと俺を見てくる。

「ふーん、あんたが敵を捕虜にしたねえ。まあ、いいわ。うちにも陸軍出身がいるから、仲良くしてやってくれる?」

「陸軍出身……彼女の事でしょうか?」

俺が視線を向けると、陸軍の服を着ている艦娘が敬礼してきた。

「そうよ。あの子の名前はあきつ丸。あきつ丸、挨拶しなさい」

「ハッ。自分、あきつ丸と申します。チヌ殿のお噂は伺っております。敵を鹵獲したなど、これまで誰にもできなかった事を成し遂げるとは、同じ陸軍として誇りに思っております」

「三式中戦車チヌです。貴方の事は竹下一等陸佐から伺っております。同じ陸軍出身、宜しく願います」

俺も敬礼して挨拶し返す。これで、今この鎮守府にはまるゆを含めて三人の陸軍出身が集まったわけか。

「まあ、詳しい挨拶は後にしなさい。それで、私達はどこで寝泊まりすればいいかしら？」

「客室を用意している。まずは疲れをとってもらって、それから作戦会議を始めようか」
互いの提督の会話が進み、朝野提督は艦娘達を伴って鎮守府の中に入っていき、それを提督と榛名が案内していくのを見送った。

第53話

朝野提督が来た翌日、鎮守府内の全艦娘が会議室に召集された。普段は出撃する艦娘ぐらいしかこないためか、狭く感じるな。まあ、援軍の艦娘達も居るし当然か。

「諸君、今回の作戦について説明する」

スクリーンの前に立つ提督がそう言つて説明を始めた。スクリーンに映つてるのはこの鎮守府の比較的近海にあるいくつかの離島のような。作戦の内容はまあ、この離島に臨時拠点を築き、そこを拠点として敵の殲滅を行う。というものだ。

「作戦内容は以上だ。また、今回の作戦では朝野提督の艦隊も参加してもらう。皆、頼むぞ」

「朝野だ。これまで顔を合わせた者も多いし固い挨拶は抜きにさせてもらう。皆、私の艦隊共々よろしく頼む」

そう言つて朝野提督が敬礼すると、艦娘達も敬礼する。こういうのを見てみると、普段は緩くてもやはり軍隊なのだと思ひできる。普段本当に緩いんだよなあ。

まあ、そういった作戦会議も終わり、俺達は作戦に取り掛かった。と言つても流石に今回は俺が直接する機会はなく、鎮守府で明石の手伝いをしつつ、防衛組と一緒に鎮守

府を防衛するという形になった。鎮守府防衛に回ったのは黒潮、明石、川内、香取、そして、朝野提督の連れてきたあきつ丸と金剛だ。戦艦である金剛を防衛組に回すというのは戦力的に惜しい気がするが、まあ提督たちには何か考えがあるんだろう。

作戦会議が終わった後、鎮守府は一気に動きを見せた。普段遠征に行っている艦娘達も編入して目的地の敵を撃退するために艦隊を編成して出撃し、同時に資材を背負った艦隊が目的地付近の離島に簡易の補給基地を設置していく。

その間、俺が何をしていたかといえば、普段とさしたる変わりはない。まあ、これだけの規模の作戦に俺を投入したところで役には立たないんだから当然だ。そういうわけで、俺は今日は明石と共に工廠で作業をしていた。

「妖精さん、次の補充用の資材は向こうに置いていくといたさーい。チヌさんは向こうに装備持つて行ってください」

明石の指示の元、俺は妖精達に混じって作業を進める。そろそろ、専門的な資格でも習得しようかな。そんなことを考えていると、工廠に誰かが入ってきた。

「すみません、チヌ殿はここにおられますか？」

声のした方を向くと、そこにはあきつ丸の姿があった。

「これはあきつ丸殿。どうかされたのですか？」

俺が近づくと、あきつ丸殿が少し表情を崩した。

「チ又殿、今お時間は宜しいでしょうか？ 同じ陸軍同士、少しお話したいと思ったのですが」

交流を深めたいという事か。

「明石、少し離れても大丈夫か？」

「あ、大丈夫ですよ。今日の予定ならば私と妖精さん達でこなせるんで、ゆつくりしてきてください」

明石の言葉に妖精達も頷いて、俺に手を振ってくる。多分お疲れ様的な意味なんだろう。こうして、俺はあきつ丸と共に工廠を後にした。

第54話

工廠を後にした俺達は、取りあえず間宮食堂に足を向けた。寮の休憩室では入渠から出た艦娘達が集まっているだろうし、俺の家にはヲ級が居るからあきつ丸殿のほうが気にするだろうからな。

間宮食堂に到着した俺達は取りあえず団子と緑茶を注文した。どちらもすぐに出てきたので、取りあえず茶を一口する。

「チ又殿とは一度、こうしてお話したいと思っております。数少ない陸軍の仲間でありまして、武勲についてもお話を伺っております」

「武勲などと……、私がやった事等大した事はありません。深海棲艦を轟沈させた事も、艦娘の攻撃によって傷ついた相手に止めがさせただけなのですから」

俺がそう言うのと、あきつ丸殿は勢いよく首を横に振ってきた。

「何を言われるのでありますか。戦車でありながら艦娘に負けぬ活躍。陸軍としてとても誇らしいのであります」

うーん、どうも過大評価されてるな。

「そう言っていただけなのは嬉しいのですが深海棲艦の撃退に関してはあきつ丸殿のほ

うが戦績を上げられているのでは？」

「……残念ながら、自分は揚陸艦ですので、敵との戦闘能力はあまりないのであります」
確かに揚陸艦はあくまで陸に攻撃を仕掛けるために必要な船だから、海上戦は得意じゃないだろう。というかまあ……。

「もし、チヌ殿が艦載機のような状態になれるのなら、自分に乗船してもらって、砲撃の援護してもらいたいところであります」

まあ、それもかなり邪道な使い方なんですが。

「あいにく、それはできそうにもないですが。ここにおられる間はできうる限りの協力はさせて頂きます」

「はい、宜しくお願いするのであります」

その後は同じ陸軍同士の話である程度盛り上がっていたが、ふとあきつ丸殿が首を傾げて訪ねてきた。

「そう言えば、チヌ殿はどちらの戦場におられたのですか？ 自分は輸送任務を行っていましたが、チヌ殿達を運んだ記憶はないのであります」

その質問に、俺は少し言葉に詰まった。

「私……というより、チハ以降の戦車のほとんどは本土防衛用として本土に残されてきました。その為、実際に連合軍と戦った事はありません」

俺の言葉にあきつ丸殿のほうが少し声に詰まったようだ。

「そうなのでありますか……。それは、申し訳ないのであります」

「いえ、どうかお気になさらないでください」

そう言ったのだが、あきつ丸殿は少し気にしているようで、不意に大きく話題を変えてきた。

「そ、そう言えば、ここにドイツ艦が来たとき、チヌ殿は酷く中傷を受けた上に傷まで負つたと聞いております。かつての同盟国とはいえ、度が過ぎていたのであります」

……また無理やりな話の転換だが……まあいいか。

「あきつ丸殿、確かにビスマルク殿からは色々言われてしまいました……私も、気持ちはわかるんですよ」

「気持ちが変わる……でありますか？」

あきつ丸殿が怪訝な表情を浮かべる。まあ当然だろう。

「ええ……彼女の生まれたドイツは陸軍国家。それゆえ海軍への予算の割り振りが少なかった。だからこそ彼女は戦車に対して良い感情を持ってなかつたんでしょうし、私が……戦車が海に出ることに不快感を持つたんでしょう。彼女自身海戦で轟沈している分、尚更そう感じていてもおかしくはない」

「だからこそ、私は特に彼女の言った事を気にするつもりはなかつたんです。私と彼女

はある意味では似たような立場だったんですから」

確かにあの国が海軍へ多くの予算を割り振ることはないだろう。だが……海軍へ予算を振り分けていたなら、彼女はその仲間は轟沈せずに済んだかもしれない。その気持ちには俺にもわかる。もし……それこそ大和殿が言ったように、大和型を作る予算を戦車に割り振っていけば、兄達ももつと戦えただろうし、もしかしたら俺自身も戦地へ赴けたのかもしれない……。だが、口には出せないな。特に今の世の中を考えれば尚更、言うべきことじゃない。

「なるほど……確かに、そういう意味ではビスマルク殿と我らの考えは似ているところがあるのであります。チヌ殿を貶したと言うことで少し嫌厭はしていましたが、自分もドイツ艦とは交流しようと思ったのであります」

「ええ、そうしてください」

ビスマルク殿達の話題で調子が回復したのか、それから後は特に何かを気にすることもなく、俺たちは陸軍の話題で盛り上がり上がって話を終えることができた。まるゆとは違う陸軍の話題を話せるのは……気持ちがいいものだった。

第55話

あきつ丸殿とそんな会話をしてから数日。俺は作戦室で現在の作戦の経過具合を見ていた。

「順調といえれば順調だけど……という感じか」

報告書を見ながら俺は眉間に皺を寄せる。

「そうなのよ。敵は倒していつてるんだけど……敵が多すぎるのよ」

そういうのは俺の向かい側に座っている暁だ。さつき入渠を終えて、次の出撃に備えて鎮守府内で休んでいる。

「そうね。このままじゃ資材の確保が厳しいかしら」

暁の隣では香取が別の報告書を読みながら溜息をついていた。さて、提督たちはどうするつもりなのか。

「あら、あんた達こんなところで何してるの？」

不意に作戦室の扉が開き、朝野提督が中に入ってきた。

「これは朝野提督。お疲れ様です」

取りあえず即座に立ち上がって敬礼する。

「ああ、いいわよ堅苦しいのは。まったく、あきつ丸と言いあんたやまるゆと言いい、陸軍は堅苦しいわね」

俺の挨拶に朝野提督は面倒そうに返答すると、俺の読んでいた報告書を手に取った。「昨日の作戦の報告書じゃない。香取と暁が読むのは良いとして、あんたが読んでどうするのよ」

「海上の戦いに出れない以上、自分が役に立てる事は限られています。その為、自分なりに勉強し、作戦上において何か気づくことができればと考えた次第です」

俺の言葉に朝野提督はどうでもよさそうな視線を向ける。

「ふーん、陸軍の戦車のあんたが海上戦に役立つアイデアが浮かぶとは思えないけど」

まあ、その意見は至極最もだと思う。

「そんな事ありませんよ朝野提督。チヌさんは勉強熱心ですから」

香取がフォローを入れてきたが、朝野提督は特に興味を示す様子はない。

「ふーん。ま、どうでもいいわ。それよりチヌ。明日の作戦にはあんたも参加してもらおうわ」

「え、チヌが参加するの?」

朝野提督の言葉に暁が首を傾げる。それに頷きつつ、朝野提督は壁にかかっている海域の地図の一点、離島の一つを指さした。

「あそこの離島に補給拠点を作りたいたいんだけど、人型の敵がいるかもしれないから、あなたにはあきつ丸を含めた艦隊と一緒に出撃して、島の中を確認してもらおうわ」

「ハッ、了解しました」

島の中での行動となればまあ、戦車の出番だろう。

「そう。それじゃ、詳しくは明日の朝に説明するから、明日は作戦室に来なさい」

そう言うと、朝野提督は、資料と思われるファイルを棚からとり、作戦室を出ていった。

「チヌさんも出撃ですか。頑張ってください」

「ああ、今回は島に出撃なわけだから俺も活動しやすいくらな。とはいえ、深海棲艦が陸上でどれだけの戦闘力を持つかわからないから、何とも言えないが」

海に居るときと同じ戦闘力だとしたら、結局戦車の俺ではまず勝ち目はないだろう。

「流石にチヌだけで行かせるわけじゃないんじゃないかしら。そのあきつ丸って人も居るんじゃないの?」

「どうだろうな。ま、なんにしろ、明日だ」

思っても居なかった俺の作戦への参加か。さて、足を引つ張る事にならないといいんだが……。

第56話

翌日、俺は作戦室に再び足を運んでいた。そこに居たのは朝野提督にうちの提督。そして艦娘はうちの鎮守府からは不知火、飛鷹、まるゆ。そして向こうの鎮守府からはあきつ丸と、そして金剛が居た。

「来たな。さっそく席についてくれ、作戦の説明を始める」

提督に言われ、俺は空いている席に座り、作戦説明を聞いた。まあ、早い話が離島の周辺及び離島に上陸している可能性のある敵を撃退し、離島を確保。そして補給拠点を設置してから防衛するようにとの事だ。もつとも、金剛は防衛には参加せず、後続の主力艦隊と合流して敵への攻撃に向かうそうだが。先日まで金剛殿を鎮守府の防衛に回っていたのは、今回のために温存していたということなんだろう。

しかし、あきつ丸殿と金剛殿か。あきつ丸殿はまだ大丈夫だと思うが、金剛殿は俺と行動する事に抵抗とかないといいんだが。

ともあれ、俺は水上バイクに乗り、他の艦娘達と共に出撃した。

「おー、今日は天気もいいし、波も穏やかネー」

海上を走りつつ、金剛殿がそんな事を言っている。

「そうね。これなら敵が居なければ安全に行けるかしら……。チヌ、うっかりバランス崩して落ちたりしないですよ？」

「流石にもうこれにも慣れたから大丈夫だ」

飛鷹の言葉に俺は返答する。

「チヌ殿を自分に搭載できたらいいのでありますが……」

確かにそれができたら良いんだがなあ。

「できない事を言っても仕方ありません。ともかく足手纏いにならないように努めます」

俺がそう言うと、飛鷹も「そうね」とだけ言つて前を見る。あきつ丸殿は心配そうに俺を見てくるが、できないものはどうしようもない。

「大丈夫ですよ。チヌさんが落ちたら私が救助しますから」

不意にまるゆが俺の横に浮上してきた。

「まるゆ。それはありがたいが、そうならないのがベストだからな」

俺がそう言うと、不意に金剛殿が声をかけてきた。

「心配いらないネー。私が居るからには、仲間にそんなことをさせはしないネー」

そう言つて胸を叩く金剛殿の姿は頼もしさを感じる。流石歴戦の艦娘と言うべきだろうか。

そうこうしている内に、飛鷹の観測機が戻ってきて飛鷹に報告している。

「一時の方向に駆逐艦3隻、重巡3隻の艦隊を発見。敵はまだこちらに気づいてはいないようよ」

「それじゃあパツと片付けてから目的地に向かうネー。皆もそれでいいデスカー」

金剛殿の言葉に全員が領き敵艦隊の方向へ向かって進撃する。程なくして敵影を補足した。

「それじゃあ戦闘を始めるネー」

金剛殿の言葉を合図に俺達は攻撃を開始する。まるゆの魚雷と飛鷹、あきつ丸殿の艦載機が敵を襲う。そしてそれらが一段落した後。

「バーニングラープ！」

という掛け声の元に発射された金剛殿の砲撃によって一番傷の浅かったであろう敵重巡があっさりと轟沈していく。流石金剛型一番艦と言うべきだろう。恐らくその練度は榛名よりも高いのだろう。

その後は俺と不知火の砲撃でなんとか駆逐艦を一隻轟沈。敵側からの反撃も特に食らうことなく無事に戦闘を終えた。

「まったく、いくら倒してもキリがないネー」

「ええ。早く離島に向かいましょう」

戦闘を終えた俺達は余韻に浸る暇もなく進軍を再開する。そんな中、不意に金剛殿が俺のほうを向いて来た。

「心配してたけど、チヌは戦闘に問題がなさそうで良かったネー。次の戦闘もさっきの調子でお願いしマース」

「了解しました」

正直問題しかないんだが、金剛殿の言葉に取りあえず頷いておく。それから先の航行では特に問題なく、俺達は予定時刻の範囲内で離島に到着した。

第57話

離島に到着した俺達はまず離島内を調査。人型の深海棲艦の存在や痕跡がない事を確認すると、急ぎ応急のキャンプを島の中に設置し、そこに手持ちの備蓄を保管する。

そして翌日になり、後続の物資運搬のメンバーや主力部隊が到着すると、キャンプに物資を保管。金剛殿率いる主力メンバーは敵への攻撃の為に攻撃し、物資補給メンバーは鎮守府へと戻り、残りのメンバーで離島の防衛を行う。

防衛の任務には主に俺、あきつ丸殿と飛鷹の三人が基本メンバーとして残り、後は主力や補給のメンバーの中から随時選ぶ形となった。

最初のころこそ慣れないキャンプ防衛や初対面の艦娘との連携ミスによって苦戦を強いられる事もあったが、日が経つにつれて徐々に連携も形になってきたおかげで敵の奇襲にも十分に対応ができるようになっていった。

と言ってもそれはあくまで艦娘達の間だけで、俺に関してはさして変化はない。まあ、海に出ずに離島の中からの対空射撃で敵艦載機を近づけさせない事しかしてないのだから当然ではあるが。

「ふう、今日の敵襲は大した事はなかったわね」

「ああ、敵もこつちに回す戦力が惜しくなってきたのかもしれないな」

敵襲を退け、休憩と艦装の点検を兼ねてキャンプに向かう飛鷹の後ろを俺がついて歩く。彼女のおかげで敵の艦載機は容易にこの島に近づけないので俺の仕事は専らキャンプの整備等に回されているのありがたい。朝野提督側の艦娘はあんまり俺の存在を快く思っていないのもいるからな。

「それにしてもチヌも随分対空射撃が上手になったわね。最初の頃は私に何回も吹き飛ばされていたのに」

「その訓練のおかげだよ。飛鷹には本当に感謝している。戦車の俺に特訓をしてくれたんだ。手間がかかって仕方なかっただろう」

「ふふ、確かに手間はかかったわ。でも、貴方が一所懸命にやっているのはわかったし、少しずつでも上達しているのはわかったから教え甲斐はあるのよ」

「そう言ってくれるのは嬉しいがな。俺に時間を費やすより、他のやつに教えるほうが戦力の向上に繋がるわけだから申し訳なくてな……」

俺の言葉に飛鷹は半目で俺を睨み付けてきた。

「ちよつと、それこそ私の教えてきた時間を無駄にするような言い方じゃない。そんな事言うならもう特訓してあげないわよ」

「……ああ、そうだな。すまない、嫌な言い方をしてしまった」

「まったく、今度の外出の時に付き合いなさい。それでさっきの発言は聞かなかつた事にしてあげるわ」

「ああ、わかつたよ」

そんなことを話しながら歩いていくと、前方から金剛殿と、朝野提督の元にいる艦娘である重巡的那智殿がこちらに歩いてくるのが見えた。

「ヘーイ、飛鷹、チヌ、お疲れさまデース」

「……フン」

金剛殿が気さくに挨拶してくるが、那智殿は俺を睨むと視線をそらした。原因はまあ、わかるが……。

「お疲れさま金剛、那智、敵は追い払ったし、次の出撃は問題ないと思うわ」

「オー。それは良いこと聞きましたター。那智、次こそ敵の主力を倒しましょうネー」

「ふん、本当に問題ないのだろうか飛鷹、そんな戦車の対空射撃で敵を追い払えたとは思えないのだが」

そういつて那智殿は俺を睨む。最初に会った時からこの調子であり、以前うちの鎮守府に来ていたビスマルク殿を連想させるが、彼女と違って那智殿は戦車に対する八つ当たりではなく、明確に俺に敵意を持っているように感じる。まあ、海の戦いに陸の兵器を持ち込んだら普通は気に入らないだろう。自分達が役に立っていないと言われてい

るような部分もあるのだから。

「ちよつと那智。私の実力を信用してないの？ それに、チヌも私がちゃんと対空射撃の特訓をしてあげたんだから、役立たずじゃないのよ」

「飛鷹の事は信用してるさ。だがな、戦車如きが私達の戦いに付いてこれるわけがないだろ」

まったくもつての正論である。……そんなのは、俺が一番よく分かっている。

「那智、その辺にしておくネー。少なくともチヌは役立たずじゃないのは私も保証シマス」

「フン」

金剛殿が諫めるも、那智は俺に鋭い視線を向けるだけでそのまま歩き去っていった。

「二人ともごめんなさいネー。後で那智にはきつく言っておきマス」

「飛鷹、チヌ、後でまたお話ししましょうネー」

そう言うのと、金剛は那智の後を追っていった。

「まったく、那智にも困ったものね」

「いや、当然の態度だとは思うんだが……そもそも、この島に敵がいなかった時点で俺はもうお役目ごめんなもんだろ」

「あのねえ……さつきも言ったけど、あんたを馬鹿にされるって事は、あんたの特訓に付

き合つてた私たちも馬鹿にされてるって事なの。いちいち自分を卑下してないで、もう少し胸を張りなさい」

「……善処する」

俺の言葉に飛鷹は軽くため息をつくど前に歩き出し、俺も続く。正直、飛鷹には悪いが、俺には胸を張れるようなものはない。当然だ、船と戦車が互角になれるわけがないんだ。まして俺は先の大戦で何もできなかったんだから……。

そして10日ほどして、主力艦隊が敵主力の壊滅に成功。作戦は成功した。それに伴つてこの補給基地も破棄。数日をかけて順繰りに資材を鎮守府に運び、後は明日運ぶ分で最後となった。

「チヌ殿、少しよろしいでありますか？」

明日の撤収に向けて準備をしている俺の元にあきつ丸殿が声をかけてきた。

「どうかしましたか？」

「先ほど金剛殿より、今日の夜に少しばかり凱旋の前祝として祝宴を開こうと提案されてきたので、チヌ殿にも参加してほしい次第であります」

「祝宴ですか……。ここでするのもあれな気はしますが……。わかりました」

あきつ丸殿の言葉に了解の返事をして俺は作業に戻る。そしてその夜、ささやかながら残っているメンバーによって祝宴が開かれた。

第58話

「へーイみなさーん、羽目を外さない程度の範囲で楽しくやりましょー」

たき火を囲み、金剛殿の合図によつて祝宴が開かれる。今島に残っているのは俺を除けば金剛殿、那智殿、あきつ丸殿、不知火、飛鷹であった。その為か祝宴は主に金剛殿と那智殿が飲んで騒ぐ側で、飛鷹がその相手をする形となっている。

俺はというと、あきつ丸殿に勧められる酒を飲みつつ、隣に座っている不知火やあきつ丸殿と会話をしている。二人とも酒はあまり飲まずにいてくれるからありがたい。酔つ払いの相手は足柄らへんだけで十分だ。

「ふう……しかし、こうしてお前と酒を飲むことができる日が来るとはな。大戦の時には思つてもいなかつたぞ」

いつの間にか不知火の横、俺の反対側に移動していた那智殿が素晴らしいながら不知火の肩に腕を回してきた。既に酔いが回っているのか、たき火に照らされているのとは違う形で顔が赤くなっている。

「私もですよ那智さん。こんな日が来るなんて思つてもいませんでした」

どうやら二人は大戦の頃から顔見知りのようだが……そういえば、不知火は那智殿と

一緒の艦隊に配属されたんだったか、そんなことを聞いたような……酔いが回ってきた
せいかよく思い出せないな……。

「チヌ殿、少々顔が赤くなっています、大丈夫でありますか？」

「まだ大丈夫だとは思いますが……少し抑えたほうがいいかもしれません」

普段ほぼ飲まないせいか、自分の限界がわかりにくいな、もう少し自分の限界を確認
しておくほうがいいか……。

「不知火、私はあの時本当に心配したんだぞ。鬼怒の救援要請に向かうといつて碌に休
憩も取らずに向かうなんて……早霜からお前が轟沈したという知らせを聞いたとき、私
がどれだけ悲しんだか……」

「その件は……本当に申し訳ありません。それでも私はあの時救援に向かうことになっ
たことを後悔はしていません。でも、結果としてただ井上艦長を始め、多くの
方を亡くしてしまうことになったのは……」

「それは言うな。それもまた、戦場では仕方がない事だったんだ……」

隣で話す不知火と那智殿の会話が耳に入る。あれは、先の大戦での出来事だろうか。
……あの二人にはあるんだな、あの時の繋がりが。

……俺にはない。先日の藤村さんとの件を除けば、あの時のことを話せる仲間……い
や、それ以前に話せること自体がない。ただ作られ、そのまま置かれただけの俺には何

も……。ああ、艦娘たちが羨ましい。あの時、国のために戦い、散り、そして今思い出としてその時のことを語ることができる彼女たちが、心から羨ましい。

「……ああ、あの頃の話ができるなんて……羨ましい……」

那智殿と不知火の話を聞いていた俺の口から不意に言葉が漏れた。俺自身意識もしなかった言葉だが、それはどうやら全員に聞こえてしまっていたようで、全員が俺を見ている。

「羨ましい……？ 羨ましいだと!? それは私たちの話のことか？ 今の話を聞いて、羨ましいとはどういうことだ！」

那智殿が俺の胸倉を掴み無理やり立たせる。

「那智!? 落ち着いて！」

「那智さん！」

不知火と飛鷹が咄嗟に抑えようとするが、そんな二人を那智が睨み付ける。

「二人は黙っていてくれ！ 私はさっきの発言を見過ごせない！」

そう叫び、那智殿は改めて俺を睨み付ける。

「貴様……私たちがあの時どれだけの絶望を……悲しみや後悔を味わったと思っている

！ 陸で何もしていなかった戦車如きが羨ましいだと……！ ふぎけるのも大概にしろ！ お前たち役立たずな戦車作る材料さえあれば、私たちの仲間も増えて……あんなことにならずに済んだかもしれないというのに！ 貴様たちが……貴様たちのような役立たずが作られなければ！」

その言葉を聞いたとき、俺は自分の中の何かが外れるような……そんな感覚を覚えた。

「ふぎけるな……！ ふぎけるなよ海軍！」

次の瞬間、俺は逆に那智の胸ぐらを掴み、思い切り睨み付けていた。

「何もしなかっただと……？ 兄が……チハ達がどんな思いで戦ったと知っているんだ！ 碌に補給もなく、敵に自分の攻撃が通用としないとわかっていても……それでも、兄達は戦ったんだ！ 戦い続けたんだ！ 俺だって、俺たちだって戦いに行きたかった！」

「なに……を……！」

那智が何か言おうとする。だが、俺はそれを遮るように矢継ぎ早に叫ぶ。その言葉を一つ一つ発することに目から涙が零れ落ちる。心の中にいる冷静な俺が必死に止めようとするが、もう……止められそうにない。

「お前たちは働いただろう！ 国のため、国民のため、仲間のために働けたんだろう！」

敵を倒す力を持って戦ったんだろう！ それだけの予算を回され、それだけ多くの技術を詰め込んだらう！ 兄達は敵を倒す力を持てなかった、俺達も弟達も戦場に行くことすらできなかつた！ 俺は……最後まで置いて行かれたんだ！」

「それでもまだ、まだ！ 再利用されるなら……例え連合国の実験に使われる形であってもまだ、納得する事ができたんだ！ 人間の為に働けたのならまだ！ 俺にはそれから……それすらもない、何もないんだよ！ 羨ましがってもいいだろうが！ 戦場で戦えたお前たちを、その思い出を持つお前たちを、戦争が終わった後も復興のために働くことができたお前たちを羨ましいと思つて何が悪い！ それでも、俺を罵倒したいならいくらでも罵倒しろ！ 殺したいなら後ろからでも撃て！ だがな……だがなあ！」

兄弟を……戦車達を侮辱するその発言だけは許さんぞ！」

それだけ叫んだとき、不意に俺の手に誰かの手が置かれた。

「チヌ殿……そこまでにするのであります」

そう言つてきたのはあきつ丸殿だった。声をかけられ少し頭の冷えた俺は辺りを見渡した。そこには俺を見る艦娘たちの視線があつた……やつてしまった……。

「……申し訳ありません、あきつ丸殿……ありがとうございます」

力を入れすぎていた指から力を抜き、俺は那智殿から手を放す。そして那智殿、そして艦娘たちに頭を下げた。

「酔いに任せ、暴言を吐いてしまった事、暴行をしてしまった事、深く謝罪します。自分は頭を冷やすため少しこの場を離れます。後ほど、改めて謝罪を致します」

自分の声に感情が籠らない。だが、これ以上この場にはいられない。そう思った俺は矢継ぎ早に言葉だけを述べるとすぐにこの場を離れた。

しばらくの間島の中を歩いた俺は海岸に出ると、砂浜に腰を下ろした。

「……クソツ……」

酒とさっきの話をしたせいか不意に目に涙が浮かんでくる。ダメだ、兵器である俺が、戦車である俺がなんでこんな不安定な気持ちになってしまっただけ……。これじゃ加古を怒鳴りつけてしまった時となにも変わらない……。

「なんであんな事をしてしまった……。俺は兵器なのに……。なんでこんな人間みたいな……あの人たちみたいなの……」

拳を握り、俺は泣く。涙が頬を伝うたびに自分が惨めに思えて仕方がない。俺は戦車。俺は兵器。俺は……あいつらの為にもこんな惨めな状態になってる場合じゃないというのに……。

……いや、そうじゃない。この気持ちは那智殿に話したものだけじゃない。これは妬みだ。碌に役に立つこともできない俺の見苦しい劣等感だ。それも混ざっている……。あの町に居た時から抱えていた。鎮守府に来てからは心の中に押し殺していた感情だ。

ああ、なんで兵器の俺がこんな感情に振り回されるんだ。俺が役立たずなのはわかりきってるだろ、なんであんな事を言ってしまったんだ。戦車の俺にこんな感情は必要ないのに、こんな感情があるから、あんな夢を見たりしてしまっているんだ！ 何があの人たちの想いに答えるのが俺の責務だ！ やっぱ俺はあの夢の通り自惚れていたんだ！ なんて……こんな人間みたいな存在なら……これなら……俺は存在しないほうが……最初からいなければ……。

涙が止まらない。惨めさが抑えきれない。……いつそ、目の前の海に飛び込んでそのまま沈んでしまおうか……。こんな気持ちのまま戦っても迷惑をかけるだけなんだ、だったらいつそ死んでしまうほうが……。

「チヌ殿、ここにおられましたか」

不意に後ろから声をかけられ、振り向くとそこにはあきつ丸殿が立っていた。

「……あきつ丸殿、どうされました？」

慌てて涙を拭き、俺は立ち上がろうとし……その前にあきつ丸殿が俺の肩に手を置いた。

「辛かったのではありませんな。艦娘達の中でずっと……一人で我慢していたのではありません……自分が胸を貸すではありません」

そう言うど、あきつ丸殿は俺の頭をその胸に納めてきた。……服越しに伝わるその温

もりが心地いい。

「チ又殿、泣きたいときには泣くべきであります。今は海軍も居ない……。自分とチ又殿だけなのでありますから……。誓って今の事は口外しないのでありますから」

あきつ丸殿の言葉が伝わるたびに俺の目から更に涙が溢れる。こんなみつともない姿を晒すわけにはいかないのだと理性ではわかつているはずなのに、体が、感情が言う事を聞いてくれない。

い。

「あきつ丸……殿……俺は……俺は……！」

思わずあきつ丸殿の服を掴んでしまう。だが、それでもあきつ丸殿は俺を抱きしめる腕に力を入れてくる。……ああ、心地いい……。こんな心地いい気持ち……。生まれて初めてだ……。

俺はそれからしばらくあきつ丸殿の腕の中で思い切り泣いた。今まで吐けなかった弱音が、想いが、涙と嗚咽と共に流しだせているような感覚の中、あきつ丸殿の温もりに包まれ、泣き続けた。

やがて泣き終えた俺は顔を上げ、あきつ丸殿の顔を見る。彼女はとても優しい笑顔で浮かべていた。

「……チ又殿。良ければ自分が所属する鎮守府に来るのであります。朝野提督や那智殿

は自分がかならず説得するので……まるゆ殿と一緒に、陸軍の出身全員集まるのであります」

陸軍全員が一か所に……ああ、それならきつと俺はこんな劣等感に悩まされずに済むのだろうか。それに、陸軍を守るためなら俺は強くなれるのだろうか。

「あきつ丸殿……俺は……」

「ダメです！ 絶対にダメ！」

俺が返答しようとしたその時不意にあきつ丸殿と違う声が響く。その方向を向くと、そこには顔を赤くした不知火が立っていた。

「し、不知火!? なんでここに?」

不知火に見られたという事実には気づき、俺は慌ててあきつ丸殿から離れた。だが、不知火はそんな俺に近づくと、俺の肩を掴んで俺を正面から見てきた。

「チヌさん、貴方は私達の仲間です。だから、どこかに行くなんてダメです。絶対にダメなんです！」

さっきの話を聞かれていたのか? いや、それより不知火は何を言っているんだ?

「いや、ちよつと待ってくれ。別に他の鎮守府に異動するだけで辞めるわけじゃないんだが……。そもそも、不知火も時期が来れば別の鎮守府に異動になるだろ」

「私は異動しません。だから、チヌさんも異動しないでください。いや、私が提督に直訴

「してでも止めます」

「いやだからな。それは俺達が決める事ができる問題じゃ……」

「ダメだったらダメなんです！」

「だめだ、話を通じない。一体どうしたんだ不知火は？　こんな顔を真つ赤にして俺に詰め寄るなんて。」

「ふふ、チヌ殿はどうやら思っていた以上に慕われているのであります」

不意に笑い声が聞こえたと思うと、あきつ丸がにこやかに俺達を見ていた。

「不知火殿に恨まれるわけにもいきませんし、今回はチヌ殿の勧誘は諦めるのであります。でも、チヌ殿がその気になられたらいつでも歓迎するのでありますよ」

そういうと、あきつ丸殿は俺たちを置いてキャンプのある方向へと歩いて行った。

「チヌさん」

あきつ丸殿を見送ると、不知火が改めて俺の顔を見てきた。

「行かないでください。私は、貴方を必要としています。だから、他所へ行ったりなんてしないでください」

「いや、だからな不知火……」

その先の言葉を俺は繋げなかった。なぜなら、不知火の目に浮かぶ涙に気づいてしまったからだ。

「……チヌさんは、そんなに陸軍のほうがいいんですか？　今まで一緒にいた私たちではなく、陸軍出身という理由だけで、あきつ丸さんのところへ行きたいという気持ちには確かにある。……？」

「……正直に言えばあきつ丸殿のところへ行きたいという気持ちは確かにある。さっきのやり取りがあつた以上、あきつ丸殿になら俺は自分の感情を吐き出せるだろう。それはとても魅力的だ。だが……。」

「どうなん……ですか？」

俺を問い詰める不知火。今彼女を拒絶すればきつと彼女の心を傷つけるだろう。それを行うという選択肢は今の俺には選べなかつた。

「……命令があれば俺は異動を拒否はできない。だが、自分から行く事はない」

「……そこは絶対に異動しないぐらい言つてくださいよ……。でも、今回はそれで納得してあげます」

不承不承という感じではあつたが、不知火は俺から離れた。

「チヌさん……一つだけ聞かせてください。あの時……那智さんに怒鳴つた時に貴方は海軍と言いましたよね」

「……ああ」

「……チヌさんにとって当時の私達は……海軍は……どんな存在なんですか？」

「……」

不知火の問いに俺は迷う。当たり障りのない答えを言うのは簡単だ。だが、今の不知火がそんなもので誤魔化せるとは思えない。だが、言ってしまったらどうなるか……。

そこまで考え、俺は自分の考えの浅はかさに自嘲した。既にやらかしているのに、今更取り繕えるはずがないだろ。不知火に至ってはさっきの泣いているところまで見られてしまっているというのに。

「……不知火、日本は島国だ。海軍に予算が割かれるのは当然だし、当時の未熟なインフラじゃ俺ぐらいの重さの戦車を使用するのは辛かったのもわかっているし……連合国……アメリカがあまりに強い国だというのだからわかってるつもりだ」

「でもな……不知火。それでも、だ。前に大和殿が言っていたが、大和型を建設する余裕を陸軍に回してくれれば……海軍の予算を陸軍に回してくれれば……と思ってしまうんだ」

「チヌさん、それは……」

俺の言葉に不知火は悲しそうな、屈辱を感じているような、そんななんとも言えない表情を浮かべる。

「わかっているんだ。今更そんな事を言っても仕方ない事だし、仮にそうしていた所で戦争には勝てなかっただろう。なにより当時海軍に予算を注ぎ込んでいたからこそ、今の深海棲艦達に対抗できているんだ。それでも……俺は悔しかったし、悲しかった。同じ

国に所属する那智殿からお前たちがいなければと言われた事が。あの時文字通り死ぬ思いをして戦った兄を、戦地にいく事すらできなかった兄弟を侮辱された事が。そして……唯一陸の兵器として戦っている俺の力不足がとても悲しかった」

そうだ。例え那智にその気がなかったとしても、彼女の発言は俺にとつてあまりに……あまりに、心に刺さった。最初に鎮守府へ来た時の俺なら耐えられただろう。だが、この鎮守府で暖かく迎えられ、過ごしてしまった俺には……耐えられなかった。

「でも……以前ビスマルクさんが同じような事を言った時には……」

「ユーが言っていただろう。彼女は陸軍国家における海軍だ。勝手な言い分だが、俺は彼女にそういう意味での親近感を持つているし、その心情もわかる。だが、那智殿は同じ国の艦娘で陸よりもよっぽど予算をつぎ込まれた海軍の所属だ。そんな彼女にお前たちを作る余裕があればと言われれば……な」

そこまで言ったとき、不意に不知火が泣き始めた。

「……申し訳ありません。私達が……あの時もつと強ければ……せめて海上輸送を安全に行えるぐらい……制海権の維持をできるぐらい強ければまだ……」

そう言つて泣きながら俺を見上げる不知火に、俺は視線を逸らすことなくまっすぐに見つめる。

「あの時の俺たちは自分で動くことのできない兵器に過ぎなかった。だからお前たちに

その責任を問うつもりはないんだ。だから謝らないでくれ。今言ったことは俺の一方的な感情に過ぎないんだ。お前たちがどんな想いで戦ったのか……戦場に行けなかった俺には想像も付かないようなものなんだろう。だから胸を張ってくれ。自分たちは戦い抜いたと」

「でも……どうか、俺たち戦車の事を悪く言うのは……やめてくれ。俺個人がどれだけ言われても仕方がない。でも、あの時の兄弟たちを侮辱するのは……やめてくれ」

「……わかり……ました……」

泣きながら頷く不知火。俺はしやがみこむと彼女の涙を拭う。

「まったく……お前が泣いてどうするんだ。お前が泣く必要も、責任を感じる必要もないって言ってるのに」

「……チ又さんは私にとつて大切な……仲……間……です。仲間がそんな思いを持っていたのに……気づけなかった……」

「言わなかったからな……でもな。お前たちが俺を受け入れてくれて、お前が仲間だと言ってくれた事はとても嬉しい。だからそんな事で泣くのはやめてくれ。後……できれば誰かに言うのもやめてくれ。流石に言いふらされていいものじゃないからな……」

「わかり……ました……」

しばらくして泣き止んだ不知火を連れて俺たちはキャンプ場に戻る。……ともかく、

那智殿達に謝罪し、それから後日両提督に報告して処罰を受けないと。

第59話

俺たちがキャンプ場に戻ると、既に祝宴の片付けも終わっているようで、空の酒瓶などは片づけられている。

「チヌ」

声をかけられた俺が視線を向けると、そこには那智殿、金剛殿、飛鷹が立っていた。

「那智殿、先ほどは不快な思いをさせてしまい真に申し訳ありませんでした。金剛殿、飛鷹にもお詫び申し上げます」

「いや待つてくれ。謝罪しなければならぬのは私のほうだ」

頭を下げる俺に那智殿が声をかけてきた。顔を上げると、那智殿が申し訳なさそうな顔をしている。

「酔いが回っていたとはいえ、私もあまりに言葉が過ぎた。それに、陸と海の違いがあれど、仲間であるにも関わらず無礼な態度を取ってしまった。本当に申し訳ない」

逆に那智殿に謝罪され、俺が反射的に謝罪の言葉を口にしようとしたとき、制止の言葉が飛鷹から出てきた。

「はい、謝罪はそこまでね。どうせ放つてたら二人とも謝罪し合って終わらないでしょ。」

これで今回の件は終わり。後は蒸し返さないこと、良いわね」
「あ、ああ。わかった」

飛鷹の言葉に那智殿が頷き、俺も同じように頷くしかなかった。

「チヌ、那智にはよく言つといたから、これで許して欲しいネー」

「ええ、もちろんです。元は私が悪いのですからどうかお気になさらず」

俺がそう言うのと、那智殿はもう一度頭を下げ、そして金剛殿と共にこの場を後にした。
「さ、私たちも明日に備えてもう寝ましょう。不知火は見張りをお願いね、時間が来たらに起こしてちょうだい」

「了解しました」

こうして俺は不知火と別れ、飛鷹と共に寝袋に入る。ともかく今日は寝てしまおうと、目を瞑ろうとしたときに飛鷹が声をかけてきた。

「……チヌ、確かに貴方には先の大戦に関しては何もないかもしれないわ。でも、今は私たちが居るんだから、それは忘れないでちょうだい。私は……貴方が配属されて良かったと思っているもの」

「ああ、そう言ってくれただけでありがたいよ」

俺の返答に飛鷹は返答せずに俺に背を向ける。俺もそれ以上何も言わずに目を閉じる。目を閉じた俺の脳裏に過るのは先ほどの飛鷹の言葉と不知火とのやり取り。俺は

……少なくとも不知火や飛鷹に認められるぐらいには必要とされているのだろうか……？ それとも、ただ同情されているのだろうか……？ その答えは出てこなかった。

離島から戻った俺たちは鎮守府で提督への報告を終え、それから事後処理を済ませていく。そして数日後、朝野提督達は元の鎮守府に戻ることとなった。

「朝野。今回は作戦に協力してくれて感謝する」

「堅苦しい事を言うな。私とお前の仲なんだからな」

埠頭で提督と朝野提督が挨拶を交わす。

「チヌ殿、今回は良い経験となりました。次もよろしくお願いするのであります」

「こちらこそ、今後もよろしくお願いします」

そう言つて俺はあきつ丸殿と敬礼を交わす。正直なところこれであきつ丸殿と当分は会えなくなるだろうというのは寂しいのだが……。

「……」

横目で不知火が俺を睨んでいるのがなんとなくわかる。どうやら今でも俺があきつ丸殿と一緒に行くことを警戒しているようだ。

「不知火殿、心配しなくても今回はチヌ殿の勧誘は諦めているのであります」

「……それは関係ありません」

あきつ丸殿の言葉に視線を背ける不知火。そんな二人をよそに両提督の挨拶は終わり、朝野提督達はここを離れる用意に入る。

「では、チヌ殿、次に会える時を楽しみにしているのであります」

埠頭を後にする朝野提督率いる艦隊。そして最後にあきつ丸殿の言葉を残して彼女たちは去っていった。

「さて、今日からは通常通りだ。皆、頑張っていくぞー」

朝野提督を見送ると、提督がみんなに声をかける。俺も、自分の本来の任務に就くために埠頭を後にした。

(……これで良かったんだよな……?)

あきつ丸殿と共に行かなかった事に後ろ髪を引かれる思いを感じる。あれから冷静に考えれば、戦力の乏しいこの鎮守府だからこそ受け入れられている俺が他所の鎮守府に行つてうまくいくはずなんかないと言う事に気づいた。だが、それを差し引いてもあきつ丸殿、そしてまるゆの三人で同じ鎮守府に居られるのなら、それはとても魅力的だ。

……そう言えば勝手にまるゆも連れていく前提で考えてたな。まったく、まるでまるゆを物みたいに考えていたなんて、あの時の俺は本当に冷静じゃなかったんだと実感する……本当に、酒には注意しよう。酔いとは恐ろしいものだということを今回の件で十

分に骨身に染みた……少なくとも酔いがなければ最初の失言がなかったはずだからな。

「チヌさん」

不意に声をかけられ視線を向けると、不知火が俺のことを見上げながら睨んできていた。

「私は貴方を必要としています。ですから、行かせませんからね」

「あ、ああ、わかったよ……」

その視線の圧力に思わず腰が引ける。そんな俺を置いて不知火は先に戻っていく。……不知火がなんで俺にそこまで拘るのか、俺には皆目見当がつかなかった。

第60話

朝野提督を見送り、今日から通常の任務体制に戻ったわ。まあ、今日の不知火は非番なんだけど……それより、チヌさんの事が気になるわね。

（あきつ丸さんを見送るときのあの表情……未練があるってわかってしまったわ……）

あの日以来、チヌさんがあきつ丸さんと話したり一緒にいたりするのを見るたびに私の心は不安になる。そのまま、チヌさんがあきつ丸さんと一緒に行ってしまうんじゃないかと。

「不知火、ちよつといいかしら？」

不意に声をかけられその方向を向くと、そこには飛鷹さんがいた。

「ちよつと話がしたいんだけど、時間大丈夫？」

「……ええ、大丈夫です」

話というのはきつとチヌさんのことね。飛鷹さんもチヌさんの表情に気づいていてもおかしくはないわ。

不知火達は埠頭を離れ近くの建物の蔭へ移動する。

「不知火も気づいた？ あのチヌの表情」

「はい。非常に残念そうな表情でした……あの日までの不知火なら特に気にはしなかったんですが……」

「私もそうよ……まだ未練があるようね、あの様子だと」

あの日、不知火達は見てしまった。チヌさんが那智さんの胸ぐらを掴みながら泣き叫んだ事を。そして私だけが見てしまったわ……チヌさんがあきつ丸さんに抱きしめられながら子供のように泣く姿を……そして、チヌさんの気持ちも知ってしまった。どちらも普段の彼からは想像もできないような姿だった。この鎮守府ですつと一緒にいる不知火達ですら想像もできなかった姿。

「……不知火、貴女はチヌがあんな気持ちを抱いているって気づいた？」

「いいえ……今思えば加古さんを怒鳴った時の態度とか、陸軍への作戦に参加したこと話を話するときのチヌさんの様子とか、断片はあったと思いますが……あんな激しい感情だとは……」

正直、自分の目で見ても信じられないもの。でも、直接見て、聞いてしまったものは否定はできないわ。

「……正直、シヨックね。チヌがあんな感情を持っていたことに気づかなかつたのもだけれど……陸軍ってだけであきつ丸の勧誘に乗りそうになつたっていうのもね」

あの子の事は勧誘の事だけ飛鷹さんには話しておいた。チヌさんがもう一度泣いた

こととかはとも言えないけど……せめて勧誘の事だけは相談する必要があると感じたから。

「……私はね、不知火。チヌのこと気に入っているわ。あんなに一所懸命に強くなるうとしていくし、人格的にも好きなのよ。まあ、すぐに自分を卑下する態度は好きじゃないけど、チヌのことを好きか嫌いかで言えば好きよ。不知火はどうかしら？」

「不知火も……チヌさんは好きです。だからシヨックです、チヌさんが……ずっと一緒に居る自分達よりも、陸軍出身というだけであきつ丸さんに靡きそうになった事が……シヨックで……とても悔しいです」

言葉をおにしたとき無意識のうちに拳を握ってしまった。でもやっぱり悔しい。チヌさんにとって不知火達はその程度の存在だって言われているみたいで、悔しかった。「私もよ。だから、私は異動になるまでチヌに構い続けるわ。単なる軽空母の一人。だって認識で終わらせてあげない、チヌの心にこれ以上ないってぐらい残ってあげるわ。不知火はどうするの？」

「不知火もです。今のまま、単なる駆逐艦の一人で終わるなんて事はさせません。絶対にです」

「そう。それじゃあ私達、これから一緒に頑張らしましょう。あの朴念仁、並大抵のことじゃこつちの気持ちに気づかないでしょうし……」

「ええ、まったくです。頑張りましょう」

こうして不知火達は一つの戦いを始めることにしたわ。本来ならやる必要のない戦いなのはわかってる。でも、この悔しさ悲しさをそのままにはできない。この好きって気持ちもそのままにはできない。だからチヌさん、覚悟してくださいね。

第十二章

第61話

その日、俺は明石の工廠を訪れていた。理由は装備の点検、そして、俺自身を見てもらうことである。

「うーん、あとちよつと……だと思っただけですけどねえ」

俺のデータを見ながら明石が困ったように頭を搔く。

「あとちよつとというが……本当にできるのか？」

俺の問いに明石はすぐに視線を俺に向けなおしてきた。

「もちろんです！ チヌさんは何回も実戦をこなしてきていますし、艦娘ならもう改造できておかしくないんです……けど」

そういつて明石は首を傾げる。そう、艦娘たちはある程度の練度に到達することで自身の艦装の改造を受けてさらなる強化を図ることができる。なぜ一定の練度にならなければできないのか、それはいったいどういう基準で図られているのかは俺にはわからないのだが、ともかくそういう事らしい。

そして俺自身もそれはできるそうなのだが……今のところできそうにはないようだ。

既に俺が配属された後に配属された艦娘の中には改造を受けて他の鎮守府に配属されていった者も幾人かいることを考えると、やはり俺は艦娘の基準で考えてはいけないということだろうか。

「取り敢えず……チヌさんにはいつも通りの戦闘や訓練をこなしてもらおうしかないでしょうか……すみません。ご期待に沿う事ができなくて……」

「いや、構わないよ。俺に問題があるんだからな」

明石から点検を受けた装備を受け取り、俺は工廠を後にする。さて、どうしたものか、艦娘に比べて役立たずとはいえ、それは今の実力に甘んじていいという言い訳にはならないんだ、なんとかできればいいんだが……。

そんなことを思っている中、不意に鎮守府の中に警報が鳴り響いた。

「これは……」

この警報は知っている。これは、敵襲来の警報だ。

急ぎ作戦室に到着した俺を提督と榛名が迎える。そして俺の後にも続々と鎮守府内の艦娘が作戦指令室に到着した。

「全員きたな。緊急事態だ。敵の大部隊がこの鎮守府へ向けて侵攻しているのが確認さ

れた」

その言葉に艦娘達からどよめきが起こる。そんな中提督は海図を示し、敵の侵攻ルートを表示する。

「既にほかの鎮守府に向けて救援を要請しているが、敵の侵攻ルートから見ると、敵がこの鎮守府に到着するほうが早い。その為、今より榛名を中心として第一艦隊、足柄を中心とした第二艦隊による連合艦隊を結成し、敵へ攻勢を仕掛ける。更に残りの艦娘で第三艦隊及び鎮守府防衛部隊を結成する。第三艦隊は連合艦隊の支援が任務だ。敵部隊は戦艦、空母を含めて30に及ぶ数となる。大半は駆逐艦や軽巡だと確認されているが当然油断はできない。各員迅速に準備を整えよ！」

提督の指示に全員が「了解」と返事し、各自準備に走る。俺は当然鎮守府防衛部隊に回され、明石と共に埠頭で敵の侵攻に備える。

「これで二回目ですね……チヌさん、あの時みたいにならないでくださいよ？」
「当然だ。同じ轍を踏んでたまるか」

以前の鎮守府防衛の時を思い出し、俺は少し顔を顰めた。あの時俺は明石に助けられるばかりで、そのうえ羽黒の誤射で大破した。流石に今回は羽黒も誤射してこないと思いたい、万が一のことを考えて気を抜かないようにしなくては……。

「！ 支援艦隊の砲撃が始まりました！」

明石の言葉に俺は緊張を感じる。そこから更に、支援艦隊の撤収、連合艦隊の攻勢と明石を介して戦局を聞いていく。

「……連合艦隊側が押されています。敵の主力部隊は抑えられてるみたいですが、いつ突破されるかわからないそうです。どうやら、敵の目的はこの鎮守府のほうにあるようですよ」

「艦娘じゃなくて鎮守府に？ ……まさか、ヲ級か？」

あの日、俺が鹵獲したヲ級、今は事態が事態なので拘束具を付けたうえで独房に入れられているが、もし敵の目的が彼女であるなら……。

「奪還……ですか、随分日が経つてからの行動ではありませんけど、無いとは言い切れないですね……彼女自身戻る気があるのかわからないですけど」

「普段の言動からはそう思えないが……。正直わからないな」

鹵獲してから既に少くない日にちが経過している。その間の彼女は俺たちに一切反抗することなく過ごしてきた。だが、あれが本心であると言い切れる保証はない。

「支援艦隊より入電！ 一部の敵が防衛線を突破しこちらに向かっています！ 向かってきているのは軽空母1戦艦1です！」

その言葉に俺は顔を顰めた。軽空母に戦艦、とても俺と明石で抑えられる敵じゃない。敵がこちらに近づくと前に特攻できればまだ可能性はあるかもしれないが、今の状態

では水上バイクに乗って突撃しようとしても届く前に轟沈させられるかもしれない。

「敵艦載機来ます！」

俺たちの視線の先に軽空母から発艦した敵艦載機が映る。

「チッ！」

俺と明石の機銃、高射装置から無数の弾丸が飛び艦載機に向かう。どうやらヲ級のよりも弱いのか、それともあれから俺たちの腕が上がったのか、なんにしる艦載機は思っていたよりも早いわけではなく順調に撃ち落として行けている、だが。

「！ 戦艦からの砲撃来ます！」

明石の言葉に俺は反射的に横に飛びのく。すると先ほどまで俺がいた地点に戦艦の砲撃が命中し、轟音と多量の土埃を上げる。

(これは……榛名の砲撃より強力だ。一撃でも直撃すればその時点で死ぬ！)

敵の砲撃の強さに目を見張りつつ態勢を立て直す、その隙に敵の艦載機が鎮守府の建物へ爆撃を仕掛けてきた。

「敵の攻撃によって出撃ドックと入居施設に爆撃！ 被害はさらに拡大中！」

無線から聞こえる内容に俺は更に焦る。提督の居る作戦室は頑丈な作りになっているためちよつとやそつとで壊れるものではないが幾度も爆撃を受ければどうなるかわからない。

「明石、俺は水上バイクで敵に特攻をかける！ このままじゃ艦載機はどうかできても戦艦の砲撃に耐えれない！」

「無茶です！ 出撃ドッグも爆撃を受けて、今のままじゃ発進する前にやられます！」
「だが、このままじゃじり貧だぞ……敵機！」

明石との会話を切り上げ、頭上を飛ぶ艦載機を撃ち落とす。だが、その隙に再び戦艦の砲撃が俺たちに向けて撃ち出された。

「ぐう!？」

「キヤア！」

直撃は回避できたがその衝撃で俺と明石は吹き飛ばされる。急いで立ち上がる……だが。

「嘘!？」

そんな俺たちに再び戦艦の砲撃が飛んできた。今度は横に飛ぶ暇もない。なにより明石がマズイ！

「明石！」

咄嗟に俺は明石に覆いかぶさり、その体を抱きしめ、その直後、戦艦の砲撃による衝撃と爆炎が俺たちを吹き飛ばした。

「キヤアアア！」

吹き飛ばされながらもなんとか明石をかばう。そのおかげか、なんとか明石無事だ……が……あ……。

「チ、チ又さん！ チ又さん！」

俺の下から出てきた明石の服が血に……いや、俺自身が血に染まっている。それを認識したとき、喉から多量の血がせり上がり、思わず吐き出す。意識が朦朧とし、体の動きが鈍る。ああ、俺はもうダメだ。

「そんな、私をかばって！ 早く……早く治療を！」

「治療は……いい……それより早く逃げ……ろ……」

もうこの場はダメだ。明石一人で戦艦と軽空母をどうにかできるわけがない。俺自身既に体の感覚も怪しくなってきたいて、どこを負傷したのかの把握すらできない。かつてヲ級にやられた時よりマズイのが自分でもわかる。

「そんな！ だめです！」

俺の言葉に明石が反発しつつ俺を担ごうとする。だが、自分も負傷している中で俺を担げるはずがない、すぐにバランスを崩した明石に俺は再度声をかける。

「逃げ……ろ……提督と合流して……はや……く……！ 俺に構う……な！」

朦朧としてくる意識の中、なんとかして明石を逃がそうと力を振り絞って明石を突き飛ばそうとするが、逆に明石はその腕をとって俺を担ごうとする。

「え……!? なんぞー！」

そんな中、不意に明石が視線を上にあげ言葉を失う。俺もその視線を追うと、そこには倒壊した建物の影から出てくるヲ級の姿があった。拘束具を外し、こちらに視線を向ける彼女の手には飛鷹の予備の甲板である巻物が握られている。

「イツテ……！」

巻物が開かれ、飛鷹が使うのと同じように、式神が次々に艦載機になり空に舞う。

「チ又さんー！」

明石が俺を庇うように抱き着く。だが、俺はそれを気にする余裕もなかった。

「ヲ級……！」

目を見開く俺の視線に映る艦載機たち。そして……彼らから放たれた機銃は、俺たちではなく、敵の艦載機を撃墜していき、更に戦艦と空母に爆撃を仕掛ける。

「え……？」

その光景に明石が目を見開く。だが、俺にはもう余裕がなかった。空を飛ぶヲ級と軽空母の艦載機を見つつ、俺の意識は闇の中に落ちていった。

第62話

目を覚ますと、そこは暗闇の中であつた。体を動かそうにも横たわっている状態からまったく動かない。

無様な。

声が聞こえ、そちらに視線を向けると、そこにいたのはチヌ……俺が見送つていった兄弟の一人が居た。

無能者よ。

反対側から聞こえた声に視線を向けると、そこには陸軍の服装をした人たちが立つていた。そしてそれを皮切りに、俺の周りには陸、海を問わず人、兵器が囲み、俺を見下ろす。

(俺は……死んだのか……?)

俺の最後の記憶……ヲ級と空母の艦載機との闘い……あの時点で確かに俺は致命傷を負っていた。そして、戦闘の最中に入居施設が爆撃を食らつたのも覚えていた。

(明石は……皆は生き残れているのか？ 俺は……少しは役に立てたのか?)

死んだ事は仕方ない。だが、何の役にも立てずに死んだのであれば無念の極みだ。だ

が……。

無能者 恥知らず 役立たず。

周囲から聞こえる声が俺を責め立てる。……俺はどうやら、役に立てなかったようだ。

(……俺は結局、役に立てなかったのか……)

周囲の声に責められ、視界が滲み、涙が零れ落ちる。俺は……戦車として、兵器として……道具として……あの時と同じように何もできずに終わってしまったのか……。

「ちくしょう……！ ちくしょう！」

悔しい。俺は、弱いなりに、役立たずなりに力を尽くしたはずだった。だが、何の役にも立てなかった！ 俺に存在する意味はなかった！ ただいたずらに艦娘たちの足を引つ張るだけでしかなかったのか！

声をあげ、涙を流す俺を、周りは変わらず見下ろす。そして、徐々に彼らの姿が暗闇に掠れていき、俺の視界が再び暗闇に覆い隠されようとしたとき、不意に目の前に光が現れ、それは人のような形をして、俺に向かって近づいてきた。

「なん……だ？」

そちらに視線を向けるが、未だ動かない体では涙を拭えず、ぼやけた視界のままでは人影がだれなのか判別できない。

「帰るんだチヌ。お前にはまだやれる事がある。俺は、俺たちは、お前を認めているんだ」

人影が声をかけて俺に手を伸ばす。そして俺の意識は光の中に落ちていった。

「！」

目を覚ました俺は勢いよく体を起こす。そこは色々な機材が置かれた薄暗い室内……恐らくは工廠の中の部屋の一つだな。なんで俺はここに？

自分の体を見回すが、あの時に受けたはずの傷もなければ体を動かすのに不便もない。どころか、むしろ体から活力が溢れている。

「チヌさん？」

声の聞こえた先に視線を向けると、そこには何かの機材を詰め込んだ箱を持っている明石が立っていた。だが、少ししてその箱を床に落とすと、俺に向かって走り出した。

「チヌさん、大丈夫なんですか?! 体……平気なんですか？」

俺の服を掴んで聞いてくる明石の表情に俺は気圧される。

「あ、ああ。特に問題はなさそうだが……」

俺の言葉を聞いて明石は大きく息を吐くと、そのまま俺に向かってしな垂れかかって

きた。

「良かったー……本当にうまくいって良かった……」

「明石……その……事態を説明してくれると助かるんだが……」

事態が呑み込めず、困惑する俺に気づいたのか、明石が顔を上げて説明を始めてくれた。

「えつとですな……チヌさん、どこまで覚えてます?」

「あーと……ヲ級が艦載機を飛ばしてた時だな、その後からは記憶がない」

「わかりました。ではそこからの説明ですな」

軽く咳払いをし、明石は説明を始めてくれた。

「えつと……あの時ヲ級さんが艦載機で敵に攻撃したことで敵も動揺したんですよ。何とかヲ級さんがその隙をついて時間を稼いでくれてる間に第三艦隊が鎮守府に戻ってきたので敵は撤退。施設のほとんどが爆撃で被害を受けてしまったのでチヌさんを入渠させることもできず……最後の手段として、チヌさんを改造したんです」

「改造は言ってしまうえば一つ上の段階へ上がることです。改造を行ったときにその時点で受けていた傷が治るのは確認されていますので、チヌさんが助かったのはそのためです」

「そう……だったのか、運が良かった……のか?」

明石の説明を受けて俺は疑問を浮かべる。だが、それよりも次の瞬間に泣き出した明石に意識を奪われた。

「本当……危なかつたんですよ。あれだけの重傷を受けてる状態での改造なんて私もした事ないですし……そもそも、昨日までチヌさんは改造ができなかつたんですから！もし、もしもチヌさんが改造できないままだったら、そのまま死んでいたんです……死んでいたんですよ……！なんでもつと自分の命を大切にできないんですか！」

そう言つて泣きながら明石は俺を睨む。

「……心配をかけたし、手間をかけたのも悪いと思う。だが、俺にはあの時お前をかばわないという選択肢はなかつた。絶対に、お前を死なせたくなかつた。例え何度同じようなことが起きたとしても、俺はお前を庇い続ける」

そう、明石に比べれば俺の存在なんて価値はないんだ、明石が死ぬことに比べればなんて軽微な損害で済むんだ。それは俺自身よくわかつている……わかつているんだ……。

一瞬夢のことが脳裏をよぎり、暗い考えが浮かぶ。だが、それより意識を奪われたのが、明石の顔がみるみる赤くなつていく事であつた。

「う……あ……チ、チヌさん！いきなりそんなこと言わないでくださいー！」

そう言うと、明石は俺からそっぽを向いてしまった。その反応に俺はどう対応すれば

いいかわからず困惑してしまう。

「チヌさんが変な意味でそういうのを言ってるわけじゃないのはわかるんです……でも、私だって女ですから、面と向かってそんなの言われると恥ずかしいです……」

「あ、あーと……悪かった……」

謝りはするが、明石はそっぽを向いたまま顔を向けないし、俺もどうすればいいのかわからず、なんとも微妙な空気が漂うのを感じる。

「明石さん、チヌさんは大丈夫なんです……」

部屋の扉が開かれると不知火、まるゆ、飛鷹の三人が入ってきた。そして俺を見て、全員が目を丸くした。

「チ、チヌさん!? 瀕死だって聞いたのに、何してるんですか!?!」

「明石さん……まさか、チヌさんの治療にかこつけて粉をかけておこうと?」

「チヌ、明石、もうちよつとね、時と状況を弁えてね……」

「ち、違うんです。違うんです!」

三人の白い目に明石は顔を真っ赤にして否定する。まあ、実際変な空気にはなったが何もなかったしな。

「別に変なこととはしてない。それより……今の事態はどうなっているんだ? それにヲ級はどうなってる?」

俺が話を切り替えると、飛鷹があからさまにため息をついた。

「……まあ、チヌなら確かに変なことしないでしょね。で、今の状況よね」

「えつとですね……敵の撃退には成功したんですが、爆撃で入居施設を含めて施設の多くが損傷を受けています。それで、他の鎮守府から、工廠での作業を得意とされる夕張さんをお呼びして応急で施設を修理してもらっています。その間は他の鎮守府から来てもらった応援の艦隊によって防衛してもらっている状態です」

まるゆの説明を聞き、俺は改めて今回の被害の大きさにため息をついた。いくら訓練を基本とした鎮守府とはいえここまでやられるとはな……。

「そう……か。艦娘たちの被害は？」

「連合艦隊、支援艦隊共に小破、中破が複数。足柄さんと黒潮さん、響さんが大破しましたが、轟沈した人はいません」

「ただ、今は入居施設も碌に使えないから、修復は進んでないわ。明石はチヌの改造に昨日からずつとかかりつきりだったし」

二人の言葉を聞いて、俺は大きく安堵の息を漏らした。轟沈を免れたのなら……死んでいないのなら本当によかった。

「昨日……か。まあ、一日であの怪我が治ったんなら早いほうか」

「そうです！ 私頑張ったんですよ！ チヌさん、今度お礼ぐらいしてくださいよ」

「わかってる。……と言つてもお前が喜びそうな事かあ……」

困ったなあ、命を助けてもらったわけだし十分なお礼をしたいが、何分明石の好むものはわからない。工具一式でも送ればいいのだろうか？

「別に急ぎませんし、ゆっくり考えてくださればいいですよ」

「それでいいならまあ……」

さて、どうするか。取りあえず香取か提督にでも相談するか……。

「ゴホンゴホン……それで……チヌさんが治つたなら明石さんにも施設の修復をお願いしたいんですけど……明石さん、チヌさんは大丈夫なんですか？」

不意に不知火が咳払いをしてから明石に聞いてきた。いかんいかん、今は明石への礼の事を考えている場合じゃないな。

「いやあ、正直うまくいくかどうか不安でしたけど、うまくいきましたよ！ 改修を施したおかげでチヌさんの傷は全部治療できましたし、さらにパワーアップもしました！」
「……というこころしい。パワーアップに関しては正直実感はわからないんだが、ともかく傷は治つたみたいだ」

「そう……本当良かったわ。心配したんだから」

「ああ、心配をかけてしまつてすまなかつた……。ところで、ヲ級がどうなっているか知らないか？」

俺が聞くと四人は互いに顔を見合わせる。そして不知火が軽く頷くと、部屋の外に声をかける。すると扉の近くで待機していたのかヲ級がすぐに入ってきた。

「チヌ……無事でよかった。もう、傷は平気なの？」

「ああ、それは大丈夫みたいだ。ヲ級、助けてくれたこと感謝する」

俺が頭を下げると、ヲ級は首を横に振った。

「私はチヌのものだから……助けるのは当然」

「だが……これでお前は深海棲艦を明確に裏切った事になる。今更だが……良かったのか？」

「確かに彼女たちを裏切ることになったのは辛いけど……貴方のものになってから覚悟はしていたから」

そう言つて俺を見るヲ級になんとも言えない気持ちになる。

「？　なんかヲ級……話し方が流暢になつてないか？」

ふと、ヲ級の話し方が気になった。敵の襲撃を受ける前もつとこう、片言のような感じだったはずだが。

「それは私も気になりました。ヲ級、いったいどうしたんですか？」

「私もよくわからなくて……。飛鷹の甲板を使つてからなんというか……。こつちの話し方に自然となつたの」

ヲ級自身もよくわかっていないのか、首を傾げている。

「まあ、いいか……明石、俺はもう大丈夫なんだな？ それじゃあ、提督に復帰の報告をしにいきたいんだが」

「あ、それもそうですね。でも、何か体に不調があつたら絶対に無理しないでください
ね。いいですか、絶対ですよ」

「ああ、わかつてる」

俺はそう返事したが、四人ともどこか信用してないのが彼女たちの視線から感じられる。

「……三人とも、チヌさんが無理しないかどうか見てもらえますか？」

「いいわよ。どうせヲ級を提督のもとに連れて行こうとも思ってたしちょうどいいわ」

「私もいいですよ。確かにチヌさんは心配なので」

「任せてください！」

「……まあ、よろしく頼む」

こうして俺は四人を連れて提督室に向かうことになった。

第63話

こうして俺は四人とともに提督の元へ訪れた。幸い今回の襲撃では提督への被害はなかったらしく、提督は普段通り提督室で俺たちを迎えてくれた。

「チヌ、無事で本当によかったよ。今までも心配する怪我を負うことはあったが、今回は本当にダメかもしれないと聞いていた」

「ご心配をおかけして申し訳ありません。幸い明石のおかげでこうして無事でいられています」

提督の言葉に俺は頭を下げる。

「ああ、明石には報奨を出さないとな……。さて、既に不知火達から聞いていると思うが、今この鎮守府は各施設に大きな損傷を受けている。その為当分は他の鎮守府からの増援によって防衛を行いつつ、施設の修繕を急ぐという状況だ。幸い増援の夕張によって入渠施設の一部は修繕が終わっているから、そこに順次負傷した艦娘を入れているが……時間はかなりかかるだろ」

「君にも当分は防衛と施設修繕に着手してもらいたい。病み上がりなところ申し訳ないとは思うが、事態が事態だ」

「了解しました」

それはまあ当然だろう。施設が破壊されたままでは艦隊運用への悪影響は計り知れない。ほかの鎮守府の艦娘だっていつまでもここに張り付かせるわけにはいかないし。「提督、せめて一日ぐらいチヌさんを休ませられないでしょうか？　チヌさんは文字通り死ぬ寸前だったのですから」

「私もそう思うわ。ここで無理をさせてチヌがまた倒れたら元もこうもないし、改修を施せたって明石は言ってたけど、艦娘じゃないんだからちやんと経過を見たほうがいいんじゃないかしら」

「そうですね、どうにかならないですか？」

俺がそう思っていると、不知火、飛鷹、まるゆが反対意見を出してきた。言いたいことはわかるが、それを了承するつもりはない。

「三人とも、気持ちにはありがたいが今は状況が状況だ。俺一人休んでなんていられないし、そんなに余裕もないだろう」

「ああ。正直今は一人でも人手がほしい。申し訳ないが、チヌにはすぐに復帰してもらおう」

提督の力を入れた言葉に三人は渋々なながらも頷いた。

「さて次に……ヲ級についてだが」

その言葉に俺は無意識のうちに体に力を入れてしまう。ヲ級……提督はどう判断するんだ？

「彼女を正式に我が鎮守府専属の艦娘として登録する。これは上層部からの指示だ」
「なん……ですって!？」

その言葉に俺だけじゃない。提督を除く全員が驚き目を見開く。

「驚くのも無理はない。俺もそうだ。だが、事の次第を上に報告した時、上は確かにこの指示を出した。ただまあ……国民感情とかもあるからこの事は海軍の中だけ……特にこの鎮守府と上層部を除けば各鎮守府の提督と艦娘だけにしか知らされない。他のところにはあくまでも「飛鷹の三番艦が着任した」という形でしか報告はしないそうだ」
「もつとも、飛鷹の三番艦は存在しないから、そういう計画があった。というのをでつちあげるらしいがな……」

「そう……ですか。しかし何というか……」

続く提督の言葉を聞いても俺たちは碌に口を開けなかった。当然だ、深海棲艦を艦娘として登録するなど、本当に上層部は何を考えているんだ？ 最初の時といい、やけにヲ級に対して優遇しているような……もしも今回のことが知らればどれだけ非難が出るかわかっているだろうに。

「まあ……そう言うわけだ。飛鷹、ヲ級の世話を頼めるか？ 彼女に艦娘としてのイロ

ハを教えてやってくれ」

「了解したわ。でも三番艦ね……急に妹ができたって事なのよねえ……実感がないわ」
「妹……それじゃあお姉ちゃん、宜しくお願いします……」

飛鷹の言葉を聞いたヲ級が頭を下げる。突然のお姉ちゃん発言に飛鷹は少し戸惑ったようだが気を取り直して「宜しくね」と返した。

「提督、それでは彼女の名前はどのようなんですか？　ヲ級のままでは流石に……」

「ああ、それは追って決めることにする。今は取りあえず鎮守府の復旧が最優先だからな。ヲ級は取りあえず飛鷹と行動をしてくれ。不知火とチヌはともかく鎮守府の防衛と復旧に尽力してくれ」

「了解しました」

提督の言葉に俺たちは敬礼をし、それから提督室を後にする。それから飛鷹とヲ級は明石の元へ事情の説明へ。俺と不知火とまるゆは爆撃された施設の復旧のために現場へ向かう。ヲ級の事の衝撃は今も抜けていないが、今は最優先にしなければならぬ事があるのだと、自分に言い聞かせながら。

第64話

鎮守府への襲撃から一か月が過ぎた。幸いにもあれから敵の襲撃はなく、無事に爆撃された施設の修復を終えることができた。妖精さん達の技術や明石、夕張の手際はとんでもなかったな……。あの技術が外に広まれば建築業界の常識がひっくり返りそう
だ。

だが、どういふことか妖精さん達は鎮守府の外へ出ようとはしない。理由は教えてくれないが、まあそう言うものなんだろう。相手は人間じゃないんだからその辺の常識で
図つてはいけないのだろうきつと。

施設の修復が終わったことで各鎮守府から来た応援も各々の鎮守府へと戻つてい
た。その中にはこの鎮守府から他の鎮守府へ移動した顔見知りが多くいたので彼女た
ちの状況を聞いたりできたのはよかつただろう。革元提督から加古も来ていたが、しつ
かりと過ごせていたようだなによりだった。

また、上層部からの指示でこの鎮守府にも戦力の拡大を求められるようになり、それ
によつて他の鎮守府への異動が決まっていた幾人かは引き続きこの鎮守府に残ること
となった。また、新たな艦娘の増員も認められらと聞いている。もしかしたら、既に異

動している艦娘の中からもここに戻るものが居るかもしれない。まあ、それだけ先日の襲撃は大事であったわけだが。ヘタをすれば鎮守府陥落もあり得たかもしれないからな、というかヲ級が居なければ本当にそうだったかもしれない。

そんな事を考えながら、俺は隣で本を読んでいるヲ級に視線を向ける。彼女は艦娘の寮に住むことになった今も、こうして暇を見つけては俺の家に来て俺と一緒に過ごしている。流石に夜になったら帰るように言っているんだが、それでも結構な割合で普通に泊まりにくる。

そう言えば、ヲ級の引越しに伴ってヲ級監視の任務もなくなっただが、今でも艦娘は普通に泊まりに来てるな。まるゆはまあ同じ陸軍同士としてわからなくはないんだが、他のやつは何を考えてるんだらうか。

「……チヌ、どうかした？ 顔に何かついてる？」

「いやなんでもない、気にするな」

俺の視線に気づいたヲ級が小首を傾げてくるので俺はなんでもないと答えると、彼女は再び本に視線を落とした。

そんな時、家の扉がノックされた。俺が入るように促すと、入ってきたのは飛鷹と黒潮、不知火の三人だった。

「あ、やつぱりここに居たわね。ヲ級、提督が呼んでるわ。一緒に行くわよ」

「……チヌも一緒じゃダメ？」

そう言つてヲ級が俺の腕を掴んでくる。おい、親離れできない子供かお前は。

「チヌも一緒に良いわよ、どうせチヌも聞く事になるって言つてたからちようど良いわ」
俺も聞くことになる？ なんの事だろう……まあ行けばわかるか。

「じゃあ行くか、ちよつと待つてくれ」

そう言つて俺は立ち上がると軽く身支度を整え始める。

「早くしなさいよ。あ、不知火も黒潮も手伝つてくれてありがとう。もう帰つてもらつても大丈夫よ」

「いえ、折角ですのでこのままついていきます。司令官がヲ級に何の用事なのかも気になりますので」

「せやなあ。どうせヲ級に何かあつたらうちらにお鉢が回ってくるんや、先に聞いてくほうが手間かからんで」

どうやら二人も一緒に付いてくるみたいだな。まあ確かにヲ級に関しては二人に色々頼んできたから他人事だと思わないんだろう。俺一人じやできる事に限界があつたから仕方はなかつたんだが、申し訳ないことをしてしまつたな。

「よつと……待たせたな、三人とも」

「それじゃあ行きましようか」

こうして俺たち五人は提督室へと赴いた。そこでは普段通りの提督と榛名が俺たちを迎えてくれた。

「待っていたよヲ級……しかし、チヌはわかるとしてなぜ不知火と黒潮までいるんだい？」

提督が不思議そうに聞くがまあ当然の疑問だよな。

「なんや司令はん。うちらが聞いたらマズイ話なんか？」

「ヲ級になにかあると結局私たちが対応することになりますので、先に聞いておこうと思ひまして。ダメでしょうか？」

「ああ、いや、大丈夫だ。どうせすぐに鎮守府の全員に伝わる事だからな」

そう言うと、提督は机から一枚の書類を取り出す。それを榛名が受け取り、ヲ級へと手渡す。

「……艦娘としての正式な名前の決定？ 名前は……鷲鷹？」

「そうだ。鷲鷹。これが君の艦娘としての正式な名前だ」

そうか、ついに決まったのか。

「へー、鷲鷹かあ、悪くない名前ちゃうん？」

「そうですね、飛鷹さんの妹となるなら順当な名前ではないでしょうか」

「ええ。隼鷹と似たような感じになるかしら。改めてこれからよろしくね、鷲鷹」

三人が口々に思いを口にしていくが、その肝心の鷲鷹は……彼女にしては珍しく眉間に深い皺を寄せていた。

「? どうした鷲鷹」

俺が尋ねると皺を寄せたまま鷲鷹がこつちを向いてきた。

「……皆にお願ひ。私を呼ぶときはヲ級って呼んでほしい」

その言葉に全員の視線がヲ級に向いた。俺も怪訝な表情を浮かべてしまう。

「ヲ級、もしかして名前が気に入らなかつたのか? ならば上層部に名前の変更を願ひ出るが」

「……提督、そうじゃない。私が戦う理由が一番にチヌの為、二番目に鎮守府の皆の為、正直人類だとか国だとかはさして興味がない。だから、そう言うものを守る者としての名前には凄い違和感がある。自分が自分以外の誰かの名前で呼ばれてる気がして……正直嫌」

その言葉に俺たち全員が驚きの表情を浮かべてしまう。

「……イヤイヤイヤイヤ、何言うとするん鷲鷹、あんま我儘言うもんやないで。てか、人類とかに興味ないとか口にせんほうがええでホンマに」

「そうよ。と言うか本当何言いだしてるのよアンタは」

黒潮と飛鷹が諫めるがヲ級は眉間に皺を寄せたまま意見を変えようとしなない。どう

すればいいんだこれは。

「……鷲鷹、一つ聞きたいのだが。君はチヌに鹵獲された故に深海棲艦を裏切ったと言っていたな。それでも君にとってこの鎮守府の皆は戦う理由に値するというのか？」

提督のその言葉にヲ級は頷いた。

「……不知火も黒潮も飛鷹も、他の皆も、最初の頃は私を警戒してたしギスギスした雰囲気を感じたけど……しばらくしてからは口でなんだかんだ言っても私の事を邪険に扱わなくなってくれた。皆私を受け入れてくれて行つた。だから、私にとって鎮守府の皆も戦う理由になる」

胸を張つて堂々と宣言する鷲鷹の姿に俺たちは呆気にとられた。彼女がこんなハツキリと物事を宣言するような事などあつただろうか？ 俺は見たことがない。

「い、いやいや。ホンマ何言つとるんや鷲鷹、うちは別にあんたの事……」

黒潮が慌てた様子でそこまで言つたとき、鷲鷹は黒潮に視線を向けてきた。

「……そんな事言つても、黒潮も他の子もなんだかんだで私を相手してくれた。だから、チヌと貴女達が私の戦う理由」

そう、はつきりと宣言する鷲鷹。……困つたな、どうすればいいんだ？ 俺がどうすべきか悩んでいると提督のほうからヲ級に声をかけてきた。

「……ふむ、そうか……。わかつた鷲鷹……いや、ヲ級。今後も君のことはヲ級と呼ぶよ

うにしよう」

「司令官、宜しいのですか？」

不知火の問いに提督は頷く。

「ああ。確かにこれまでヲ級と呼んでいたんだ、無理に変える必要もあるまい。ただし、それはあくまでこの鎮守府の中での話だ。対外的には君はあくまで飛鷹の三番艦、鷲鷹だ。必要とあれば私たちもそう呼ばざるを得ない、それだけは忘れないでくれ」

「……わかりました」

提督の言葉にヲ級はしつかりと頷く。やれやれ、最初はどうなるかと思ったが、どうやら大きな問題にはならなかったな。

第65話

ヲ級の名前が決まってから一週間が経過した。結局、ヲ級の希望通り彼女の呼び方が変わらないため、鷲鷹の名前はほぼ書類上だけのものとなつている。まあ、それで特に問題は起きてないようだから、俺が何かを言うべきではないのだろう。

「まるゆ、お茶をとつてもらえるかしら？」

「あ、はい。どうぞ」

そんな事を考えながら腕立て伏せをしている中、不知火とまるゆがちやぶ台でやり取りをしている。今日は勉強というよりは雑談をしに来てる感じだな。

「……チヌ、ただいま」

そんな中家の扉が開かれ、ヲ級が入ってきた。その後ろからは飛鷹の姿もある。取りあえず俺は腕立て伏せをやめて二人に向き直った。

「ヲ級、ここはお前の家じゃないからそれはおかしいぞ」

「……だつて、ずっとここで過ごしてたんだもん。チヌも居るし」

「前半はわかるとして、後半の認識はおかしいと思うが……まあ取り敢えず上がれ。飛鷹も上がるか？ お茶ぐらいなら出せるが」

「ありがたく貰うわ。はあ……疲れた」

家が上がった二人はちやぶ台の近くに座るとまるゆが出したお茶を口にする。

「疲れたって……あ、そう言えば今日は飛鷹さんとヲ級さんで訓練されたんですって、どうだったんですか？」

まるゆの質問にヲ級が少し胸を張り、飛鷹が大きくため息をついた。

「……私の負けよ。それも、運が悪かったとかじゃなくて実力だよ……」

「……飛鷹に勝てた」

二人の言葉にまるゆも不知火も驚きの表情を作る。それは俺も同じだ、まだ艦娘として1か月ちょっとしか経っていないヲ級が飛鷹に勝ったなんて信じられない。

「……チヌに鹵獲された時の戦いの時から飛鷹には勝ってた。あれから飛鷹も錬度を上げて、あの頃の私より強くなってたけど、元々の地力は私が上だったし……軽空母と正規空母の差もある」

「くう……確かに防御力は低いけど、それでも正規空母並の活躍はしてきたはずなのに……悔しいー」

「……飛鷹はスピードが遅いから回避に難がある。防御力はそこそこあるほうだし……無理に回避して隙を作るより、最小限の被弾で動くようにするほうがいいかも」

拳を握り悔しがる飛鷹をヲ級が慰める。これは……驚きだな。ヲ級……いや、深海棲

艦にそれだけのポテンシャルが秘められているということなのか？　だとすればこの先の戦いどうなるか……。

「……チヌ、チヌ」

そんな事を考えていると、ふと隣にヲ級が来ていて、俺を見ていた。

「……私頑張つて飛鷹に勝つた……褒めてくれると嬉しい」

「ん？　あ、ああ。よくやったなヲ級、この調子で頑張つてくれ」

そう言つて俺はヲ級の頭を撫でる。するとヲ級は嬉しそうに笑顔を浮かべると俺に抱き着いてきた。こうしてみると、さつきまで戦いの事を考えてたのがバカらしくなつてくるな。深海棲艦が全員こうなつてくれれば……いや、こういう考えはやめよう。実戦の時に迷いが生じる。あくまでヲ級が特別なだけなんだ。

「……羨ましいなあ」

「くっ……もつと強くないと」

「私も……頑張らないと」

そんな俺たちを見ながら三人は何かを決意してるようだが、いったい何を決意してるんだろうか？　まあ、恐らくはヲ級に負けないうようにとの事なんだろう。

第十三章

第66話

先日の敵の襲撃より数週間。鎮守府が受けたダメージも回復し、既に通常任務を行えるようになっていた。

そんな中、俺はある衝動を持って余していた。それは……戦闘への衝動だった。
(資材も補充できたみたいだし、そろそろ出撃ができると……いいんだがなあ)

家で本を読みつつ俺は軽いため息をつく。明石によって改造を受けた事で俺自身強化されたらしいんだが……あれから一度も出撃することもできず、その力の確認もできていないし、俺自身から湧き上がる衝動の解消もできない。勿論状況が状況だったのだから仕方がないのだが……。

「チヌはん、なんや難しい顔しとるけどどないしたん？」

そんな事を考えていると黒潮が俺の背中にしがみつきつつ話しかけてきた。

「いや、なんでもない。黒潮こそ何か用か？」

「別になんもないで。ただチヌはんはんに引ッ付こう思っただけや」

そう言っつて腕に力を込めて更に引ッ付いてくる。暇なのか？ そんな事を思っつい

ると扉がノックされた。

「すみませーん、チヌさんいますか？」

「明石か？ ああ、いるぞ」

声をかけると扉を開けて明石が中に入ってきた。

「お邪魔しまーす。あら、相変わらず仲良しさんですね」

「へへー、そやろー」

俺たちの様子を見た明石の言葉に黒潮は笑顔を浮かべて更に俺にしがみついてくる。

「それで、何か用なのか？」

「あ、そうそう。実はですね、チヌさんの水上バイクに武器を追加したんです！ お時間

あるみたいで少し見に来てください！」

……そう言えば、あの水上バイクにも将来的に武装を付けたいとか最初の頃に言っ

たな。

「わかった、すぐに行こう。黒潮、そう言うわけだから離れろ」

「ほいほい……あ、そうや。明石はん、うちもそれ見に行つてもええやろか？」

「勿論です！」

明石から了解を得た途端黒潮はいそいそと俺から離れて外に出る準備をする。俺も軽く身支度を整えると二人と共に工廠へ向かった。

工廠に着いた俺たちを明石は奥の作業場へ案内する。そしてそこで見たのは鎖で宙に釣り上げられている水上バイクだった、そしてその側面には二本ずつ魚雷がセットされている。

「新しい武器って……魚雷なのか？」

「はい。53cm連装魚雷を左右に装着しました。いやあ苦勞したんですよ。魚雷を装着しても全体の重量の増加を防いだりバランスが悪くなったりしないように、防御力をそのままの薄い装甲を作ったりしないといけませんでしたからね」

そう言うって得意げに胸を張る明石。全身で自分はいいい仕事ををしたと主張している。

「……その情熱はこれより艦娘の艦装のほうに向けるべきだと思うんだが……というかなんで魚雷なんだ。主砲はまだなんとかなったが……魚雷の事なんて俺はまったくわからないぞ」

「いやあ、機銃じゃ流石に敵に損傷を与えるのは難しいですし、かと言って主砲を装着するにしてもチヌさんが以前使って12cm単装砲ぐらいでしたから……今のチヌさんなら14cmを装備できますから、あんまり意味はないかなあと」

「ああ、そこは改造の恩恵だな。……で魚雷なのか？」

「はい。これなら攻撃の手段も増えますし、悪くないかなと」

確かに攻撃の手段が増えることは悪くない……悪くないんだが。

「明石、さつきも言ったが、主砲ならまだしも魚雷の扱いなんか俺はまったくわからないぞ。概要的なものぐらいいは勉強したが、流石に使えと言われると……」

そこまで言ったとき、後ろから背中を叩かれる。振り向くと黒潮が俺を見上げていた。

「チヌはん、安心しーや。このメンバーはほとんどが魚雷使えて、香取先生もおるねんで。いくらでも練習に付きおうたるがな」

「……そう言ってくれるのはありがたいが、良いのか?」

「大丈夫や。それに例え不知火や響が見捨ててもこの黒潮はチヌはんの事見捨てたりはせーへんからな」

そう言っつて胸を叩く黒潮。確かにそう言っつてくれると自然とありがたみを感じてしまふ。……見た目とのアンバランスさは気にしないでおこう。

第67話

水上バイクに魚雷がつけられてからまず数日をかけて俺は魚雷の使い方を学び、そしてそこから数日かけて海上の的を目標とした実訓練を受ける。そして改めて黒潮を相手とした訓練を行って……。

俺はこれ以上ない程にボコボコにされた。

「ゲホッ……ゴホッ……」

なんとか這い上がった水上バイクの上で俺は盛大に咽る。さつきから何回落とされたか、数えるのも嫌になってくる。最初のころの水上バイクの特訓よりも落ちたぞ……。当然だが黒潮には一発とて当たっていない。

「チ、チ又はん。大丈夫かいな？ 今日はどうやめよう？ これ以上続けても明日が大変になるだけやで」

俺の背中をさすりつつ黒潮が声をかけてくる。確かに……これ以上はダメだな……。

「そう……だな……。悪かったな……。ここまで付き合ってもらって……」

「なに言うとするんやチ又はん、これぐらい当然やで。さ、今日はもう帰ってゆつくり休もうや」

「ああ……」

残った力を振り絞り、俺はなんとか出撃ドックまで移動する。そして水上バイクをしつかりと固定すると、よろめく足で何とか家まで戻り、そのまま床に倒れこんだ。

「もう、チヌはん初日から飛ばしすぎやで。明日からはもうちよつと加減せな」

「ああ……しかし……魚雷の扱いがこうまで難しいとはな……主砲や機銃とは勝手が違いすぎる……」

「それそうやで。簡単に扱えるなら苦労せえへんつて。それよりチヌはん、風呂ぐらい入りにや。そんな海水塗れのまんま寝たらアカンで」

「ああ……ちよつと待ってくれ……」

俺はなんとか気力を振り絞って立ち上がり、タンスから着替えを取り出して風呂場へ向かう。……さつと済ませないと途中で寝そうだ。

「……チヌはん大丈夫なんか？ 風呂場で寝たりせえへんか？」

「……遅いと感じたら様子を見に来てくれ。正直……寝そうだ」

そうなんとか絞り出すと、俺は覚束ない足取りのまま風呂場に入る。そして適当に服を脱ぐと湯船に湯を張る。その間も眠気が押し寄せてくるが、なんとかそれに対抗しつつ、なんとか湯が溜まっていくと、手早く体を洗ってから湯船に浸かる。

「ふ……う……」

湯に使った途端に一気に気が抜ける。風呂は良いものだと言うことを実感するが……だめだ、このままじゃ本当に寝てしまう。俺はなんとか体を起こすと浴室から出る。温まった体が外の空気で冷える中、少しだけ眠気の覚めるなかで手早く服を着て脱衣所を出た。

「あ、チヌはん。布団敷いておいたけど……早ない？ 体洗ろたんか？ それにちゃんと温まれてないやろ」

「……一応は洗ったが、湯船に浸かっているだけで寝そうになった……。起きてから改めて入る」

そこまで言うと、俺は布団の上に倒れこむ。流石に限界が来ていた。

「あく、やつぱさうなつたかあ……しゃあないなあ、今日はうちが添い寝したるからゆつくり寝えや」

黒潮がそんな事を言っているが、もう反論する気力もない俺はそのまま眠りに落ちていった。

第68話

初日から一種間、あれから黒潮だけでなく不知火、響、暁のような比較的付き合ひのある駆逐艦だけじゃなく香取や足柄、羽黒と言った巡洋、重巡のメンバーにも手伝ってもらつてゐるが、成果は相変わらずだ。かすらせる事すらできない。

まあ、それでも最初のころに比べればマシにはなつてゐるだろう。というよりも流石にあれだけ訓練して何も成長できなかったら明石に魚雷を外すよう頼むつもりではあつたが……。

「うわあ！」

そして今日も不知火に海面に叩き落される。なんとか浮上して水上バイクにしがみ付くが、体が疲労でうまく動かせず中々這い上がれない。

「チヌさん……大丈夫ですか？ もう五十回落ちてから数を数えてませんよ」

「そんなにか……悪いな、そんなに付き合せて」

なんとか俺を引き上げてくれた不知火に礼を言う。

「それは構いません。ただ……流石に訓練の度が過ぎています。少し控えめにされるほうがいいと思います」

そう言うって不知火は心配そうに俺を見下ろしてくる。言いたいことはわかるんだが……。

「そうしたいんだが……折角明石が付けてくれたからな。それに魚雷が使えれば少しは役に立てるかもしれないだろ。せめて牽制にぐらい使えればないよりマシだろ」

「それはそう……ですが」

不知火が何かを言いよどむ。なんだ、何か言いにくいことでもあるのか？

「……あ、そうか。俺みたいなの戦車の訓練で使う魚雷が勿体ないか。そこは失念してたな、それに不知火の時間も使わせてしまつて……」

そう口にした途端、不知火に横から突き飛ばされて再び水の中に落ちる。

「ゲホッ！ 不知火、何を！」

「チヌさん、その発言は看過できません。いい加減にその辺りの発言は控えてください」

そう言うって俺を冷たい目で見降ろしてくる不知火。いや、こうも上達しないんじゃないや無駄使いと言われても……それより……。

「ゲホッ……ああ、悪かった、悪かったから引き上げてくれ……腕が……」

水上バイクを掴んでこしているが、力がうまく入らない。救命胴衣を着てるから水没はしないが、このままじゃ浮いてるだけで登れそうにない。

「……わかりました」

まだ冷たい目をしているが、不知火は不承不承ながら俺を引き上げてくれる。だが、引き上げられた俺はもう動く気力もなく水上バイクに倒れ伏す。

「あの……牽引したほうがいいですか？」

「……悪いが頼む……さっきので本当に体力を使い果たした……」

その言葉に不知火が少し眉間に皺を寄せるのが見えたがもう反応する気力もない。それに気づいたのか、不知火は何も言わずにそのまま水上バイクを牽引してくれた。

出撃ドックまで戻ると、ちょうど手の空いていた明石に水上バイクのことを頼んで俺は家に戻る。道中不知火が俺を支えてくれなかったら道の途中どこるか出撃ドックの中で寝てたかもしれない……。その証拠に、俺は家に帰り着くとそのまま着替えも何もせずに床に倒れ伏してそのまま寝てしまったのだから。

「う……ん……」

薄ぼんやりと視界が開けていく。最初に視線に入ったのは見慣れた天井であった。

「あれ……俺は……」

体を起こすと上半身から布団がずり落ちる。確か俺は家に帰ってきて……。

「ようやく起きましたか」

左から声が聞こえたのでそちらを向くと、そこには香取の姿があった。淡々としてい

るが……なんか怒ってないか？

「香取？　なんでここに？」

「不知火さんから連絡を受けてきたんです。あの子は任務がありましたし、放っておくのは忍びないとの事なので。それより、何をやっていらっしやるんですか、連日過剰な訓練を続けているなんて。他の子との訓練でも私の時同じようになっていたなんて」

そう言つて俺を睨み付ける彼女の視線からは、俺が起きた直後に感じたものよりも怒気が込められているように感じた。

「仕方がないだろう、戦車の俺には魚雷の使い方は馴染みがなさすぎる。体が覚えるまで何度でもやらないと……とは言え、流石にこれじゃあ他のことに支障をきたすし……そうだな、訓練の時間は減らすようにしよう」

流石に連日寝落ちする程の訓練はやめておくか。実戦でミスをやらかすほうが怖い。

「はい、そうしてください。ところで、お腹は空いてないですか？　もう二〇〇〇を過ぎていますよ」

そう言われて近くの時計を見ると確かにもう二〇〇〇時を過ぎている。どうりで外が暗いわけだが……言われたら確かに空腹感を感じる。

「確かに……腹が減ったな。問宮で何か食べるか……。香取も起きるまで居てくれてすまなかつたな、もし食事がまだなら問宮で奢らせてもらいたいんだが、構わないか？」

「ええ、遠慮なく頂かせてもらいます……ですが、チヌさんはまずお風呂に入ってください。海水を浴びたまま寝ちやってるんですから、まずは体を洗ってくださいね」

「ああ、わかった、ちよつと待っていてくれ」

香取に言われ、俺は風呂に入って体をしっかりと洗う。そして風呂から出ると香取と共に間宮で食事をとり、その後は特に何事もなく翌日を迎えることができた。

第69話

香取に怒られてから一か月。俺は時間こそ減らしはしたものの、変わらず魚雷の訓練を続けていた。俺自身最初のころに比べれば上手になつては来てると思う。少なくとも的当てなら外すことはなくなつた。だが相変わらず対人訓練になるとまったく当てる事はできなかつた。

「……はあ……」

家で本を読みつつ、俺はため息を出してしまう。まさかここまでまともに運用ができないとは思わなかつたな……そろそろ明石に魚雷を外すよう頼むべきか……。

「なんやチヌはん、ため息なんてついてたら幸せが逃げてしまふでー。ほれ、スマイルスマイル」

「……笑顔を浮かべられる状態ならそうするよ……」

俺の背中にしな垂れてきた黒潮が俺の顔の横から笑顔を浮かべてくる。黒潮が俺を慰めようとしてくれるのはわかるんだが、とても笑顔を浮かべる気分にはなれなかつた。なにせ一か月の訓練で未だに実戦で使えるほどの上達が見込めてないんだ。対空機銃の訓練ではもっと早い時間で実戦で使える程度には扱えてきた事を考えたら上達

の遅さが際立ってくる。

そんな事を思っていると、家の扉がノックされ、不知火が中に入ってきた。

「黒潮、やつぱりここに居ましたね。探しましたよ」

「ん？ なんや不知火、どうかしたんか？」

俺にしな垂れたまま黒潮が不知火に視線を向ける。それを見た不知火が僅かに眉間に皺を寄せたように見えたが、まあ気のせいだろう。黒潮が俺にこうしてスキンシップを取ってくるのも前々からだしな。

「秋雲の着任の報告が来ました。近いうちにこの鎮守府に来るそうです」

「え、秋雲が来るんかいな。そうかー、楽しみやなー」

黒潮がそう言って嬉しそうに笑う。なんだ、知り合いなのか？

「二人とも、秋雲って言うのはどういう艦娘なんだ？」

「秋雲は私たち陽炎型の艦娘です。……と言っても当時は陽炎型と夕雲型がかなりごっちゃになっていたもので、秋雲自身も夕雲型だと思っていたのですが……」

「そうやったなあ。まあ秋雲自身特に気にもしとらんからうちらも気兼ねのー接してるけどなあ」

「なるほどな……まああの頃は戦争のせいで色々と混乱があつたわけだからな。で、その秋雲がこの鎮守府に着任すると」

「はい。悪い子ではないのでチヌさんとも仲良くできると思います。チヌさんも仲良くしてやってください」

「そやでー、可愛い可愛いうちの妹や、悪いことしたらうちが許さへんからな」
「わかってる。変なことはしないよ」

新しい艦娘か……さて、どんなのが来るのか。俺は訓練のことは一時おいて、秋雲という艦娘について考えるのであった。

第70話

不知火から知らせを受けてから数日後、無事に秋雲は鎮守府に着任した。そして家で筋トレをしていた俺の元にも彼女は挨拶に来た。

「どうも、陽炎型19番艦秋雲です。宜しくお願ひします」

「三式中戦車チヌだ。宜しくお願ひする」

頭を下げてきた秋雲に俺も頭を下げて挨拶する。

「いやあ、チヌさんの事は不知火や黒潮から聞いてたけど、本当に戦車が居るんだねえ、驚いたあ」

「秋雲、チヌさんに対して失礼な物言いをするのはやめなさい」

秋雲の言葉に不知火が釘を刺すが、まあ当然の反応だからなあ。

「気にするな不知火、当然の感想だ……堅苦しく構えなくて大丈夫だ。俺自身そうしようとして拒否されたからなあ」

「へえ、話がわかる人なんだねえ。正直堅苦しいのは苦手だねえ。よろしくねえ」

そう言つて差し出された手を俺も握り、握手する。

「まったく……それではチヌさん、他の方への挨拶が残っていますので私たちはこれで

失礼します。行きますよ秋雲」

「はいはいっと。それじゃあねチヌさん」

そう言い残し、二人は俺の家を後にした。しかし、19番艦か。陽炎型は本当に数が多いんだな。まあ、不知火と黒潮の妹だ、悪い奴じゃないだろう。

秋雲に対してそんな印象を持った3日後。俺は魚雷の訓練の為に訓練場に来ていた。さて、今日は少しは上達することができるといいんだが……。

「あれ、チヌさんじゃん。特訓なの？」

声をかけられその方向を向くと、そこには秋雲の姿があった。艦装を持っているということは彼女も特訓なのだろう。

「ああ、少しでも特訓をしておかないと、俺じゃあ役に立てないからな。秋雲も特訓か？」

「そだよー。あ、じゃあさ、一緒に特訓しない？ 対戦形式とかどうよ？」

対戦形式か……まあ、俺じゃ艦娘には勝てないが、俺にとつてはありがたいし、秋雲からしても動物的のほうがやりがいがあるだろう。

「それは構わない。さっそくやるか？」

「ほいほい。じゃあちやちやと準備をするからちよつと待つててね」

そう言うのと彼女は艦装の確認を行う。俺がそれが終わるのを待つていると、ふと視界

の端に黒潮の歩いている姿が見えた。すると黒潮も俺に気づいたのか、歩く方向を変えて俺のほうに来る。

「黒潮、何やってるんだ？」

「うちはちよつと散歩やで。あれ、秋雲もおるやん。何するんや？」

「あ、黒潮。私今からチ又さんと特訓するんだ。黒潮もどう？ 一緒にやらない？」

「そやなー。チ又はんが居るなら一緒にやるで、ちよつと待っててなー」

そう言うのと彼女は工廠に向かつて走り出し、しばらくして艀装を持って戻ってきた。その頃には秋雲も準備を終えて水面に立っていた。

「お、黒潮来たねー。じゃあ、黒潮が準備してる間に対戦しようかチ又さん」

「へ？ 秋雲、チ又はんと戦うんかいな？」

「そだよー。いやー、チ又さんが実際にどれだけ戦えるかとか気になるしさー」

それを聞いた黒潮が何か微妙な顔をしている。どうしたんだ？

「あー……秋雲、チ又はんと実戦形式はやめとくほうがええんとちやう？」

「えー？ 大丈夫だよ。いくらなんでも怪我させるような事はしないってー」

「いや、そうやなくてな……そのなあ……」

「なにー？ そんなに心配なの？ 大丈夫だってー、秋雲の事信用しなよ。さ、始めよう

チ又さん」

「ああ、宜しく頼む」

何か言い淀む黒潮を置いて俺たちは海上を進んでいく。そしてある程度陸から距離が離れた所で互いに向き合った。

「じゃ、行つくよー」

秋雲の声を合図に俺たちは訓練を開始した。

特訓開始から五分後。そこに居たのは煙を上げて海面に座り込む秋雲と、ほぼ無傷の俺であった。……何を言ってるかわからない？俺もわからない。

「いたーい！　なんで、なんでチヌさんこんな強いのださー！」

「俺が聞きたい……じゃない。秋雲こそ一体どうしたんだ？　どこか調子が悪いのか？」

「それとも艤装に異常でもあるのか？」

「あーあ、やっぱりこうなったかあ。予想通りやで」

困惑する俺たちの元に呆れ顔の黒潮が来た。だが、予想通りとはどういうことだ？

「黒潮、どういう事さ？　もしかして、チヌさんって実は戦車じゃないとか？」

「ちやうちやう。単純な実力の差や」

「いや、何を言ってる黒潮、実力って……戦車の俺がどうやって艦娘に実力で勝てるとうんだ？」

黒潮の言葉に俺も秋雲も困惑する。

「あのなーチ又はん。どんだけ実戦と訓練してきとるのか自分でわかったらんのか？ぶっちゃけ、時間だけで言えばとうにこの鎮守府から別の鎮守府へ異動になるぐらいの経験をしとるんやで」

「いや、だからって、艦娘に勝てるわけがないだろう」

「あんなあ、チ又はん元々深海棲艦を倒す力があるんやから、艦娘相手にかて勝つ力があるんやで。で、チ又はんの特訓の相手しとるうちらは、自慢やないけど前線の鎮守府に配属される事も視野に入れられとるぐらい錬度が上がつとるんや。こないだの鎮守府への襲撃でそういう話はのうなつたけど、そんな艦娘を相手にチ又はんはずつと訓練してきとつたんや、強くならんほうがおかしいで」

「……そんな事があるというのか？俺が艦娘より強くなるだと？ そんな馬鹿な。」

「あ、でもなー……言いくいんやけど、チ又はんは確かに強うなつたけど、それでもやっぱ上達の色度は遅いし、多分ちゃんとして訓練と実戦をこなした艦娘相手やと勝てへんと思うわ。あくまでも、十分な実力のない艦娘相手ならんとか……つてぐらいに考えてーや」

「なるほどな……ああ、納得できたよ」

続く黒潮の言葉に俺は安堵の息を漏らす。艦娘が俺に負けるような弱さだなんて

シヤレにもならないからな。

「なーんだ。それじゃあ別に秋雲が弱いつてわけじゃないんだー。あー、良かったあ」
黒潮の言葉を聞いた秋雲もホツとしたのか胸を撫で下ろしている。だが、そんな彼女に黒潮が容赦なくチョップを叩き込んだ。

「アホウ、いくらチ又さんのほうが強いうてもなんや秋雲のあの戦い方は。大方チ又はんの事を舐めてかかったんやろ。そうやなかつたらあんなあつさり当たったりなんかせえへんで。次からは注意するんやで」

「アテテ……わかったよー。秋雲だつて悔しいし……チ又さん、次からは本気で行くからね」

「ああ、是非そうしてくれ」

頭を抑えながらも、彼女の声には先程まではなかつた真剣さが感じ取れた。どうやら本気になったようだな。このまますぐに俺を追い抜いてくれるといいんだが。

第71話

そんな事があつてから一か月。秋雲は毎日欠かさず訓練と実戦を行い着実に錬度を上げていった。そして今日、俺との特訓で俺は彼女の放った魚雷を回避できず、水上バイクから見事に叩き落された。

「よしー。よしー。やっとチヌさんに勝てた！ やったー！」

俺に勝てたのが余程嬉しいのか、全身で喜びを表現する秋雲。やれやれ、これでやっと彼女も一人前……あれ、なんで俺が艦娘の試金石みたいな状態になってるんだ？

「へっへー。どうよチヌさん。秋雲強くなったでしょ」

水上バイクにしがみ付きながら頭に浮かんだ疑問について考えている俺に秋雲が近づいてくる。

「ああ、一か月でここまで強くなるとはな。凄いな秋雲は」

「あー……そんな素直に称賛されるとなんか調子狂うなあ……ま、いつか」

そう言うとな彼女は俺を引っ張り、水上バイクの上に乗るのを手伝ってくれた。

「ねえチヌさん。秋雲けっこう頑張ったんだよ。だから、何かご褒美とかあつてもいいと思わない？」

「そうだな……間宮の特別チケットでいいか？」

「お、それも貰うけどさー。それと別に、チヌさんの絵を描きたいんだけど、いいかな？」

「絵？ それは別に構わないが……何かにでも使うのか？」

秋雲の要求に俺は首を傾げる。俺の絵なんかどうするんだらうか？

「いやいや、使うとかそんなのじゃないよ。単に描きたいだけだから。趣味だよ趣味」

趣味か。まあ、そういう趣味もあるんだらう。

「わかった、じゃあまた絵を描くときは言ってくれ。いくらなんでも今から描く。なんては言わないだろ？」

「そりゃそうさ。まずはチヌさんから貰う間宮のチケットで自分にご褒美上げないかね」

そう言うとな彼女は早く俺にチケットを渡すようにせがんでくる。仕方がないので俺は訓練を中断し、彼女にチケットを渡すために家に帰る事になった。

秋雲が俺に勝てるようになってから更に一か月が経過した。俺は図書室で勉強をしながらも、彼女の今後のことについて考えてしまう。既に俺では完全に勝てないまでに錬度も上がっており、あれなら別の鎮守府でもやっていけるだらう。これまでの例ならそ

ろそろ彼女も別の鎮守府に異動する話が出てははずだが、彼女は どうするつもりだろうか？

「あ、チヌさん居た居た」

声をかけられその方向を向くと、秋雲がこつちに向かつてきていた。俺を探していたようだが。何か紙を持つてるのはなんだろうか？

「秋雲、どうかしたのか？」

「いやね。これあげようと思つたんだ。ほら、チヌさんの絵だよ」

そう言つて彼女が差し出した紙を見ると、確かにそこには俺の絵が描かれていた。水上バイクに乗つて訓練をしている時の姿だが、よく描けている。色まで付けてるし……趣味どころか、これで食つていく事も十分できるんじゃないだろうか。

「……凄いな、こんな上手な絵なんて、俺は初めて見たぞ」

「へっへー。どうよこの秋雲の実力、御見それした？」

「ああ、御見それしたよ、よくできてる。こういう事ができるのは素直に凄いと思う」

俺が掛値なしに褒めると、秋雲の顔が少し赤くなつた。

「あー……チヌさんつて本当に素直に褒めてくれるよねえ。あんま素直に褒められても照れるよ」

「そう言われても困るが……しかし、本当に貰つてもいいのか？ けっこうな手間がか

かったんじゃないのか？」

「んー？ 大丈夫大丈夫。だって、これからまた描けばいいんだからさあ」

そう言つて彼女は笑みを浮かべる。まあ、確かに、彼女なら実物を見なくても十分描けそうだな。

「そう言うわけだからさ。これからも宜しくねチヌさん」

「ん？ これからも？ ……秋雲は異動しないのか？」

秋雲の言葉に首を傾げると、秋雲は多少大げさだが、驚いたような表情を浮かべた。

「ちよつとちよつと。さつきチヌさんの絵をこれからも描くつて言つたじゃん。実物もなしに絵描くと思つてるの？」

「秋雲なら十分できそうだが……異動はしなくていいのか？ お前の実力ならもう他の

鎮守府でもやつていけると思うが」

「いやあね。ここの鎮守府つて戦力の増強求められてるでしょ？ だからさ、秋雲もそれに加わろうと思つてるんだ。不知火や黒潮がいる鎮守府だしねえ」

確かに先の鎮守府襲撃以来、ここは戦力の増強を図つてはいるが……。

「確かに戦力増強を図っているが、秋雲はいいのか？ 他の鎮守府なら他の陽炎型や夕

雲型も居るんだろ？」

「いやあ、皆にはまた機会があれば会えるしねえ。それより、私は今はチヌさんのほうが

興味あるんだよ」

「……俺に興味？」

秋雲の言葉の意味が分からず俺は首を傾げる。俺は別に彼女にとって興味深い何かがあるとはとても思えないんだが……。

「そう、艦娘を除いて唯一深海棲艦を倒す……だけじゃなくて鹵獲まで成し遂げた戦車。興味がわからないほうがおかしくない？」

「ああ、そう言うことか。確かにそれならまあわかるが……」

そこまで言った時、不意に秋雲が俺に顔を近づけてきた。

「まあ、それだけじゃなくてさ。チヌさんの人柄とかにも興味があるんだ」

「……なんだそれは？ 俺は別にそんな面白い性格はしてないと思うんだが……」

「いやあ、興味あるよ。だって、あの不知火が一人称変えてまで、自分をよく見せようとしてるんだよ？ 黒潮は懐いてるし……実は秋雲も好きって思ってるんだよね。陽炎型の三人が揃って好きになるなんてさ、そりゃ興味ないわけないじゃん」

そう言つて彼女は俺に顔を近づけ、とても良い笑顔を浮かべた。

「……は？」

「ま、そう言うわけだからさ。秋雲はこの鎮守府に残るよ。それじゃ、また新しい絵を描くからね」

そう言い残して秋雲は図書室を後にした。

「好きって……いきなりなんなんだ？」

秋雲の言葉に俺は首を捻る。確かにここ二か月程の間は彼女とよく交流していたし、訓練でもよく相手をする事があった。だが、それが好きなんて感情に結びつくか？

「……ああ、同僚としての好きか。それならまあ……わかるか」

しばらく考えた俺はそう結論を出して図書室を後にする。勉強の途中ではあるが、彼女から貰ったこの絵をちゃんとしまつておかないとな。

うつわあ……恥ずかしい！ 超恥ずかしい事言っちゃったよ自分！

図書室を出た私は急いで離れる。うわあ、自分の顔がめっちゃ赤くなってるよ。こんな誰かに見られたらシャレにならないって。

取りあえず近くの物陰に隠れて深呼吸する。……よし、落ち着いてきた。

「まったく、不知火、黒潮だけじゃなくてこの秋雲さんまで落とすなんて、まるで同人誌の主人公だよねえ。いやあ、そんな人が実際に居るなんて思わなかったよ」

そう呟きながら、チヌさんとの二か月を思い返す。特訓の時にはいつも真剣に付き合ってくれて、実戦で私がミスって怪我した時には背負って入居施設まで連れて行って

くれたっけ。それに、何かと秋雲に気を使ってくれたし……。

「……チ又さんってなんだろうなあ、お父さんって感じに近いけど、絶対にそれだけじゃないよね。天然たらし？ ジゴロ？ ……完全に無自覚なんだよねえ」

ぶつちやけ、普段の彼のやり取りからは下心の類なんて一切感じない。もしそんな気があるなら不知火や黒潮があんなに懐くとは思えないし……何より秋雲だってそんな人を好きになんかならないしー。

「あー、もう。変に考えるなんて秋雲らしくもない。こうなったらなんでチ又さんが好きになったのか、じっくり観察してやるんだから」

どうせあの人の性格のことだ。私以外にも同じような態度で接してるだろうし、私と同じように思ってる艦娘もいるはず。彼女たちに話を聞いたりして、なんとか探ってみて……。

「最高の一枚を描いてプレゼントしてあげたら、きっとこの秋雲さんが本気だってわかるはず！ 頑張るぞ！」

拳を突き上げ、私は宣言する。絶対にチ又さんを振り向かせてやる！

第十四章

第72話

その日、俺は提督から呼び出しを受けた。さて、提督室に呼び出されるときは大抵が任務を言われるのだが、今回はどうなのか……。

「来てくれたかチヌ。早速だが、君に頼みたいことがある」

提督室に入ると提督がいつも通り俺を迎える。さて、今回は何を言われるのか？

「実はだな。私は一週間後から出張に出る。その護衛を君に頼みたい」

「出張ですか？ いったいどこへ？」

「ああ。愛知県にある鎮守府の村中提督と近々共同作戦をする予定だから、その打ち合わせに向かうつもりだ。今回はヲ級……いや、鷲鷹のお披露目も兼ねることになる」

その言葉に俺は無意識のうちに体に力を入れてしまう。鷲鷹……正式にヲ級に名付けられた艦娘としての名前。あの襲撃からそこそこの日にちが経過し、彼女はこの鎮守府のメンバーとの連携は十分にできるようになっていた。だが、他の鎮守府の艦娘との連携か……。

「提督の目から見て、鷲鷹は問題はないのでしょうか？」

「ああ、実力だけでみれば既に飛鷹を超えている。それに不知火や響も一緒に行かせる予定だからフォローも大丈夫だろう。まあ……問題は彼女が驚鷹の名前にちゃんと反応できるかなんだが……な」

その懸念は確かにある。正式に驚鷹の名前が名付けられこそしたが、彼女の要望で、今でも呼び名はヲ級のままで。せめて今日からでも驚鷹と呼ばれることに慣れさせないとダメだな。まあ、それはさておき。

「それで、私が護衛……ですか。提督ほどの地位ならば海軍から護衛の兵士ぐらい用意されるのではないのですか？ 私は確かに人間より強いですが……護衛任務で必要な専門知識を持つてはいません」

「ああ、海軍からも来てもらうが……鎮守府に所属していない以上は彼らは外部の人間だ。どうしても完全な信用はできない。そもそも上層部の連中があんまり信用しきれないのもあるんだがな。まあ、ぶつちやけるとチヌ一人に護衛してもらうほうが良いと思うのが正直な気持ちだ。そう言うわけで来てもらうぞ」

やけに過大評価を受けてるが……任務なら仕方がないか。しかし……愛知か。確か、藤村さんが神主を務める御上神社があつたはずだが……ダメだな、提督の護衛として行くのに勝手に行くのは無理だ。

「護衛の任務については了解しました。提督と海軍の兵士以外には誰か来るのでしよう

か？」

「ああ。鷲鷹を初めとして、合同作戦に参加する榛名、不知火、響、飛鷹の五人が参加する。私が留守の間は香取が代理を任せて、移動は陸路を使う」

うちの主要メンバーを連れていくわけか。あれ、空母二人とも連れていくのか？

「提督、鷲鷹と飛鷹がいない間は空母はどうされるんですか？」

「そちらは革元のところから隼鷹を派遣してもらう。彼女なら十分だろう、他に質問はあるか？ なければ退室しても大丈夫だぞ」

「了解しました。では、失礼します」

返答しながら俺は一週間後のことを考える。陸なら大丈夫だとは思いますが、念のため万全は期しておかないといけないな。

第73話

翌週、俺たちを乗せた護送車は愛知に向けて出発した。流石に距離が距離なので途中で新幹線に乗る事になったが、グリーン車を一両貸し切りにしたりと中々に豪勢な手段を使って移動する。まあ、護衛の事を考えればこれぐらいはするんだろう。そして名古屋駅で降りると再び護送車に乗り、なんとか無事に目標の鎮守府に到着した。

鎮守府に付いた提督以下、作戦に参加するメンバーは向こうの村中提督とメンバーと顔合わせ等をするために作戦室に籠った。その間俺は客室に案内されたが、驚いたこと案内してくれたのは以前うちの鎮守府に所属していた利根であった。

「久しぶりじゃなあチヌよ。提督や榛名達も元気そうで何よりじゃ」

「ああ、久しぶりだな利根。そっちも元気そうで何よりだ。ここではうまくいけてるのか?」

「うむ。村中提督は少々厳しいところもあるが優しくもあつてのう。艦隊の指揮も手馴れておるし、特に大きな問題はないぞ」

そこまで言った所で、利根が俺の座っているソファアの向かいの椅子に座り込んだ。

「ところでチヌよ……あの例のヲ級じゃが……本当に大丈夫なのか? 吾輩はどうにも

心配でな」

ああ、まあ当然の反応だよな。俺が利根の立場でも間違ひなく同じ心配をする。

「信じにくいとは思うが、鷲鷹は俺や明石を助けるために鎮守府に襲撃を仕掛けてきた敵を攻撃。その時に軽空母を一体轟沈させている。それから何回か出撃してそのたびにかならず敵を轟沈させている。裏切ったりはしないはずだ」

「ふむ……そうじゃな、裏切るつもりなら絶好のチャンスを逃したわけじゃし、吾輩もあの鎮守府で一緒に何回も寝泊りをした仲じゃしな。うん、チヌの言うことを信じよう」

そう言ってくれた利根に俺は軽く息を吐いた。利根は実力のある艦娘だし、彼女が信じるのなら……と言う艦娘も居るだろう。まさか鎮守府でヲ級の監視のために家に泊まり込みをさせたのが役に立つとはな。

「ところでチヌよ。話は変わるんじゃが……お主、好きな女性はできたのか？ お主の周りには大勢艦娘がおるじゃろ」

突然の利根の問いに俺は呆気にとられる。いきなりなんなんだ？

「あのなあ、俺は戦車だぞ。戦車が船を好きになると思うか？ 逆もまたしかりだ、俺にはその手の話はない」

「何を言っておる。吾輩はお主を好いているぞ」

「！ ツ……ゴホッ……突然何を……」

気を取り直す為に茶を口にしたところでのこの発言に俺は思わず咽る。

「チヌよ。お主の一途に強くなろうとする姿勢、艦娘の為に色々と頑張る姿勢は実に吾輩の好みじゃ。まあ、自分を卑下する態度は好きにはなれんが……他の艦娘もけっこうお主を好きな者はおるぞ。特に不知火や香取は間違いないお主が好きじゃろうな」

「……それは同僚としての好きだろ、異性としての好きじゃない」

「いやいや、少なくとも吾輩はお主をそういう意味で好きじゃと思っておる。そこでじゃチヌ、吾輩とケツコンカツコカリをせぬか？」

「……ケツコンカツコカリって……あの、錬度を極めた艦娘に提督が指輪を送る事で限界を超えるというあの制度の事か？ あれは提督じゃないと無理だろ」

「それがそうでもないのじゃ。あれは指輪を渡すという形をとっておるから、提督と榛名のように一人にしか指輪を渡す気がない提督もおるし、重婚という形になって揉め事になるケースもあるという。そこで、ある鎮守府が、ある艦娘とその恋仲の軍人とで試した結果、成功したという。つまり、あれは提督と艦娘でなくてもできる。ということじゃ」

「……なんというか、よくわからない制度だな。上層部は何を考えてこんな制度を作ったんだろうか。本当に海軍上層部の考えはわからない。」

「そう言うわけでじゃチヌよ。吾輩とケツコンカツコカリをせぬか？ 先も言ったよう

に吾輩はお主を異性として好いておる。お主も今はそういう気持ちはないのはわかっておるが、何、いずれ吾輩のことを好きにさせるのな。まずは形からじゃ」

そう言つて椅子から身を乗り出し俺の前に来る利根。突然の行動に俺の反応が遅れる。そんな俺の顔に利根が両手を近づけてきて……。

「何をしているんですか利根さん」

「利根姉さん、何をしてらっしゃるんですか？」

不意に聞こえた声の方向に視線を向けると、そこには冷たい視線をこちらに向ける不知火と筑摩の姿があつた。

「ぬー！　ち、筑摩……：不知火……：違うんじゃ、これは別にチヌに手を出そうとしたのではなく、あくまでその前段階で……」

「問答無用です。こんな行儀の悪いことをするなんて、利根姉さんにはお仕置きです」
そう言つて筑摩は利根の襟首を掴むとそのまま強引に引きずっていく。

「ぬおお！　やめるのじゃ筑摩、ちくまー！」

叫び声をあげる利根を引きずりつつ筑摩は部屋を出て行つた。後に残つたのは不知火と俺だけだが、不知火の視線は相変わらず冷たい。

「チヌさん……：利根さんに言い寄られてそんなに嬉しかったんですか？」

「そんな風に見えたのか？　……：突然の事で頭が追い付かなくて行動が遅れたんだ。

しかしまあ……告白のほうは本気じゃないだろう、流石に」

気を取り直すため、俺は再度茶に口を付ける。まったく、変に疲れてしまった。

「……そうですね、チヌさんはそういう人でしたね」

「……何がだ、不知火」

「別に何でもありません」

そう言つてそっぽを向く不知火に俺はため息が出す。

「……とところで、ここに居るって事はこの提督との顔合わせは終わったんだろう？」

「この後はどうなるんだ？」

「それでしたら、今日は体を休めて、明日から数日の間合同訓練を行います。それが終わり次第私たちの鎮守府へ帰還。それから後日改めて作戦の遂行だそうです」

「そうなのか。それじゃ俺は護衛の面々と一緒に過ごしておこう。不知火はしっかりと体を休めてくれ」

「あ、待つてください」

部屋を出ようとした俺を不知火が呼び止めてくる。

「提督と相談したのですが、合同訓練が終わった後に一日だけここで観光をしても大丈夫という事になりました。それで……確か藤村さんがいらつしやる神社はここから比較的近い所にあるそうなので、一緒に行きませんか？」

不知火が御上神社の事を覚えていたことに軽く驚く。しかも、そこに行こうと誘っているのだから尚更だ。

「それはありがたいんだが……良いのか？ 折角の観光の機会だぞ」

「構いません。それに、実は提督を始めとした全員がそこに行きたいと言っているんです。なんでも、御上神社に祭られている天之御影命は武神や災いや悪霊から身を守ってくださる面があるということなので今回の作戦の成功を祈っておきたいとの事なので」

「そう言えばそうだったな。確か元々は鍛冶の神で、特に戦国時代に広まったとかだったな。……明石も連れてくれば良かったかもしれないな」

鍛冶の神様だから、明石とは相性が良さそうだ。

「機会があればそうしましょう。それでは、私はこの辺で」

「ああ」

こうして不知火と別れた俺は護衛の面々の元へ向かう。しかしこんな形で御上神社に行けるとはな……世の中何があるかわからないものだ。

第74話

不知火との会話をしてから数日、合同訓練を終えた俺たちは鎮守府周辺の観光を行った。私的な観光ということで海軍から派遣された護衛の軍人を置いての観光という事だったので俺は一応異議を唱えたはしたが、万が一の為の緊急連絡方法はちゃんと用意しているし、お前がいれば問題ないと言いつけられてしまった。大丈夫なのだろうか？

そんな俺の不安を余所に観光は問題なく行われ、そしてある程度の観光を行うと、俺たちは御上神社へ足を運んだ。

御上神社は観光地より多少離れた郊外にあったが、その規模は郊外にあるという割にはそこそこ大きい。

「……ですね。思っていたよりも大きいんですね」

地図を片手に不知火が小さく呟く。

「そうですね。提督、それでは早速お参りをしましょうか」

「ああ、そうだな」

そう言つて提督と榛名は中に入っていく。そしてそれを追う形で俺たちも境内へと入っていく。だが、境内に足を踏み入れた時、俺は何か不思議な懐かしさを感じた。

「え…………？」

思わず足を止め辺りを見渡す。

「? どうかしましたか?」

「…………いや、なんでもない」

不知火の言葉に答えると俺は改めて歩き出す。…………さっきの懐かしさは…………藤村二等兵と木村准尉の想いの影響なのだろうか?

そんな事を考えていると提督と榛名が並んで拝殿の前で願い事をしているのが見えた。まあ、あの二人の願い事の内容は大体想像がつくが。観光中もここに来るまでの道中もバカップルよろしくイチャついていたしな。

「あの二人、わざわざお願いする必要あるのかしら? 提督も榛名も人目も憚らずベタベタしてるのに」

「あれは自重してほしいが…………あれ、鷲鷹、どうした?」

外出中なので鷲鷹でヲ級を呼ぶが、なんかボーツとしているな。

「…………なんだかここにいとボーツとすると…………空気が綺麗すぎて…………チヌ…………捕まらせて」

そう言うところ級は俺の右腕に抱き着く形で俺にしがみついてくる。

「…………チヌさん、私も少しボーツとするのでしがみつきます」

突然不知火がそんなことを言いながら左腕にしがみついていた。ついさっきまで普通にやり取りしていたのにいきなりどうした？

「あんたらねえ……。提督と榛名じゃないんだから、イチャつくんじゃないわよ」

「不知火、随分積極的になったんだね」

そんな俺たちをみた飛鷹と響も呆れたような顔をしている。

「おお……。これはチヌ殿!? それに不知火殿に響殿も!」

そんな俺たちに向かって聞き覚えのある声がかげられた。そちらを向くと宮司の格好をしている藤村さんがこちらを見ていた。

「藤村さん、お久しぶりです。お元気そうで何よりです」

「チヌ殿こそ……。それに不知火殿と響殿……。そちらの方々は飛鷹殿と鷺鷹殿とお見受けします。初めまして、私はこの神社で宮司を務めております藤村純一と申します」

そう言つて藤村さんは頭を下げる。

「初めまして、飛鷹型空母一番艦飛鷹です」

「飛鷹型……。三番艦……。鷺鷹です」

二人もそれに応えて頭を下げる。そうこうしているうちにお参りを終えたのか提督と榛名がこちらに戻ってきた。

「ん? チヌ、この方は?」

「こちらは藤村純一さん。この神社の宮司を務めておられて……かつて私に搭乗するはずであつた藤村二等兵のご子息です」

「これは……失礼しました。私はチヌが所属する鎮守府で提督を務めております伊藤蒼波と申します、以後お見知りおきを」

「なんと……ああ、失礼。この神社で宮司を務めております藤村純一と申します。お話は伺つております、お会いできて光栄です」

二人はそう言つて互いに挨拶する。

「皆さん、立ち話もなんです。もしよろしければお茶でもいかががでしょうか？ 折角提督殿と艦娘の皆さんが来られたのに何の御持て成しもしないわけにもいきません」

「そうですね……榛名、今日の予定はここで最後だったよな？」

「えつと……そうですね。後は鎮守府に戻るだけです」

「それではありがたく頂きます。皆もそれでいいな？」

提督の問いに俺たちは了解の返事をする。こうして俺たちは藤村さんと話をすることとなつた。

第75話

藤村さんに案内され、俺たちは事務所の客間に案内された。大人数用の畳式の部屋のおかげで俺たちは狭苦しさもなく出された座布団の上に座る。そしてしばらくして茶と多少の茶菓子を用意して頂いた。

「さて……しかしこうして目にすると思議なものです。チヌ殿が提督殿、艦娘殿達と共にこの神社を訪れてくれるとは」

「私も不思議な気分です。いずれ訪れるつもりではありましたが、その時はお役目御免となつた後の一人旅の中で、と考えておりましたので」

「おいおいチヌ。私が君をお役目御免にすると思っているのか？ 君にはまだまだ働いてもらうつもりだよ」

「そうですよ、貴方は必要な存在なんですから、簡単にお役目御免になるとか言わないでください」

俺の言葉に提督と不知火から即ツツコミが入る。いや、そのうちお役目御免になるのは確かなんだが。

「これはこれは……チヌ殿がこう慕われているとは……父や木村さん達にも見せたいも

のですなあ」

俺たちのやり取りを見た藤村さんが微笑ましそうにしている。その反応は少し反応しづらいたが……。

「ハハッ、チヌは確かに戦闘力は低いですが、それをカバーする人徳がありますからね……ところで藤村さん、少々お尋ねしたいことがございますが……よろしいでしょうか？」

不意に提督の声が低くなる。それを感じたのか艦娘たちも藤村さんも姿勢を正し次の言葉を待った。

「……藤村さん、神職であり、チヌと関わりのある方だからこそお聞きします。チヌの……彼の正体についてなにか心当たりはありますか？」

正体……そうか、そうだな。確かに神職に就いておられる藤村さんなら、何かわかるかもしれない。俺という存在について。

「彼は確かに深海棲艦を倒しうる力を持っている。それは艦娘と同じです。しかし、彼の身体能力……特に頑強さは艦娘とまったく異なっています。彼の体は文字通り戦車の装甲の如き頑強さを誇っており、それは艦娘よりも遥かに強い。それなのに深海棲艦の砲撃を食らえれば大きな傷を負う……私はそういう方面には疎いですが、チヌと艦娘が異なる存在だという事はわかります。ですから……どうかお心当たりがおありなら

「教えていただけませんでしょうか？」

「そう言うのと、提督は深く頭を下げた。そうか、ここに来たいと言ったのはこの為だったのか。」

「なるほど……そうでございましたか……先日提督殿よりこの神社を訪ねたいと言われた時には驚きましたが……なるほど、そういう理由だったのでございますね」

「なるほど、妙にとんとんと中へ案内される事になったと思つたが、事前に言つていたのか。」

「ふむ……そうですね……。これから述べるのはあくまで私個人の見解に過ぎません。当たつているのかそれとも的外れなのか……どうか鵜呑みにされず、参考程度にお聞きください」

「そう言うのと藤村さんは大きく息を吐き、それから改めて俺たちに視線を向けた。」

「チヌ殿に関して話す前に、まずは私なりの艦娘への見解を述べましょう。……皆さんご存知の通り、艦娘とは先の大戦における各国の軍艦が女性の形をなつたものです。それは艦娘の皆さんの記憶からも確かな事でしょう。では、なぜ貴女達は人の姿になつたのか、皆さんが戦う深海棲艦とは何なのか……でございますね」

「そうですね、そこは私も興味があります。私たち艦娘も深海棲艦もなぜ生まれたのか……」

榛名の言う通りだな。そこは俺も興味がある。

「それですが……私はこれを二つの大戦や、今日までに起きた戦争の負の感情の爆発と考えております」

これは……予想外だな。先の大戦だけじゃないというのか。他のメンバーもそう思ったのだろう、頭の上に疑問符を浮かべてるのがなんとなくわかる。

「第一次大戦を皮切りに、人はあまりに血を流しすぎました。一次大戦は約3700万人、二次大戦は約8500万人。これだけで1億2千万……日本の総人口を超える死傷者が出ました。公式に死傷者とされていない人間を合わせれば更に増えるでしょう。そして他にも起きたいくつかの戦争、武装組織との戦い、僅か百数十年の間にもあまりに多くの人が死にました。それも普通の死に方ではなく、戦争という中で死んだのです。彼らの憎悪、悲しみ、怒り……負の感情がどれだけのものなのか、想像が付くと思います」

「勿論、その死傷者の多くは陸上で亡くなっておりますし、各国とも鎮魂のための儀式や行事は行っております……が」

そこまで言ったとき、藤村さんは深く、とても深くため息をついた。

「海で死んだ方への鎮魂の行事はどうしても場所も回数も限られます。そして昨今の……科学を盲信し、神も仏も信じなくなった方々が増えたことによる信仰の希薄化は、

儀式そのものの成果すら希薄にしてみました。それは海で死んだ方への鎮魂だけでなく陸で死んだ方への鎮魂も完全にはできない程に……残念ながら、神職にある者ですらそう言うものが増えておりますのですから、仕方がない事なのでしょう」

「では……深海棲艦はやはり……」

提督の言葉に藤村さんは頷いた。

「はい、先の大戦における海での死者の負の感情。それが形をとつたものでございましょう。そしてそれを核として、陸で死んだ方々の浄化しきれない怨念を吸収していったのだと思われます。戦争程に大きな負の感情が渦巻く状況はございません。そして……彼らが陸を指すことがあるのは、未だ吸収していない、陸における昇華しきれない戦争の死傷者達の負の感情を吸収する為だと思われます。それらを吸収する事ができれば彼らは更に強大な力を手に入れるでしょう」

藤村さんの言葉に俺は背筋が寒くなるのを感じた。深海棲艦が更に強くなればどうなる？ 今でさえ人類は優勢とは言えないのだ。これ以上深海棲艦が強くなれば……手に負えなくなるかもしれない。

「そして、それに対して艦娘の皆さまは正の感情を元にして生まれた存在……かと思われます。ただ残念ながら……戦争とは志願した者だけが行く場所でなければ、兵士でない民間人も多く亡くなります。それに、例えば志願して御国のためにと意気込んでいよう

とも、大半の人間は死ぬときには負の感情が勝るものです。それが……深海棲艦と艦娘との絶対的な数の差を生み出しているのでしょうか」

……いくら言葉で言おうとも、そのつもりであったとしても、やはり人間にとつて死の瞬間はそうなるのか……。

「でも、藤村さん。私たちは確かに先の大戦の軍艦の生まれ変わりだと思います。では……なぜ私たちは女性として生まれたのでしょうか？」

飛鷹の問いに藤村さんは非常に言いにくそうな顔をする。

「そうですね……一つは船霊と呼ばれる海の女神の影響が考えられるでしょう。この女神は船を作った時に祀られる神なので、その影響を受けたとは十分考えられます……後は……そうですね……やはり生み出した人の想いの影響もあるでしょう。船には女性の名前を付けるといふ風潮があります。それはまあ……男性が乗るものとしてのあれですので……どうしてもその想いが影響したのかと……」

それを聞いて艦娘達が心なし顔を赤くする。俺も正直なんとも言えない気持ちになる。……もしかしたら俺も女に生まれてたかもしれないって事だよなあ……戦車だつて男が乗るものだし、そもそも陸上戦艦を目指して作られたのが俺たち戦車の祖だもんなあ。

「ゴホン……まあ、それは置いて……藤村さん、それではなぜチヌと彼女たちの頑強

さは大きな違いがあるのでしよう。船の生まれ変わりであるなら、むしろ艦娘のほうがチヌよりも頑丈であるべきではないかと」

小さく咳払いして提督が話を戻す。それを聞いた藤村さんも気を取り直したのか表情を改めた。

「そこでごいいますか……そうですね、総数こそ大きな違いがありますが、恐らく艦娘と深海棲艦はコインの表と裏のような存在……性質は違えど人の想いから生まれたのでしよう。しかし……中国の陰陽思想にあるように、万物は陽と陰の二つがなければ成り立ちません。ならば、陰である深海棲艦、陽である艦娘。完全に二つに分かれたわけではなく、ある程度は双方とも両方の性質を持つているでしょうが、あまりにバランスが取れていない事は想像できます。恐らくはそれが、彼女たちの力を小さくしているのでしょう」

「もしも艦娘と深海棲艦が一つの存在として生まれたのなら……それはきつと元の船と同じ戦闘力……いや、人ならざる力を宿すことになっている以上はそれ以上の力を持つているのかも……しれません。これが、私が考える艦娘と深海棲艦の存在について、です。先も言いましたが、あくまでこれらはただの私の想像に過ぎません。どうか鵜呑みはせぬよう、お願い申し上げます」

そう言つて藤村さんは頭を下げた。

「いいえ……大変参考になるお考えでした。しかし……それではチヌはいつたいたいのよう存在なのでしょうが?」

「そうですね……チヌ殿は恐らく……付喪神の一種でございます」

付喪神……人の想いが宿った道具に魂が宿ると言う妖怪。やはりそうなのか……だが、疑問は残る。

「艦娘、深海棲艦は人の想いが核となつて実体化した……言わば思念体、幽霊に近いと思います。しかしチヌ殿はれっきとした依代を持つ付喪神……その依代という物理的な存在がチヌ殿の頑強さの元なのでしょう。その一方で戦車と軍艦という違いの影響によつて深海棲艦からの攻撃には大きな傷を負つてしまう……そのように考えられます」

「……しかし、藤村さん。付喪神は百年程の時を経た道具がなるものだとも聞いています。私は未だそれだけの歳月を過ごしていません。それに……一度たりとも使われていない私が……なり得るものなのですか?」

そうだ、俺は使われる事はなかった。ただの一度たりともだ。確かに俺の中には俺に乗るはずだった小隊の想いが宿っている。だが……それは僅かな間に宿ったものだ。それでも俺は付喪神となったのか?

俺が疑問を問うと藤村さんは温和な笑みを浮かべて俺に視線を向ける。まるで、香取が俺に指導をしているときのような……そんな雰囲気を感じ出してしまふような、そんな

な笑顔を浮かべて。

「チヌ殿、妖怪とて命あるもの。機械のような厳密な定義があるわけではありません。それに……チヌ殿の場合は……恐らく父と木下准尉が影響を与えていると思います」

お二人が影響を？ どういうことなんだ？

「その……身内自慢ではありませんが、父はいわゆる霊力と言うものが非常に強力な方でして。そして木下准尉も父の幼馴染でこの神社でよく一緒に過ごしていた事もあり、その影響で木下准尉も大きな霊力を持つようになりまして。普通の方に話せば鼻で笑われる話ではありますが、皆さんなら問題はないかと」

……確かにそうだよな。普通に考えればこんな事を言われれば一笑に付すだろう。だが、俺も艦娘も人間じゃないし、提督はそんな俺たちとずっと接してきているんだ、笑うわけがない。

「恐らくチヌ殿が今こうして付喪神の一種となられたのも強い霊力を持つ父と木下准尉の霊力の影響を受けたからでしょう。特に木下准尉の想いがチヌ殿の姿を作るほどに強かったのであれば尚更です」

……なんか和風ファンタジーじみた話になったなあ。まあ、仕方がないか。

「そして、チヌ殿は深海棲艦が生まれた時と同じくして生まれたと聞いております。恐らくは深海棲艦が誕生した時の霊的な余波がチヌ殿の誕生を促したのでしょう。その

余波を受けた事で、チヌ殿もまた艦娘と同じように深海棲艦にダメージを与えられない……しかしながら戦車としての存在故に艦娘と同じ程にはいかない……のではないでしょうか」

……つまりこう言うことか。俺は元々遠からず付喪神になるはずだった。だが、深海棲艦誕生の余波を受けてその時期が早まり、更に深海棲艦とも戦えるようにはなつたが、あくまで戦車であるため、艦娘ほど強くはない。その代り、付喪神としての依代のおかげで物理的な頑強さだけは強いって事か……。

「なるほど……非常に参考になるお言葉です。私だけではそのような考えには辿り着かなかつたでしょう」

「いいえ、繰り返しますがこれはあくまで私の私見に過ぎませんし、これだけでは説明のつかない事もあるでしょう。例えば……その深海棲艦に関する事など、でしょうか」
その言葉に俺たち全員が目を見開く。藤村さんの視線は確かにヲ級に向けられている。気づかれていたというのか？

「なにを仰っているのですかな？　彼女が深海棲艦等と、冗談にしては少々悪趣味ではないかと」

提督がそう言つて藤村さんを睨むが、藤村さんはその視線を正面から受け、はつきりと言葉を口にする。

「これでも私も神職の端くれでございます。最初のうちは気づきませんでした……彼女の気配は艦娘のそれに近い……ですが、負の気配が強い。艦娘に近く、なおかつ負の気配のほうが強いとなると深海棲艦以外におりますまい」

「……なるほど、御見それしました。確かに彼女は深海棲艦……いや、元と言うべきでしょう。彼女はチヌに鹵獲されたヲ級です」

観念したのか提督はヲ級の事を藤村さんに説明する。それを聞いた藤村さんも大きく首を傾げた。

「なんと……チヌ殿が鹵獲でございますか……うーむ、それはなんとも不思議な事です。付喪神故の何かがあるのか……。申し訳ありません、その件に関しては私がわかる事はなさそうです」

どうやらこの件に関しては藤村さんもわからないようだ。まあ、前例がなければ仕方ないと思うが。

その後も俺たちは質問を重ね、気づけばけっこうな時間が経過してしまっていた。

第76話

「ふむ……もうこのような時間ですか。申し訳ない、少々お話が長くなってしまいましたな」

時計に視線を向けた藤村さんの言葉に俺たちも時計に視線を向ける。時間は既に一九〇〇を指していた。確かにこれは長居しすぎたか。

「いえ、どうかお気になさらないでください。大変有意義な時間を過ごすことができました」

確かにそうだ。藤村さんの言っていることが正しいのかはわからない。だが、参考にするには十分すぎる内容だった。

「皆さん、もうこのような時間になってしまいました。もしよろしければ晩御飯等いかがでしょうか？」

「宜しいのですか？」

榛名の言葉に藤村さんは頷く。

「はい、この国を守る皆さんに食べて頂けるならば光栄な事でございます。それにもしままだお聞きしたことがございますならその時にお答えもしましょう」

「提督、どうされますか？」

「私は構わない。実際、まだお聞きしたことはある。皆はどうなんだ？」

提督の問いに俺たちは了承の意を示す。その時、ふと藤村さんが提督と……俺のほうを見て視線を外に向けた。……これは、何かはあるということか？

「かしこまりました。では準備を整えてまいりますので少々お待ちください。ああ、その間はご自由に境内を見ていただいでいて構いませんので、それでは」

そう言つて藤村さんは客室から出て行つた。さて、恐らくさっきの藤村さんの行動の意味は外に出てくれということだろう。それに従うか。

「ち又、少し私と一緒に歩かないか？ 色々と聞いたことだし、少し君の意見も聞かせてもらえるといいのだが」

立ち上がるうとした俺に向かって提督が声をかけてきた。提督も気づいているようだな。

「わかりました、お供します」

そう言つて俺は立ち上がり提督と一緒に部屋から出ようとする。すると、後ろから飛鷹が声をかけてきた。

「あら、榛名を連れて行かないの？ 珍しいわね」

「ああ、たまにはな」

短く答えて提督は部屋を出る。俺もそれに続いて歩き、事務所を出る。すると、そこには先ほど出て行った藤村さんの姿があった。

「申し訳ありません、このような形でお二人をお呼びしてしまい……提督殿にこちらの意図に気づいて頂けて幸いです」

「これでも管理職の軍人ですから、ああ言うのには多少機敏なのですよ。さて、私とチヌの二人だけに目配せしたということは艦娘や深海棲艦には聞かせられないお話ということでしょう。いったい何のお話しなのですかな？」

「はい、あの方々にお聞かせするかどうかはお二人にお任せしますが、まずはお二人だけにお話しをしておくほうがよろしいかと」

そう前置きして、藤村さんは俺たちを事務所から少し離れた場所へ案内する。

「ここなら大丈夫でしょうか……。さて、お二人にお聞かせするのは、艦娘と……恐らくは深海棲艦にも通じるであろう事柄でございます」

「両者にですか？ それはいったいどういった事なんでしょうか？」

俺が聞くと、藤村さんは神妙な面持ちで俺たちを見てきた。

「先ほどの話の中で私は艦娘や深海棲艦は思念体、幽霊が実体化したものだとお話しました。さて、そう言った類のものは生きている者に強く惹かれる習性があります。また、彼らは自身の想いの発露に対して人間よりも積極的な傾向があります。……お二人

はお心当たりがおありじゃないでしょうか？」

「……確かに、艦娘である彼女たちは人間以上に感情を率直に表していますね。チヌ、君はどう思う？」

「私もそう思います。彼女たちは年相応……いや、それ以上に感情を表す事が多いですし、感情が行動に直結しているところも見られます。……提督と榛名は極端な例としても、他の艦娘達もそんな感じはします」

「そうだ、思い返してみれば彼女たちの感情の表現は人間に比べればかなりハッキリしている。表裏がないと言うわけじゃないが、概ね素直に感情の通りに体が動いている傾向にあるという感じだろうか。」

「やはりそうでございますか。さて……そうした感情の発露の激しい彼女たちですが、それ故に近くに肉体を持つ者に惹かれやすいでしょう。特に提督殿とチヌ殿は艦娘と普段から過ごしていますゆえ、その想いの矛先としてはうってつけです」

「しかし、それは……こういう言い方をするのは申し訳ないのですが……彼女たちの近くにいるだけで勝手に好意的に見られる部分があるということです。勿論それは人間関係を構築する上ではありがたいでしょう。しかし、一度それが負の感情のほうに流れた場合、それは人間に嫌われる時よりも過剰な拒否反応を見せられる可能性もあるという事です」

「恐らくそうなれば、艦隊運用にも支障をきたすかもしれません。また、彼女達の好意を利用して何かを企むものもいるかもしれません。その懸念だけ、お伝えしようと思った次第でございます」

……これは、恐ろしいな。そうか、愛憎という言葉もあるように、感情と言うのはそれこそあつさり引つ繰り返つたりもするし、そうじゃなくても普通に嫌われれば加速的に進む事もありうる。……と言うか、俺自身も気を付けたほうがいいんじゃないかこれ？ 依代があるとは言え、俺自身も人の想いで生まれたんだから、藤村さんの懸念が当たる可能性があるぞ。

「なるほど……ご忠告、痛み入ります。肝に銘じておきましょう」

「私もです。肝に銘じておきます」

「そう言つて頂ければ幸いです。それでは、私は晩御飯の用意に入りましょう。お付き合ひ頂きありがとうございます」

そう言つて藤村さんは俺に一礼すると足早に事務所に戻つていった。

「しかし……これはまた、とんでもない事を聞いてしまったな。……だが、私にも心当たりはある。チヌもそうなんじゃないのか？」

「そうですね。正直、先ほどの話が真実だとするなら納得いく話です。彼女たちが戦車である俺に対して向けるには些か過剰な好意だと思つていましたから。と言うかそも

そも任務のためとは言え俺の家にさして抵抗もなく泊まりにくる時点でおかしいとは思ってましたから」

「確かに。私も艦娘からある程度の反対があるとは思っていたが、榛名を除けば皆あっさりと承諾したからな。……さて、この事を彼女たちに話すべきか……」

「……話すほうがいいとは思いますが。彼女たち自身に自覚ができたならその対処もできるでしょう。極端な言い方ですが、悪意のある人物の話術でコロツと騙されたりしたら大変な事になります」

「……そうだな。だが、今すぐと言うのも言い辛いな。少し日を空けよう」
「わかりました」

取りあえずの結論を出した俺たちは取りあえず事務所に戻る事にした。あまり外に長居してたら艦娘からも変に思われるだろう。だが、そうしようとした矢先に提督が不意に俺の後ろに視線を向けてきた。

「ん？ ……チヌ、何か物音がしなかったか？」

「そう言われ提督の視線を追うが、特に不審なものは見当たらない。」

「さて……私にはわからないですが、調べますか？」

「いや、単なる気のせいだったかもしれない。気にしないでくれ」

「そう言つて提督は事務所へ歩き出す。俺もその後についていくのだった。」

第77話

事務所に戻った俺と提督はそのまま客室に戻る。そこにはヲ級と飛鷹の姿だけがあり不知火と響の姿はなかった。だが、程なくして二人も戻ってきて、それからしばらくして俺たちは藤村さんが用意してくれた晩御飯に舌鼓を打つこととなった。料理そのものが美味しいというものもあるが、どこか懐かしく感じたのは、きっと俺の中にある藤村二等兵と木村准尉の想いの影響なのだろう。

料理を食べ終え、食後のお茶を頂いていた俺たちだが、そんな中、藤村さんが俺に声をかけてきた。

「実は……チヌ殿に是非ともお渡ししたいものがございます。少々お待ちいただけますか？」

そう言つて藤村さんは客室を後にし、そしてしばらくして戻ってきたときにはその手には何か棒状の物を持っている。布で嚴重に包みがされているが恐らくは……刀の類だ。

「藤村さん、それは？」

「これは……かつて木村准尉のために父が作った刀です」

そう言つて藤村さんが包みを解く。そこにあつたのは95式軍刀。大日本帝国陸軍で下士官用として作られた軍刀であつた。だが、俺にはそこから言葉にできないような、何か大きな力のような物を感じ取つた。そしてそれは俺だけではなかつた。

「これは……単なる刀じゃない……ですね」

「うん……形容はできないけど、何かが違う」

「……チヌ、これ、少し怖い」

駆逐艦の二人も何かを感じたようだし、飛鷹は口を開けたまま刀を凝視している。ヲ級だけはそう言つて俺の後ろに隠れた。

「私は何も感じないが……藤村さん、この軍刀はいつたい？」

「これは、我が神社に伝わるヒヒイロカネを加工し、父自らが作り上げた物です」

その言葉に俺は耳を疑つた。ヒヒイロカネ。日本神話に出てくる伝説上の金属だ。まさかこんなものまで実在したというのか。

「御上神社には伝承があります。それは天之御影命が日ノ本の地に降り立ち、この金属を使い、お前たちの最も信頼のおけるものの為に武器を作りなさいと言ひ残したと。それが本当なのかどうかはわかりません。ただ、この神社では古くより、そのヒヒイロカネを使つて武器を作り、それを信頼のおける武将や兵士へ預けると言うのが代々行われるようになりました。不思議な事に、その武器を受け取つた者はいかなる戦場からでも

生きて戻り、その武器を返却してきたと言われています。そして、その武器を溶かし、再び信頼のおける者の為の武器を作り預ける。それを繰り返してきました」

「父もそれにあやかり、木村准尉の為に自ら槌を振るいその刀を作り上げました。しかし、皮肉なことに父も木村准尉も戦場に赴くことすらなく、この刀はそのまま使われることなく仕舞われていたのです」

そう言つて軍刀を見る藤村さんはお二人のことを思い出しているのか、とても懐かしい物を見るような、そんな目をしていた。

「しかし……よく個人で作った物を軍刀に混ぜられましたね。それに、GHQの刀狩からもよく逃れたものです」

提督の言葉に藤村さんはどこか悪戯っぽい笑顔を浮かべる。

「この神社は天之御影命のご利益のおかげで古くより軍に連なる方とは懇意にしております。その伝手でどうかしたと聞いております」

そう言うと、藤村さんは俺の前に軍刀を置いた。

「チヌ殿、どうかこの刀をお持ちいただけませんか？ 今の戦場ではもはや軍刀の必要とする場面はないでしょう。しかし、父達の想いを宿し、木村准尉の姿を持つ貴方以外にこの刀を持つべき方はいらっしやいません」

「この……刀を……」

思わず唾を飲み込む。この刀には人間には感じられない何かがあるのはよくわかる。そんなものを俺が持っていないのか？　だが、俺の体は思考に反するように置かれた刀を手に取り、少しだけ鞘から抜く。電気の光を反射したその刀身に俺は目を奪われた。俺には日本刀の知識はない。だが、その刀身の美しさ、そして神秘さだけは目で見ただけ十分に理解ができた。そして同時に、この刀から発せられる力のような物を更に感じ取った。

「……チヌ……」

俺の後ろに隠れていたヲ級が俺を掴む手に力を入れる。そのおかげで何とか気を取り直した俺は改めて刀を鞘から抜き、目の前に掲げた。

「おお……これは凄い……」

「[[……]]」

刀身を目にした提督は息を飲み、不知火たちは言葉もないままに刀身を凝視する。

しばらくして俺は刀を鞘に納め、目の前に置く。

「藤村さん、これは私にはとても過ぎた物です。本当に、私なんかに預けられるのですか？」

「チヌさん、貴方ならわかるはずですよ。使われない道具の悲しみが。その刀も貴方と同じ、使われる機会を逃してしまった物なんです。どうかお持ちください。それが、その

刀の為なんです」

そう言われ、俺は改めて刀に視線を向けた。そうか……木村准尉の為に作られ、使われなかったこの刀は……確かに俺と似たような境遇にあるのか。

「提督……よろしいでしょうか？」

「無論だ。チヌの刀の所持許可は後々取るようにしよう。今はとりあえず私の刀を運ばせている。という形にしておく。一応、私個人は刀の携帯許可は持っているからな」

「……ありがとうございます」

俺は深く、頭を下げた。

第78話

刀を受け取った後、俺たちは一度この鎮守府に戻り、一夜を過ごした後に元の鎮守府へ戻った。その間、不知火達がどこか余所余所しかつたが、恐らくはこの刀のせいだろうと考える。俺自身、正直これを持って余している所があるのは否めなかつた。

そう言えばこの刀の名前は御影命之緋緋色金だと藤村さんは言ってたな。まったく、本当に俺なんかには過ぎたものだ。そんな刀は現在筆筈の中にしまわれている。普段から外に出しておくようなものでもないからな。

それはさておき、今俺は竹下一等陸佐の元にいる。陸軍の要請で新たに国内で活動している新しいテロリストの検挙のための人出がほしいとの理由であり、また大和殿の時のように陸軍から力を借りる必要ができた時のためにと言うことで俺が赴くこととなったのだ。そして陸軍に出向してから一か月、先日そのテロリストの検挙も無事に終え、俺は事後処理の為に陸軍の事務所で書類を書いていた。

「ふう……これで大丈夫かな」

疲れた目を擦り、俺は書類を確認する。これでここでの俺の仕事はいったん仕事は終わり、明日には鎮守府に戻ることになる。名残惜しいが仕方ないな。

「もうこんな時間か……」

腕時計を見ると既に時刻は二〇〇〇を指していた……どうも書類関係は時間がかか
る。書き慣れていない陸軍の書類なら余計にだ。

「チヌ、書類のほうは書けたかね」

不意に声がかげられ、そちらに視線を向けるとそこには竹下一等陸佐がいた。俺は慌
てて立ち上がり敬礼する。

「楽にしてくれチヌ。しかし、今回も君のおかげで助かった。ありがとう」

「いえ、これも作戦内容とチームのメンバーのおかげです」

「相変わらずだな。まったく、君の謙虚さを海の上層部連中にも見習ってほしいものだ」

そう言つて竹下一等陸佐はため息をついた。海の上層部とはどういうことなのだろ
うか？

「竹下一等陸佐、海の上層部とはどういうことでしょうか？」

「ああ、連中は自分たちがこの国の支配者だ。とも思っているのだろう、最近では軍内部
どころか政治のほうにまで口を出してきているらしい。鎮守府を纏める提督の身分に
ある者はそうでもないんだが、それ以上の将官クラスがそういう態度をしているよう
だな。我が陸軍も対応に困っているのだ」

確かに今の世界情勢を考えれば仕方ない部分もあるんだろうか……軍部の権力増大

か。何も無いといいんだが。

「幸い君のところの提督やその友人達はそういう事に興味がないのか、そういう態度は見られないのが幸いというべきか。まあ、だからこそ君をあの鎮守府に所属させようと思つたわけだがな」

俺があの鎮守府に所属するようになったのはそういう経緯もあつたのか……。確かにあきつ丸殿も提督の幼馴染である朝野提督の鎮守府所属だからなあ。

「さて……書類は書けているようだね。これは私のほうで処理しておこう。君はもう休みなさい」

「！ そんな、竹下一等陸佐のお手を煩わせるようなものでは……」

「君は明日には鎮守府に帰る身だ。深海棲艦との戦いに備えて少しでも体を休ませておきなさい」

それを言われれば何も言えない。俺は竹下一等陸佐に頭を下げ、礼を述べると、宛がわれている自室に戻り眠りについた。

翌日、俺は鎮守府に戻ってきた。帰還の報告を提督にする時について俺がいない間の事を聞いたが特に大きい出来事は起きてないらしい。その事に多少の安堵を感じつつ、俺は家に戻り陸軍の軍服から海軍の軍服へ着替える。名残惜しいが仕方がない……

と、そこでふと気づいた。

「……誰もいないな」

普段なら不知火なり黒潮なり、誰かが俺の家に居たりするのだが今日はいない。それどころか鎮守府に戻ってきてからは秘書艦をしている榛名以外艦娘自体を見ていない。まさか全員が出撃や遠征をしているわけでもないが、何かしているんだらうか？

「……あいつらが居るのが当たり前になってたからなあ」

ここに來てからはなんだかんだであいつらと一緒にいる時間が一日の大半を占めるようになっていた。訓練では誰かが付き合ってくれたし、家にいればヲ級が大抵居たし、あいつが居なくなつてからもたいてい駆逐艦の誰かは遊びにきてた。陸軍に出向しているときには感じなかったが、こうして鎮守府に戻つてから誰にも会わないと、なんとも言えないものを感じてしまう。……ここに来るまではそれが当たり前で、は何も感じなかった、感じずに済んでいたいのに。

「まったく……ここに來てからどんどん弱くなつてるな、俺は……あいつらが俺に好意を寄せていたのも、あくまでもあの性質のおかげだというのに」

そうだ。藤村さんの仮説が正しいなら、あいつらが俺に好意を向けてきているのは俺自身を見ているものじゃないんだ。俺自身じゃなく、俺の依代に無意識のうちに惹かれていてだけ……まあ、提督と榛名は違うだらうあれは。あれはもうそんなので片付けられ

ないほどのバカップルだ。

「チヌさん、お帰りなさい。お待ちしていましたよ」

物思いにふけてっていると、家の扉が開かれ不知火が入ってきた。

「不知火か、ああ、戻ったよ。俺が居ない間は特に大きな事はなかったと聞いている。明日からは元通りに任務に就けれそうだ」

「そうですか。では今日はお時間がありますね？」

「ん？ ああ、訓練か勉強ぐらいしかないが、どうかしたのか？」

「はい、実は少々やりたいことがありますので、チヌさんに是非来てほしいんです」
「やりたいこと？ 何なのか想像つかないが、行けばまあわかるだろう。」

「わかった、行こう」

俺は立ち上がると、そのまま不知火についていく。だが、俺たちが向かった先にあったのは艦娘の寮であった。

「不知火、寮で何かするのか？ 俺は砲撃は食らいたくないんだが……」

「砲撃？ 何を言ってるんですか？」

俺の言葉に不知火が首を傾げる。いや、お前が言った事だろ。

「ここに来た初日の案内の時に言ってただろ、へたに入れば砲撃が飛んでくるって」

それを聞いた不知火はしばらく考え込み……そして、思い出しはしたんだろうが、何

か焦った表情をしだした。

「すみませんチ又さん。あれはその……私の冗談なんです。まさかずっと信じて……？」

「まあ、あり得ない事ではないと思っただけからな。そもそも入る用事なんて何もなかったから本当でも嘘でも変わらなかつたんだが」

まあ、冷静に考えればいきなり砲撃をしてくるのは流石にないよな。艦娘以外なら間違いなく大げがやないし死亡だからな。

「……いえ、これは不知火の落ち度ではありません。ずっとあんな冗談を信じていたチ又さんの……いやでも……」

「……何を言ってるのかわからないが、ともかく砲撃が飛んでこないなら入るぞ」

不知火が青い顔をして何か言っているが、取りあえず俺は寮の中に入る。そしたら慌てて不知火も入ってきた。

「こ、こつちです。ついてきてください」

不知火に先導されて俺は入り口から右の廊下を進んでいく。しばらくすると、談話室と書かれた掛札のついている扉が俺たちの前に現れた。

「この中です。入ってください」

そう言われ俺が何か入ると、途端にクラッカーの炸裂する音が響き、クラッカーから

飛び出した紙吹雪が俺に向かって落ちてくる。

「……………は？」

呆気にとられる俺の目に映るのは、色とりどりの飾り付けがされている談話室。そして、その中で俺のほうを向いている、この鎮守府所属の艦娘達だ。全員……………20名近い艦娘が俺のほうを向いている。

「な、なんだこれ……………は？」

「なにつて、チヌさんがこの鎮守府に来てから一年が経ったお祝いですよ」
（……………そう言えば俺がここにきて一年か……………いや、でも、だからつて……………）

未だ混乱が収まらない俺の腕を取つて不知火が引つ張る。そして俺はされるがままに近くの椅子に座らされた。

「チヌはん、おめでどうやで」

「おめでどうチヌ」

俺の隣に座る黒潮と響がそんな事を言ってくるが、どう対応すべきなのかわからな。い。こんな事、された事なんてないぞ。

「あら、もしかしてチヌさん緊張しているんですか？ リラックスしてくださいね」

そう、香取に声をかけられるが、緊張も何も、状況についていけないんだぞ。

「か、香取、榛名。これはどういことだ？ 俺の着任してから一年つて……………」

取り敢えず艦娘の纏め役である二人に声をかける。

「あれ、チヌさん、もしかして自分が着任した日を忘れたんですか？」

「いや、それは覚えてる。だが、だからってこんなお祝いになるような事では……」

「いいえ。十分お祝い事です。よ。ねえ皆さん」

榛名がそう言うのと、全員が賛同の意を示す。

「チヌさん、よく聞いてください」

香取が俺の正面に立つと、まっすぐに俺を見てくる。俺もそれに答え、彼女と視線を合わせる。

「私たちは最初、貴方がここに一年も居るとは思っていませんでした。貴方は陸軍の戦車、いくら深海棲艦を倒す力があるとはいえ、貴方とここは相性が悪いですから、いずれは陸軍へ異動するだろう……そう思っていたんです」

「でも……貴方は私たちのそんな予想を色んな意味で裏切りました。貴方は戦車でありながら海で戦うようになり、ヲ級さんを鹵獲するという艦娘の誰もできなかった事を成し、更に、私達全員が貴方が異動することを快く思わなくなりました。それどころか、貴方には絶対に残っていてほしい。そう皆思うようになったんです」

「香取……だがそれは……」

違う、その好意は……あくまでも特性に惹かれているだけだ。……言わないと……す

ぐに誤解を解かないと。

「チヌさん、まさか……私たちの好意が、貴方の特性に惹かれてるからだけって思ってますんか？」

不知火の言葉に俺は思わず彼女の顔を凝視する。知っていたのか!? いつから？ 提督が話したのか？

「チヌ、あの時藤村さんが君と提督に目配せしたのには皆気づいてたんだよ。私達だって軍所属だ。素人の藤村さんのやることぐらいすぐに気づける」

「そもそも、提督が榛名を連れて行かない時点で怪しさ満点よ。だから、不知火と響に後をつけてもらったのよ」

響と飛鷹の言葉に俺は言葉を失う。それじゃあ、最初から……気づかれていたのか。「いやー、しかし驚いたよねえ。私たちとチヌにそんな関係性があったなんてさ」

「そうよね。確かに言われてみれば納得よねえ。私たちの感情表現が激しいのとかも含めてね」

川内と足柄がまるでなんでもない事のように話しているが……気にしていないのもいうのか？

「チヌさん。貴方が陸軍へ出向している一か月の間に飛鷹さんは全員にこの事を伝えました。理由はわかりますか？」

「……俺への好意で勘違いしないためなんじゃないのか？ 俺に惹かれるというのはあくまで俺と艦娘の特性によるものであって、人格的なものとかじゃないって事を……」
そう言った途端、香取が俺の頭に拳骨を振り下ろし、だが、逆に香取のほうが痛がる。なんか前にもこんな事があつた気がする。

「イタタ……。ち、違いますよチ又さん。その特性を聞いたうえで皆さんがチ又さんをどう思っているのかを考えてもらうためです」

「つまり、その特性を聞いたうえで貴方に好意を持っているかどうかという事です。皆さん……私も最初は戸惑いましたが、一か月という時間は考えるには十分でした」

痛がる香取から引き継ぎ榛名が説明してくれる。確かに、一か月あれば困惑が収まるには十分な時間だ。

「それで……結論はどうなんだ？」

俺の問いに榛名は変わらぬ笑顔を浮かべたまま、告げた。

「私たちはその特性を置いて……貴方が好きです、チ又さん。それが全員の出した結論です」

その言葉に俺は呆気にとられ言葉を失った。

「あのなあ、チ又はん。一年やで一年。この一年の間にうちらんどんだけ一緒に過ごしたと思つとるんや」

「黒潮のいう通りだよ。私たちは公私をほとんど共に過ごしてきたんだよ。最初に惹かれただけでそんなに過ごせるわけがないじゃないか」

「チヌ、貴方はいつも一所懸命よね。戦いに備えて常に己を鍛え、仲間の為なら命だつて捨てられる。プライベートの時もなんだかんだで私たちに付き合ってくれる。特別な理由なんて必要ない、一年という歳月の中で好きになったのよ」

「チヌさん。私達が今言っている言葉が私たちの総意です。……どうせ貴方の事ですから中途半端に伝えても変な曲解をしかねないので、こうして全員に集まってもらいました。もう一度はつきり言いますよ。私たちの貴方への好意は、貴方と私たちの特性によるものだけじゃない。いや、そんな特性以上なんです。理解してください、曲解したり難しく考えたりしないでください。素直に受け取ってください」

黒潮、響、飛鷹の三人の言葉に続き、不知火が一際多くの言葉を並べてくる。俺はそれに圧倒されるしかなかった。

「……で、チヌ。返事は？ 理解した？ できたの？ 私たちの好意は、貴方の特性とは別にちゃんとあるって事。理解できたの？」

「あ、ああ……わかつ……た」

飛鷹が俺のすぐ目の前に顔を持ってきて睨んでくる。俺はその勢いに押され、頷くしかなかった。

それから俺は皆から改めて俺の就任一年経過を祝うパーティーに参加することになった。皆が俺の事を祝ってくれている。こんな……置いていかれただけの時代の遺物を。俺は……こんな歓迎を受けていい物じゃないのに。だが、彼女たちの気持ちは先ほどハッキリと伝えられた。いくら俺でも流石にあれを否定する事はできない。……例えその好意がどういふ種類のものなのかはわからなくても、少なくとも彼女たちが俺の特性ではなく、俺自身を見てそう言ってくれてるんだと言う事だけはハッキリと伝わったのだから。……あ、榛名だけは間違いない同僚としての好意だな、それだけは間違いない。

第79話

「……気持悪い……」

あれからパーティーは色々と盛り上がり、俺は足柄から色々な酒を飲まされてしまった。なんとかパーティーのお開きまでは耐えたが、早く家に戻って休まないとヤバイ。

「あ、チヌさん……大丈夫ですか？」

後ろから声をかけられ振り返ると、そこには香取が立っていた。

「香取か……正直キツイ……」

素直に答えると、彼女は俺の肩に手を回し、肩を貸す形で俺を支えてくれる。

「このまま支えていきますので、早く帰りましょう」

「ああ……」

香取に支えられ、俺は覚束ないながらもなんとか歩く……しかしなんだろうこの状態……何か覚えがあるような……。

「こうしていると、チヌさんが着任された初日を思い出しますね。あの時もチヌさんは足柄さんにお酒を飲まされてふらついていらっしやいましたっけ」

「……そう言えばそうだな。あの時は確か……香取の肩に手を置いてたんだっけ……」

「はい。それで、家に帰ったチヌさんを介抱したんでしたね、懐かしいですね」

「……あんまり今の状態に懐かしさとかを感じたくはないんだが……」

そんな事を話しつつ、俺たちはなんとか家に辿り着く。そして扉を開けると、そこには不知火とヲ級の姿があった。

「お帰りなさいチヌさん。酔い覚まし用の水とお布団をご用意してますよ」

「……万が一の時の洗面器もある」

言われれば確かに布団が既に敷かれていて、枕元には水の入ったペットボトルと洗面器が用意されてる。

「あらあら、二人とも準備がいいですね」

「先生から去年の事は聞いていましたので、事前の対策はできていました。チヌさん、横になってください」

「あ、ああ……」

何とか香取から体を離して俺は布団の上に寝転がる。ダメだ、今日はもうこれ以上動けそうにない。

「それでは、後はお二人にお任せしますね」

そう言うと、香取は家から出て行った。後に残った不知火とヲ級は俺を見下ろしてくる。

「……チヌ、大丈夫？ お水飲む？」

「いや……大丈夫だ。二人も、もう戻っていいぞ」

そう言い出したが、二人とも帰る様子も見せず、俺を見下ろしたままだ。おまけに不知火に至っては大きなため息をつかれる。

「……チヌさん、この状態を放っておけるわけないでしょう。今日はこのままお世話しますからね」

そう言うのと彼女はタオルを濡らしてきて俺の額の上に置く。冷たく濡れたタオルが熱の籠った頭を冷やしてくれる。

「まったく……こんな状態で遠慮なんかしないでください。本当にチヌさんは他人の好意を受け取らないですね」

「……私達が好きでやってる事だから。たまには遠慮なく甘えてほしい」

二人からそう言われ、口を開こうとしたが、二人はジト目で俺を見下ろしてくる。今の俺にそれに対抗する気力もでてこず、結局口をつぐんでしまった。

「さて……と。チヌさん、これで皆の好意については納得できたと思います。ですから……今後も改めてよろしくお願いしますね」

「……宜しく、チヌ」

寝ている俺に向かつて深々と頭を下げる不知火と、それに合わせて頭を下げるヲ級。

この体勢の時に言われても困るが……。

「ああ……、取りあえず好意を持ってくれてるって事は十分わかったよ……今後とも……宜しく頼む」

俺の言葉に二人は頭を上げる。よく見ると二人とも少し笑顔になった。だが、その辺りで微妙に視界がボヤけてきた。ダメだ、横になったせいで眠気が来てる。

「……二人とも……もう眠気がきた……。かえっ……ていい……か……ら」

そこまで言ったところで、俺は眠りに身を任せていった。

第80話

「……寝ちゃいましたね」

瞼を閉じて寝息を立てるチヌさんを見て小さくため息をつく。まったく、結局最後まで帰るように言ってくるなんて。

「……服脱がせないと、皺になる。不知火、手伝って」

ヲ級がそう言つてチヌさんの体を起こす。不知火もそれに続いて彼の服のボタンを外していき、まずは上半身の下着以外を脱がせた。

（……分厚い体。毎日鍛えてるから当然かもしれないけど……）

服を脱がせるときに触れる彼の体はとても分厚く、筋肉質で。不知火なんかよりよっぽど力が強い……でも、彼は不知火達が使うサイズの主砲までしか使えない。不知火達よりも敵の攻撃を食らったときに大きく負傷する。……体だけみたら戦艦レベルのはずなのに、「戦車」という性質が彼の足を引っ張つてる。

（もしも……チヌさんが戦艦として生まれていたら……チヌさんは不知火達の好意を素直に受け取ってくれているんでしょうか？）

「……不知火？ どうかした？」

「あ、いえ……なんでもありません」

ヲ級に声をかけられ不知火は気を取り直す。

「……不知火、ズボンも脱がしておくほうがいい？」

「……それはやめてあげてください」

チ又さんのズボンに手をかけるヲ級を止める。どうもこの辺の常識にはまだまだ疎いようです。この辺も勉強させないと、外で何か粗相をさせるわけにはいきません。

そんな事を考えつつ、不知火はヲ級と一緒にチ又さんの服を片付け、かけ布団を被せます。……酔っぱらったチ又さんの寝顔って、普段に比べて、なんだか穏やかな感じがするのね。……今なら、キスしても起きない……わよね？

「……不知火？ チ又の顔に何かついてる？」

「ツ！ い、いえ……なんでもありません」

ヲ級の声を聴いて慌てて視線を逸らす。……危なかったわ、ここまで無防備なチ又さんなんて初めて見たからつい……。

「……？ 不知火、私達ももう寝る？ チ又も寝ちゃったし」

「そう……ですね、そうしましょうか」

これ以上チ又さんの顔を見てたらまた変に気を起こしそうですし、もう寝ましょう。ヲ級の言葉を幸いに、私達は服を着替えたりして準備し、そのまま布団に寝そべった。

チヌさんの隣の布団はさっきの事もあつてヲ級に譲っている。

「……チヌ、お休み」

もう寝ているチヌさんに一声かけてからヲ級が電気を消して、それからしばらくして彼女の寝息が聞こえてくる。

「……不知火も、彼女ぐらい素で甘えられれば良いんですが……」

静かに寝息を立てるヲ級の姿に軽く息を吐きながら、不知火も意識を手放しました。

第十五章

第81話

その日、俺は用事があつて不知火と共に工廠に居た。だが、俺たちの他にも先着がいた。暁、提督、榛名の三人である。三人とも心配そうに工廠の奥を見ている。

「もうすぐ響の改造も終わるのね。どうなるのかしら」

そう言つてウロウロとしているのは暁であつた。かなり落ち着かない様子だが、改造？

「不知火、俺は改造については詳しくないんだが、今回は何かあるのか？」

「はい。普段の改造と違つて、今回の響の改造は、響からヴェールヌイへの改造となりま

す。ですから暁も心配でしょうし、提督も様子を見に来ているんでしょう」
ヴェールヌイ……確か、ソ連に賠償艦として連れていかれた響の向こうでの名前だったな。と言うことは……もしかしたら響としての人格や記憶に何か影響が出るかもしれないということなのだろうか？

「ん？ ちよに不知火か。どうしたんだ二人とも？」

俺たちの存在に気付いたのか、提督が声をかけてくる。

「明石に頼みたいことがあつて来たのですが……、響をヴェールヌイに改造ですか。そんなに心配するような内容なのですか？」

「明石は大丈夫だと言つてはいたんだが何分心配でな、様子を見に来たんだよ」
「そうですか……何もなければ良いんですが」

そうやって話しているうちに工廠の奥から人の気配がした。俺たちがそちらを向くと、そこにはツナギを着ている明石と、彼女の後ろについてくる響……いや、ヴェールヌイの姿があつた。

（服装と……多少雰囲気が変わつた感じだな）

響の時に比べるとヴェールヌイは服装と、そしてどこか大人びた雰囲気に変わつていた。

「響、体大丈夫？ 私の事わかる？」

一目散に暁が駆け寄りヴェールヌイの前に立つ。それを見たヴェールヌイは穏やかな笑みを浮かべながら暁を見つめ返した。

「大丈夫だよ暁。何もおかしくはなつていないさ」

そこで俺たちに気づいたのか、ヴェールヌイの視線がこちらに向く。

「提督に榛名に不知火、チヌ。皆そんなに心配だったのかい？」

「えー、私そんなに信用ないんですか？ 酷いですよ」

そう言つて明石は微かに頬を膨らませる。いかんな、変な誤解をされてる。

「いや、俺と不知火は別件で用事があつてきたんだ。決して明石を信用してないとかそういうのじゃない」

「あ、そうなんですか？ いやあごめんなさい勘違いしちゃつて」

俺が誤解を解いている間に会話が終わったのかヴェールヌイと暁がこつちに來た。

「チヌ、不知火、どうかな、変なところない？」

そう言つて自分の服を撮んだりするヴェールヌイ。特におかしいところは見受けられないな。

「大丈夫ですよ響、よく似合つてます」

「そうだな、特に変なところはないぞヴェールヌイ」

俺がヴェールヌイと発言したとたん、暁が俺を睨んできた。

「違うでしょチヌ。響は響よ！」

そう言つて響を抱きしめる暁。突然の態度に思わず俺は呆氣にとられた。

「いや暁、私は一応ヴェールヌイに改造されたわけで……」

「ヴェールヌイでもなんでも響は響でしょ。さ、行きましょう」

そう言つてヴェールヌイの腕を引つ張る暁。それを止めようとして……不意に、俺の視界でヴェールヌイからぶれるように響の姿が見えた。

(ええ?)

驚き目をこすり再度見てみるが、そこに響の姿はなく、そうこうしている内に暁はヴェールヌイを連れて工廠を出て行ってしまった。

「暁ちゃん、心配なんでしょうか? 響ちゃんの事」

「そうだろうな、響からヴェールヌイになつてしまふんじゃないかって心配してたみたいだし。まあ、あの様子なら響は元のままだから心配ないだろう」

提督と榛名がそんなことを言っているのを聞く限り、どうやら二人にはぶれた響は見えていなかったのか? それじゃあ、あれは単なる気のせい?

「チ又さん? 何をポーっとしているんですか?」

不知火に声をかけられて慌てて俺は気を取り直す。そうだ、用事をこなさないと。

さっきの光景はきつと単なる気のせいだ。俺はそう思うことにして明石に要件を伝えることにしたのだった。

第82話

響がヴェールヌイになった翌日、不知火と共に訓練を終えた俺はそのまま一緒に間宮で昼食をとっていた。俺はざるそば定食、不知火は少々辛目のカレーを食べている。

「前から思っていたんですけど、チヌさんってお蕎麦が好きなんですか？ よく食べてるのを見る気がするんですが」

「まあ好きなほうだな。特に理由は無いが、取りあえず迷ったらこれでいいか。って感じではあるが」

そんな話を話していると食堂の扉を開けて暁とヴェールヌイが入ってくるのが見えた。二人も俺たちに気づいたのかこっちに近づいてくる。

「あら、チヌに不知火じゃない。二人とも昼食？」

「ああ。さつき訓練を終えたところだな。そっちは？」

「私たちは出撃の帰りだよ。ヴェールヌイになった事でどれだけ強くなったかを確認するためだったんだけど……」

「そこまで言ったところでヴェールヌイが口を閉ざした。

「？ どうかしたんですか？」

「ああ、ごめん……どうも調子が悪くてね、戦闘でも大した戦果を挙げることができなかつたんだ」

「大丈夫よ響。改造してすぐだから本調子が出てなかつただけよ。響はやればできる子なんだから」

そう言つてヴェールヌイの頭を撫でる暁。だがその瞬間、俺は昨日見たようにヴェールヌイからブレるように響の姿が一瞬見えた。

「!？」

それを見た俺は三人に視線をやるが……三人のやり取りに変化はない。あれは、やはり俺にしか見えていないのか？

「チヌさん？ どうかしたんですか？」

「あ、いや、なんでもない……そうだ、ヴェールヌイには改造まで行けたお祝いをしていなかった。今手元にあるのはこんなものしかないが、これでいいか？」

そう言つて俺は以前間宮の仕事を手伝ったときにお礼にと貰つた特製甘味チケットを二枚取り出してヴェールヌイに手渡す。

「こんなものつて……これ、特別な時にしか買えない特別なチケットじゃないか。しかも二枚も。いいのかい、こんなの貰つても？」

「俺が持ったままでもいいも仕方ないからな。いらぬなら別のにするが」

「いらぬわげがないじやないか。暁、今日のおやつはこれで決定だね」
「え、いいの？ だつてそれは響が貰つたものでしょ」

後ろから羨ましそうに見ていた暁はそう言つて断ろうとするが、ヴェールヌイは小さく首を横に振つた。

「折角二枚あるんだから一緒に食べるほうがいいじやないか。それとも暁は私と一緒に食べるのが嫌なの？」

「そんなわけないじやない！ ありがとう響！」

そんなやり取りをしつつ二人は俺たちから別れて昼食を注文しにいった。相変わらず仲はいいな、あの二人は。

「……チヌさん。私もあのチケツト欲しいです」

ふと前を見ると、不知火も羨ましそうに俺を見てきた。俺はあんまり甘味は食べないが……艦娘、特に駆逐艦やまるゆはやけに好んでるな。

「手に入れたらな……とところで不知火。ヴェールヌイを見ていて何かおかしなところとか、変に感じた事とかつてないか？」

突然の質問に不知火は大きく首を傾げる。まあそうだよな。

「なんですか突然？ 私が見ている限りでは響に特に何かおかしなところはないですが……
そう言えばチヌさんつて今でも響の事をヴェールヌイつて呼ぶんですね」

「ん？ まあヴェールヌイに改造したわけだからな。ヲ級みたいに嫌がってるわけでもなさそうだし、暁も最初の時は怒ったが、今では容認してるようだしな」

「それはまあそうなんですが……多分鎮守府の皆は響で呼び続けると思えますよ。そっちのほう呼び慣れてますし」

まあ、そうだろうな。それに……ヴェールヌイという名前はロシア語。賠償艦として連れていかれた響に与えられた名前だ。嫌なものを感じるのが居ても仕方ないことだが。

「本人が嫌がるようならやめるよ。もしそういうのを感じたら伝えてくれ」

「……わかりました」

そこから俺たちは食事を再開した。しかし……なんなんだろうか、あのブレた響は。単なる俺の気のせいならいいんだが……。

第83話

翌日、今日の予定は俺の海戦での訓練だ。まあほとんどは自主訓練なのではあるが、俺が自主訓練をしているのを見かけると不知火やまるゆらへんがよく手伝ってくれる。だが、今日は少し事情が違った、

「それじゃあ準備はいいかい？」

「ああ、始めよう」

俺の目の前に立っているのはヴェールヌイ。どうも昨日の戦闘での調子の悪さが気になるらしく、訓練で調子を取り戻したいのだという。その準備運動替わりに俺の相手を務めてくれるとの事だ。

「響、早く調子を取り戻すのよ」

「頑張ってくださいね、チヌさん」

陸上から暁と不知火が声をかけてくる。だが、暁の声が届いたとたん、不意にまたヴェールヌイから響の姿が一瞬だけブレて見えた。

(やっぱりブレて見える……なんなんだ?)

気にはなったが、すぐにその事を忘れ、俺は水上バイクを走らせる。棒立ちなんてし

てたら一瞬で終わらされる。

「行くよー!」

動き出した俺にヴェールヌイの魚雷が発射される。くっ、牽制なんだろうが避けるのが精いっぱいだ。

「チッ!」

なんとか魚雷を避けると、俺は機銃でヴェールヌイに攻撃する。勿論ダメージを与えられるなんて思っではいない。単なる目くらましだ。

「クッ」

機銃の弾をうつとおしいと思ったのか、ヴェールヌイは最小限の回避行動で弾を避けながら俺に主砲を向けてくる。俺は咄嗟に大きく回避行動をとる。

「無駄だよ」

ヴェールヌイから発射された弾が俺の目の前に着弾する。咄嗟にハンドルを切り大きく不規則に動いて続けているの攻撃を避け続けるが、俺は既に違和感を覚えていた。

(一発も当たらない? どういう事だ?)

響の時の彼女なら既に俺はバイクから落とされてるはずだ、なのに未だにヴェールヌイの攻撃が俺に当たっていない。

「ハッ!」

攻撃の合間を縫って俺も主砲を撃つ。もっとも当たるとは思っていない。本命はこの後、回避行動のできるであろう隙について少しでも近づいて……。

「うわあー！」

「!?!」

俺の攻撃がヴェールに直撃し、彼女が海上に膝をついた。馬鹿な、当たって上にまともなダメージを受けただど!?

「ヴェールヌイー！」

急ぎ俺は彼女のもとへ向かう。演習で使う模擬弾だから実際の負傷はないはずだが、衝撃はそのままだ。何もなければいいが……。

「ゲホツ……チヌ……」

「大丈夫かヴェールヌイ? いったいどうしたんだ、あんな弾に当たるなんて」

「うん……どうやら調子はまだ回復してないみたいだ……ごめん」

受け答えの様子から見るに特に何もなさそうだが……調子が悪いにしても限度があるだろう。

「訓練はここまでにしておこう。俺の主砲で直撃を……ましてやダメージを受けるなんて本当に調子が悪いぞ。明石に見てもらって、それからしばらくは様子を見たほうがいい」

「そう……だね、そうしておこう」

ヴェールヌイも自分の調子の悪さを自覚しているのか素直に頷く。それを確認すると俺は彼女を抱え上げ、バイクの前に座らせる。

「チヌ、手間をかけさせてごめんね」

「気にするな」

ヴェールヌイの言葉に短く答えると俺はすぐに陸に戻る。そこでは既に心配そうにしている暁と不知火の姿があつた。

「響！ 大丈夫なの!？」

「響、怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫だよ。ただ、思っていた以上に調子が悪いかも知らない。明石の所に行くうと思う」

「二人とも、付き添いをしてくれないか？ 俺はここの片づけをしておく」

「そうですね、ではお願いします。行きましよう響」

「うん、ありがとう不知火」

「響、大丈夫よね？」

「心配しすぎだよ暁、大丈夫だから」

足取りを確かに歩くヴェールヌイに不知火と暁が付き添う。しかし、本当に調子が悪

そうだな。今回は訓練だったから良かったものを、実戦は大丈夫なのか？

第84話

あの訓練から一か月が過ぎた。俺はどうにもヴェールヌイの事が心配でならなかった。というのも、あれ以降も彼女の不調は続いてきたからだ。

海戦に出ても以前の……響の時に比べて戦果は下がり、被弾率も上昇し、彼女の中破大破が原因で撤退するケースも少なくない。俺も何回か一緒に出撃しているが、明らかに精彩を欠いている。

それどころか鎮守府での日常生活にも支障が出ていた。香取の話では授業中にもボーツとしている事が多くなっているらしいし、鎮守府の中で見るときにも調子が悪そうにしている事が多々あった。そのせいか最近では暁が付きっ切りになっている。

だが俺は更に気になることがあった。それは依然としてヴェールヌイからブレるように響の姿が見えることだ。最初の頃はそうでもなかったんだが、最近はかなり頻繁に見る。特に暁と一緒にいるときになるとより多く見るようになった。

そして気になるのは、俺以外の誰もそれに気づかないことだ。艦娘はおろか、提督や軍人のような人間、工廠の妖精、ヲ級に至るまで誰も見ていないという。ここまでくると俺の気のせいだと思いたいが、それにしても頻度が多すぎる。もしかして俺が異常な

のだろうかとも最近は考えそうになるが……。

そんな中、今日はヴェールヌイ、暁、足柄、と共に近海へと出撃することになった。本来のヴェールヌイの錬度ならもつと別の海域に出撃するんだが、最近の様子を鑑みるととても別の海域に行かせられないという。

「艦隊、出撃！」

足柄の号令と共に俺たちは出撃する。既に俺も幾度となく通ったルートだから行軍は問題ないはずだが……既にヴェールヌイが遅れ始めている。なんとか一回目の偵察機発艦ポイントまで到着はしたが……。

「響、大丈夫？」

「うん……平気だよ」

暁の心配そうな問にそう答えるヴェールヌイの表情は明らかに悪い。戦闘に入る前からこれじゃ流石にまずくないか？

「足柄、ヴェールヌイの体調が悪そうだ。撤退はできないか？　いくらこの辺の敵は強くないとはいえ、万が一もありえる」

「そうね……思った以上に悪そうね。ここは……」

「いや、大丈夫だよ……私はやれるから……」

足柄が転進を口に出そうとするがどうのヴェールヌイが否定する。とても大丈夫そ

うではないんだが。

「いや、ヴェールヌイ本当に大丈夫なのか？ 無理はせず撤退したほうが……」

「ハハ……最近はそのが続いてるからね……流石に毎回私のせいで撤退させるのも申し訳ないよ」

そう言つて乾いた笑みを浮かべるヴェールヌイ。その笑みからは生気を感じられず、ただでさえ白い肌と相まつてもはや病人にしか見えない。

「……偵察機より報告よ。重巡一隻に駆逐艦三隻の小規模艦隊を発見。今ならまだ後退できるけど……」

「大丈夫……やれるから……」

ヴェールヌイの言葉にしばし悩む足柄。そして結論を告げた。

「何かあればすぐに撤退よ。まあ、この近海の敵なら私一人でも十分だから、暁は響をしつかり見てあげてね」

「勿論よ！ 一人前のレディに任せなさい！」

勇ましく返答する暁に頷くと足柄は出発し、俺たちもそれに続く。確かにこの近海の敵なら足柄一人でも問題はないんだが……何事もなければいいんだが。

そんなことを考えつつ進んでいくと、やがて遠方に足柄が言っていた敵小艦隊を補足した。

「砲雷撃よーい！ 始め！」

足柄の声を合図に三人が魚雷を発射する。二本の魚雷はそれぞれに敵に命中したが、一本……ヴェールヌイのだけが外れる。

それを気にする暇もなく互いの主砲から発射された弾が飛び交う。本来なら余裕なのだが、やはりヴェールヌイのフォローもあつて攻めきれない。

「きゃあー！」

敵の放った魚雷が暁に命中し爆発を起こす。幸い大した損傷じゃないようだが、その隙に敵の砲撃が暁に集中してヴェールヌイから離される。

そして敵の攻撃をヴェールヌイが避けようとした時。

「響ー！」

暁の音が響いた瞬間、今までよりも大きくヴェールヌイからブレた響の姿が見えた。その瞬間、動きが止まったヴェールヌイに敵の主砲の弾が直撃し、大きな煙を上げた「ヴェールヌイ！」

それを見た瞬間、俺は全力でヴェールヌイの元へ向かう。そして煙が晴れる中で見たのは、たった一撃で艀装を大きくやられたヴェールヌイの姿であった。

「クソ！ ……掴まれ！」

俺はヴェールヌイの近くに來ると問答無用でヴェールヌイを抱え上げて俺の前に座

らせる。

「足柄！ 俺は回避に専念する。敵の撃退は任せられるか？」

「勿論よ。さあ、響を傷つけた事、後悔させてあげるわ！」

「そうよ！ あんたたちなんか全員沈めてやる！」

ヴェールヌイを傷つけられた怒りか、二人は一気呵成に敵を殲滅させてく。これなら
そつちは問題ないか、問題は……。

「ヴェールヌイ、大丈夫か？」

俺の前に座らせたヴェールヌイの様子を見るが、もう俺の言葉に返答する余裕もなさ
そうだ。青白い顔で苦痛に表情を歪めている。

しばらくして二人が敵を殲滅させたのを確認し、俺たちは急ぎ鎮守府へ戻った。

第85話

鎮守府へ戻った俺たちは急ぎヴェールヌイを入渠させ、事の次第を提督へ報告する。報告を聞いた提督は思い悩む表情を見せ、当分の間のヴェールヌイの出撃を禁じる命令を出した。当然だろう、今日の結果はそれだけ酷い物なんだから。

報告を終えた俺たちはそのまま解散。俺は予定よりも早く戻ってきたこともあつて今日やる予定を繰り上げてこなしていく。幸い任務のような時間が固定されてる予定もなかったので繰り上げは問題なかったんだが、その分全てを予定より早く終わらせてしまった。

「さて……後の時間はどうするか」

家で時計を見ながら俺は呟いていた。時間は二一〇〇。寝るには早い。普段から泊まりに来るメンバーは明日の任務のために自室で早めに休んでいるのもあつて今日は久しぶりに一人だ。本でも読んで時間潰すか？

そんな事を考えていると戸が叩かれた。こんな時間に何かあつたのか？ 緊急事態なら警報がなるはずだが……そんな事を思いながら戸を開けると、そこにはヴェールヌイの姿があつた。

「こんばんはチヌ。こんな時間にごめんなさい」

「ヴェールヌイ!? どうしたんだこんな時間に? それに傷のほうはもういいのか?」

「傷のほうはもう大丈夫さ……それより、今日は誰も泊まっていないのかい? それなら都合だ……相談があるんだ」

そう言つて俺を見上げるヴェールヌイの顔色は相変わらず悪い。本来なら自室に帰して療養するように言うべきだが……こんな時間にわざわざ来たんだ。何か理由があるんだろう。

「良いだろう。取りあえず中に入れ」

中にヴェールヌイを招くと俺は茶を用意してちゃぶ台の上に置く。彼女はそれをゆつくりと飲み、少しの間を置いて俺を見てきた。

「チヌ……私は、どうすればいいのかな?」

「……何がだ?」

「私は……響に戻ったほうがいいのか?」

質問の意図がわからず俺は首を傾げる。戻るとはいつたいうことだ?

「……チヌ。私は響からヴェールヌイになった。でも、鎮守府の皆は私を響として扱う……わかつているんだ、皆に悪意があるんじゃないって事は。でも……痛いんだ、私を否定され、響だけを肯定されているようでとても痛いんだ」

俯きそう語るヴェールヌイの頬を涙が伝い落ちる。そして不意に彼女は顔を上げ、俺を見てこう言った。

「チヌ……ヴェールヌイは……ここでは必要じゃないのかな……？ 私……響だけじゃないとダメなのかな？」

そう言ったとき、今までより大きくヴェールヌイから響がブレた。そして二人の視線は深い悲しさを称えて俺を見ていた。

(……名は体を表すという言葉がある。人間じゃない、人の思いから生まれた艦娘である彼女にとってそれは文字通りということなのか……？)

俺はこの時やっと思いついた。ヴェールヌイから響がブレて見える理由を。それはこの鎮守府の艦娘が響を意識しているからだ。ヴェールヌイではない響を……もしかしたら彼女たちは無意識のうちにもヴェールヌイという存在を消そうとしていたのかも知れない。ロシアの賠償艦として名前を変えられた彼女の事を。だが、それは彼女に影響し、体に影響を与えていたんだ。それは……人の思いから生まれた艦娘だからこそ起きた現象なのかも知れない。

ヴェールヌイの近くに居るが故にその想いの影響は大きく、重いだろう。もしかしたら、多くの人の思いによって生まれた艦娘からの思いだからこそ影響を与えたのかも知れない。

そして俺にだけ見えるのは……俺がヴェールヌイを意識しているからなのか、それとも俺が艦娘と別の存在だからなのか……。いや、今はそんな事はどうでもいい。今重要なのは、ヴェールヌイが助けを求めている事であり、それに応えられるのが、今は俺しかないと言うことだ。

「ヴェールヌイ。俺はお前を必要としている。でもそれは……ヴェールヌイとしても響きとしてでもない。お前だからだ」

「どういう……意味……？」

今の彼女の名前を、力を入れて呼ぶ。それを聞いた彼女は困惑の表情を浮かべた。

「……艦娘であるお前は響きであると同時にヴェールヌイだ。ヲ級ののように、最初からもう一つの名前をただ持っているだけじゃない。ヴェールヌイとして長い間ソ連の人々に認識され、想いを受け止めてきたお前は、響きであると同時にヴェールヌイなんだ。どっちかだけじゃダメだ……どっちもお前なんだ」

「名前が二つあるから変な状態になってるんだろが……お前はお前だ。どっちかだけじゃない。どっちもあって初めてお前なんだ。だから……片方だけなんて絶対にダメだ。それを認めてしまったらきつと……お前はお前でなくなってしまう。だから胸を張って言ってやれ、自分は響きでもありヴェールヌイでもあると。響きだけで見るのはやめてくれと」

「私は……そう言ってもいいの？　チヌは……認めてくれるの……？」

「認めるさ、ヴェールヌイ。お前は響でありヴェールヌイだ、と」

俺はヴェールヌイの両肩に手を置き、力を、想いを込めて彼女に告げた。それが俺にできる事だったから。俺の言葉を聞いたヴェールヌイはそのまま俺の顔を見つめ……不意に大きく顔を歪ませたと思うと、彼女は不俺の懐に飛び込み、そのまましっかりと俺の腰に手を回し、抱き着いてきた。

「ひぐ……ウエ……あり……ありが……」

嗚咽を漏らし、俺の懐で泣くヴェールヌイ。俺は彼女を抱きしめ返し、頭を撫でてやる。

(……こうして泣かれると、不思議と今までの彼女へのイメージにはあまりなかった、子供をあやすような気持になるな……あきつ丸殿もこんな気持ちで俺を慰めてくれたのだろうか?)

しばらくの間、俺は彼女の好きなようにさせる。普段の彼女からは見られないような、見た目相応の泣きじやくる姿はきつと暁達には見せられないだろう。

「チヌ……抱きしめて……もつと私の存在を感じて……強く抱きしめて……」

泣き顔を上げて俺に言うヴェールヌイに答えて俺は頭を撫でるのをやめて力を入れて……それでも痛くないように注意しつつ抱きしめる。

「うああああああー！」

再び俺の胸に顔を埋め泣き続けるヴェールヌイ。俺は静かに抱きしめ続けた。

それからしばらくして、嗚咽の収まったヴェールヌイがゆつくりと俺を見上げてきた。その表情は涙と鼻水でヒドイ有様だったが、とても晴れやかで、青白くなっていた顔色も赤みを取り戻している。

「ありがとう……もう……大丈夫」

「そうか……それは良かった……。ほら、取り敢えず顔を拭け。凄い状態だぞ」

俺が近くにあつたタオルを取るとヴェールヌイの顔を拭いていく。それに身を任せ、てるヴェールヌイを見てると……なんか、猫を連想するなあ。響の時に猫の姿で甘えてきたのも原因だな。

そんな事を思いつつ俺はヴェールヌイの顔を拭き終える。が、ヴェールヌイは未だに俺の腰に手を回したまま動こうとしない。

「おい、もう大丈夫なんじゃなかったのか？」

「それはそれ、これはこれだよ。私は今幸せなんだ。私という存在の全てを認められて……暁達にもう一度会えた時と同じぐらい嬉しいんだ。だから、今はこの幸せを噛み締めさせてほしい。離せなんて無体な事言わないでくれると嬉しい」

「待て待て、取りあえず一度離れる。と言うか、今更だが暁とかはお前がここに来るのを

……」

そこまで言ったとき、勢いよく家の戸が開かれ、暁と不知火が入ってきた。

「チヌー！ 響見てない!? どこにもいな……」

「……チヌさん……何をやっているんですか……」

俺たちを見た暁はそのまま硬直し、不知火は思い切り俺を睨み付けてくる。まあ傍から見たら……俺にしがみつくと響とそれに困った顔をしている俺だ。邪推の余地は十分にある。

「……二人ともいいところに水を差さないで欲しい。私は今チヌの温もりを堪能しているんだ」

「おい誤解を受ける言い方をやめろ。マジでやめろ、二人が俺を殺しかねない視線を向けるからやめろ」

ヴェールヌイの言葉を聞いた二人の視線が殺気を帯びている。俺はヴェールヌイを引っぱがすと二人に急いで事情を説明することとなった。

第86話

「……と言うわけなんだ。暁達が悪いとは思ってはいないし、無理に呼び方を変えてほしいとかでもないんだ。でも、私……ヴェールヌイの事を否定する事はやめてほしいんだ。私は響でもあり、ヴェールヌイでもあるんだから」

「うう……ごめんなさい……私のせいで……私の……」

「そうだったのですね……不知火の落ち度です。本当に申し訳ありません」

ヴェールヌイの事情説明を受けて暁は泣きながら謝り、不知火も顔を俯かせて謝罪している。やれやれ、事情を説明するのに一苦労したが……ヴェールヌイのほうは問題なさそうだな。

「二人とも、さつきも言ったけど二人が……いや、鎮守府の皆が悪いわけじゃないんだ。だからこれから気を付けてくれたらいいんだ。それに……もし皆が中々私への認識が変えられなくても、チヌが居れば私は私で居られるし……そうなったら暁の部屋からここに引越そうかな」

「それはダメ！」

ヴェールヌイの言葉を即二人が否定する。まあ、たまに泊まり込むぐらいならともか

く引つ越しは普通にアウトだろ。暁としても妹が男と同棲状態なんて容認できないだろう。

「取り敢えず……他の面々には明日説明するとして、今日はもう三人とも部屋に戻れ」「何を言っているんだチヌ。私はまだチヌの温もりを……」

「戻れ。暁だつて心配するだろ。不知火も明日は朝から任務のはずだろ。いつまでも起きてないでさつさと寝ろ」

ヴェールヌイが何か言おうとするのを、これ以上変に反論されないように上から被せるように言う。それにヴェールヌイは僅かに口を尖らせたが、観念したのか立ち上ると暁達と共に玄関へ向かう。

「それではチヌさん、お騒がせしてすみませんでした。失礼します」

「ごめんなさいねチヌ。それじゃ失礼するわ」

「チヌ、今日は本当にありがとう、明日またお礼はするから」

そう言つて三人は家を後にした。

「やれやれ……なんかドツと疲れたな……俺も寝るか」

時計を見れば既に二二〇〇時を回っている。まったく、一時間ほどの間に妙に濃い時間になったな……しかし……。

「ヴェールヌイがあんな状態になるなんて……。他にも海外への賠償艦となつて名前

が変わったやつがいたよな。確か不知火達の妹の雪風……もそうだったよな。彼女たちは大丈夫なのか……？」

そんな考えがふと過つたが、今回の件は提督の耳にも入るだろう。そうなれば他の鎮守府へも同ケースへの対処法として伝わるだろうし大丈夫だろう。そう考え、俺は眠りにつくことにした。

第87話

翌日、午前の見回りを終えた俺が昼食を取りに間宮へ向かうと、そこには朝の出撃や任務を終えた艦娘が食事を取っている姿があった。その中には暁とヴェールヌイの姿もある。

「あ、チヌ。こつちに来て一緒に食べないかい？」

「ああ、構わない、ちよつと待っていてくれ」

そう言うと、俺は受付でサンマ定食を用意してもらい、それを受け取ってから二人の前に座る。

「あれからどうなんだ？ 体のほうは大丈夫なのか？」

「うん、何人かにはもう話してあるし、後は徐々に浸透していくのを待つだけだよ」

「これで響も大丈夫よね」

そう言つて嬉しそうに笑うヴェールヌイの姿に暁も安心したような表情を浮かべていた。

「そうか、なら良かった」

俺はそう言うのと食事に手を付け始める。だが、ふとヴェールヌイの顔を見ると、

何か言いたそうな感じでモジモジしていた。

「ヴェールヌイ、どうかしたか？」

「あ、ああ……チヌには昨日とてもお世話になったから……お礼を……したいんだ……」

「お礼？ 別に構わん。困ってる仲間の相談に乗るなんて普通のことだろ」

「うん、チヌはそう言うと思っていたよ。だけど、それじゃ私の気が済まないんだ。どうかお礼をさせてほしい」

……まあ、その気持ちはわかるが。

「それじゃ有り難く頂くとするが……どうするつもりなんだ？」

「ん……チヌ、ちよつと顔を近づけてくれないか？」

ヴェールヌイの意図はわからないがとりあえず身を乗り出して顔を近づける。その瞬間、ヴェールヌイは俺の頬に顔を近づけ。

「ひ、響!？」

俺が止める暇もなく、俺の頬にキスをした。それを見た暁が驚きの声を上げている。

「……まだ唇は恥ずかしいから……これがお礼。前からチヌの事が好きではあったけど……昨日の件でもっと好きになったから……」

俺から離れ、顔を真っ赤にしてそっぽを向くヴェールヌイ、かくいう俺も突然の事に反応ができず固まってしまった。

「どもー、青葉です。青葉、見ちゃいましたし聞いちゃいましたよ」
「あ、青葉!？」

突然後ろから青葉が声をかけてきて慌てて後ろを振り向く。いったいいつの間に後ろに居た!？」

「いやー、チ又さんがまさか響さんとそういう関係になるとは……今まで不知火さんやヲ級とそうなるんじゃないかと噂になっていましたがまさかねえ。お二人はいつからそんな熱々な関係になったんですか?」

「おい待て青葉。誤解だ誤解。これは……」

「関係が一気に進んだのは昨日だよ。昨日私はチ又に認められて、互いに抱き合つて……」

そう言つて顔を赤くしながら横を向くヴェールヌイ。おいこら、間違つてはないが曲解しろと言つてるようなもんだろやめろ。

「……チ又はん……まじかいな」

ふと青葉の後ろから黒潮が出てきたが、顔色が青ざめている。

「不知火ならまだあり得るかもと思つとつたけど、響が先を越すなんて……予想外すぎるで……」

「おい黒潮、いったい何を考えてるか知らないがこれは……」

と言ったところで不意に黒潮が俺の顔面を両手で挟んでそのまま顔を近づけ来ようとしたので咄嗟にガードする。

「なにガードすんねんチヌはん！ 響とキスしたならウチとキスしてもえーやろ！ ウチかてチヌはんの事が好きやねんで！」

「ヴェールヌイのキスは頬だったし、あれは単なる礼だ！ 恋愛的な意味はない！」

「そんな……酷いよチヌ……昨日はあんなに愛してくれたのに……」

「ヴェールヌイ！ しれっと嘘をつくな！」

「あわわ……響が……響が大人の階段を……」

混乱するやり取りの中、更に周りにいた艦娘まで加わってきて、俺は事情を説明するのに苦労する羽目になった。

結局あれから多数の艦娘に事情を説明する事になったのでヴェールヌイの事情は一気に全体に伝わった。まあそれは悪いことではないんだが、おかげで一部からロリコンと渾名をつけられた。真にもって遺憾である。

「……チヌ、怒ってる？」

「逆に聞くが、怒っていないと思ってるのか？」

騒ぎを片付けた俺は家であろうやく一息ついていたが、その後ろからヴェールヌイが申し訳なさそうに声をかけてくる。そう思うなら最初からするな。

「ごめん……でも嬉しかったんだ……だからつい……」

「……お前の気持ちが嫌いとかじゃない。だがな、時と場所を弁えろ。おかげで俺は口リコン呼ばわりだぞ……まったくもって遺憾だ」

まったく……非常に不名誉な渾名だ。そもそもヴェールヌイもそういう意味でのキヌをしたわけじゃないんだから、まったく。

「取り敢えずお前はもう他に行っておけ。また青葉らへんに騒がれるのは勘弁願いたい」

「うん、わかったよ。今日はおとなしく引き下がろう」

そう言うのとヴェールヌイは家を出ようと玄関に向かい、そして扉を開けて出ようとした時、俺のほうを向いてきた。

「チヌ、本当に……本当にありがとう」

そう言うのと、そのまま俺の返事も待たずに彼女は家を出て行った。まあ、不名誉な渾名をつけられてしまったが、彼女が元気になったことだし良しとするか……。そう思うことにしておこう。

第十六章

第88話

ヲ級が鷲鷹になつてから結構な月日が過ぎた。その間秋雲の着任や、他の鎮守府への異動の話が出ていた不知火やヴェールヌイと言つた古参の駆逐艦の異動の取りやめなど、この鎮守府では戦力の増強に手を回しているが、やはり十分な戦力の増強ができてるとは言い辛い。空母に関してはヲ級が加わつたことで戦力の拡大はできたが、戦艦、重巡、軽巡洋、潜水艦と言つた所は未だに榛名、足柄、川内、まるゆに頼りきりだ。これから提督はどういう風にするつもりなのか……。

そんな事を考えてる日々がしばらく続いたが、今日新しい艦娘が着任することになった。香取が挨拶に連れてくるらしいが……軽巡だと言うことだが、さて、彼女はどの鎮守府にそのまま残つてくれるのか……。

「ぴゃん。阿賀野型軽巡四番艦酒匂だよ、よろしくね」

……そう言つて今俺の前に居るのが今日から着任する軽巡だという話だ……。軽巡は川内らへんしかあまり見たことはないが……なんと言うか、彼女より幼い感じだな。四番艦だからなのだろうか？

「……三式中戦車チヌだ。宜しくお願いする」

「はい。宜しくお願いします」

そう言つて頭を下げる彼女。それから多少の話を交えた後、彼女は香取に連れられて他へ挨拶に行った。……ヘタすればヴェールヌイや不知火のほうが大人びている感じがするが、彼女は大丈夫なのだろうか？

俺の予想に反して、酒匂は十分な実力を持つ艦娘だった。俺との訓練でも秋雲みたいに油断するような真似もなく真面目にこなしていたし、出撃した時にも順調に戦果を挙げていた。口調や見た目からは幼さが目立つが、流石に軽巡は精神年齢が駆逐艦に比べて高いようだ。

そう思っていたが、今日、俺は彼女が真面目になつている理由を知ることになつた。「ふう……。この辺にしておくか」

鎮守府の中にある訓練室。戦闘における戦い方ではなく、純粋な筋トレや対人用の技術を学ぶためのスペースで、俺はそこで刀を構え、剣術の型稽古を行つていた。実際に使う機会があるとは思っていないが……受け取つたからには多少なりとも使えるようにしないと流石に後ろめたいものがある。

「あれ、チヌさん。珍しい特訓してるんですね」

聞き覚えのある声に振り替えると、そこには酒匂が入り口からこつちを見ているのが目に入った。ラフな格好をしているし、何か訓練でもするんだらう。

「ああ。酒匂か。ちよつとした縁で手に入れてな。それより、ここを使うならどくぞ。俺がいると気が散るだろ?」

俺がそう聞くと、酒匂は少し迷った素振りを見せた後に刀に視線を向けてきた。

「ん〜……酒匂、ちよつと興味持っちゃった。ねえねえ、どんな特訓してたのか見せてもらってもいい?」

「それは構わないが……見ていて面白い類のものじゃないぞ? それに、特訓はしないでいいのか?」

「へーキへーキ。それに、特訓見せてもらわないと気になってしかたないよ〜」

そう言う酒匂の目には確かに好奇心の光が見える。まあ、別に構わないか。

「それじゃあちよつとやってみるが、飽きたら言ってくれていいぞ」

そう前置きし、俺は刀を抜くと型稽古を行う。その途端、酒匂が息を飲んだのが気配でわかったが、俺はそちらに視線は向けずに一つ一つの動作を慎重に、型に乱れが生じないように体に馴染ませる。いぎというときに考えるよりも早く体が動くように、一回の動きを体に刻み込ませていく。……まあ正直、俺自身が全力で殴り掛かるほうが

対人戦では早いし強いと思うが、そこは考えないようにしている。

しばらくの間型稽古を繰り返し、やがて最後の型の動きを終えた俺は静かに息を吐いて刀を鞘に納めた。

「びやく。……チヌさんすごい。カッコイイ」

型稽古を終えた俺に酒匂が拍手をしてくれる。それはまあ嬉しいが……格好いいのか？

「まあ、こんな感じの訓練だな。じゃあ、俺は戻るから、後は自由に……」

俺が全てを言い終わる前に酒匂は目の前から走り去っていて、しばらくしたら、剣道で使う竹刀を持って戻ってきた。

「チヌさん。私にも教えて教えて」

「……なんでだ？」

俺が知っている限り、彼女はこう言った事に興味のあるタイプではなかったと思うんだが。

「チヌさんのを見てたら私もやりたくなっちゃった。ねえねえ、教えてよー」

「……俺も人に教えられる程身についてるわけじゃないが……取りあえずこれを読んで、その通りに動いてみればいい」

そうやって俺は、今俺が型稽古をしていた剣術の指南書を酒匂に渡す。それを受け

取った酒匂は興味深そうに型の写真に目を通し始める。そんな彼女を横目に俺は先ほどまで繰り返した型稽古をもう一度やり始めた。

「ふうむ……なるほどお、わかりました！」

しばらく指南書に目を通していた酒匂だが、立ち上がると、彼女も型稽古を始めた。と言つても下に置いてある指南書に目を向けながらだから時折バランスを崩したりすることもあるが、俺の最初の時はそんなもんだったから、まあ当然なんだろう。

しばらくの間俺達はそうやって型稽古を続けてきたが、やがて酒匂がその場に座り込んだ。

「びゃあ……疲れたあ……」

「普段やらない動きをするからな。ちよつと待つてろ」

俺も刀を床に置くと、訓練室の隅にある自販機でスポーツドリンクを二つ買い、一つを酒匂に手渡した。

「あ、ありがとうございませ……。あー、美味しい〜」

手渡されたスポーツドリンクを一気に飲み、彼女は大きく息を吐く。

「自分の特訓をする前にそんな疲れてもいいのか？ はつきり言つて、実戦では役に立たないぞ」

「良いんですよ、私がやってみただけなんですから」

そう言われてはこれ以上何か言うこともできないので、俺は適当な相槌を打ちつつスポーツドリンクに口をつける。

「しかし……酒匂は熱心だな。確か、この後短いとは言え遠征をするって聞いてるぞ。それなのに訓練をやるとはな。大抵のやつは遠征に備えて体力温存してる場合が多いが」

俺の言葉に酒匂は先ほどまでとは違う、少し乾いた笑みを浮かべた。

「あはは……。だって、やつと皆と一緒に戦えるんですから、頑張らないと。今は油が足りないって事もないから」

「やつと?」

「はい。あたしは、生まれてくるのが遅かったんで……戦いに行けなかったんです。戦いに行けず、皆が沈んだ知らせを聞くだけで……皆と……戦いたかったんです」

「……そうだったのか……」

……そうか。彼女が熱心なのは俺と同じような気持ちだからなのか……。戦いに行けず、ただ身内が死んでいく知らせを聞くだけ……。そんな日々を彼女も送っていたのか。

「あ、ごめんなさい。暗い話しちゃって」

「いや、構わない……。俺も同じだ。俺達三式中戦車も戦場に行けずに置いてかれた。

だから、酒匂が熱心な気持ちはよくわかる」

「ぴゃ……そうだったんですか。……あたし達、似た者同士なんですネ」

そう言つて笑う彼女の顔はどこか親近感を感じるもので、俺達はそれから酒匂の遠征の時間まで互いの気持ちを語り合つた。

第89話

そんな事があつたからか、俺は何かと酒匂に気を遣うようになり、しばらくして彼女は別の鎮守府に異動となつた。なんでも彼女の姉が全員揃つてゐる鎮守府らしく、これで姉妹全員が揃うらしい。その事を話す彼女はとても良い笑顔を浮かべていた。だから俺も残念な気持ちはあつたが、気持ちよく彼女を送り出すことができた。姉妹で一緒か……羨ましいものだ、その時の俺は思った。だが……それからしばらくして俺は戦争の悲しさを今更ながらに味わうことになつた。

「行方不明……？　酒匂が戦闘中に行方不明に？」

提督室で聞かされた言葉を、俺は信じられなかつた。

「ああ。酒匂が着任した鎮守府の提督……あのクソツタレ野郎の作戦がまずかつたらしい。作戦は失敗。酒匂は殿を務め、そして行方不明になつたらしい」

「！　酒匂の最後の確認場所は！　すぐに捜索しないと……今の海上で行方不明など……！」

「ダメだ。酒匂が行方不明になつた海域はここから相当な遠方になる。俺達が捜索の手を伸ばすには遠すぎる。二次遭難を起こすだけだ」

「！……では自分だけでも！ 私なら居なくなっても戦力上の影響はないに等しいです。どうか許可を！」

「……ダメだ、許可はできない」

提督の言葉を聞いた俺は、身を翻して部屋から出るために歩き出す。こうなったら断専行でもなんでもいい。処罰は受ける。だが、酒匂は放っておけない。

「いいかチヌ、独断行動を起こそうものなら、それは陸軍の竹下一等陸佐にも迷惑がかかることになるぞ！」

その言葉に俺は体が止まってしまった。クツ……だが……！

「チヌ。向こうの鎮守府には酒匂の姉達が居るんだ。彼女たちなら文字通り死にも狂いで捜索にかかるはずだ。……だから、今は彼女たちを信じて待つていろ」

「ッ！……了解……しまし……た」

辛うじて声を絞り出した俺は、振り向くことなく提督室を後にし、そのまま……人気がない倉庫の裏手に足を運んだ。……ここなら誰の目にもつかないな。

「……クソッ！」

俺は近くにあった岩に思いきり右手の拳を振り下ろした。……ダメだ、こんなやり場のない怒りを抱えたままじゃ……だが、……だが！

「！チヌさん！何をしているんですか!？」

不意に右腕を捕まれた。視線を向けると、そこに居たのは不知火だった。

「不知火……？　なんで……ここに？」

「チ又さんが凄いい形相で歩いてきたから追いかけてきたんです。それよりどうしたんですか？　こんな……手が血だらけじゃないですか」

そう言われて手を見てみると、岩を砕いた事では何もなかったが、握りしめていた両手の平に爪が深く食い込んだらう、その血が流れていた。

「……大丈夫だ、大した傷じゃない……医務室で処置しておけば問題ない」

俺がそう言うと、不知火は俺の手を取って傷を見てきた。

「……そうみたいです。では、一体何があったんですか？　チ又さんがあんな形相で歩いているなんて……八つ当たりしてるなんて。何も無いわけじゃないですよ」

……どうせ提督から連絡ぐらいい入るかもしれない……隠しても意味はないか。

「……酒匂が戦闘中に行方不明になったらしい。その海域が遠くてここからは搜索は行えないと言われた」

俺の言葉を聞いた不知火が一瞬息を飲むのがわかった。

「そう……ですか……。向こうの鎮守府からの搜索はどうなっていますか？」

「阿賀野型が搜索しているらしい……。だが……今の海で戦闘中に行方不明になるといふことは……」

「……そうですね。生存はほぼ不可能……でしょう。運よく無人島か何かに身を潜められればいいのですが……」

俺たちの間に沈黙が流れる。……こんな時、俺は何と言えればいいんだろうか。不知火を安心させるような事を言えればいいのか？ ……俺自身が何も安心できていないのに。さっきの八つ当たりを見られているのに。

「……チ又さん。ともかく傷を処置しましょう。このまま放ついても仕方ありません」

そうやって俺の手を取り歩き出す不知火。それに引つ張られながら、俺の口からは言葉が零れ落ちていた。

「……不知火……俺は情けないな……先の大戦で多くの兄弟達を失ったのに……また……こんな気持ちになる……なんて……こんな感情……持つていても……」

そうだ。俺は兄を、弟を、同じチ又達を、親戚たちを失った。なのに……なんで今もこうして気持ちに流されてしまっているんだ……情けない。本当に……情けない。

「……チ又さん。その気持ちを捨ててはダメです。それを捨てる事は……ダメな事なんです」

いつの間にか俺の両手を握り、俺を見上げる不知火。その表情はまるで泣きそうな……そんな表情を見た俺は、何も言えずただ頷くことしかできなかった。

第90話

酒匂が行方不明になってから10日が経過した。今も向こうの鎮守府では周辺の無人島等を搜索しているらしいが、既にその生存は絶望的だと言われている。……俺はその間、表面上は普段通りに過ごしていた……と思う。正直自信はない。

(俺はもつと……何かできたんじゃないだろうか?)

心の中に巣くっているこの考えはずっと離れなかった。俺がもつと彼女が強くなるために何かできれば……いや、もしかしたら、彼女が他の鎮守府に異動するのがズレるだけでも、もしかしたら……。

「チヌさん……チヌさん。聞いていますか?」

「……あ、不知火か。悪い、聞いていなかった」

訓練場のベンチに座っていた俺の目の前にいつの間にか不知火が立っていた。マズイな、全然気づかなかったぞ。

「はあ……。司令官が呼びびです、酒匂さんに関する事です。至急提督室に来るようにとのことです」

酒匂の名前を聞いた俺は即座にベンチから立ち上がった。

「……酒匂に関する何か……。不知火、お前は思う？」

「……判断が難しいところです。轟沈が確認されたのか、発見されたのか。いずれにせよ、司令官の元へ行けばわかると思います」

「……そうだな」

不知火の返事に俺は頷くとすぐに提督室へ向かう。……見つかったという知らせならしいのだが。

提督室に到着した俺を迎えた提督の雰囲気は普段より重いものだった。……これは、無事に見つかったというわけではないのか。

「来たなチヌ。さて……要件は不知火から聞いているかな？」

「はい。酒匂に関することだと聞いています。提督、酒匂は……無事なのですか？」

「さて……それは判断が難しい。これを見てくれ」

そう言つて提督が差し出したのは一枚の写真だった。俺はそれを手に取つて……そして、そこに映っている内容に目を見開いた。

「提督……これは……!？」

「……酒匂捜索中の阿賀野型によって撮影されたものらしい」

俺の手の中にある写真。そこに映っているのは多数の深海棲艦。そしてその中央にいるのは……。

「酒……句……？」

深海棲艦の持つ艤装を装備し、目の部分にはバイザーのようなものが覆いかぶさっていて素顔はわからない。だが……それは確かに酒句だった。

「……これと遭遇した艦隊は説得を試みるも失敗。敵の攻撃を受けて撤退したとの事だ。そして、現在この深海棲艦はこの鎮守府に向かって侵攻中だ」

「この鎮守府に？ ……いったいなぜ？」

「理由は不明だが、来るというなら迎え撃たねばならない……だが、私はこれを好都合だと思っている。なぜなら……チヌ、君なら……」

提督がそこまで言ったとき、部屋の扉がノックされた。提督が入るように言うとう入ってきたのはヲ級だった。

「……提督。酒句の事で用事があるって聞いたけど……なに？」

「ああ……ヲ級、今チヌが持っている写真を見せてくれ」

提督に言われるがままヲ級が俺の手の中の写真を見る。

「……これ、酒句。……どうしてこんな事に？」

「……理由は不明だ。だが、私は彼女を轟沈させたいなどとは思わない……。ヲ級、彼女を艦娘に戻すことは……できるのか？」

提督は真剣な……これまでにない程の真剣な顔でヲ級に聞いた。俺もヲ級に視線を

向ける。……それに対してヲ級の返答は。

「……うん。できるできる」

……あまりに軽かった。

「！ 本当なんだな？ 本当に、酒匂を元の艦娘に戻せるんだな？」

「……元の……と言われるとわからないけど。酒匂がこうなってから日も浅いから、少なくとも記憶や人格に損傷がない状態で艦娘に戻すのはできるかな……。チヌが協力してくれるならだけど」

「俺の力で……できるのか？」

「……うん。私を鹵獲したチヌならできる。あ、あの刀が必要だから持ってきてね」

ん？ なんでそこであの刀の事がでるんだ？

「ヲ級、それはどういう意味なんだ？」

「……酒匂が顔につけてるこれ。これを壊せばいけるけど……。チヌが直接殴ると……。多分私と同じ深海棲艦としての酒匂の鹵獲になるから……。あの刀の力で深海棲艦から艦娘に戻さないと……。元に戻せたとは言えない……。かな」

……正直、俺はヲ級の言ってる事の半分もちやんと理解はできてないと思う。だが、それは重要なことじゃない。俺にとって今重要なのは、それで酒匂が戻ってくるかどうかだ。

「……なるほど、刀には古来より邪悪な気を払う力があるとされている。深海棲艦と言う負の感情から生まれた者を艦娘に戻すにはその力が必要になるわけか。……天之御影命由来の刀ならば確かにできそうだな。……チヌ、やってくれるな？」

「勿論です。身命を賭してでも、彼女を元に戻します！」

「よく言ってくれた。榛名、これより我が鎮守府は総力を挙げて酒匂救出に動く。すぐに艦隊を編成し、出撃するぞ！」

「はい！　すぐに準備します！　チヌさん、ヲ級さんも、行きましょう！」

「ああ」

「……了解」

榛名の後に続いて俺とヲ級も提督室から出る。……酒匂、絶対に助けるぞ！

第91話

あの後俺とヲ級は榛名を旗艦とした不知火、黒潮、俺、ヲ級、足柄による第一艦隊として出撃。更に、残りの艦娘が支援艦隊として編成され、残りの艦娘が万が一のための鎮守府防衛に残ることとなった。そして今、俺は刀を背負いつつ水上バイクで海上を走っている。情報ではこの海路の先に酒匂が居るらしいが……。

「……チヌ、緊張してる？」

「……当たり前だ。これからの俺の行動で酒匂が助けられるかどうかがかかっているんだ……。緊張しないわけがないだろ」

ヲ級の問いに返答する。だが、言葉に出すと一層、体が緊張するのがわかる。ハンドルを握る手に無意識のうちに力が籠り、呼吸のたびに喉の渇きを感じる。俺がしくじれば酒匂がどうなるか……。

「大丈夫ですよチヌさん。私達が全力でサポートします。ですから、チヌさんは自分を信じて行動してください」

「……ああ、頼む」

横を並走している不知火の言葉に俺は頷く。緊張が解けたわけではないが……そう

だ、こんな有様じゃ助けられるものも助けられない。気をしっかりしないと。

「！ 皆さん、前方を！」

榛名の言葉に俺達は前を改めて見る。すると……居た。遠目でまだハッキリとしたものは見えないが、深海棲艦がこちらに向かつてきている。

「いよいよやでチヌはん。気張っていくで」

「救出戦なんて初めてよね。でも燃えるわ。さあ行くわよ！」

黒潮、足柄の言葉に背中を押されるかのように、俺達は深海棲艦に向かう。向こうもこちらに気づいたのだろう、こちらに向かつてきている。

「榛名、支援艦隊からの援護は？」

「もうすぐです……支援艦隊より砲撃を開始したとの連絡が！」

榛名の言葉を合図にするかの如く、俺たちと離れた場所を航行していた支援艦隊からの砲撃が敵に降り注ぐ。流星に距離があるからそんなに着弾してはいるわけではないが……それでも敵の駆逐艦が何体か沈んで行っている。よし、これで多少楽になったな。

「主砲、砲撃始め！」

再度聞こえる榛名の声。今度こそそれを合図に俺達の、深海棲艦の主砲から放たれる砲撃が飛び交う。幸いというべきなのは敵の錬度がそこまで高くないのか、多少なりとこちらに余裕がある戦いになってる事だろう。

「……………行つて！」

現に今も俺の後ろから発艦されていくヲ級の艦載機が次々に敵の艦載機を撃墜、更に敵艦隊に爆撃を浴びせている。……こいつが味方になってくれて本当に良かった。これなら……………！

「……………チヌー！ あそこ！」

ヲ級の指さした方向を見た俺は確認した。酒匂の姿を……。その姿はあの写真で見た通りの、深海棲艦の艤装に身を包んだ姿だった。

「酒匂！」

思わず叫んだ俺の声が聞こえたのか……酒匂はこちらを向いたと思うと、その主砲を向け、容赦なく撃ち放つ！

「クッー！」

咄嗟に回避した俺の後を追うように酒匂の攻撃が放たれる。その砲弾が海に着弾するたびに大きな水柱が上がり俺の体を濡らす。だが、躲せる。なんとか避ける事ができる。

（攻撃の正確性が落ちてる。深海棲艦になった影響か？ だが、これならチャンスだ）

俺の知っている彼女なら、既に俺に命中させていただろう。だが、今の彼女の攻撃にはその正確性はない。だが、一撃でも当たれば致命傷になる。それに周りの深海棲艦達

も、いつの間にか酒匂の近くに集まってきている。もしも集中攻撃を食らえばどうしようもない。ならば。

「ヲ級！ 援護を頼む！」

「……………うん」

ヲ級の艦載機が周りの深海棲艦を蹴散らし、俺に道を開けてくれる。そして俺は酒匂の攻撃を掻い潜り、そして……………。

「うおおおー」

俺は水上バイクから飛び出すと、そのまま酒匂を勢いのまま海面に倒し、その上に馬乗りになる。以前、ヲ級に対してやったのと同じ状態だ。この状態なら、酒匂も自爆の可能性があるから主砲は打てないし、魚雷も意味はなさない。そして酒匂の腕力や技術ならこの状態の俺をどうにかする事はできない。

「……………！」

俺を見上げる酒匂が何かを叫ぶ。それは俺には理解できない言語だったが。だが……………俺には助けを求めているような、そんな気がした。

「酒匂……………今、助けるからな！」

背中に背負う刀を抜き、俺は酒匂の目を覆う艤装に突き刺した。硬い金属を貫くような感触が伝わり、刃先が食い込む……………すると、そこを中心に艤装が……………刺しているも

のだけじゃない、主砲も、魚雷も、他の全ての艤装にヒビが入っていき、そして音を立
てて崩れ、海中に沈んでいった。

「チヌ……さ……ん……？」

崩れた艤装から現れた酒匂の顔。それは俺のよく知っている彼女の顔であり、その瞳
から流れる涙が、彼女が元のままであるということを実に物語っていた。俺はそれに
安堵の息を漏らし、刀を鞘に仕舞う。

「酒匂……助けに来た。戻ろう、俺達の鎮守府へ」

「う……あ……うあああああ！ チヌさん！ チヌさん！」

俺の言葉に酒匂の目から更に涙が溢れたと思うと、彼女はそのまま俺に抱き着いてき
た。おい待て。この戦闘中にそれはマズイし、落ちる、落ちる！

「さ、酒匂！ 落ち着け！ このままじゃ敵の良的に……！」

「大丈夫やでえチヌはん。もう敵は撃退しとるで」

「成功したんですね。酒匂さん……戻ってこられたんですね」

聞こえてきた声に振り向くと、そこには黒潮と不知火が誇らしげな顔をして立ってお
り、周りには深海棲艦の影も形も存在していなかった。

「ふっ、この私にかかればあれぐらい何ともないわね。さあ、凱旋するわよ！」

「お帰りなさい酒匂さん。さあ帰りましょう、鎮守府へ」

更にその後ろから榛名と足柄も現れて酒匂の手を取る。そして酒匂は立とうとして……動きが止まった。

「ピヤツ……チヌさんどうしよう」

「……悪い、誰か水上バイクを探してくれないか？ あれがないと……」

「……大丈夫。回収してきた」

そう言つてヲ級がいつも何か水上バイクを回収してくれていたので急いでそれに乗る。そして酒匂は榛名達の手を借りて立ち上がると……なぜかそのまま俺の水上バイクに乗り込んで俺の背中にしがみついていた。

「……いや、酒匂。なんでこれに乗る？」

「ピヤア……だつて凄い疲れてるんだもん。ねえチヌさん。乗せてちょうだい。ちょうだい」

そう言われればどうしようもない。彼女が消耗しているのは確かだ。だが、だからと言つて一番弱い俺に背負われたままでは俺の巻き添えでやられる可能性もある。

「……榛名、足柄。問題はないか？」

「ええ。大丈夫です。もし敵が出てもし私達で撃退してみせます」

「私達を舐めてもらつちや困るわ。ここまでやつたんだもの。最後までキツチリ終わらせるわよ」

「なんやチヌはん。そない心配いらんで。ウチらがちゃんと護衛するからな」

「ここまで来て失敗なんてしません。どうぞご心配なく」

「……大丈夫」

「……わかった。頼むぞ」

榛名と足柄だけでなく三人にまで言われては仕方がない。俺はそのまま酒匂を乗せたまま、皆と共に帰路に就く。背中から伝わる彼女の存在が、俺にこの任務が成功したのだと、改めて実感させてくれた。

第92話

酒匂を連れ帰った翌日。俺は酒匂と共に家で過ごしていた。彼女を連れ帰った後、彼女は入渠し、明石にチエックしてもらったが特に異常はなかった。だが、彼女は言うわけか一人で居るのを嫌い、あれから俺の家で一泊することになった。今も彼女は寮の、以前彼女が使っていた部屋へ戻ろうとせず俺と一緒にいる。

「なあ、酒匂。なんでまだ俺と一緒にいるんだ？ ……深海棲艦に捕らえられていて、一人でいるのが怖いというのはわかるが、ここに居るより寮で誰かの部屋にでもいるほうがいいだろ」

「……迷惑だったらごめんなさい。でも、今はチヌさんと一緒に居たいから。お願い、今は一緒にいさせてほしいの」

そう言つて彼女は俺から離れようとしな。理由を聞いてもこの有様で教えてくれる様子もないし……。どうするかな。

そんな事を考えながら過ごしている、俺と酒匂に提督室への出頭が命じられた。それに応じて二人で提督室の前に到着し、扉をノックしようとしたとき、中から怒号が聞こえてきた。

「ふざけんじゃねえぞ！ 酒匂を返還しろだ！ お前の作戦ミスで彼女は危うく死ぬところだったんだぞ！」

そんな言葉を皮切りに、中から怒号が断続的に聞こえてくる。最初の声だけがかなりでかかったのか、後の言葉は断片的にしか聞こえてこないが……恐らくは酒匂の所属している鎮守府の提督だろう。だが、平和とは程遠いやり取りだ。

しばらくして怒号が止んだのを確認すると、俺は扉をノックする。そして榛名がどうぞと言ったので入ったが。

「ともかく、酒匂はこちらに所属させる！ お前の所に所属させて轟沈させるような真似なんかできるか！」

執務机の上にある固定電話に全力の怒鳴り声と共に受話器を叩き付ける提督の姿と、それを困った顔で眺める榛名の姿があった。まだやってたのか。

「まったく……ああ、チヌ、酒匂。みっともない所を見せてしまった」「ぴやつ……それより提督さん……もしかしてさっきの電話って……」

「ああ。酒匂が所属していた鎮守府との連絡だよ」

それは話の内容でわかっていった。だが、どうにも穏やかとはとても言えそうにない会話の内容だったな。……だが、当然だ。

「提督、ある程度の話は聞こえていましたが、酒匂に関しては、こちらに所属させるとい

うことでよろしいのでしょうか？」

「当然だ。あの野郎、言うに事欠いて酒匂が行方不明になったのは酒匂の責任であり、彼女に処罰を下すためにも早期に返還しろと抜かしやがった。艦娘を道具と勘違いしてんじやないぞあんの野郎！」

「ぴゃっ！」

提督の怒号を聞いた酒匂が俺の後ろに隠れる。完全に怯えてるな。

「……………提督、酒匂が怯えています。どうか落ち着いてください」

「……………ああ、そうだな、すまない酒匂」

酒匂の様子に気づき、提督は大きく息を吐いた。少しは落ち着いてくれただろう。

「さつきも言ったが、君は今後この鎮守府に正式に所属することになる。と言うか絶対的にそうさせる。阿賀野型の姉妹と離れ離れになる事には心苦しいと思うが……………。私には君をあの鎮守府へ戻すという判断を下すことはできない」

「……………いえ、大丈夫です。確かに皆と離れるのは辛いけど……………あたしはあそこよりここが良いから。だから……………宜しくお願いします」

そう言つて頭を下げる酒匂。そして頭を上げたときに横から見えたその表情は、何かを決意したような、そんな引き締まった表情であつた。

第93話

提督との話が終わってから数日後、提督同士の間で酒匂の異動が正式に決定し、改めて彼女はこの鎮守府所属となった。比較的最近まで所属していただけあって、他の艦娘達からも問題なく受け入れられ、今も演習形式で訓練している。傍から見たら、つい最近まで過ごしていた日常に戻ったようなものなのだろう。ただ……。

「えーい、いっくよー!」

「おわあ! 危ないで!」

「ちよつと、酒匂さん強すぎるよお」

酒匂の砲撃が黒潮、暁に襲い掛かっている。その着弾の正確さ、二人の動きを読む洞察力。明らかにここを出て行ったときに比べて高くなっている。彼女が配属された鎮守府は前線の鎮守府だとは聞いていたが、それだけで短期間であそこまで強くなるというのか? 酒匂がこの鎮守府から異動してから半年も経過していないのに。

「……酒匂、強くなってる」

俺の隣で演習を眺めているヲ級が小さく呟く。

「そうだな。明らかに強くなってる……前線の鎮守府はそれほどに苛烈な状態なのか

「？」

「……………あ、違うと思う。あれは……………深海棲艦になった影響だと思う」

……………ちよつと待ってくれ。ヲ級は今なんて言った？

「……………ヲ級、どういう事だ？ わかるように説明してくれ」

俺の言葉にヲ級はゆつくりと頷き、話し出す。

「……………藤村さんの話だと艦娘も深海棲艦を正と負のバランスが偏っている……………だから、一時的にでも深海棲艦になった影響で、それがあつた程度整えられたから……………その分強くなつてる」

……………酒匂の攻撃の正確性が落ちていたのは別の要因があつたって事なのか？ いや、

それよりも大切なのは……………。

「……………それは本当なのか？ ……いや、彼女の強さを見ればある程度納得はできるが……………」

確かに藤村さんはそう言っていた。だが、俄かには信じがたいな……………。

「……………多分私もそう。私の場合には艦娘寄りになつてゐるって事だけ……………。チヌに鹵獲される事で艦娘寄りになつたんだと思う」

「……………いやいや。流石にそれはおかしいと思うんだが。なんで俺が鹵獲したら艦娘寄りになるんだよ」

「……………うーん。でも、それ以外に説明がつかないし……………チ又自体、艦娘寄りの存在だからだと思うけど」

……………首を傾げられても俺は困るんだが。

「あ、あの！ それ、本当ですか!?! 深海棲艦になったら……………強くなれるんですか!?!」
対応に困る俺の後ろから声が聞こえ、振り向くとそこにはまるゆが立っていた。

「……………まるゆ、それを聞いてどうするの？ まさか……………深海棲艦に捕まりに行くとか……………言わないよね?」

「……………まるゆ、まさかとは思いますがそんな事考えてないよな」

俺とヲ級の迫及にまるゆは口籠る……………が、少しして俺達を見上げながらはつきり口に出した。

「わ、私は弱いですが、だから……………少しでも強くならないと。……………戦車のチ又さんがこうして頑張ってるのに、私が弱いままじゃ……………」

……………確かにまるゆの実力は最近伸び悩んでいる。だが、だからと言って深海棲艦化させるなんて、そんな馬鹿な事をさせられるわけがない。

「……………まるゆ、先に結論言うけど、無理だと思おう」

「な、なんでですか!?! 私と酒匂さんじゃ……………何が違うって言うんですか!?!」

俺が話すより先に出たヲ級の言葉にまるゆが嘯みつく。だが、次に出てきた言葉に俺

達は言葉を失うこととなった。

「……だってまるゆ潜水艦だから……チヌが鹵獲にいけないし」

「……あ」

そうだ、確かに仮にまるゆが深海棲艦になったとしても絶対に海面に出てこない。それじゃ俺がどう頑張っても鹵獲に行けはしない。

「……それに、原理も何もかもが不明瞭、不明確だから……なれるかもわからない、なれたとしてもヘタしたら他の鎮守府へ向かって、そこでやられちゃうかもしれない……地道に強くなつてくしかないと思う」

「そ………そうです………ね」

ヲ級の言葉に反論点を見いだせなかったのか、まるゆは肩を落としてしまった。だが、今の考え方のままじゃ危ういな。

「……まるゆ」

「はい？ なん………わわ」

俺は腰を下ろすとまるゆの両肩に手を置く。変な声を上げるまるゆだが、俺は構わず話し続ける。

「まるゆ、さつきみたいな考え方はもうしないでくれ。……そんな不確かな、危険な方法で強くなろうとするなんてのはダメな事なんだ。そんなまるゆが危険に晒されるよう

な方法を取ろうなんて……頼む、今後はもうあんな考えを起こさないでくれ」

「……そう、ですよ。ごめんなさい、もう、あんな考えはしませんから」

まるゆは俺の目を見ながらしっかりと頷く。その様子からどうやら危ないことに先走ろうとする考えは改めてくれただろうか。だが、また同じ考えをしないとは限らないし、提督に相談したほうがいいな。

第94話

演習を終えたあたしは艀装を明石さんに返却した後、チヌさんと一緒に家で本を読んでいる。はあ……落ち着くなあ。

本を読みながらチヌさんを横目で見てみるけど、彼はあたしの視線に気づかずそのまま本を読んでいる。

(はあ……やっぱり前の鎮守府よりこのほうがお家つて感じがするなあ)

あたしが派遣された先はお世辞にも良い場所とは言えなかった。阿賀野姉や能代姉や矢矧ちゃん。姉妹揃う事ができたのはとても嬉しかった。でも、あの提督は怖かった。私を道具としてしか見てないような……そんな感じだった。

そしてあの戦い。提督の無理な命令のせいで艦隊は危機に陥って、そして届いた作戦は私を殿とした撤退戦。矢矧ちゃん達を危険に晒したくなんてなかったから了解したけど……とても怖かった。怖い中戦って、深海棲艦の砲弾を受けて……そのまま沈んでいったのを覚えてる。

でも、気付いたら私は海の上に居た。まるで自分が自分じゃないような、そんなフワフワとした意識の中で私は動いていた。後から聞いた話だと、阿賀野姉達とも戦闘をし

ていたみたい……よく覚えてないけど。

そんな中、私の中にあつたのは……帰りたいという気持ちだけだった。ただ、帰りたい……その気持ちのまま動いて……そしてチ又さん達と戦つてた。必死の形相で私に向かつてくるチ又さんを見た時、あたしは叫んでいたのをよく覚えてるよ……助けてって、叫んでたんだ。

それでチ又さんの刀が目の装甲を貫いて……それであたしは元に戻れた。元に戻つたあたしはただ嬉しくて、チ又さんに抱き着いていて。それで皆と一緒に鎮守府に帰つた。見慣れた鎮守府の建物を見た時、あたしは本当に帰つてこれたんだと思つて……チ又さんの背中に顔を埋めて泣いちゃつた。

それから阿賀野姉達に来てくれたけど……、あたしはこつちに残る事を伝えた。それは勿論ここの提督さんがそういう風にくれたと言うのがあるけど……あたしにとつて帰る場所はここなんだよ。あの怖い提督が居る鎮守府じゃなくて、皆が暖かく迎えてくれるところが、あたしの帰る場所なんだ。それに……。

「……酒匂、さつきから俺のほうを見てないか？ 何か用事があるなら言つてくれるほうがいいんだが」

「ん？ ないよ、チ又さん見てただけだから気にしないで」

チ又さんにそう返すと、彼は困惑した表情を浮かべて、また本を読み始める。その一

挙一動を見ているけど、飽きることがない。

(……ヲ級さんは、チヌさんに鹵獲された影響でこんな考えになつてゐるんだらうつて言つてたけど……それだけじゃないよお)

元々、チヌさんには親しみを感じていた。同じ、戦いに行けなかつた身として。でも、今はそれ以上、あの戦いでチヌさんに助けてもらつてから、その気持ちは先に進んでいつて……。

(……チヌさん、恋人とか居ないから、あたしにも可能性あるよね)

彼にそう言う関係の人が居ないのは知つている。でも、それを狙つてゐる人が多いのも知つてゐる。……他所の鎮守府だと提督さんが複数の艦娘に恋をしたりされたりつてあつてみたいけど、ここの提督さんは榛名さん一筋だし。

(あたし、絶対に負けないからね)

チヌさんの顔を見ながら、あたしは心の中で宣言した。

第十七章

第95話

最近この鎮守府も人の賑わいが多くなってきた。理由は簡単だ、戦力拡大を掲げた事によってここに留まる艦娘が増えたことだ。秋雲や酒匂と言った新しい仲間も居れば、ビスマルクとローのように他所から戻ってきた艦娘も居る。そんな中、更に新しい艦娘を迎えることになった。

「……それで、今度迎えることになったのは……ソ連艦なのですか？」

「そうだ。名はガングート。戦艦だ」

提督室でその話を聞かされた俺は……正直困った。なにせ前回ビスマルクとローが着任した時、俺のせいで一悶着があったんだ。今回もそうならないとは限らない。しかも、相手はソ連……終戦の間際には敵となった国であり、ヴェールヌイを初めとしてソ連に賠償艦として連れていかれた艦は何人か居る。そこに複雑な気持ちがないとは言えないだろう……。

「チヌ、今回はソ連……かつての敵国の戦艦だ。君は、大丈夫か？」

「私は問題ありません。確かにノモンハンのように、ソ連によって陸軍が攻撃され、日本

人や兄達が死にましたが……それは向こうも同じであり、少なくともガンクート殿に対して何かを思うこともありません」

それは正直な気持ちだった。俺が何かを思うとすればそれは当時陸軍と直接戦った向こうの陸軍に対してになるし……そんな感情をぶつけて嫌な空気にしたところでのんの利益もない。

「そうか……だが、何か思うところがあれば言ってくれ。チヌはそういう気持ちを押し殺す傾向にあるようだからな」

「……承知しました」

押し殺すも何も、俺のせいでロシアと関係悪化になるような事は俺自身が嫌なんだが……。とは言え、ビスマルクとの事もある。注意しないとな……。

提督からそんな話を聞かされてから数日後、俺達はガングートを迎えた。前にビスマルクとローを迎えたときと同じように広間に集められ、壇上でガンクートが挨拶をする流れとなった。

「日本の艦娘の諸君。私がガングートだ。宜しく頼むぞ」

壇上に上がったのは……銀色と言えはいいのかな。そんな色のロングヘアーの女性。

ビスマルクの時のように強い軍人としての気質がはつきりと見える。喋り方も明朗ではつきりとしているし……今のところ態度に問題はなさそうだがさて、どうなるか……。

ガングートが軽い自己紹介を終えた後、こちらからも挨拶が行われる。……さて、ヴェールヌイとビスマルク、ローがどう反応するか……。

「初めましてだね、ガングート。私がヴェールヌイだよ」

「ふむ、お前が同志ヴェールヌイか。ソ連では会うことがなかったが、同志が居るのは心強いな、宜しく頼む」

……ヴェールヌイはまず問題なさそうだな。ガングートの顔にも他の艦娘に挨拶をしたときにはなかった笑みが浮かんでいる。暁も、ヴェールヌイと呼ぶことに対して許容してるし……前の騒ぎがなければここで一悶着あったかもしれないが、この様子ならこっちは大丈夫か。さて……次はビスマルクとローか。流石にビスマルクも喧嘩を売するような真似はしないと思うが……。

「初めましてガングート。私の名前はビスマルクよ」

「ほう……まさか、日本でドイツの艦娘と挨拶する事になるとは思わなかったぞ」

「それは私も同じよ……。安心なさい、わざわざ他国で問題を起こすほど私も馬鹿じゃないわ。大戦のときの遺恨はお互い、いったん置いておきましょう」

「……ふ。喧嘩を売られれば買わねばと思っていたが、理性的な判断をしてもらえて何よりだ。宜しく頼むぞ戦艦ビスマルク」

ビスマルクから差し出された手を取る形で握手をする二人。その後ローとも同じように握手したし……こつちも問題はなさそうか。さて……いよいよ俺か。

「三式中戦車チヌです。宜しくお願ひします」

そう言つて握手を求めたが……ガングートは訝しげな表情を浮かべたまま提督に視線を向けた。

「提督よ。これは何の冗談だ？ 男がいるのがおかしいと思つていたが、戦車だと言つてくるとは思わなかつたぞ」

「冗談ではないさ。彼は三式中戦車チヌ。れっきとしたこの鎮守府の所属であり、大切な仲間だ」

ガングートの問いに提督が真正面から答える。それで冗談ではないと判断したのでろうが……。反応はやはり予想通りだった。

「ふ、あの日本海軍が戦車を使わなければならないほど人手不足だとは思わなかつたぞ。それに……日本の戦車など使えると言うのか？ ノモンハンではわが赤軍相手に一方的に叩かれただけの軟弱な日本陸軍。そこが作った戦車など、ただの鉄屑よりましという程度ではないか」

……俺はともかく大日本帝国陸軍をバカにされるのは流石に来るものがあるが……。
ここで俺が暴発するわけにはいかない。

「ガングート」

そんな中、不意にヴェールヌイがガングートに近づく。そうだな、彼女ならやんわりとガングートに意見もできるだろう。

「ん？ どうした同志ヴェールヌイ」

「ガングート。今日……いや、たった今から、君を私は同志とは認めない。以上だ」

……俺は今何を聞いた？ ヴェールヌイの口から発せられた言葉はなんだ？ ……
認めない？

「な！ ヴェールヌイ！ それはいったいどういう！」

「それじゃあ失礼するよ」

動揺するガングートを他所にヴェールヌイは素早く壇上から降りて広場から出ていく。それを慌ててガングートが追っていき……後に残された俺たちは呆然とするしかなかった。

第96話

……結局、あの後ヴェールヌイはガングートから逃げおおせたようで、広間に戻ってきたガングートを榛名が鎮守府の案内連れて行ったが……彼女は目に見えて消沈していた。まあ……正直同情はしにくいんだが。

そしてそれから数日の間、彼女はヴェールヌイと方々で鬼ごっこを繰り返すのだが、地の利がヴェールヌイにあるせいでまったく捕まえることができていない。おまけにヴェールヌイの小柄な体格のせいであっちこっちに隠れられて見失うっている姿もしばしば見られた。……そして。

「ヴェールヌイ！ 開けてくれ、ヴェールヌイ！」

今、ガングートは俺の家の戸を叩きながらヴェールヌイを呼んでいる。それを俺と、遊びに来ていたビスマルク、ローが辟易しながら聞き流し……呼ばれている当のヴェールヌイですらそうしている。

「……ヴェールヌイ、いい加減、ガングートに対応したらどうだ？」

「嫌だね。彼女からの謝罪があるまで私は今のままだよ」

「……彼女、それに気づくのかしらね？」

「うーん、ウルサイよお」

ローがかめつ面をするが仕方ないだろう。突然ヴェールヌイが家に入ってきて鍵をかけたと思つたら外からガングートがしつこく呼びかけてくるんだからな。

「……だからと言ってこれは色々問題だぞ。鍵開けてくるからな」

俺はそう言つて立ち上がり、鍵を開けると、途端にガングートが俺を押しつけて家に入ってくる……靴は脱いでほしかつたんだが。

「ヴェールヌイ！ どこだ！」

部屋に入った彼女は中を見渡す……つて、ヴェールヌイどこ行つた？ さつきまで居たよな。

「彼女なら裏口から出て行つたわよ。と言うか靴脱ぎなさいよ、汚いわね」
「くっ……また逃げられたのか……」

ビスマルクの言葉を無視して悔しがるガングートの姿にビスマルクもローも眉間に皺を寄せる。……本当、どうすればいいんだろうか。

「おい、貴様。その戦車。よくもヴェールヌイを逃がしてくれたな」

突然肩を掴まれたと思うと、そのままガングートのほうを向かされて胸倉を掴まれる。どうやら俺がヴェールヌイを逃がしたと思われてるようだな。

「誤解です、ガングート殿。私は彼女を逃がしていません」

「そうよ、むしろチヌはヴェールヌイに会せようとして家の戸を開けたのよ」
「そうですよ、チヌさんは悪くありません」

ビスマルクとローの言葉にガングートは僅かに舌打ちしたと思うと俺から手を放した。

「まったく、ここに来てから碌な事がない。そもそも、貴様のような鉄屑がいる鎮守府に来たのが悪かったんだ」

ヴェールヌイに逃げられて機嫌が悪いんだろう。彼女はなおも俺に悪態をついてくる。さて、どうするか……早いところヴェールヌイを説得しないと、彼女が何か問題を起こしかねないな。

「ガングート」

そう思っていると、不意に家の窓からヴェールヌイの声が聞こえた。そっちに向くと、そこには家の外から覗き込んでいるヴェールヌイの姿があった。どこか行つたと思つたが、まだ居たのか。

「ヴェールヌイ！」

その姿を認めた途端、ガングートがヴェールヌイに近づくが、彼女からの一言がその動きを止めた。

「ガングート。今から君は私の敵だと認定した。覚悟しておくように」

「な、なんだ……と!？」

ガングートが呆然としている間にヴェールヌイがまたどこかへ行ってしまう、しばらくしてガングートは覚束ない足取りで家から出て行った。

「……どうすればいいんだあれは？」

ガングートが立ち去ってから、俺は思わずビスマルクとローに尋ねる。まあ、当然二人も首を横に振るだけだったが。

第97話

それから数日、ガングートの憔悴具合は半端なものではなかった。まあ、仲間だと思ってたヴェールヌイに敵認定までされれば仕方があるまい。ここが日本で、他にソ連艦が居ない中でそれは精神的にかなりキツイだろう。

おまけにビスマルクの時と同じように俺への対応の悪さから、今もよく思っていない艦娘はそこそこ居るようだ。まあ、そっちの方はまた言っておくとして、問題はヴェールヌイだ。早いところ彼女をどうにかしないとガングートがどうなるか……。

「……彼女の姿見てると、自分もああしてたんだなあ、って思ってた気が滅入るわ。チヌ、どうにかならないの？」

「どうにかと言われてもな……。どうにかできるならどうにかしてるんだが」

家で緑茶を飲みつつ、俺とビスマルクはため息をついている。さて、本当にどうしよう。

「ビスマルク。そっちからガングートに対してアプローチはかけられないか？ 前の方を考えると……情けない話だが、俺が何か言っても聞いてもらえない気がしなくてな」

「それ、私の時の事じゃない。……難しいわね、もうちよつと親しくなれてたらまだし

も、着任当日からあれでしょ。取りつく島もないわよ。やっぱり、ヴェールヌイをどうにかするしかないんじゃない？」

……やっぱりそうなるか。

「それにしても、彼女、なんであそこまで怒ってるの？ 言ったらなんだけど、私が最初に着任した時にはあんなに怒ったりしてなかったはずだけど」

「それは俺が聞きたい。まあ、あの頃より接する時間が長くなつた分親しくなつたのは間違いないが、いくらなんでもガングートに対する態度は看過できるものじゃない。かと言つていくら言つても聞かないし……。まったく、どうするべきなのか」

「……私の時にもあの地震がなかったらもつと拗れてたでしょうし……何かキツカケが欲しいわね」

「キツカケ……か」

さて、キツカケと言つてもどうするか。困つたことに本当に思いつかないからな。かと言つてこのままなのも困るし……うーん。

結局妙案は何も思い浮かず、更に数日が経過していく。ガングートの様子は日に日に

悪くなつており、このまま手を拱いていたら本当にマズイ事になりそうだ。……仕方ない、あまり強引な手は使いたくなかつたんだが。

俺はその辺にいる人にヴェールヌイの居場所を尋ねて回る。すると、今日はどうやらトレーニングルームに居るとの事なので見に行つたら、小さい鉄アレイを使つてトレーニングをしている彼女の姿があつた。

「ヴェールヌイ、ここに居たか」

「ん？ チヌ、何か用かい？」

「ちよつとな。こつちに來てくれるか？」

俺が呼ぶと彼女は鉄アレイを置いてこつちに來たので、そのまま両脇に手を差し込んで持ち上げる。

「わつ、どうしたんだい。チヌのほうからこう言うのをやつてくれるなんて」

「ヴェールヌイ、ガングートと仲直りしろ」

俺の言葉に彼女は即そつぽを向く。だが、今日はそれで追及を緩めたりする気はない。

「ヴェールヌイ、わかつてるだろ。このまま彼女が憔悴したままなのはマズイ。何がそこまで怒らせてるのかわからないが、いい加減仲直りをしろ」

「チヌ、それはだめだよ。彼女は私の大事なものを侮辱したんだ。その謝罪もなしに許

すわけにはいかないんだ」

「大事なものって……ともかく、それならそれでも、ともかく話し合いぐらいはしてくれ。今のままじゃ彼女が憔悴するだけだぞ」

「……っ」

無表情に見える彼女の表情から僅かに迷いの気配を感じる、よし、このまま説得を続けるか。

「ヴェールヌイ。彼女はまだ日本に来て日も浅い。そんな中お前に一方的に敵扱いされればショックもでかいはずだ。だからせめて話し合いぐらいはしてやってくれ。お前だって本心から彼女が嫌いなわけじゃないだろう？」

「それは……そうだけど」

「なら尚更だ。……な、ヴェールヌイ。頼むから、彼女と話し合いをしてやってくれ。俺としてもヴェールヌイが彼女と喧嘩したままなのは心が痛い」

「……わかったよ、チヌがそこまで言うなら……」

どうやら納得してくれたようだ。ふう、これで少しは事態の改善も図れるか。

「本当、頼むぞ、ヴェールヌイ」

彼女を降ろし頭をなでながら念押しすると、ヴェールヌイは頷いた。さて、あとはガングートだが……。

「貴様、ヴェールヌイに何をやってる」

不意に後ろから聞こえた声に振り向くと、そこには俺を殺さんばかりに睨み付けているガングートの姿があつた。

「ガングート……！」

「貴様が……貴様がああ！」

俺に詰め寄り、胸ぐらを掴むガングートに、俺は咄嗟にヴェールヌイを離す。

「貴様が、貴様がヴェールヌイを脅していたんだな！ だからヴェールヌイは！
ヴェールヌイは！」

ダメだ、完全に逆上してる。口で言つて聞く状態じゃない。強引に取り押さえてもいが、ロシアの艦娘に下手に手を出して問題を大きくするわけにもいかないし……仕方ない、しばらくの間されるがままになっておくか。力尽きたら落ち着くだろう。

「ガングート」

そう思つていたら後ろからヴェールヌイが声をかけてきた。おい、まさかこれ以上火に油を注ぐような真似は……。

「ガングート、君を避けていたのは悪かつたよ。だから落ち着いて話をするために彼を離してあげてくれないか」

「しかしヴェールヌイ。こいつはお前を脅したんだろ？ なら私はこいつを許すことは

「でござん」

「その事を含めて説明するから。だからチヌを放してくれ」

重ねられたヴェールヌイの言葉にガングートも渋々と言った様子で俺から手を放す。さて、これ以後はヴェールヌイ次第なわけだが……まあ、今の彼女の様子を見ると……恐らく大丈夫だろう。

「さて……ガングート。まずは君を避けていたことを謝るよ。それに対して具体的な理由を述べなかつた事もね」

「理由の説明など要らん。この鉄屑のせいなのだろう。今からこのアドミラルに直訴してこるぞ」

「待って、お願いだから待ってほしいんだガングート。チヌが関係してるのは事実だけど、私はチヌに脅されてなんてないんだ」

ヴェールヌイの言葉にガングートが不思議そうな顔をして彼女を見つめる。

「……ならば、なぜあんな事をしていたというんだ？」

「それはね……ガングート。君はチヌの紹介の時に大日本帝国陸軍の事をバカしただろ。……例えば所属する軍が違って、彼らは日本の国民であり、私が守るべき国民であつたのは変わりないんだよ。そんな彼らをバカされて、黙っているのはできなかつたんだ」

その言葉にガングートはハツとした表情になる。

「……そう、だな。確かにそうか。すまないヴェールヌイ。私が浅慮であつた。他の艦娘達にも謝らなければならぬな」

「そうだね、機会があればそうしてほしい……。で、あともう一つ。と言うより、こつちが本命だよ」

「本命だと？ いったい私が何をしたというのだ？」

「彼を……チヌを馬鹿にした事だよ」

その言葉が予想外だったのだろう、ガングートは呆気にとられた様子で俺とヴェールヌイを交互に見る。

「ガングート。彼はもうこの鎮守府に一年以上在籍している。確かに彼は艦娘より弱い。でも、深海棲艦を倒す力を持つて実際に私達と一緒に出撃もする。……わかるだろうか？ 戦車が軍艦の攻撃を食らえば一発でアウトだ。そんな危険の中を、彼は戦つてきて深海棲艦を倒しているんだ。そんな彼を馬鹿にされて……仲間を馬鹿にされて、君は気分を害さずに済むのか？」

「む……だがヴェールヌイ。本当にあれは深海棲艦を倒す力を持つているのか？ 正直なところ、私はその部分から疑問なんだが……」

「気持ちわかるよ。でも私は彼と一緒に何回も出撃して、彼が深海棲艦を轟沈させる

場面を見てきた。ガングート、そんな彼を君は公衆の目前で馬鹿にしたんだし、彼の家でも侮辱もしただろう。仲間がそんな事をされたら誰だつて怒るだろ？」

「む……………」

「さあ、彼に謝ってくれ、ガングート。それで私は君を許すし、他の艦娘との仲も取り持つよ」

ヴェールヌイの言葉にガングートは暫く迷つたが……やがて、俺に向かつて頭を下げた。

「すまなかつた」

短い謝罪。だが、恐らく彼女にとっては精いっぱい謝罪なのだろう。

「いえ、どうかお気になさらず」

俺も短く答える。それを聞いたガングートはどこか安堵した様子を見せると、ヴェールヌイに向き直つた。

「ヴェールヌイ、どうだ、彼は許したぞ」

「うん、チヌが許すならこれ以上は言わないよ。それじゃあ、改めて宜しくね、同志ガングート」

「ああ、宜しく頼む、同志ヴェールヌイ」

二人の間に握手が交わされ、これで仲直りとなつたのだろう。やれやれ、ビスマルク

の時よりは穏便に終わったし……よしとするか。

結局、あれからガングートはヴェールヌイと一緒に鎮守府の中を回って、提督を初めとして、艦娘達全員に謝っていったらしい。そのおかげで彼女に対する態度も緩和されていった。ビスマルクの時に比べたら短い期間で終わったし、まあ良かったと思つておこう。

だがまあ……彼女の苦労は終わりそうにはないが……。

「なん……だと……」

今、俺の家でガングートが信じられないものを見る目で俺とヲ級を見ている。理由は……俺がヲ級を鹵獲したという話を聞いたからだが。

「……ガングート、知らなかったのかい？」

ヴェールヌイの問いにガングートは表情そのままに頷く。

「……祖国ではそんな情報は聞いていなかったし、ここに来てからは……ヴェールヌイの事で頭がいっぱいになって……」

まあ、確かに話す機会なんてなかったからな。だが、俺が鹵獲した。と言う情報は海

外には伝えてないのか。とはいえそれがロシアだけなのか、それとも全ての国に対してなのかはわからないが。

「……すまないチヌ！ まさかチヌがそのような功績を上げていたとは……！」

「……どうか気になさらないでください」

深々と頭を下げる俺に声をかけるが、ガングートは顔を上げようとしない。そんな彼女を見ながら、ヲ級が小さく呟いた。

「……私を鹵獲したって事を聞いた途端にこの態度……ガングートって……功績でしか人を見てない……？」

「グウー！」

ヲ級の何気ない呟きがガングートの胸を抉る。そして。

「ヲ級、だめだよ本当のことを言ったら」

「ガハア！」

ヴェールヌイの追い打ちでガングートは床に突っ伏した。

「……二人とも、その辺にしておけ」

一応止めはするが……多分、ガングートはこれから先も弄られるだろうなあ。……まあ、これ以上俺ができることはないし……彼女自身に頑張ってもらえないだろう。

第十八章

第98話

「……鎮守府単独の大規模作戦ですか？」

いつものように提督に呼び出された俺に提督から告げられたのは次の作戦の内容だった。

「ああ。この鎮守府も最近では戦力が整ってきた。特にヲ級とガングート、ビスマルクによつてこれまで不足していた航空戦力、火力が増加したのが大きい」

確かにその通りだろう。三人が加わるまでは戦艦は榛名、空母は飛鷹しか居なかったのだから。だから大規模な攻略作戦には常に朝野提督や革元提督と合同で行ってきたのだが……。

「それで、いったい何処を攻略されるのですか？」

「現在の目標はここだ」

そう言つて提督が机の上の海図で指差したのは……以前朝野提督の艦隊と共に攻略した地点に比較的近いポイントで、いくつかの小島が点在している。

「ここですか……。しかし、ここは戦略上重要なポイントだったでしょうか？ 確か、以

前朝野提督との合同作戦で攻略したポイントを経由すれば特に問題なく艦隊や輸送船の移動は行えたと思います」

「……戦略上は確かに重要なポイントではない。だが、気になる情報がある」

気になる情報？ それはいつたい……？

「この海域では最近レ級の目撃が報告されている。放置しておくとなズイことになりかねない」

「レ級……ですか」

……提督の言葉に俺は背筋に冷たいものが流れるのを感じた。レ級。戦艦という区別こそ付けられているが、空母のように艦載機を運用する上に、魚雷まで使うという他の艦種の攻撃方法まで行ってくる、マルチタイプの敵。しかも単純な戦闘能力だけで言えば姫や鬼と呼ばれる敵の最上位クラスにも匹敵するという……。確かに放置しておいていい敵ではない。

「それで、今回の作戦において私はどのような役割になるのでしょうか？ 鎮守府の防衛に回すなら明石にも連絡はしておきますが」

「実際の海域攻略になればそうならざるをえないな。ただ、それとは別に……聞きたいことがある」

「なんででしょうか？」

「……今回の作戦、ヲ級を参加させるべきだと思うか？」

「……どうなのだろうか。これまでの戦闘におけるヲ級の様子を見るに、敵に寝返ると思えない。だが、ヲ級は鹵獲された身だ。もしも……敵に俺のように鹵獲する能力を持つ敵が居たらどうなる？ 酒匂の件もある。……通常の作戦ならともかく、レ級討伐にぶつけるには不確定要素は否めない。」

「……私個人としてはヲ級が自らの意志で裏切るとは思っていません。ですが、敵に鹵獲される可能性を考えれば参加させないほうが不確定要素は少なくできると思います」

「……そうだな。普段の出撃や合同作戦ならともかく、レ級がヲ級を見逃すような真似をするとも考えにくいか。わかった、ヲ級は今回の作戦から外して……仕方ないな、単独で行うつもりだったが、他の鎮守府から空母を派遣してもらおうか。チヌ、もう下がってもいいぞ」

「ハッ。失礼します」

一礼し、俺は提督室を後にする。しかし、レ級か……危険な敵だな、今回の作戦で無事に倒せればいいんだが……。

第99話

作戦の事が伝えられ、各々が作戦予定日までには準備を整えていく。そんな中、俺はヲ級、ビスマルク、川内、秋雲、まるゆと共に近海の哨戒を行っていた。

「もうすぐ大規模作戦だねー。ビスマルクさん、期待してるからね」

「フツ。このビスマルクに任せなさい。レ級なら相手にとつて不足なし。私の力を見せてあげるわ」

先を進む二人はそうやって気合を入れているが、俺としては不安な気持ちになる。無事に終わればいいんだが。

「おーい、チヌさん。なーに暗い顔してるのさ。なに？ まだ始まつてもない作戦の事考えてるの？」

「だ、大丈夫ですよ。きつと大丈夫です」

隣を走る秋雲と浮上してきたまるゆもそう言っているが……。

「……俺としては不安だ。レ級の強さは危険だ。何もなければいいんだが……」

「……大丈夫。今回はこちらが攻める作戦だし……。もし鎮守府に攻撃して来たら、私が沈める」

そう言つてヲ級は俺を見てくる。その様子を見ると、やはりヲ級が自分の意思で裏切ることはないだろうと思えるが……。

「そういう事態にならないのが一番だよ。……それより、そろそろ偵察機を出す頃合いじゃなかったか？」

「……うん。それじゃあ行く」

ヲ級の甲板から偵察機が飛び立ち周辺の偵察のために飛んでいく。普段ならこの周辺で小規模の敵艦隊が発見されるはずだが……。

偵察機が戻ってくるまでの間、全員が警戒態勢を維持しながらもどこか気が抜けている空気を感ずる。まあ、この戦力なら近海で発見される敵ぐらいなら問題はないからだろう。……と言つても、かつてそう思つていた出撃でヲ級に殺されかけた俺としては警戒を解く気にはなれないが。

「……あ……！」

そんな中、不意にヲ級が声を上げた。その目は見開かれ、驚愕の表情を浮かべている。「ヲ級、どうかしたの？」

「……偵察機が迎撃された。敵は近い」

その言葉に瞬時に全員が警戒態勢に入る。

「偵察機が迎撃された位置は？」

「……8時の方向……。敵、艦載機捕捉」

そう言つてヲ級が指さした方向。その空を飛ぶのは深海棲艦の艦載機。……これは、かなり数が多い。相手は軽空母じゃないぞ。

「中々の数ね。相手は空母かしら……。ヲ級、敵を轟沈させてもいいわよね?」

「……構わない。それより、油断しないで……!」

軽口を叩くビスマルクにヲ級が真剣に警告する。

「……そうね、そうするわ。全艦、対空攻撃! ヲ級の艦載機を援護して!」

ビスマルクの言葉を合図に俺達は一齐に敵艦載機を攻撃。その間にヲ級の艦載機が飛び立ち敵艦載機とが空中戦を繰り広げる。その間に俺達はこちらに接近する敵影を補足した。

「……なんでここにいるのさ! ここはあいつの目撃例のない海域でしょ!」

秋雲の叫びに俺は敵の編成を確認する。軽巡、重巡、軽空母……。その中に混じっているのはレ級……。!? なんでここに居る!

「逃げる暇はないわ。全艦攻撃! 勝つて活路を開くのよ!」

「そうだね……。よし行くよ!」

ビスマルクの声を合図に互いが魚雷を、砲撃を打ち合う。俺はともかく回避と牽制に専念だ。この状況でヘタな行動は味方の足を引っ張る。

「クツ！　なんて手数……！　こんなの反則だよ！」

秋雲の口から弱音が叫ばれる。俺も同じ気持ちだ。艦載機を飛ばしながら砲撃も魚雷も打ち込んできて、拳句の果てに艦載機の爆撃はまるゆにまで及んでいる。文字通り化け物だ。

戦況は完全にこちらが押されている。ヲ級の艦載機がなんとか制空権こそ抑えているものの、こちらは俺も秋雲も足を引っ張っているし、まるゆも思うように戦えていない。ビスマルクと川内が持ちこたえてくれているが、いつまで持ち堪えられるか……。「……………これで！」

そんな中、ヲ級の爆撃が重巡に命中。そのまま轟沈させた。よし、これでバランスはこちらに傾いたはず。このままいけば……！

「ちよー！　レ級が突っ込んでくるよー！」

川内の叫んだ通り、レ級が砲撃をしながらこちらに走ってくる。クソツ、どういうつもりだ!?

「きやあー！　クツ……この秋雲さんが」

「あきぐ……グアー！」

その砲撃に巻き込まれて秋雲が中破に追い込まれ、俺も水上バイクが大きく損傷する。……………ここまで……か！

「チヌー！ 秋雲！ ……くっそー！」

川内がレ級の前に立ちふさがろうとして……だめだ。川内じゃ抑えきれずに突破され、こつちに突っ込んでくる！

「く……秋雲、離れている！」

咄嗟に秋雲から離れた俺に向かって砲弾が次々に飛んでくる。なんとか避けるが、これは……誘導されて……!?

「ぐあああー！」

水面下で魚雷が爆発し、俺は水上バイク諸共空を舞い、水面に叩き付けられる。辛うじて水上バイクから落ちていないが……グッ……。

(バイクは……だめだ、かなりダメージがかい。俺自身もこれは……)

爆発の衝撃で体が完全にやられている。動くことこそできるが……回避行動なんてできるはずもない。

(……まで……か！)

再びこちらに突っ込んでくるレ級に俺は主砲を放つ。だが、それはあつさり避けられ、そしてレ級の主砲がこちらに……。

「……チヌー！」

突然レ級が背後から羽交い絞めにされる。それをしたのは……ヲ級!? 何をやって

る！ 空母がそんな事を！

「チヌ、逃げて！ ここは抑えるから、早く！」

「！ 馬鹿な事を言うな！」

なんとか水上バイクを動かそうとして……だが、ハンドルが誰かの手に捕まれる。相手は……川内？！

「チヌ、撤退だよ！ 敵の増援が来てる！」

そう言つて川内が指さした方向。そちらから確かに新手が来ている。だが、このまま逃げたら……！

「だが、ヲ級が！ 俺が少しでも足止めをしてヲ級を！」

「チヌじゃ抑えきれない！ それに、ヲ級の意思を無駄にしないで！」

有無を言わず川内は水上バイクをコントロールして俺ごと戦場を離脱する。それについてビスマルク、秋雲、まるゆも撤退する。唯一ヲ級だけが、レ級を羽交い絞めにしながら艦載機で他の敵を抑えている。

「く……ヲ級！」

遠ざかるヲ級を、俺は見続けることしかできなかつた。

第100話

鎮守府に戻った俺たちは急ぎ提督へレ級遭遇の報告を行い、対応に追われることになった。ビスマルクを初めとした負傷した艦娘に入渠させ、俺と川内が提督へ直接報告を行う。本来なら川内も入渠させるべきなんだが、負傷が比較的軽い事から、俺と共に報告する事になった。

「……」

提督への報告を終えた後、俺達は入渠の待機部屋で順番を待っているが……川内がチラチラとこつちを見てきてる。理由は……まあ、わかる。

「……ねえ、チヌ。怒ってる?」

「……川内に怒ってはいない。あの状況だと……確かに撤退するのが正解だ……怒っているのは……!」

俺はちやぶ台に拳を叩き付けていた。叩き付けた部分が砕けて大きな音を立てるが、知ったことじゃない!

「怒っているのは俺自身の弱さだ! 俺が……俺がもつと戦えていたら、俺が殿になれていた! ヲ級を置いていく事なんて……そんな事……」

今回ばかりは本当に自分の弱さに反吐が出そうだ。あの状況では早めに俺を捨て石にして逃げるべきだった。だが、勝てるかもしれないという甘い考えがその進言を、行動を遅らせた。その結果ヲ級が犠牲になんて……。なんて愚かなんだ俺は！

「……チヌ、それは言っちゃダメだよ。チヌがそんな考えをしたら、ヲ級が悲しむ……私も悲しいよ」

叩き付けた拳を川内が握るが……俺の心が晴れる要因にはならない。

「チヌ、そのちやぶ台の代金は君の給料から引いておくぞ」

不意に聞こえた声の方向を向くと、そこには提督の姿があつた。

「提督？ 何の御用でしょうか？」

「様子を見に来た。チヌが荒れているんじゃないかと思つてな。それと命令だ。入渠が終わり次第提督室に来るように。それまで荒れたりなんてするなよ」

「……了解しました」

提督の言葉に頷くと、提督は部屋を出ていく。……一体何の用事なのだろうか？

「……川内、もう大丈夫だ。だから手を離してくれ」

「ダメ。大丈夫だと思えるまで離さない」

川内にそう伝えるが、結局入渠するまで川内に手を握られ続ける事になった。まあ、また何かに八つ当たりされたら川内もたまつたものじゃないだろうし、俺が悪いんだか

ら文句は言えないんだが……。

入渠を終えた俺が提督室に赴くと、提督が難しい顔で俺を迎えた。

「来てくれたなチヌ。……さて、呼んだ理由はわかるな？ 次の作戦についてだ」

「……はい」

戦力的に考えれば俺は出撃できないはずだ……。ならばなぜ俺を呼んだんだろうか？

「……件のレ級だが、先ほどこの鎮守府への進撃が確認された。そしてその中には……ヲ級もいる」

「……では、ヲ級は……」

「君が彼女を鹵獲したのと同様に鹵獲された。とみていいだろう。そして、上層部に報告したところすぐに返事が来た。内容は……ヲ級を再鹵獲せよとのことだ」

その言葉に俺は体に力が入る。再鹵獲。つまり……俺が、ヲ級をもう一度鹵獲するということ。今回の作戦の要になると言うこと。

「……チヌ、これは君にしかできないことだ。ヲ級を連れ戻して来い」

「了解しました！」

俺は敬礼をしつつ返事する。これは汚名を挽回するチャンス……いや、違う。俺の汚

名なんてどうでもいい。今俺がやることはヲ級を取り戻すこと。それだけだ。

提督から命令を伝えられた俺は急ぎ明石の元へ向かう。先の出撃で水上バイクはかなりの損傷を受けたはずだが、その修理等はどうなっているのかを確認しなければならぬ。水上バイクが使えなければ話にもならない。

工廠に着いた俺が明石を探して奥に入ると、そこには水上バイクをチューニングしている明石の姿があった。

「明石、水上バイクはもう直ったのか？」

「チヌさん！ もう動いて大丈夫なんですか!？」

声をかけると明石が驚いた顔で俺のほうを見てくる。

「入渠はもう終わった。それより提督からヲ級再鹵獲の作戦が通達されてると思うが、水上バイクは動かせるか？」

俺が聞くと、明石が申し訳なきように頭を下げる。

「すみません、チヌさんが使っていた物は損傷が酷くて作戦予定時刻までに修理するのは無理です。ひとまず予備で作った物を至急動かせるように調整しているところですよ」

「……っちは作戦予定時刻に間に合うのか？」

「はい。こちらならなんとか……」

「それなら問題ない。邪魔をして悪かったな」

「ま、待つてください」

工廠を後にしようとした俺に明石が声をかけたと思うと、彼女は部屋の奥に行き、少しして見慣れない妖精を連れてきた。

「この子たちを連れて行ってください」

そう言つて明石が差し出したのは、安全ヘルメットを被っている三人の妖精だった。

「明石、この妖精達は？」

「この子たちは応急修理要員。戦場で致命的な損傷を負ったときに一度だけ艦装を修理する力を持っています」

「……それは重要な妖精じゃないのか？ 俺より他の艦娘に……」

「……相手はレ級で、チヌさんは作戦の要です。貴方がやられたらそれでお終い、例えば敵を全滅させても私達の負けなんです。今回は四の五の言わずにつれて行つてください
！」

その劍幕に思わず俺は妖精を受け取る。三人とも俺の手の上で任せろと言わんばかりに張り切っている。

「いいですかチヌさん！ 私は時間までに全力で水上バイクを万全の状態にしますか

ら、チヌさんは絶対にヲ級を連れて、生きて帰ってきてください！ 例えヲ級を連れて帰ってきてても、貴方が死んだら意味がないんですからね！」

「あ、ああ。わかっ……た」

劍幕に押されながら返事すると、明石の話は終わりと言わんばかりの勢いで水上バイクに向き直り、調整を再開する。俺はもう声をかけることもできず、妖精さんを肩に乗せて工廠を後にした。

第101話

急ピッチで準備が整えられ、俺達はヲ級奪還作戦を開始した。と言つても別にやること自体は普段とさして変わらない。敵を殲滅し、ヲ級を再鹵獲する。だが、この作戦には二つの難題がある。

一つはレ級の存在。直接戦つて、改めてその強さに戦慄と恐怖しか覚ええない。砲撃、艦載機、魚雷。ほぼ全ての艦の攻撃を一人で行う上にその全てが高い水準を誇っているまさに万能の敵。あれを俺という足手まといがいる状態で退けられるのか？

そして二つ目はヲ級だ。彼女が敵に再鹵獲されたのなら当然こちらに攻撃してくるはずだ。そして彼女の力量は既に飛鷹を上回っている。皮肉なことにそこまで成長させたのはこの鎮守府なんだが……。そして、彼女を再鹵獲なんて事ができるかどうかだ。刀を使えば酒匂の時と同じようにできるかもしれないと思ひ背中に括り付けてるが……。激しい戦闘の最中に使い慣れない刀を使うことができるかどうか……。

「チ……………さ……………チヌ……………チヌさん！」

「!? ……不知火か」

腕を引っ張られて後ろを振り向くと、そこには心配そうに俺を見上げる不知火の姿が

あった。

「チヌさん、しっかりしてください。今回の作戦の要は貴方なんです。……今回私は第二艦隊に配属となりますが、それでも作戦が成功するように尽力します。チヌさんも……気をしっかり持つてください」

「……ああ、わかつている」

……口ではこう返すが……正直自信なんて欠片もない。酒匂の時と違い、向こうにはレ級と言う化け物と、ヲ級が居る。そして、ヲ級を再鹵獲できるという保証もない……。酒匂の時にはヲ級が断言してくれた。だが、今はそれも無い。

(……ヲ級がこんなに大きな存在になってたなんてな……)

人は失ってから初めてその大切さに気付くというが……それは俺にも当て嵌まつたらしい。ヲ級が居ないことがこんな心細いとはな……。

「……チヌさん。大丈夫です。貴方は一度ヲ級を鹵獲したんですから、酒匂さんを助けたんですから……今度もできます。自分が信じられないというのなら、チヌさんを信じる私達を信じてください、お願いです」

……いつの間にか不知火が俺の手を掴んで見上げていた。その眼には心配そうな印象と……そして、俺を信頼している、そんな印象が見えた。……こう言われたら、信じられないか。

「……わかった。俺は、お前たちを信じる」

「はい、信じてください」

不知火の言葉に力を入れて返事をする、不知火も力強く頷く。……少しだけだが、落ち込んでいた気分が持ち直してくれた。

やり取りを終えた俺は出撃ドッグで出撃準備に取り掛かる。そして時刻が来たことで、第一艦隊として出撃した。

第102話

出撃した俺達はそのまま敵の部隊に向かって進軍する。今回、第一艦隊には榛名、ビスマルク、飛鷹、足柄、ヴェールヌイと言った、俺を除く鎮守府の最高のメンバーが揃えられている。第二艦隊もガングート、不知火、黒潮、川内、羽黒と言ったレギュラーメンバーで占められている。……これで作戦が失敗するようなら、俺の不手際以外にありえないだろう。

「……チヌ、絶対にヲ級を連れて帰るわよ」

物思いにふける俺の後ろから飛鷹が声をかけてきた。

「わかつてる。だが……飛鷹、大丈夫なのか？ ヲ級の実力は……」

「わかつてるわよ。だから今回は爆撃機は一機もなし。すべてが制空権を確保するための機体だけ。私は制空権を取られないようにだけ尽力する……それでもいけるかわからないけど……例え書類上だけでもあの子は私の妹よ。負けるわけにはいかないわ」

「……そうだな」

飛鷹の決意に満ちた表情を見て、俺も改めて気を入れなおす。

「あら、二人だけで決意表明？ 私も混ぜなさいよ」

「私も混ざろうかしら。ねえ響」

「そうだね、二人だけでなんてズルイよ。榛名もそう思うだろう？」

「勿論です。皆で作戦を成功させましょう」

先を行く四人からも声をかけられる。全員がこの作戦の成功を信じているような自信に満ちている。

「勿論よ。チヌも、絶対に成功させるわよ」

「ああ、勿論だ」

全員の言葉に俺は自分が勇気づけられるのを感じる。……そうだ、弱気になっている場合じゃない。俺が弱気になっていてどうする。

「！ 電探に反応があります！」

不意に聞こえた榛名の言葉に全員が進軍を止め、飛鷹が偵察機を飛ばす。程なくして戻ってきた偵察機の報告を元に進路を進むと……居た。敵の艦隊だ。数はそんなに多くはない。だが、遠目からでもわかる。レ級と……ヲ級が居る。おまけに、数が少ないとはいえ、他も戦艦、重巡が二隻ずつだ。

「数は多くないね。こちら第二艦隊と共に攻撃すればなんとかいけそうだ」

「そうね。これならある程度余裕をもって……」

ヴェールヌイとビスマルクが少し安堵の様子を見せていたが、そこに榛名が驚きの声

を上げた。

「第二艦隊より入電！ 敵艦隊の奇襲を受けてそちらに対応中との事です！」

「……やるじゃないの。仕方がないわ榛名。私達だけで行きましょう」

「そうですね。全艦、攻撃開始！」

榛名の声を合図にこちらから攻撃が開始され、向こうからも即座に反撃が飛んでくる。俺は前回と同じく回避と牽制に専念する。

「クツ……敵の艦載機が多い……！ 皆、注意して！」

後ろから聞こえた飛鷹の悲痛な声に視線を上に向けると、そこには双方の艦載機が入り乱れている様子が映った。だが、こちらが押されていると言うのは俺の目から見ても明らかだ。まずいな、このままじゃ制空権を取られる。

「！ クソツ！」

不意に敵艦載機の一機がこちらに降下してくる。反射的に機銃を撃つが回避され、敵の爆撃が落とされる。それを間一髪で回避し、今度は主砲を撃ちこみ、なんとか撃墜する。だが、その間にも新しい艦載機の爆撃が空から降ってくる。これじゃあヲ級の所に行くどころじゃないぞ！

「どうする……！」

ともかく回避に専念しつつ戦況を見るが、やはりこちらが劣勢だ。榛名とビスマルク

が主軸となつてなんとか敵を押し止めているが、やはり敵の戦力が高い。それにレ級が厄介すぎ……ん!?

(レ級の姿がない!?)

榛名達が戦っている相手は他の戦艦だ。それならレ級は一体どこに……!

「! チヌ! 前見て!」

飛鷹の声に咄嗟に前を向くと……レ級が突っ込んできてる!?

「……アツハハハッ!」

放たれた砲撃を慌てて避けるが大勢が大きく崩れる。その隙に接近してきたレ級が俺の両手首を掴んできた。

「……シネー!」

俺が反応するよりも早く、レ級の尻尾の頭部が俺の左肩に噛み付いた。そのまま食いちぎらんばかりに力が籠められるが、俺の装甲を破るほどの力はなさそうだな。

「! ……のおー!」

俺は掴まれたまま、ハンドルから手を放すとレ級の腹にパンチを叩き込んだ。

「……ガ……!」

レ級が怯んだ隙に、今度は尻尾の顎を掴むと強引に開かせる。そしてその大口の中に砲撃を叩き込んだ。

「……………！ オ……………マエ……………！」

「はあああ！」

更に右の拳レ級の顔面に叩き込み、体勢を崩した隙に主砲を叩き込む。その衝撃に離れそうになるレ級を左手でしっかりと掴んで離れるを阻止する。大きなダメージはないが相手のバランスは崩れた。このまま畳みかけ……………！

「ガッ、アアアア！」

背中を、腕を熱と痛みが貫く。思わず後ろを振り向くと、そこには敵の艦載機。そして、その隙に俺の手からレ級の手が離れて……………。

「……………オマエ……………！」

声とともに放たれた砲撃が俺に直撃する。その痛みと衝撃に俺の意識は吹き飛びかけるのが逆に引つ張り戻される。だが……………ダメか……………体が動かない。装備も……………ダメ……………か。

「……………ヨクヤツタネヲ級」

バイクの上に倒れ伏す俺の頭を掴み上げ、レ級が笑う。そしてその後ろには……………いつの間にかヲ級の姿があった。

「ヲ……………級……………」

俺を見つめるヲ級の目には最初のころに見た時のような冷たい印象がなく、その右

目には……青白い炎が燃え上がっている。

「……ヲ級、ドウ？ お前を鹵獲したやつだよ。実力ハ大シタ事ハナカッタナ」

「……」

レ球の嘲笑に反応することなく、ヲ級は俺を見てくる。く……手を伸ばせば届くのに……！ だが、もう……体は……。

(……？)

そんな中、俺の体の中に違和感を感じた。僅かながら痛みが引き、体が、主砲が動く。……そうか、これが応急修理要員の力か。

(……だが、どうする？ この状況で俺ができること……)

相手は油断しているとはいえ、背中の刀を抜いて切り付けるのは隙が大きい。主砲で砲撃しても大したダメージを負わせられるとは考えにくいが……。だが……ヲ級の頭の帽子。あれなら……。

「……さあ、コイツヲ殺して、他ノヤツラモ轟沈させにいく？」

「……!？」

レ級がよそを向いた瞬間、俺は残っている全ての力を主砲に込めてヲ級の帽子に砲撃した。

「！……オマエ！」

レ級が反射的に俺の顔面を殴るが、逆に痛がっている。だが……もう俺に反撃の力は残っていない。主砲もさっきの砲撃の衝撃に耐えきれずに煙を上げているし……なにより体がもう動かない。目が霞んで、ヲ……級……は？

「……」

(ダメ……か)

ヲ級の様子は何も変わらない。帽子から煙を吐いているが……それだけだ。それ以上の変化は……見えない。作戦は……失敗……か。

「……フン、悪足掻きしちやつて。サア、ヲ級。殺し……いや、やっぱり殺すのはやめる？　なんか惜しくなってきたなあ。どうしよう？」

レ級が何か悩んでいる間にヲ級が俺の正面に来る。そして……彼女の右手が俺の肩を掴み……。

「……！　な!？」

レ級が驚きの声を上げると共に、艦載機の爆撃が彼女を襲う。そして、ヲ級はバイクのハンドルを掴んでエンジンを動かすと、俺ごとバイクを牽引し始めた。

「……チヌ、チヌ！　生きてる？　大丈夫？」

「ヲ……級……？」

聞こえてくるヲ級の声は、暖かさに満ちた……俺が知っている彼女の声だった。これ

は……………まさか……………。

「……………ゴメンね……………ありがとう」

ヲ級のその声が聞こえたが……………それに反応することはできなかつた。目が霞み、何も聞こえなくなっていく……………俺の意識は遠くなっていた。

第103話

「…………？」

水が落ちる音が耳に届き、俺は目を開く。……………体全体を包んでいるのは……………お湯か？それに顔から感じる熱気。ここは……………入渠施設？……………なんだかデジヤブを感じるな。

「……………起きた……………？」

後ろから声が聞こえ、振り返るとそこにはヲ級の姿があった。……………そこで俺はあの海戦を思い出す。

「……………ヲ級……………なんだよな？」

「……………うん、そうだよ。チヌが鹵獲したヲ級……………チヌが知っているヲ級……………だから」

そう言っただけ俺を見つめるヲ級の目には暖かさがあつた。海上で対峙した時にはなかった、俺の知っている暖かさだ。

「ヲ級、俺が気を失ってから……………どうなったんだ？」

「……………あれからチヌを庇いながら戦って……………艦娘側が勝った。損害はゼロ。敵は全滅。

「……………誰も沈んでない」

「そう……か」

俺はその言葉に心から安堵を覚える。そうか……作戦は成功したんだな。誰も死なずに……済んだんだ。

「……チヌ、ごめんさい……私……チヌを……」

安堵に浸っている俺にヲ級の声が聞こえる。視線を彼女に向けると、彼女はその目から大粒の涙を零していた。零れた涙が彼女の頬を伝い、床に落ちていく。

「……ごめ……なさい……ご……なさい……」

途切れ途切れの言葉を口にしながら謝るヲ級。俺は体を起こすと、彼女の頭を撫でる。

「大丈夫だ。そもそもお前が鹵獲される事になったのは俺が弱いからだ。お前に責任はないし、俺も怒っていない。艦娘達はどうだったんだ？」

「……怒ってなかった……でも……私……は……」

「……ヲ級、泣くな。お前は悪くないから、悪いのは俺なんだから」

俺の言葉に、ヲ級は駄々を捏ねるように首を横に振る。……困ったな、どうすればいいのか……。

「ヲ級。それなら……もうあんな事をしないでくれ。……お前が鹵獲されている間、俺はとても不安だった。俺自身困惑するほどにな……。お前がもしまた同じことをした

らと思うと……俺は不安になってしまふ。だから……」

「……ダメ」

俺の説得に首を横に振り、ヲ級は涙で濡れたままの目で俺を見てくる。

「……チヌが死ぬぐらいなら、私は同じことをする……チヌもそうするでしょ……？」

「……それは……」

俺が言葉に詰まる間にヲ級が俺の目前まで迫る。

「……チヌは私を鹵獲した。だからチヌには私の為に生き続ける義務がある。……敵になったことは謝るけど……チヌを逃がすために残ったことは絶対に謝らない」

「……もしチヌがその行動を治させたいなら……チヌが死なないようにするしか方法はない」

そう言って俺を見てくるヲ級の視線の力強さに俺は思わず息を呑む。普段の彼女からは感じないこの威圧、まるで、あの海の上でみたような威圧感で、目からも青白い炎がでてるよう……あれ？

「……ヲ級。俺の気のせいか？ ……目から青い炎が出てるような……」

「……あ、ごめんなさい……あれから感情が高ぶると、出ちゃうようになって……」

そう言って彼女は目を閉じて数回深呼吸すると、目から出ていた青白い炎は消えた。

「……えーと……なあ、ヲ級……。それは大丈夫なのか？」

「……大丈夫大丈夫。ちよつと炎が出てるだけだから」

本当にそれは大丈夫なのかと心配になるが……まあ、大丈夫なんだろう。さて……そろそろ出るか。

「取敢えず俺はそろそろ出るぞ。提督に顔を出さないといけないし。ヲ級はどうする？」

「……私も行く。ここに居たのはチヌが溺れたりしないようにってだけだから……」

そう言つてヲ級も俺の後に付いてくる。一緒に脱衣所に入った俺達は手早く服装を整えると外にである。すると、そこには不知火の姿があつた。

「！ チヌさん……もう大丈夫なんですか？」

心配そうに俺を見上げる不知火に、俺は返事をする。

「ああ、体のほうはもう大丈夫そうだ。ヲ級からある程度話は聞いているが、作戦は……成功したんだな」

「……はい。成功です。チヌさんを含めて皆無事。ヲ級も……戻ってきました」

不知火の口調からは安堵の様子が感じられる。それを聞いて、俺も改めて作戦が成功したんだと感ずることができた。

「それで、今はどういう状態なんだ？」

「二つを除いて大きな動きはありません。損傷を受けた艦娘は既に入渠を終えて、今は

後処理と警戒状態になっています。提督は報告書の作成で大忙しでしょうが、チヌさんが入渠を終えたら提督室に顔を出すようにと仰っていました」

「他の艦娘の入渠がもう終わっているのか？ 思ったより損傷が少なかったんだな」

不知火の意外な報告に俺は思わず聞き返すと、不知火の表情が沈んだものとなった。

「……逆です。チヌさんの損傷が重すぎたんですよ。応急修理要員を使った上に主砲を発射ですから……。それだけしいないといけなかっただろうというのはわかっていますか……」

「まあ、それでヲ級が戻ってきたんだから、俺の損傷程度どうでもいいんだが。ともかく提督が呼んでいるんだな？ それじゃあ顔を出してくる」

「……私も付いてく」

「あ、不知火もご一緒します」

そう言つて二人も俺の後についてくる。俺も特に何か言うこともなく、三人で提督室へ赴いた。

第104話

提督室に到着し、中に入ると提督と榛名の姿があつた。

「三式中戦車チヌ、治療完了しました」

「ああ、お帰りチヌ。今回も無事に帰ってきてくれて良かった……そして、ありがとう。君のおかげで作戦は成功した」

「チヌさん、本当にお疲れさまです」

そう言つて二人は頭を下げる。その行動に俺は慌てて顔を上げるようお願いする。

「提督、榛名。どうか顔を上げてください。私は提督の命令を遂行しただけです。頭を下げていただくような事は何もしておりません」

「確かに、チヌにとつては命令を遂行しただけかもしれない。だが、今回君の行動はそれ以上の成果を上げたんだ」

提督の言葉に俺が聞き返そうとしたとき、廊下から何か走るような音が聞こえてきた……と思つたら、ドアが勢いよく開かれ、その音に振り向いた俺の視界に映つたのは……。

「レ級!?!」

今回の戦いにおける敵の旗艦であるレ級の姿に俺と不知火は反射的に構えようとする。だが、俺達が行動を起こすより早く、レ級は俺に向かって飛びついてきて……。

「やっ」と起きたんだね。遅いよ」

「な、なにを……!」

突然のフレンドリーな言葉に戸惑っていると、ヲ級がレ級の肩を掴んで引つ張り始める。

「……離れてレ級」

「いいじゃんヲ級、僕は彼に鹵獲されたんだよ。鹵獲したんだからちゃんと世話してもらわないと」

「……いいから離れて!」

そう言つてヲ級は力一杯レ級を引つ張る。それに渋々と言つた感じでレ級が離れたが……まさか……。

「はあ……はあ……なんて速さ……」

「ちよつと……陸でもこれなの……!?!」

「冗談……じゃないわよホント……!」

そうこうしていると足柄、川内、ピスマルクが息を切らせながら提督室の中に入ってきた。

「……提督。まさか……」

「そうだ。あの戦いでレ級は降伏し、鹵獲された。……反省房に入れて、三人に見張りを頼んでいたはずなんだが……」

「ふふん、あんなの艤装がなくても壊すぐらいわけないよ。さあチヌ、これからよろしく頼むよ。何せ君は僕を鹵獲したんだ。鹵獲した以上、最後まで面倒は見てもらうからね」

そう言つてレ級は笑みを浮かべる。それは海上で見た笑みとは違う、人懐っこい笑みだった。

「……あー……と。提督、上層部はなんと?」

「……レ級を正式に鎮守府に所属させよとの命令だ。世話はチヌに任せる」

そう告げる提督の顔からは多少の疲労感が見えた。……まあ、仕方がないだろう。相手はレ級だ。もしも暴れることになったら……。

「なんだ、僕が暴れるか心配してるの? 大丈夫だよチヌ。僕は僕とヲ級とチヌに危害が加わらない限りは暴れたりしないから」

「……本当だろうか」

俺が懐疑の視線を向けると、レ級が答えるより先にヲ級が答えた。

「……それは大丈夫だと思う……レ級が鹵獲されてるのは確かだし……」

「そう言うことだよ。チヌ、宜しく頼むね」

そう言って笑みを浮かべるレ級に、俺は今後のことを考えてため息をつくしかできなかった。

第105話

あの戦いから3日が経過した。今、俺は家でレ級からの調書で得られた情報を纏めていた。

(……こうして書き出すと、凄い事が書かれているな)

①レ級がヲ級を鹵獲したのに使用したのは、近くに居た又級を殺して奪った頭部の艦載機収納スペースであり、それを被せたのだという。

②レ級は戦いの最中、俺からの攻撃を受けるたびに俺を殺す気持ちよりも俺を生かそうとする気持ちが沸いていたらしい。そして、徐々に大きくなるその気持ちに従い、降伏したという。特にそれが顕著に表れたのは、尻尾の口に主砲を受けたときとの事。

③レ級は海を気ままに彷徨っている間に鹵獲されたヲ級の話聞いて面白半分で行動を起こしたと言っており、深海棲艦による組織的な攻撃ではないとのこと。

④上位の深海棲艦は下位の深海棲艦を従えることができると言う。レ級は元々一人で行動していたが、今回の行動のために近海に発生していた深海棲艦の中から使えるやつを選んで従えていたらしい。再鹵獲されたヲ級もその力によって従えられていたが、現在は従えることはできないという。これは他の深海棲艦に対しても同じである。

⑤ 深海棲艦が陸を攻撃するのは本能的なものであり、全ての深海棲艦は行動の根幹にそれがあるといふ。

⑥ 又級の帽子を被った時、ヲ級は自分の心が俺に鹵獲される前に戻っていったと自供。それでもある程度の自我はあつたらしいが、それ以上に深海棲艦として行動する殊に疑問を抱いていなかったらしい。俺の主砲を帽子に受けた途端にその心は消えたらしい。

⑦ レ級の戦闘力を検証したところ、この鎮守府の最高メンバーによる第一艦隊とほぼ互角にやりあえる程の戦闘力が確認された。これは他の鎮守府にあるレ級との戦闘記録と比べると、それよりも戦闘力が高いとされている。また、ヲ級の戦闘力も計測したところ、こちらはフラグシップ級以上と計測されており、敵に鹵獲された時の危険性が増したと言えるだろう。

⑧ これまでの経緯から推測するに、深海棲艦の象徴とも言える、あの巨大な口の部分に攻撃を行うことが鹵獲の必要条件と思われる。ただし、これまでの戦闘の中でも同様の部位への攻撃を行つても鹵獲を行えなかった例のほうが多数であるため、要検証と言えるだろう。

⑨ フラグシップの目から出る青い炎は触れても熱を感じず、何かを燃やすこともない。今現在はヲ級の感情の高ぶりによって現れたりしている。

「……前にヲ級から聞いた内容と被る部分もあるが……改めてみるとんでもない内容だよなあ……」

書類に書き出した内容を見て俺はため息をつく。そうしていると、不意に後ろの扉が開く音がして誰かが入ってきた。

「ねえチヌ。一緒に遊ぼうよ」

そう言つて俺の背中に引つ付けてきたのはレ級だった。犬みたいに尻尾を振つてるが、大きさが大ききさなので床に当たるたびに大きな音を立ててる。

「仕事の最中だ。後にしてくれ」

「仕事を後にしても良いじゃないか。相手してよ」

しつこく俺の背中に引つ付けてくるレ級をどう対処するか考えていると、別の気配が部屋の中に入ってきた。

「……レ級、チヌの邪魔……離れて」

「こらあ、レ級！ こつちきなさい！」

ヲ級と酒匂がそう言つてレ級を引つ張るが……レ級はしつかりと俺の背中にしがみついて離れようとしない。

「なに？ 別に急ぎの仕事でもないんでしょ？ 僕の証言を纏めてるだけなんだから」

「……はなれ……て……！」

「はなれな……さ……い」

後ろを向くと、ヲ級と酒匂がレ級の尻尾をつかんで引つ張っているが、レ級は抵抗を続け……やがて、コルク栓が抜けるような音と共にレ級の尻尾が抜けて、ヲ級と酒匂が後ろの壁まで転がっていった。

「あくあ、僕の尻尾が抜けるようになったのは知ってるでしょヲ級。何やってるの」

そう言つてレ級は俺の背中から離れて、ヲ級と酒匂から尻尾を回収すると、そのまま元の場所に当てる。すると音もなく尻尾はレ級の胴体と一体化した。

「……改めてみるとスゴイ光景だな、それは」

「僕も驚いてるよ。まさかチヌに鹵獲されてからこんな事ができるようになるなんてね」

レ級曰く、俺が鹵獲する前はこんな抜けるようにはなつてなかつたらしい。これも、あの口の部分が無くなった影響なのだろうか？

「……取りあえず、俺はもう少し仕事があるから、構うのは後にしてくれ。ヲ級、酒匂、悪いが少しレ級の相手をしててくれ」

「……ほら、チヌもこう言ってるから」

「行くわよ、レ級」

「チエツ、わかったよ」

二人に手を引かれてレ級が部屋から出ていく。やれやれ、やっと仕事に専念できるか。

(しかし……今の状況を考えると家の改築が施されて本当によかったな)

今現在、家は前の6畳一部屋に台所とトイレ、風呂がついている形のものから4畳の俺の部屋。10畳の居間、それに台所、トイレ、風呂がつく形になった。以前から艦娘の私物やらなんやらが多くなって困ってきたので増築をできないか明石に聞いてはいたが……まさか一日で増築が終わるとはな。妖精さんの力を改めて目の当たりにすることになった。

(……とはいえ、レ級は反省房を臆装なしで破壊して脱走する力の持ち主……何やってくるかわからないし、やっぱり相手してやるか)

纏めている途中であったが、俺は書類を片付けると居間へ移動してレ級達の相手をしてやる。しかし……レ級か……。改めてとんでもないやつを鹵獲したものだ。こいつの存在が何か波乱を起こさないといいんだが……。

第十九章

第106話

雨が降る。最近は雨の日が多い。

(雨……か……)

「……最近雨続きですなぁ」

ちやぶ台で勉強をしながらまるゆが呟く。

「……そうだな、あんまり嬉しくはないな。出撃や遠征の時に手間が増える」

「そうなんですよね。私は潜水艦ですからまだ影響は少ないですけど……」

俺の返事にまるゆは憂鬱そうなため息をついていたが、俺が嬉しくない理由はそれだけではない。雨がずっと……元の体の頃を思い出す。何もできず、雨の湿気で錆びていくだけだったあの頃を……。

「チヌ、居る……あ、まるゆも居るのね、ちょうどよかったわ」

不意に家の扉が開かれ、飛鷹が入ってきた。手に持っていた傘を傘立てに挿して、うっとおしそうに濡れた袖を振っている。

「飛鷹か、何か用なのか？」

「提督が呼んでたわ、まるゆも一緒にね。なんでも陸のほうからの呼び出しがあるそうよ」

「陸……ですか？ なんなんでしょうか？」

まるゆが首をかしげるのも無理はない。俺だけならまた竹下一等陸佐の下で任務を行ふ事になるんだろうが、まるゆがそう言うのに参加できるとは思えないし……。

「行つてみたらわかるわよ。あ、私も一緒に行くわ。陸からの呼び出しでまた何日か居なくなるとかだったら、先に知っておきたいから」

そう言つて飛鷹も付いてくる様子を見せてきたので、俺は二人と共に提督のもとへ向かった。

提督室に着いた俺達はノックののち、入室する。提督は俺達を迎え入れてくれたが、飛鷹の姿を見て少々驚いた様子だ。

「飛鷹、君も来たのか。君が聞く必要のある要件ではないのだが」

「チヌとまるゆに陸からの連絡でしょ。また何日も離れることになるなら事前に知っておきたかったのよ。それとも、そういう用事じゃないの？」

飛鷹の言葉に提督は戸惑い、そして少しの間考え込んでいるが……いったいどんな要件なんだ？

「……チヌとまるゆが数日離れる事……にはなると思うが、すまないが、要件に関しては先に彼らに話をして、それから彼らが話すかどうかを委ねたいと思つている。席を外してくれないか」

提督の言葉に飛鷹は一瞬不快な表情こそ浮かべたが、去り際に「話せるなら話してね」とだけ言つて部屋を出てくれた。だが、こうなると増々要件の内容が気になるな。俺とまるゆにだけ伝えておきたい内容とはいつたい……？

「さて……チヌ、まるゆ。竹下一等陸佐から連絡が入つた。チヌがかつて保管されていた茨木の旧陸上自衛隊武器学校に保管されている90式を除く他の戦車が接収されることになつた」

「な……そんな……な……」

今の時代に接収されるという事は……つまり、溶かされ、資材に変えられるということだ。兄が、弟が……他国の者とはいえ、共に長い間過ごしてきた戦車達……溶かされて……消えるのか……。

「……これはすでに決定していることであり、覆すことはできない。だが、何も知らずに後から聞かされるよりは、見送る機会を与えるべきだと……竹下一等陸佐は仰つた。どうする？ チヌは勿論だが、まるゆも同じ陸軍に属する者として、行く気はあるか？」

「……私は、勿論行きます」

「わ、私も行きます。行かせてください」

「わかった。今日はそれぞれ任務の予定があるから、明日の朝に出発してくれ。幸い陸軍のほうから迎えを送ってくれるとの事だ」

「……わかりました」

提督の言葉に返事をし、そこからいくつかのやり取りを経て後に俺達は提督室を後にした。

第107話

提督室を後にした俺はともすれば感情に任せた行動をしそうなのを抑えながら廊下を歩いていく。

「ねえ……チヌ。大丈夫？」

「……だいじょうぶだ……」

飛鷹の言葉に返事こそしたが、表情を作る余裕が持てない。だから彼女のほうを振り向くこともできず、ただ歩くことしかできなかつた。

「チヌさん……」

不意に手が握られた。横を向くと、手を握っていたのはまるゆで、俺のことを心配そうに見上げている。

「チヌさんの家に戻りましょう。少し、時間をとったほうがいいですよ」

「……ああ、そうしておく」

今の気持ちのままでは何のへまをしかしてしまかわからない。少なくとも……今は落ち着かないと。

「飛鷹さん。私達も……」

「……………そうね。チヌ、他の娘達には貴方が明日から数日休みになることを伝えてくるわ」
「……………頼む」

飛鷹とまるゆと廊下で別れた俺は家に戻り、自室で俺は座り込み、皆のことを思いだしていた。

（共に何かをできたわけじゃない。だが……………だ……………が……………）

彼らがもうすぐ居なくなる。彼らがもうすぐ彼らで無くなる。そう考えると、俺の心は言葉にできない感情で揺り動かされる。俺は何も手を付けることができないまま、眠りについた。夢も何も見ることはなかった。

碌に寝付くこともできなかったまま、俺は翌日を迎えた。なんとか身だしなみを整え、間宮で軽い朝食だけをとった後、俺はまるゆと共に鎮守府の出入り口で迎いの車を待ち続ける。

「チヌさん……………大丈夫ですか？ 目の下に隈ができてますよ」

「……………大丈夫だ」

まるゆが声をかけてくるが、俺は視線も向けずに答える。正直自分でも酷い顔をしているのがわかってるからこそ、正面を向くことができない。

そのせいでまるゆもそれ以上は俺の声をかけてくることもなく、それがありがたかった。そして程なくして陸軍の車が到着し、俺達の前に止まった。

「チ又殿、まるゆ殿。お久しぶりであります」

「あ、あきつ丸さん。お久しぶりでです」

「……お久しぶりで、あきつ丸殿」

車から降りて俺達を迎えてくれたのはあきつ丸殿だった。まさか彼女がここに来るとは。

「お二人とも、まずは車の中に乗るのであります。陸上自衛隊武器学校へお連れするであります」

「……お願いします」

あきつ丸殿に促され、俺達は車に乗り込む。俺とまるゆは後部座席へ、あきつ丸殿は助手席に座り、それを確認してから車は出発した。

「……チ又殿。このたびの事は同じ陸軍として自分も残念であります。ですが、彼らはお国のため、その礎となるのだから……自分達もしっかりと見送らなければいけないであります」

そうだ……その通りだ。彼らはこの国のため、人のためとなるんだ。だから、悲しむ必要なんてないはずだ。そのはず……なんだ。だが……。

「……確かに彼らはお国のためとなります。ですが、それは私で良かったはずです。彼らの中には私なんかよりもっと強い戦車達が居るんです。私なんか人がなるよりも彼らになつていけば……!」

「だめですよ! チ又さん、そんなのを言ったらだめです!」

まるゆがそう言ってくるが、あそこには俺より後の世代に生まれた戦車が何台も居る。特に74式ならば戦後の2、5世代であり、俺が何台居ようとも太刀打ち出来ないほどに強力な戦車だ。彼がもし俺のように人の姿になれば……。

「チ又殿……それは無理な話であります。チ又殿が人の姿になれたのは付喪神……長い時間を経過したが故だと聞いているのであります。ならば、74式のような戦後に生まれた戦車達では人の姿になれる道理はないのであります」

「そして、チ又殿以外で人となれるとすれば、それは八九式だけであります。八九式の性能はチ又殿よりも下。チ又殿が人となるのが……一番なのであります」

あきつ丸殿の言葉に俺はそれ以上の言葉が言えなかった。彼女が言っていることは正しい。それはわかっているが……。

「……チ又殿。納得できない気持ちはわかるであります。しかし……自分達にできることは胸を張って彼らを見送ることだけなのでありますから……到着するまでに気持ちを整理しておくべきであります」

「ツ……わかり……ました……」

更なるあきつ丸殿の言葉に俺は頷くことしかできず、そこから先は顔をうつ向かせたまま上にあげることができなかつた。

第108話

そしてどれだけ車の中にいたのか、やがて車は止まり、ドアが開かれる。俺もなんとか顔を上げてあきつ丸殿達と共に施設の中を歩いていく。ああ、久しぶりだな。戦後から何十年と見続けた景色だ。まさかこんな形でまた見ることになるとは。できれば、こんな形で戻ってきたくなんてなかった。

歩みを進める俺たちは程なくして兄弟達の搬送作業の現場に到着した。そこには戦車運搬車も到着しており、既に何人かの戦車は積み込まれている。

「M4中戦車……M24軽戦車……」

まず目についたのはアメリカの戦車達。彼らは既に積み込まれており、後は出発するだけの状態だ。その隣にはソ連の野砲達も既に積み込まれている。そして。

「61式……74式……」

今まさに積み込まれているのは俺の弟に当たる戦後型の日本戦車……。俺よりよっぽど強くて、頼りになる奴ら……。俺よりあいつらが人になれているほうがよほど……。

「……悲しいです。お国のためとは言え……」

「……同感でありますな」

まるゆとあきつ丸殿の声が聞こえる。が、そちらに意識を割くことはできなかった。そうしている間にも他の戦車や野砲達が積み込まれていく……。もう彼らと会うことはできない、そうだ、このままでは兄さんも……。

「……あきつ丸殿。八九式はもう積み込まれたのでしょうか？」

「どうでありましょうか……少し聞いてくるであります」

俺の質問にあきつ丸殿は少し困った顔をしたが、すぐに近くの人に聞きに行ってくれた。

「チヌ殿、八九式はまだ積み込まれていないのであります。向こうに保管されているそうでありますが、行かれるのでありますか？」

「はい」

俺が頷くと、あきつ丸殿が案内してくれて、俺とまるゆはそれについていく。そして程なくして俺は八九式の前に立っていた。

「兄さん……」

八九式中戦車……俺の兄である戦車。俺と同じく大戦に参加することなく終戦を迎え、そしてこうしてこの時代まで残されてしまった遺物。歳月を考えれば……俺と同じように付喪神になっていておかしくないはずの兄さん。

俺は兄さんに近づき、装甲に頭を押し当てる。伝わってくる冷たさが、今の俺と兄さんの違いを明確に突き付けてきた。

……戦いたい。

不意に聞こえてきた声。それは耳を通さず、直接頭の中に聞こえてくる……。

……チヌ、お前が羨ましい。お前はそうして人と同じになれた。私はなれない。お前より古い私なのに、なることはできない。

「……わかつています、兄さん……だけど……俺達は道具だ……」

ああ……そうだ。道具である私達に拒否権はない。だが……それでも……。

(そうだ……当然だ。兄さんだって……)

俺自身、溶かされるのもまた一つの道である事に不満があるわけではない。だが、兄さんの気持ちもまた痛いほどにわかる。わかつて……しまう。

……ふふ。栓なき事を言ってしまったな。弟を羨んで迷惑をかけるなど、子供のよう
な事をしてしまった。

「……兄さん」

チヌ、折角だから私を……残りの兄弟や仲間たちを見送ってくれ。我々はお前に託そう。どうか……我々の代わりに人々のために戦い続けてくれ。

その声を最後に、兄さんは口を閉ざした。

「……わかりました、兄さん」

俺は小さく呟くと、兄さんから離れてあきつ丸殿とまるゆの元へと戻る。そして、俺は基地の出入り口で全ての兄弟を、仲間を見送った。一人一人を見送るたびに、俺は引き留めたいという気持ちを抑えるのに、涙を流すのをこらえるのに必死になった。これは不名誉な事じゃない、国の為、人の為になるんだと、名誉な事だと言いつ聞かせ、必死に堪える。

そして、最後に八九式兄さんを見送り、全ての戦車はこの地を後にした。

全ての戦車を見送った俺は二人に連れられて、自動車の中に戻っていた。竹下一等陸佐は用事があるとの事でまだ建物に残っていたが、俺にとっては幸いだった。もう、この感情を抑えられなかったから……。

「……ああ、兄さん……皆……！」

俺はもう耐えることができなかつた。俺は見送る事しかできなかつた。皆、これから溶かされて皆でなくなる。俺にできる事なんてなにもなく、こうして見送ることができただけでも良かったのに、兄さんたちは国のために為すべきことを為すことができるというのに、俺はたまらなく悲しく、寂しい。こんな感情、要らないのに、必要ないのに。俺の心尾はこの感情で支配されてしまっていた。

「……チ又殿」

不意にあきつ丸が俺の頭を抱え込む。あの時の……合同作戦での無人島での時と同じように。

「ダメでありますよ、チヌ殿。感情を溜め込むのは良くないのであります」

「チヌさん……ここには私達陸軍しかいませんから……」

まるゆもまた反対側から俺の腕を握ってくる。ああ、そうだ。ここに居るのは皆、陸軍だ。

「……すまない……すまない、あきつ丸殿……まるゆ……」

俺は我慢することをやめた。両目から止めどなく涙が零れ落ち、胸の奥から湧き上がる衝動のまま泣き喚く。あきつ丸殿とまるゆはそんな俺を暖かく包み込んでくれた……。

第109話

車の中で泣き終えた俺は、程なくして戻ってきた竹下一等陸佐と共に陸上自衛隊学校を離れ、そして俺とまるゆは鎮守府へ、陸佐は陸軍本部へ、あきつ丸殿も所用があるとのことでそれに同行した。

戻った俺達は不知火や飛鷹達からの質問に答えつつもそのまま日常へ戻った。あの時泣いたことで悲しさが尾を引かなかったのはありがたい。まったく、最初のころの俺ならもつと割り切れていたはずなのに、本当に弱くなってしまったな。

そして数日後、俺の元にあきつ丸殿が訪ねてきた。客室に案内されたあきつ丸殿の元へ行くと、彼女は大きなカバンを両手に抱えたまま俺を出迎えた。

「あきつ丸殿、お久しぶりです」

「久しぶりでありますなチ又殿。今日は、竹下一等陸佐からの預かり物を持ってきています」

そう言うときあきつ丸殿は鞆の中から透明な袋を取り出す。袋越しに中身を見た俺は息をのんだ。

「……あきつ丸殿、これは」

「解体された戦車達の装甲の一部であります。特に74式の装甲は多めに持ってきたのであります」

そう言つて差し出された袋から俺は中身の一部を手取る。それはチイ兄さんの装甲の一部であり、持っている兄さんの気持ちを感じるような……そんな感じがしてくる。

「……竹下一等陸佐はなぜこれを？」

「形見分け……というのとはちよつと違つてありますが、チ又殿が持っているべきだとの事であります。それに74式の装甲は明石殿に渡せば何か開発の参考になるかもしれない」と

「……竹下一等陸佐……」

彼からの好意に俺は深い感謝を覚えずにはいられなかつた。

「それと、74式のエンジンも持つてきたのであります。こちらは大きさが大ききさなので明石殿の工廠に直接運ぶように手配してあります」

「エンジンまで……わかりました。ありがたく受け取らせていただきます」

俺が頭を下げると、あきつ丸殿は笑みを浮かべて頷いてくれた。

「では、自分は所用がありますのでこれで失礼するであります……チ又殿、もし何かありましたら気軽に連絡してください。それでは」

あきつ丸殿はそう言って笑顔を浮かべる。その笑顔に俺もつい笑みを浮かべてしまう。そしてあきつ丸殿を見送った後に早速明石の元へ向かった。

「ほうほう。あきつ丸さんがねえ……ふーん」

事情を説明すると明石は何かジト目でこちらを見てきたが……程なくして装甲の方に視線を向けた。なんでジト目で睨まれなければならないのだろうか。

「そうですね……旧式の戦車さん達の装甲は一部を溶かして纏めてチヌさんのお守りにしてみてはどうでしょう？ 74式さんの装甲も一部はそうすると……大部分はチヌさんの新しい装甲の開発発に存分に使用してもらいますよ。それにエンジンも有効活用させてもらいましょう」

「ああ、宜しく頼む」

「任せてください、チヌさんの為にも、頑張っちゃいますよ」

そう言って笑顔を浮かべる明石に俺は深く頭を下げた。

明石に仕事を頼んでから10日後、俺は彼女の手による新しい改修によってその実力を上げることができた。流石は74式のエンジンだ。それに合わせて装甲なども改修

してもらった。おかげでこの間ようやくノーマルのヲ級を相手に一人で戦うことができた。勿論それも大事なことだ。だが、それ以上に大事なのは……。

「ねえチヌ。貴方そんなの付けてたかしら？」

間宮の食堂で飯を食べてると、後ろから足柄に声をかけられた。彼女は俺の首にかけられている鎖を不思議そうに見つめる。

「ああ。こないだちよつと明石に作ってもらってな」

「へー、意外ねえ。どんなの付けてるの？ 見せてくれない？」

「ああ、構わない」

足柄の頼みの応えて鎖を引っ張り、先端に付いている部分を彼女に見せる。

「……なにこれ？」

それを見た足柄に首を傾げられた。まあ、単なる円形の金属板だから当然か。

「俺の兄弟の装甲から作られたお守りなんだ」

「え!? ご、ごめんささい! なにこれなんて言っちゃって!」

「いや、気にしないでくれ。おしやれな物じやないのは確かだからな」

足柄の謝罪を受け取りつつも、俺は指でお守りをなぞる。金属からは気のせいか仄かに熱を感じていて、俺はその熱が大層心地よく感じている。

(兄さん、皆……どうか力を貸してくれ。人を、国を、仲間を守るために)

お守りの熱を感じながら、俺は心の中でそう呟かずにはいらなかった。

第二十章

第110話

「お邪魔するでありますよチ又殿」

「どうぞ、あきつ丸殿。大したおもてなしもできませんが、どうかお寛ぎください」

家の中にあきつ丸殿を招き入れ、ちやぶ台の前に座ってもらおう。お茶と茶請けのせんべいを出すと、彼女はお茶を一口飲み、ホッと息を吐いた。

「いやあ、温まるでありますなあ。この時期の船出はやはり寒いもので……チ又殿の鎮守府に寄港できたのは幸いであります」

「確かにこの時期になるときついですね。どうぞ、十分な休息を取ってください」

彼女の言葉を肯定しつつ外を見る。今日突然あきつ丸殿を含む艦隊がこの鎮守府へ寄港すると聞いた時には何事かと思ったが、こうして目の前でお茶をすする彼女を見ると大した事は起きてないのだろうと安心する。

「しかし、予定外の訪問になったのは事実でありますから……チ又殿、何かさせていただけないでありますか？」

「うーん、急にそのようなことを言われても……」

突然のあきつ丸殿の申し出に俺は困ってしまう。普段から自分の事は自分でして、まさか仕事を手伝ってもらうわけにもいかないし……。

「……ム。チ又殿は耳かきをされているのでありますか？」

ふとあきつ丸殿の視線が柵の上に向けられる。そこにはペン入れの中に交じって耳かきを入れていた。

「ええ。一応自分の分ぐらいはしています、それがどうかされましたか？」

「いや、もしチ又殿が良ければ自分がチ又殿の耳かきをしようと思うのであります」

これは意外な申し出だな。とは言え……。

「いえ、あきつ丸殿のお気持ちだけで十分ですよ。そのようなことをしていただくかなくとも……」

「いや、是非ともさせていたいただきたいのであります。まるゆ殿はまだこちらの鎮守府へ寄港したりするので交流はありますが、チ又殿はほとんど交流がないのでありますから。お願いであります」

そう言われると俺としても断りづらいものがあるが、かといってあきつ丸殿に無理にやつてもらおうという気もないし、どうするか。

「……チ又殿、自分の耳かきでは信用できないでありますか？」

……流石にここで断ると、あきつ丸殿の事を信用してないと取られかねないか。仕方

ない、もしあきつ丸殿が下手だったとしてもただの耳かきで俺の鼓膜が破られる事もないし。

「……いえ、そこまで言われるならお願いします」

「わかりましたであります。ではチ又殿、少しお待ちを」

俺が了解の意を伝えると、あきつ丸殿は笑みを浮かべ席を立った。そして少ししてお湯の張ったタライとタオル、それに耳かきを持ってきた。

「ではチ又殿。自分の膝の上に来るであります」

「では、失礼します」

あきつ丸殿は自分の膝を叩いて俺を招く。それにこたえて俺は彼女の膝の上に頭を置いた。

「どうでありますか？　自分、柔らかさには自信がありますよ」

確かに彼女の言う通り、膝は柔らかく、心地よい弾力で俺を支えてくれている。

「確かにこれは……良い弾力ですね」

「ふふ。チ又殿に褒められると嬉しいでありますな。では、失礼するでありますよ」

あきつ丸殿はそう言うのと、俺の耳の表裏をお湯で濡らしたタオルで拭いてきた。

「チ又殿、熱さは大丈夫でありますか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

暖かいお湯で温められたタオルで拭かれるのは気持ちいい。その気持ち良さに少しの間浸っていると、タオルは離れていき、代わりにあきつ丸殿の手が添えられた。

「では、掃除開始であります。んー……チヌ殿の耳はそんなに汚れてなさそうでありま
すなあ」

少し残念そうに聞こえる彼女の声だが、それでも耳かきでは耳の外側をコスコスと擦っていく。お湯の水分と熱でふやけた耳垢が掻き取られていく。

「やっぱりこの辺はあまり汚れてないでありますなあ。では、奥を失礼するであります
よ」

あきつ丸殿の声が近くなり、彼女の息遣いが聞こえ、微かに吐息が耳に届いてくる。

「奥はく……お、耳垢発見でありますよ。さつそく取り掛かるであります」

声の調子が楽しそうな、少し音程が上がった様子になり、耳かきが入ってきて、そのまま耳垢を削り始めた。

カリカリカリ……ガリガリ……。

「むう。チヌ殿の耳垢は中々に固いでありますな。提督殿の耳垢に比べると中々に手ごわいであります」

「……あきつ丸殿は朝野提督にも耳かきを？」

「そうであります。提督殿はよく耳かきをねだつてくるので、自分も上手になったであ

りますよ」

なるほど、朝野提督がか。確かに他人に耳かきをしていれば上手になるのも必然だろう。

コリコリコリ、カリカリカリ。……ペリッ……ペリッ……。

そうやって話している間にも耳の中には気持ちの良い音が木霊する。そして、徐々に耳垢が剥がれる音も聞こえてきた。

「んー、半分ぐらいまでは剥がれてきましたでありますなー。チヌ殿、痛かったりはしないでありますか？」

「ええ、大丈夫……です」

俺の返事にあきつ丸殿は気を良くしたのか、「では、一気に剥がしていくでありますよー」と答え、耳かきは動きを早くしていく。

「我は〜官軍我が敵は〜♪」

いつの間にか歌まで歌い出したあきつ丸殿だが、耳かきを動かす手は止まらない。

コリコリ……カリカリカリカリ。ペリッ、ミヂッ。

あきつ丸殿の歌声と、耳かきが耳垢を剥がす音とが一緒に聞こえてくる。それが思った以上に心地よく、俺は徐々に心が緩んでいるのが自分でもわかった。

（ダメだ。気を緩めた姿をあきつ丸殿に見せたりなどできない、しつかりしろ）

自覚したゆるみを引き締めていると、不意に耳の中の音がひととき大きく変わった。「よっし、取れたでありますよ、チ又殿」

そう言つてあきつ丸殿は耳かきを引き抜き、ティツシユの上に耳垢を捨てた。耳垢の取られたところは空気に触れて、少し涼しさを感じる。

「いやあ、チ又殿の耳垢は取り甲斐があるでありますなあ。これからもこちらに立ち寄つた際は毎回チ又殿の耳かきをするのもいいかもしれないでありますな」

「いえ、流石にそれは……」

「遠慮など無用でありますよチ又殿。同じ陸軍の仲間同士、変な遠慮などせず、頼つていただきますのであります」

同じ陸軍の仲間。そう言われると、心の中に潤みが生じるのを自覚してしまい、思わずそれもいいかもしれないと思つてしまう。

「ふふふ、考えておいて欲しいでありますよチ又殿。さ、他には耳垢はなさそうですし、粉を取つていくでありますよ」

そう言つて、あきつ丸殿は梵天を耳の中に入れてきた。

ゴシユゴシユ……ザツザツ……ゴシユゴシユ……

耳の中を梵天が上限左右に擦れる。柔らかいその感触に眠気を感じ、思わず息を吐いてしまう。

「ふふ、チヌとくどくの。眠くなったたら寝ても大丈夫でありますよ。自分、鍛えているでありますから、チヌ殿が起きるまで正座して問題ないでありますよ」

「そういうわ……けには……」

拳に力を入れ、眠気に耐える。だが、そうしているとその握った拳を包むようにあきつ丸殿の手が被さってきた。

「チヌ殿、不要に力を入れる必要はないでありますよ。さ、反対を向くであります。ああ、このまま反対側に向くでありますよ、立ち上がる必要はないであります」

「しかし……」

体をそのまま反対側にするのは流石に抵抗がある。だから、体を起こそうとしたのだが、いつの間にか頭を押さえられていた。

「チヌーどーの。ダメでありますよー、体を起こすんじゃなくて……反対を向くでありますよー」

そう言ったかと思うと、あきつ丸殿は俺の体を引つ張り反対側に向けようとする。それに抵抗しようとするが、抵抗しようとしたその動きを利用され、クルン、と反対側を向かされてしまった。

「あきつ丸殿、この体勢は流石に……」

反対側を向いたことで、俺の視界にはあきつ丸殿の腹部……はいいとして、彼女の短

めのスカートまで目に入ってしまう。俺自身にその気はないが、もし誰かに見られよう物なら要らぬ誤解を与えてしまう。

「大丈夫でありますよ。ギリギリで見えそうで見えないと朝野提督も言ってるでありますからなく。それに、見えそうであるなら、目を瞑っていればいいでありますよ」
そんな笑い声を聞いていると、再び耳かきが始まった。

「こつちは……そこそこ汚れてるでありますなあ。さあ、こつちも掃除していきますでありますから、チヌ殿はゆくりリラックスしてくださいくださいであります」

そう言うってくるが、先程よりも視覚的な情報が刺激的すぎる。艦娘達のあられもない姿等は戦闘や、家に泊まりに来た艦娘達を通じていくらでも見てきたはずなのに……陸軍であるあきつ丸殿にはなぜか、心が穏やかでなくなってしまう。

「ん……外側の掃除は終わつたでありますよ……チヌどのー、どうしたでありますか？」

「い、いえ……なんでもありません」

動揺を押し隠し、俺は目を閉じる。流石にこの状態で目を開け続けていたら、動揺を抑えきれない。あきつ丸殿にそのような事を知られるわけにはいかない。

「おや……ふふふ、それでいいでありますよチヌ殿、目を閉じて……ゆつくり……自分の耳かきを堪能するであります」

ガサガサ……ペリペリ……

目を閉じていると、耳の中の音がより一層鮮明に聞こえてくる。その音が心地よくて、気が付けば体の力が徐々に抜けていつている。

ガサガサ……ペリッ……ズゾゾ……

コリッ……カリカリ……ズツ……ズツ……

「これは……いい……です……ね」

「そうでありますよチヌ殿。でも、寝るのはもう少し待つて欲しいであります、寝ながらの耳かきは危険でありますから」

「いえ……自分……は……せん……しゃ……で……すから……ためして……みたの……で……」

眠気で意識が飛びそうになりながらもなんとか答える。だが、この辺りで限界だった。耳かきが終わるよりも早く、俺の意識は深く沈んでしまっていた。

第111話

「……ふふ、意外でありますなあ。チヌ殿がこんなに簡単に寝てしまわれるなんて」

自分の膝の上で、上を向いたまま穏やかに寝息を立てるチヌ殿を見下ろしながら、思わず苦笑が浮かぶ。まさか、あのお堅いチヌ殿がこうもあっさり寝てしまうとは。

（んー……でも、仕方ないのかもしれないですなあ……鹵獲した敵の世話、海戦で置いていかれないための特訓、陸軍への出向、歩哨としての仕事……チヌ殿は色々やることが多いと聞いていますからなあ）

体を屈め、チヌ殿の顔を覗き込むと、目の下に薄っすらとだが隈が見える。付喪神であるとはいえ、疲労とは無縁ではないのだろう。勿論、人間よりは頑丈だが、それでも限度がある。

（本当、自分がこっちの鎮守府に来て、チヌ殿のサポートができれば一番なのでありますが……朝野提督を見捨てるわけにもいかなんでありますし……まるゆ殿はまだ自分の事で手一杯らしいでありますからなあ）

だからこそ、今こうしてチヌ殿が自分の膝の上で寝ているのが、嬉しい反面、複雑な気持ちになる。こんなあっさり寝てしまうほど疲れているなら、彼にはゆつくりと休

憩をしてほしい。でも、彼自身はそれをまったく望んでいない。

(困ったものでありますなあ。まるで、手のかかる子供を心配してるようでありますよ、チヌ殿)

揚陸艦である自分にとって、戦車とは自分に搭乗させ、安全に運ぶ……まさに守るべき存在。だからこそ、今の状態がとても嬉しい。自分にこんな無防備な姿を見せてくれる彼がとても愛しいのだ。

「このまま……しばらく眺めるのも悪くないでありますな」

顔を近づけたまま、そんな事を呟いていると、ふと玄関の方から気配を感じ、顔を向けてみるとまさに戸が開かれ、飛鷹殿と不知火殿が家の中に入ってきた。

「チヌ、少しいいか……」

「チヌ……さ……ん？」

ああ、こちらを見た二人がポカんと、口を開いたまま固まっているであります。大声を出されてチヌ殿を起こすわけにはいかなないので、しーっ……と、唇に人差し指をやりと、二人は口を閉じ……そして、恐る恐る、こちらに近づいてきたのであります。

「これ……どういうことよ……」

「チヌ……さん……」

近づき、改めてチヌ殿の寝顔を見つめる二人に、自分は優越感を感じずにはいられな

いであります。おそらくこの二人はチ又殿にとつても親しい艦娘であるのに、この二人が見たことのないチ又殿を見せつけたのでありますから。

「お疲れだったのでありますなあ。自分が耳かきをしてる最中に寝てしまったでありますよ」

「うそ……チ又が耳かきで寝るなんて……」

「信じられません……」

ああ、やはりチ又殿はこういう姿を他人には極力見せないのがありますな。

「おや、その様子では……お二人もこのようなチ又殿の姿を見たことはなかったのですか……お二人はけっこうチ又殿と親しいと思っていたのでありますがなあ」

ニヤリ、と意識して笑みを浮かべてみると、二人ともなんともいえぬ表情になりました。そろそろからかうのもやめとくでありますかな。

「まあ、冗談はこの辺にして……二人とも、チ又殿の事はよく見ていて欲しいでありますよ。疲れが溜まっていなければ……こうはならなかったはずでありますから」

そう言うのと、二人とも悔しそうに口を噛み締めている。ふふ、からかうのはやめるつもりでありましたが……、もう少しいいかもしいないのでありますなあ。

「さ、取り合えず用事は後にしてほしいでありますよ。チ又殿が起きたらお二人が家に来たことはお伝えするでありますから……」

「……そうね、不知火、後でまた来ましょう」

「そう……ですわね」

そう言つて二人が家を後にしたので、自分は改めてチヌ殿の顔を眺める。ふふ……チヌ殿……今はゆつくりと、お休みしてください。

「……むかつくわね、不知火」

チヌの家から出て寮までの道を歩いている中、私はそう呟かずにはいられなかった。

「むかつく……? その、あきつ丸さんは間違つたことを言つては……」

「違うわよ、あきつ丸もまあ……思うところあるけど、チヌよチヌ。不知火、あんたチヌに耳かきした事あつたでしょ? その時のチヌはどうだつたのよ」

私の問いに不知火は少し考えこんだ。

「えつ、えつと……特に普段と変化はなかつたと思いますが……」

「でしょ。私の時もそうよ、普段と同じ、気を抜いてもらおうと思つても全然そんな気配もなくて……なのに、陸軍つてだけで全然交流のないあきつ丸に対してはあれよあれ。あつさり寝落ちしてるじゃないの。ふざけるなつて話じゃない」

ああ、苛々が落ち着かない。本当、私も不知火も、いや、この鎮守府に居る他の娘だつ

てあなたの事気にかけてるのに、なんで気を許さないのよあいつは。耳かきしてる時ぐらい、気を抜いて膝の上で寝るぐらいしなさいよ。

「不知火、もうこうなったら意地よ。絶対、絶対、ぜーったいに！　チヌを振り向かせるわよ！」

「も、勿論です。不知火だって、このまま引き下がりはしません」

「よく言ったわ不知火。なんとしても、チヌを振り向かせるわよ」

不知火と力強く握手を交わしながら、私は改めて誓う。あの堅物を、絶対に振り向かせるのだと。